奈良県僻地教育総合学術研究報告

奈良学芸大学七十周年記念事業

昭和37年3月

奈良学芸大学教育研究所

71

序　　文

最近我国において僻地を政治的、経済的面から解消せしめようという論があるが、これは中々匆急には解決できないことでどうしても解消の基盤としての教育の改善向上を緊急に解決していかなければならないと思う。

『教育は国家の安全と人類の一般福祉の基盤である』といわれている吾々は僻地解消の第一段階において僻地教育の改善向上を断行しなければならない。

わが奈良県は全国でも最も多くの僻地教育機関をもつ県であり、従て県教育委員会においても当学卒業生の大部分を僻地に送りその教育の向上を期している。

学芸大学がその七十周年紀念事業として僻地の実態調査を計画し教育研究所がこれに当ることになり9サークルを組織し一昨年来各サークルは殆んど半額以上を自費負担して現地に入り現地当局の御協力を得て5、6日宛2、3回滞在して実態調査を決行しこゝにその結果の一部（予算の都合で）を公刊する運びとなった。教育研究所としてこの調査が僻地教育の改善向上に幾分でも資するところがあるならばよろこびこれに過ぎるものはない。

この調査に当り御協力いただいた十津川村教育委員会各位、その対称となった小、中学校長、教官各位及地方の方々に厚く御礼を申上げると共に9サークルの各メンバーの労苦を深く感謝して已まない。

この調査の経過については別記の『綜合研究調査経過概要報告』に詳述してあるので省略する。

昭和37年2月

奈良学芸大学教育研究所長

川　井　清　久

目　　次

調　査　概　要　報　告……1頁

十津川村小坪瀬・今西の一地理的考察……人文地理研究会…5頁

十　津　川　の　生　活……民俗学研究会…24頁

マス・コミが地域社会に及ぼす影響……新　聞　部…46頁

地域における職業期待調査……職業教育研究会…62頁

児童のアニミズム—都市と僻地の比較を中心として—…心理学研究会…82頁

十　津　川　村　教　育　史……文科社会科…98頁

へ　き　地　児　童　の　学　力……教育研究会…121頁

十津川地方における児童生徒の言語実態調査……国語国文会…140頁

平谷地区算数数学学力調査報告……数学研究会…173頁

綜合研究調査経過概要報告

昭和３５年、奈良学芸大学創立７０周年記念式典を控えて、学生側からも自分たちの手で記念として遺すべき学術調査を行いたいとの声が高まった。この自発的な学究意欲に対して教官側も双手を挙げて賛成し、ここにその推進組織として川井教授を議長とする綜合学術研究全体会議が発足した。幾度かのテーマ設定小委員会の後に、教育者養成を第一の目的とする本学として、また全面積の $3/4$ を山地によって占められる奈良県として、最近頓に関心の強まっている僻地教育を中心に採り上げることとなり、「奈良県に於ける僻地の近代化と教育への影響に関する綜合調査」の題目が選ばれた。折から３６年１０月に本県で全国僻地教育研究大会が開催されることに決定したことも、この調査に対する刺戟となった。

調査の対象地域としては吉野郡十津川村、野迫川村、下北山村などが議題に乗って検討されたが、結局最近大規模な総合開発工事の進捗によって変貌の甚しい十津川村が選定され、その中でも新旧の対照の著しい平谷地区と西川筋に主力を注ぐこととなった。３５年１月の小委員会で採択された調査項目は

A、地域社会の近代化

マスコミ（マスコミュニケーション手段）、交通機関、地理的条件、電源開発、社会階層、社会慣習、社会意識、通婚、交易、歴史的背景、産業（生産形態）、消費生活、生活水準、職業、労働機構、行政区画の統合その他。

B、地域教育の近代化

複式学級（学級編成）、教育方法、教育内容（カリキュラム）、視聴覚教育、児童生徒の学力、人格特性、就学状況、経験内容、進学状況、集団活動、健康、学校形態、Ｐ.Ｔ.Ａ.、僻地の教育組織（研究組織）、教員養成の問題、教育財政、学校施設と教材教具、社会教育集団（青年学級、婦人学級、成人学級、子供会その他）、社会教育の方法、社会教育行事及び機会（祭事・講）、社会教育の内容、社会教育の指導者、社会教育施設、生活改善運動、職業集団、コミュニケーションの形態その他

と盛沢山なものであった。

以上の趣旨によって３５年５月、調査の進行を担当する事務部と直接調査を担当する調査部が設けられ、事務部長には太田静樹教官、笹田（学生）、調査部長には林宏教官と東畑（学生）が指名された。事務部は庶務（村井）、会計（滝野）、記録（岩崎）、渉外（木村）、情宣（上田）

の５班に編成され、括弧内の各教官のほかに、夫々学生代表が参与した。また調査には学生を主体とする有志研究サークルが当たり、夫々の顧問教官が積極的に助言指導することとなり、五つの調査班が結成されて、その研究目的によって次のようにサークルが割り当てられた。

第一班　僻地における集落構造

人文地理研究会、社会科２回生グループ、職業科研究会。担当主任　堀井、東畑（学生）

第二班　僻地における社会慣習と社会意識

民俗学研究会、（家政研究会）、（社会科学研究会）。担当主任　林宏、服部（学生）

第三班　僻地における児童、青年の実態

心理学研究会、新聞会。担当主任、柳川、林（後に柳）（学生）。

第四班　学校教育

教育研究会、数学研究会、（物理研究会）、（地学研究会）。担当主任、太田静、中川修（学生）

第五班　社会教育

新聞会、（演劇研究会）、（児童文化部）。担当主任　永田、内藤（学生）。

こうしていよいよ本格的な実際活動に入ったのであるが、予算の捻出、資料の蒐集、現地との連絡、現地調査などの努力が続けられている中に年が改まって、各サークル共多数のメンバーを送り出し、また予算その他諸種の事情から括弧内のサークルが脱落し、結局第五班は第三班に包含される形となった。こうして綜合的な内容においてかなりの空隙を生じるに到ったことは遺憾である。さて３６年８月末日には一応当日までの各サークルの調査結果を持ち寄って中間報告会が行われ、互いに批判検討を重ねた末に、更に研究完成に向って努力することとなり、１０月３１日には予定通り各サークルの最終報告が提出された。この間学生諸君や顧問教官各位は限られた予算では賄い切れぬ出費を互いに工面し合い、学業の時間を割いて、あるいは炎天の山坂を、あるいは吹雪に暮れる谷あいを克明に踏査し続け、然も報告書完成後も予算の関係から苦心の結晶たる報告原稿を切り縮めるなど涙ぐましい努力が払われた。しかしその甲斐あってささやかながらも一同の努力の成果が漸く陽の目を見るに到ったことは実に喜ばしい。

次に各参加サークル毎にその研究主題と調査の経過を書き留めて謝意を表したい（順序不同）。

１、人文地理学研究会

研究主題 ― 西川地区小坪瀬、今西の地理的考察。人文地理学的見地から山村生活の基盤と実態を把握する。顧問教官 ― 堀井。参加学生 ― 東畑、笠松、岡田、秋本、小出、松村、萩原、奥本ほか。着手以来夥しい資料の蒐集、整理に努め、３６年４月には６日間に亘って東畑以下

8名が小坪瀬、今西、平谷を実地調査し、以後報告の作製に協力した。

2　職業科研究会

研究主題 — 僻地における地域社会、特に産業構造と中学校職業教育との関連について。僻地の産業構造と生産技術を調査し、これと中学校において実施されている職業教育との結びつきを考察し、また現行職業教育の実態の把握に努めた。顧問教官 — 平田。参加学生 — 稲田、沢田、辻井、山本。

3、社会科2回生（完成時は3回生）グループ

研究主題 — 十津川村教育史。明治30年以後の十津川村教育の歴史を通じて同村教育の問題点を把握し、現在の実践的意義を確立しようと試みた。顧問教官 — 池田。参加学生 — 田中、押谷ほか。昭和35年夏5日間押谷が現地予備調査。36年夏、田中、押谷、赤築が小原を中心に12日間の調査を実施した。

4、民俗学研究会

研究主題 — 庶民生活の伝統と変遷。西川地区の生活を民俗学の立場から採り上げ、教育の場としての物質的、精神的基盤を究明する。顧問教官 — 林宏。参加学生 — 服部、川畑、福島ほか。発表以来関係既存資料の蒐集や予備知識の吸収に努め、また比較のため採訪実習を兼ねて、大和高原の山村や盆地の農村に赴いた。35年12月下旬、西川筋の実地採訪にあたり、平谷、重里、西中、小山手、小坪瀬を8日間に亘って調査した。

5、国語国文研究会

研究主題 — 十津川地方における児童生徒の言語実態調査。言語教育を進める基礎は当然児童生徒の言語生活の実態を捉えて指導の重点を決めることに在り、共通語の滲透状況をも併せ調査した。顧問教官 — 鈴木。参加学生 — 中尾ほか。35年8月より臨地調査準備。11月予備調査の結果、修正本案決定。翌36年4月、5日間に亘り、臨地調査。音韻、アクセント、語彙、語法の4部門に分けて計4人で実行した。

6、教育研究会

研究主題 — 僻地児童の学力。終戦後の生徒児童の学力の実態把握を目的とし、特に都市との差異に注目、又その背景としての個人的、家庭的、地域的要因を綜合的に究明し、その結果として僻地児童の学力を規制する諸条件を明かにする。顧問教官 — 太田静。参加学生 — 倉本、為川、中川修、中川衛ほか。35年1月より学力調査の問題作製に取り掛かり、3月上旬予備調査。4月下旬都市（奈良市）、農村（磯城郡）で、又下旬には4日間に亘り十津川筋で学力調査。10月末に分析完了。「へき地児童の学力」を中間報告として発表。続いて第一次調査

の結果に基ずいて僻地児童の学力を規制する諸条件を究明するための第二次調査計画案作製。３６年５月上旬、５日間に亘り実地踏査。以上を通じ調査対象校は竹筒、花園、小坪瀬、西中、小山手、五百瀬、折立、上湯川（以上十津川）、坂本、巻向、唐院、佐保、椿井の各地に及んでいる。

6、心理学研究会

研究主題 -- 児童のアニミズム。都市と僻地の比較を中心として、変りゆく僻地の実状に関しその生活様式、環境に対する子供の発達的な特性をアニミズム的思考の一側面から究明した。顧問教官 — 柳川。参加学生 — 柳、林ほか。３６年４月柳が４日に亘って現地を予備調査。６月には５日間に亘り柳ほか１２名が参加して平谷、重里、小坪瀬、小山手、西中の小、中学校を歴訪調査した。またその間比較のため奈良市の飛鳥幼稚園、飛鳥小学校、三笠中学でも度度調査を行った。

7、奈良学芸大学新聞会

研究主題 — マスコミの地域社会に及ぼす影響。顧問教官 — 寺尾。参加学生 — 船越、安池矢野、近田ほか。３５年７月、６日間に亘り８名で実地調査にあたり、平谷、重里、西中、小山手、小坪瀬、迫西川を歴訪。またこの間「ぼく（わたし）は将来〇〇になりたい」との題目で僻地児童の作文をとりまとめた。

8、数学研究会

研究主題 — 僻地教育研究報告。算数、数学部門。顧問教官 — 竹村。参加学生 — 今谷、城、上平、万。３５年９月吉野郡天川村洞川で開催された奈良県僻地教育研究大会に出席。僻地教育全般についての概念、知識、問題点を把握。１０月後半４日間に亘り平谷地区の小中学校を訪ねて授業参観、教師と懇談し、算数学力調査、器具、模型など備品の調査をも行なった。

末尾にあたり、事務の進行や予算について特に配慮をいたゞいた本学事務局長はじめ事務当局の方々、本綜合研究機関の川井委員長、太田静尚事務部長、滝野会計班主任その他の方々、そして特に現地の当局者、小中学校教官諸氏、また数々の貴重な御教示を賜わった村民各位に対し、心からの感謝を捧げるものである。

調査部長　林　　宏

十津川村調査地域
吉野郡
十津川村
西川地区
崖又山
△1205.6
△1082.7
951
△952.8
△804.4
△645.4
△716
△817.4
△871.1
△1139.9
△1091.7
行仙嶽
牛廻山
△1040.8
丸尾山
△938.9
天上山
迫西川
瀬戸峠
小坪瀬
小山手
大谷
矢倉
西中
玉垣内
永井
重里
郡知合
小原
平谷
高森
西川
出谷
上湯
十津川
果無山脈
1155.8
△1262.3
1:50000
0
1000
2000
3000
4000
N
大阪
奈良
三重
和歌山
新宮

十津川村小坪瀬・今西の一地理的考察

人文地理研究会

はじめに
一. 概　　観
二. 各　　説
1. 小　坪　瀬
(1) 人口及び職業　(2) 住　　居
(3) 農　　業　(4) そ の 他
2. 今　　西
(1) 人口及び職業　(2) 住　　居
(3) 農　　業　(4) そ の 他

◇はじめに

本報告は、人文地理研究会の会員と堀井教授・西田助教授の助言と協力を得て作成したものである。

本調査に当って我々が目ざしたものは他サークルの基盤にならんとして、土地のあらゆる面からの把握ということにつとめた。研究テーマとして「生活の場そのものとそこに営なまれている生活の具体的な研究」というものを設定した。調査地域は、僻地といわれる十津川筋でもそういう性格を多く残し、かつ今までにあまりに奥地であるために、入って調査のされていない小坪瀬・今西を選んだ。

こういう調査は何分初めてでもあり、調査においても、もれ落ちが多く、見苦しい点が多々あるかと思うが、ここに調査の結果を報告することとする。今後も更に継続して不充分な点を研究して行きたいと考えている。

最後に、この紙面を借りて調査に協力して下さった方々に対して心から感謝の意を表わすものである。

昭和３６年８月３０日

一．概　　観

十津川村は十津川の本支流にひろがる巨村で、５５の大字．２０５の小字からなり、集落数が非常に多い。村落は本流筋の南北性の谷に沿うものと、東西性の支谷に沿うものとに分かれる。本流筋の村落は穿入曲流を描いて流れる袂状部に立地するものが多い。これは地形が比較的平坦であり、またそこが侵触段丘面であるときはさらに立地に都合がよいからである。

本流筋の中心集落には上流から上野地（うえのじ）・風屋（かぜや）・小原（おはら）・折立（おりたち）・平谷（ひらたに）などがある。これらの集落は共通的に戸数が増加している。これは国道筋でバス交通の便がよく、支谷の集落を背景とした商業が可能であるから、和歌山県・三重県からの転入と支谷からの移住とで戸数が増加したものである。したがって商業戸数が圧倒的に多く農業戸数が少なく、しかも専業農家よりも兼業農家が多く、平坦部における近郊農村が都市化していく過程と同じ性格を思わせる。これらの本流沿いの集落は、陸の中の孤島と呼ばれる本村では、中心的な集落となり都市の色彩を強めつつある。

これに反して、支谷にある集落は典型的な山村型態を示す。貧弱な経済空間であるために、戸数の増減がわずかな自然災害にでもすぐに影響される。村落が谷壁の傾斜面に立地して、家屋の分布は階段状に層をなしている。ここに地辷が起きたら家屋・耕地・森林地の埋没となるので、戸数・人工も急に減少するのである。これは、明治２２年の水害、最近の例では昭和28年の台風１３号・同32年の台風１７号で、森林の流失８００町歩・耕地の埋没４町歩となっている。また、経済事情にも影響されるので、第一次大戦後の経済不況に戸数の減少を示した。木材ブームなどの好況がくるとやや増加現象を示す。

山村では、耕地狭少であるので専業農家が少なく、兼業農家が多く、農産物の商品化率は零で、現金収入は農業外所得によらなければならなくなり、森林所有者は森林の売却、森林を持たぬ農民は山林労務に依存しなければならぬ。すなわち、山林が各集落の生計を支えている大きいものである。このような不便で経済的に恵まれぬ所に集落ができたのは、隠田集落の性格によるものであろう。ここには強い社会意識として、かって十津川郷士であった士族という誇りが村民の団結力として存在している。これが十津川村に生きる大きな力である。

以上が十津川谷の集落の概況であるが、本流筋には国道に沿った集落がその地域の都市的存在として繁栄しているのに対し、支谷の集落は戸数が少なく、自然災害や経済変動にも影響されるが、祖先伝来の土地とそこに持つ文化の特殊性を誇りとして住んでいるのである。この山村も電源開発・林道開発で活況を呈しつつある。

こんどの総合学術調査では、われわれ人文地理班は、支谷西川筋の小坪瀬と今西を中心としてその地理的環境を調査することにした。各大字の構成・人口・集落・経済生活・交通とくに林道の開通による影響・教育・人情・その他など本地域の社会構造についてみるところがあった。調査の結果については未だ十分ではないが、例えば農業にあっては猫額大の耕地に工夫をこらして種々の作物を栽培し、とくに農作物の種類が多く自給を目的としていること。また、急傾斜の畑地に杉檜苗を栽培して経済的に有利な林業に重点を置いていること。さらに山林副業として椎茸栽培を行なって商品化することなどが明らかとなった。交通とくに林道の問題については、従来永らく西川を一本ずつの管流しによっていた運材方法も、小型三輪トラック輸送となり非常に便利になったこと、林道ができたため、今まで運べなかった重量の電化製品が急激に侵入して、女子の家事労働を軽減してまことに喜ばしいこと。しかし反面、土砂くずれなど自然の災害で折角の林道も危険度の高いこと、また道幅も狭くてバスを通じ得ないことなど、種々の問題を見いだした。以下、大字小坪瀬・今西につき項目を分けて調査の結果につき記述することにするが、残された問題については今後の調査にまつことにしたい。

(堀井・西田)

調査概要

予備調査　日時　昭和36年3月9日～10日

場所　十津川村大字桑畑小字果無

参加者　堀井教授　岡田泰治　笠松喜和　東畑元美　伊藤中

小出晃三　高松成行

本調査　日時　昭和36年4月7日～12日

場所　十津川村大字小坪瀬（7日～9日）

十津川村大字今西（9日～11日）

十津川村大字玉垣内・重里・平谷・猿飼（高森）

（11日～12日）

参加者　西田助教授　岡田泰治　笠松喜和　東畑元美　秋本悟

荻原紘子　小出晃三　松村定子　奥本正胤

二. 各　説

1. 小坪瀬

本調査地域は奈良県の最南端、吉野郡十津川村の南西にあり、奈良大仏前より十津川村の銀

座といわれる平谷まで急行バスで6時間半、それより十津川の一支流西川に沿って小型三輪トラックに便乗して40分の所に位置する十津川村の一大字の集落である。

当大字は人口126．戸数24．人口密度11.2人．面積11.25平方粁を有しており、下番・庵平番・上番・向番の4つの番よりなっている。ここでいう番とは、小字名と同じである。集落は平坦部は少なく、谷壁の緩傾斜地をえらんで散村形態をとっている。家屋はいずれも幾らか傾斜地を占めているから石垣があり、田畑もできるかぎり耕作されているが、これにて生計をたてることは困難である。農業には主として女子があたり、男子は山林労務に従事している。本地域への交通は、昭和31年開発公団の事業によって平谷より西川に沿って奥地に入ること17Km、V字形の曲流する渓谷に沿うため難工事であったが総事業費136,080千円の巨額の費用を投じて迫西川・竜神路線が昭和35年末に開通した。これより永らく西川を一本ずつの管流しによっていた運材方法も小型三輪トラック輸送となり非常に便利になったことは否定できない事実であるが、私達がこの林道を通った時にも土砂くずれがあり、いまだ危険度高く、道幅せまく、完全な林道とはいえない状態にある。この林道が人間生活におよぼす影響については今後継続的に観察・調査しなければならないであろうが、今あらわれかけている現象としては、この林道ができたため急速な家庭電化、ひいては女子の家事労働軽減という成果をもたらした。反面、製品購入のために家計が苦しくなっていることはこばめない現実である。しかし、交通は便利になったとはいえ、未だにバスの運行できないのは道幅のせまいことが大きい原因の一つであるが、これが開通すれば一層便利さを増すであろう。こういう現実の故であろうか、当地をおとずれる者は少なく、今回のような調査団さえあまり送りこまれていない。このようにとざされた、ことばをかえていえば、タケのカーテンのおろされた地帯であった。

これがようやくベールをぬぐ時がいまややっと訪れた。これがこの林道である。このように林道について述べてきたのであるが、この地の環境を考えるにあたってこれを切りはなしては考えられないことは一目瞭然であろう。当地の教育施設としては、小坪瀬小学校があり、複々式で昭和35年度の生徒数31名（男子15名．女子16名）、教員数は3名である。また中学校もあり、十津川第六中学校で小坪瀬分校複式、生徒数25名（男子11名．女子14名）である。しかし図書館．映画館などの施設はない。また文具店らしいものもなく、日用品店一軒があるのみであり、これもあまり利用されていない状態である。小学校．中学校共に庵平番にあり、その他の番よりの児童の通学距離は非常に長いものがある。この地域は静かな、表向きは明るい感じの平和な集落であるようだが人間はだれでも不安感があるもので、内面的には色々な問題がある。これは今後の研究で明らかにされるであろう。当地の人は親切で我々にも

気持よく気軽に答えてくれ、もてなしてくれた。（東畑記）

（1）人口及び職業

当地域は人口１５６人、その内男８７人女６９人である。人口密度をとってみると１３.９人で、全国的にみても低い十津川村の１９.９人を更に下まわっている。〔註．昭和３４年１２月末現在十津川村役場調〕西川に沿った比較的緩傾斜地に密度が大である。大字別に人口を記すると右表のようになる。

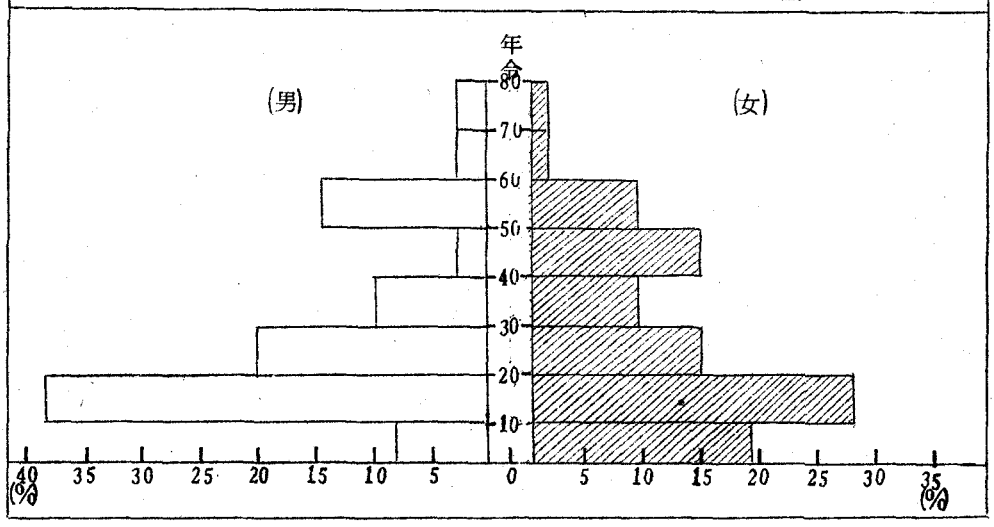
Table１　小坪瀬小字別人口（36.4.1）

	人　口	男	女
上　　番	３９	１４	２５
向　　番	１７	９	８
庵　平　番	２９	１５	１４
下　　番	４１	２１	２０
計	１２６	５９	６７

ところで、明治１４年に資料があるのでこれと比較してみると、当時人口は１５７人で現在とほぼ同数、その内訳は男７３人と女８４人であった。この同数であることと男女の比が現在と逆であるということは注目に値する。明治１４年と現在とほゞ一致した人口であるということは、時間的に余りにずれがあるが、隔絶的山村は自給自足を余儀なくされ、地形は近畿屈指の山地で岩石は粘板岩質で風化されやすく、土地は不安であり耕地は狭く急傾斜をなしているため、土地に対する収容人口が小であると共に、上に述べた様々の条件のために、収容人口は一定である。また副次的に都市への集中化も働いている。

次に人口構成についてみれば、人口構成において顕著に十津川的性格を示している下番を例にとってみると図１の如くなる。

図１　人　口　構　成　図



図から察せられる通り、青年層の稀薄なことがあげられる。男子４０代の皆無であるということは、ここにも戦争の復跡が発見できる。２０～４０代の減少は都市集中により大阪・奈良・神戸へ出ていったものである。そして都会へ行ったものは二度と帰って来ないものが少なくない。ということから小坪瀬の人口増加は現状のまゝでは起らないだろう。

ところで、明治２２年の風水害により小坪瀬より１９世帯が先祖伝来の土地を捨てて北海道に新天地を求めて移動したのは周知の通りである。現在においても成年層が稀薄なことを具体的に示すものとして、奈良・神戸・大阪へ出ている。転出はあっても転入はほとんどみられない。

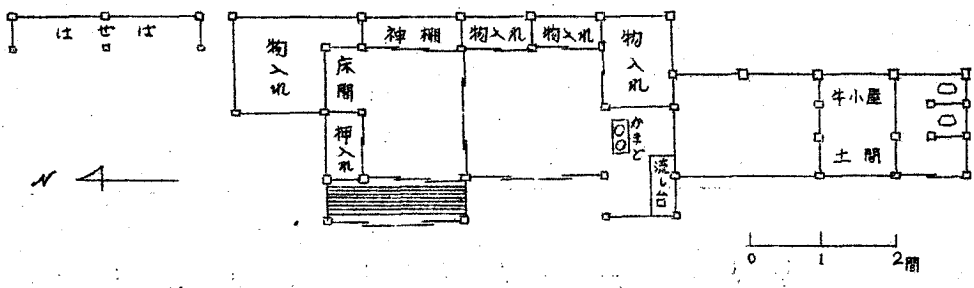
一方職業について述べると、５４人中農業２２人．林業に関係するものは２６人．小売業に従事するものは２人．サービス業は４人である。農業はそのほとんどが女で林業はその性格上男が断然多い。サービス業としては、商易旅館、いわゆる木賃宿で行商に入った人達が利用するものである。（小出記）

(2) 住　居

十津川支流西川流域に沿う集落で家屋はこの地域独特な自然条件に制約されて立地している。すなわち本来この地域は山岳地帯である故平地である集落と異なり、平坦地は少ない。従って、山腹を開墾して造成せられた宅地．耕地がみられる。よって家屋の周囲には傾斜をもっている耕地がある。しかしこの地域では通常みられる山村の形態を示すのでなく、大字の中でもある地域では宅地を求める様に、狭い土地に２．３戸の家屋が点在している。しかもこれらの土地は前述のように山腹を開墾しているので、あるものは山の尾根にまで点在している。よって、他家を訪ずれるのに山越えならぬ谷越えをして訪問する様な奇現象がみられるのである。また各家屋団は層状的にほゞ南面に向って分布している。

家屋自体についてみると、この地域独得の十津川式家屋を形成している。(図２)

（図２）　　間取図



十津川村小坪瀬上番瀬戸峠　　H　家

これらの家屋の屋根は杉皮ぶきであるが、最近では、杉皮を樹木からはぎ取ることは樹木をいためることになり被害をこうむるので杉皮の供給が減少するとともに、物資の供給が林道開発の結果安易となり、次第に杉皮ぶきの屋根は減少の傾向を示している。しかし依然としてやはり杉皮ぶきの屋根が大半を占めている。その他の材料ではトタン張りの屋根が多く目について増加の現象を示している。また一方十津川式の家屋が示す横に細長い弱々しい構造を威嚇する様にいくらかではあるがスレートぶきや瓦ぶきのものが時代を反映して建築されているのが印象的である。（奥本記）

(3) 農　業

当地はわが国で有数の僻地として知られている。それ故農業に及ぼす地形的制約は非常に大きく、わが国の他の隔絶山村、例えば富山の五箇山．肥後五箇庄などと地形的類似点をもつので、それらと同様な農業形態の観察が期待されるであろう。

まず耕作地はどれだけあろうか。傾斜地を利用しての耕作故、耕地面積は猫の額程である。総面積５７９町４反８歩のうち田４町１畝１９歩．畑は６町５反３畝２５歩．山林５０８町５反７畝１歩．野が５９町６反８畝７歩．他は宅地である。このうち田は畑の約３分の２であり、田より多い畑さえも山林の１％程度である。この狭い耕地における作物はどうであろうか。

米・小麦・麦・ジャガイモ・タマネギ・西瓜・里芋・粟・なんば・白菜・大根・タカナ・エンドウ・ソラマメ・南京・菜種・マクワ・キャベツ・ナス・キュウリ・イチゴなどの農作物が季節ごとに植えられているが田は冬季の間休閑地として放置されている。しかし畑は年中作物が栽培されている。ここで特に感ずるのは農作物の種類が多いことであり、これは自給自足を目的にして作物が栽培されているからであろう。また畑地は山腹傾斜を利用しているものであるから約２０～３０度（最高３８度の畑地が存在している）の傾斜地となっている。この畑地には蔬菜の他に、杉．檜苗が栽培されて、経済的に有利とみられている林業に、いかにウエイトをここの住民がおいているかがうかがわれる。また山林においては、副業として椎茸栽培が行なわれ、山林中にそのボタがよくみられる。この椎茸は「春子（はるこ）」と「秋子（あきこ）」と年二回収獲され、和歌山県の田辺などの商人と取引きしている。

ここにも時代の推移に従って、近代消費文化が林道開発の完成と共に特に著るしく滲透し、その結果農作物、特に粟．ヒエなどのような雑穀物の作付面積の減少が如実に観察され、日本民族に固有な「米の郷愁」を充分に発揮して、米食へと食生活が改善されていく様子が、土地利用の推移によってみられる。従って、粟．ヒエなどの作付は次第に減少しており、現在ではほとんど無いとまで断言し得る。それでは、粟．ヒエに代って、自給自足の米作が進んだのか、

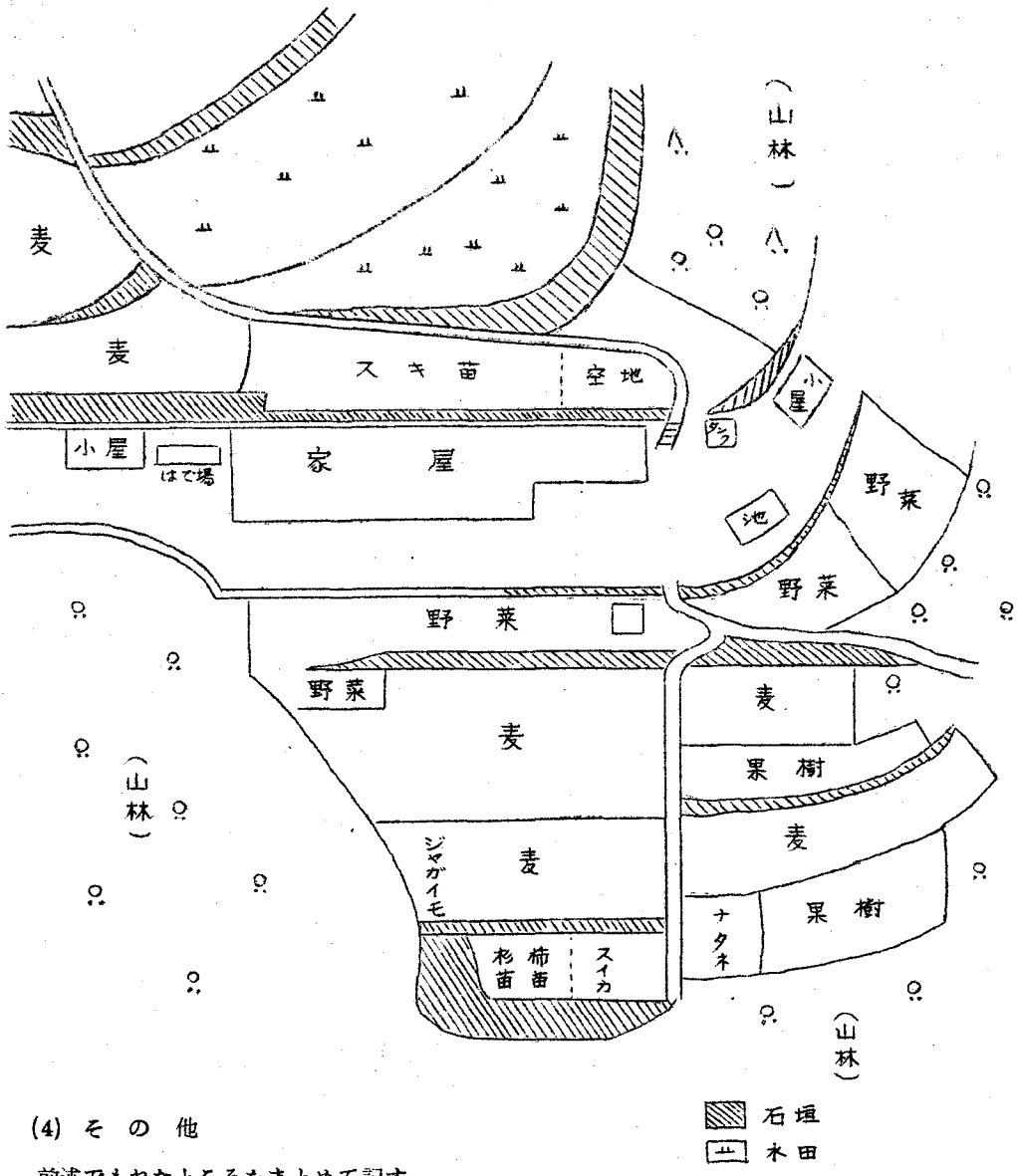
いやそうではなく、むしろ水田もそれ自身の作付面積は減少している現象を示している。その要因は、この地域は吉野山地の壮年期なる地貌を呈し、山腹傾斜を利用開発しての土地利用である為に、水田の地質、あるいは地味は肥沃でなく、また山村特有の谷水を田に導水して水源を確保しているような灌漑方法である故に、収穫量はもともと微々たるものである。いわゆる、自然環境の悪条件のもとにおける水田経営と他方人文環境現象では、社会の文明発展に歩調を合わせる様に、林道の開発完成によって物資の流入が豊富になり、必然的に、米の移入高も高くなっている。この様に他の僻地と同様、総合開発などの社会現象と時世との必然的な流れに導入されてきたための文化水準及び生活水準の向上とが観察し得る。すなわち、水田開拓が押し進められた原因で、前時代的な穀物が減少したのではなく、この現象はあくまでも社会の流れによる人文現象に多く影響されている。

次に、畑作物について述べると、これも水田におけると同様、山腹傾斜の利用法で開拓された立地条件のものが、しかも水田の床のように傾斜面を平坦化する手法を取らず、わずかばかりの手を加え、例えば、土砂流出防止の為の「ハゼ」を造成して傾斜面をそのまゝ利用している状態で、畑地化している畑の景観である。従って、ほとんどの畑が急傾斜をなし（最大なもので3.8度）、平坦部の耕地を整地するのと異なり、農作業の能率が著しく低い。また水田同様耕地面積も少なく地味もやせているので収穫も思うにまかせず、自給が出来得る程度であり、耕地の特殊な条件に左右されて、商品作物即換金作物はなく自給の為の作物として農作物を作っているのである。そのため前記の如く種類が多種多様である。

以上は、自然的環境によって、この地域の農業規模のあり方を述べてきたが、他方人文環境の一部である交通路、特にこの地域のような僻地においては重要なカギを握るのである　ここでは林道によって、主食たる米が以前と異なり、いつでも自由に購入される関係から、自らの手で耕作する必要性を認めなくなり、今までの自給自足体制の農業は打ち破られ「生活の糧」としての農業の姿は大きく後退し、その上貨幣経済体制における今日の社会に適応するための人間の赤裸々な姿を露出してか、むしろ水田は、この地域の気候が多雨地帯である故に、我が国数の山林地帯を形成しているので、いわゆる林業への関心がいままで以上に大きくなり、水田を苗床に転化してまでも林業をのばそうとする住民の熱意がみられる。

これは、貨幣経済体制の著しい滲透度によって、この地域の唯一の換金手段とみられる林業は、住民への労働力の供給地となり、以前のように農業のみに偏到することなく、むしろ農業を見捨てる感情が芽ばえている現在である。（奥本記）

(図 3)　耕作景観一例　(小坪瀬　下番)



(4) その他

前述でもれたところをまとめて記す。

まず文化面について述べてみると、郵便・新聞は日遅れで小坪瀬小学校まで持って来られる。しかし、無集配地区であるために、学校へ通っている子供達が自分の家まで持って帰る。新聞料は年二回、五条から集金に来、毎日の新聞は新宮経由で小坪瀬まで入って来る。

奈良版の新聞が新宮経由で入ってくるのは五条から配布されるよりも時間的に早いからであ

る。電灯は昭和２３年に設置され、今日ではラジオはほとんど全戸に普及し、電気洗濯機などの電気製品も浸透して、生活も改善されつつある。最近都市で著しく普及したテレビは、山頂にアンテナをつければ映らないということはないので、まだ小坪瀬には一台も入っていないが、今後少しは入ってくるだろう。また個人負担による有線電話が昭和３５年に施設され連絡は昔は比べ非常に便利になってきている。飲料水は、以前谷からかついで汲みあげられ、一日の重労働の一つの日課となっていた。しかし、４・５年前から、ビニールホースの普及により改善されて、都市の水道となんら変らないようになっている。しかし谷水を引水する場合、にごらない、冬凍結しない。一年中涸れないことが条件となるため、１０００m以上も離れた所から引水されていることがあり、大変費用がかさむようである。

食物はほとんど自給自足であるが米は自給できぬ。日用品は西中（にしなか）．永井（ながい）．重里（しげさと）まで買いに行き、日用品以外のものは、新宮などに出ることが多い。西中．永井．重里には、新宮．平谷方面から商品が入ってきている様であるが、いわゆる万屋式で一軒の店に色々な品物が所狭しと並んでいる。又山村のお医者さんともいわれる売薬も、例にたがわず配布されており、高市郡や富山の業者からそれぞれ入っている。しかし最近重里に診療所が作られ、また薬店が作られてから利用度は低下しつつある。

同じ字の中でも、遠い所は３０分以上も山道を歩いて登校しなければならない。そのため特に冬の登校は困難である。しかし、そのほとんどの親が山林業に従事しているため、朝早くから出てしまうので、子供たちも始業の二時間位以前から学校に集まってきて遊んでいる。子供のある家の近くには広場というものが全然ないため、学校の運動場で走りまわるのが楽しみなのであろう。

一年中を通じて一番盛大な祭は、春祭ともいうべき神武天皇祭（４月３日）であるが、祭といっても簡素なもので、村の代表者が集まって西中から神主を呼んでモチマキを行うだけである。

しかし娯楽の少ないこの地方の子供たちにとっては結構楽しい行事なのである。現在では一年中を通じて一番にぎやかな行事というものは、学校で行われる運動会（１０月）だそうである。

しかし何といっても、この地域が急激に開けてきたのは、昭和３５年に林道ができてからである。電源開発される以前は平谷から山の中腹に巾１ｍの道があったが、現在では迫西川（せにし）．今西（いまにし）などからの木材搬出用の林道巾５ｍが旧道の下約１０ｍ、西川に沿って作られた。このため唯一の交通路であった旧道の利用はほとんどなく、新道を自転車．単車（特に目立つ）．木材

搬出用小型トラックに便乗するものが多い。従って林道は単なる林道としてではなく、迫西川・小坪瀬と平谷を結ぶ生活交流の中心となり価値が大になっている。また最近までみられなかったタクシー（重里営業所の三交タクシー）も営業され、急用の場合欠くことのできない交通要具となっている。（荻原記）

2. 今　　西

今西は小坪瀬より北東6.5Km（道のり約15Km）、平谷より北（わずかに西にそれるが）7Km（約12.5Km）、十津川の支流西川に注ぐ浸蝕のはげしい釜中川・甲喰川の合流点の東側にあり、東には行仙嶽（1091.7m）がそびえ、比較的なだらかな傾斜地に家屋が点在している。もちろん、本村も典型的な山村であり、上原・下原・三阪・釜中の計4つの小字が集って今西集落が形成されている。しかし、今西もやはり小坪瀬と同じく集村ではなく、中心上原・下原より徒歩約60分のところに三阪があり、釜中へは約90分を要する。また釜中の一部馬場平までは釜中より約25分かかる。すなわち釜中とは、釜中川をはさんで向い側にあり、急な坂道をあえぎあえぎ登ったところにあって、全く「陸の孤島」にふさわしいところである。しかしそこからの眺望はすばらしく、前面にひらけた杉・檜の山並、その向うには上原・下原の今西集落がマッチ箱のように見え、山と山の谷間をぬって流れる釜中川の曲流が手にとるように見えてその眺めは、「すばらしい」の一語につきる。始めて訪ずれる者にとっては、よきハイキングコースとでもいいたいところであるが、そこで日常生活を営む人達にとっては、それどころではないだろう。

村の構成は上原（9戸）・下原（13戸）・三坂（1戸）・釜中（13戸）計26戸、人口146人で、面積13Km²・人口密度12.2人である。しかし146人のうち比較的成年層が少なく、本村の将来に暗い陰影を投げかけている。（現地人の話）学校は小学校だけで、中学校は約7Kmはなれた重里まで出なければならない。小学校は今西の中心地下原にあり、教師2人の複々式の学校である。狭い運動場でソフトボール・かけっこなどに興じている姿を見ると哀われを感じさせられる。

家屋は緩傾斜地を選び、いわゆる十津川式といわれる様式で、前面に高い石垣を築き、横に長く、屋根はほとんどソギ葺きである。農業では見るべきものはない。水田は上原・下原ではほとんどなく、三阪・馬場平の階段状水田の光景は美しく、能登の千枚田を思わせる。（上原・下原ではわずかな水田にも木が植えられているのは面白い。）また比較的多い畑作は急傾斜地に耕作され、大麦・野菜類が自給的に作られ、狭い土地によろず屋的で向い側の木々の色と好対照をなし、町では見られない景観である。また特異なものとして杉苗・檜苗が多く見られ、

一年子・二年子が規則正しく植えられており、将来の大木の片鱗を示している。主な収入源は山林労働としての収入である。周囲の森林は大部分新宮などの他村の者に所有されており、一般に山主といわれる大規模な所有者は、ほとんど無に近い。故に一年中（冬の積雪の多い時期を除いて）山に入り、大木を前にして生活している。

この山村に大きな変革をもたらしつつあるのは、昭和３５年に平谷より今西の上流 3.5Kmまで貫通した幅約５ｍの林道である。開通前は重い荷物を背にして運んだのも、今となっては小型自動車・単車などに一変し、以前とは逆に「荷物の上におればよい」というようになった。木材の搬出方法も変り、木材を満載した自動車が重要なルートであった西川の清流を横目にして走っている。しかし依然として山村形態からはぬけきらない。例えば郵便なども無集配地区であり、新鮮さを要する生魚などもまだ入手できない状態である。そのため、保存のきく罐詰．干魚．塩魚などにたよっているのである。人里離れたこの静かな山村にも今後解決しなければならない問題がたくさん残されているようである。（笠松記）

(1) 人口及び職業

当地は人口１５６人でその内男７７人女８２人である。人口密度は１２.２人で、十津川村全体の人口密度を下回る。前述の小坪瀬を更に下回っている。〔註．資料は昭和３４年１２月末現在十津川村役場調〕

ところでその分布状態をみると、三坂・釜中といった辺鄙地に少なく、上原下原といった学校のある中心に多い。これはやはり地形の関係を強く感じさせる。つまり緩傾斜と少ないながら平地を有する土地に大である。各小字別の人口を表にしてみると上述のことが明確に理解出来る。

次に人口構成図を作ってみると、やはり男子青年層の稀薄なことが目につく。小坪瀬に比べると、女子は正常な型である。つまり女子の転出者が少いことを物語るものである。

Table2. 小字別人口 (S.34.10)

	戸数	人口
上原	9	52
下原	13	72
三阪	1	4
釜中	3	18
計	26	146

人口の変遷について述べると、明治１４年の人口調査によると、２９６人（５３戸）である。昭和１２年には２０３人に減っている。更に昭和３４年１０月には１４６人と減少している。その変化の様子を変化率に現わすと下表になる。明治１４年の２９６人と現在と比べればほゞ半分に減少している。

図 4 人 口 構 成 図

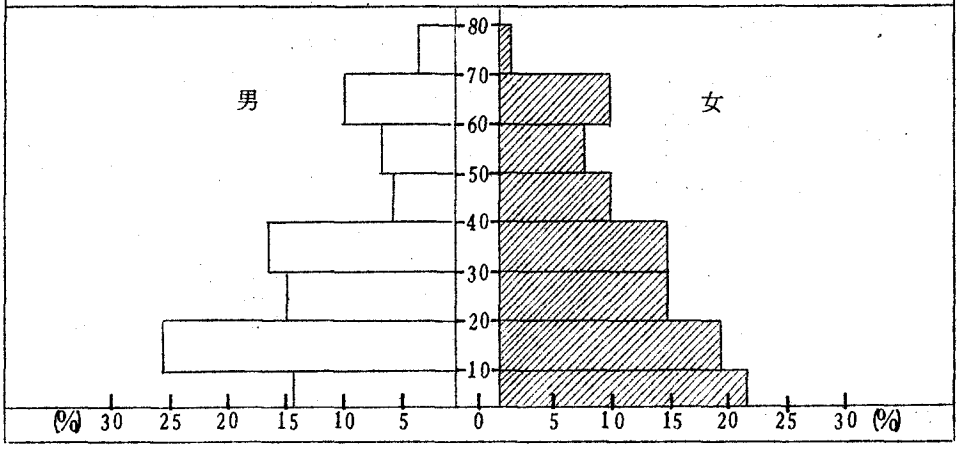


Table3. 人口変化率	
明治 14	296人
T. 3～S.12	1～10%減
S.12～S.23	20～30%減
S.23～S.34	0～15%増
昭和 34	146人

(註. T：大正　S：昭和)

表より分る人口の増減の根底をなす諸因子については今後の研究にまちたい。

最後に人口の移動についてみると、

転出者は今から30年前に北海道へ古矢倉より出て行き、これによって今西より古矢倉の小字名は消えてしまった。これより以前明治22年の風水害により、北海道へ21世帯が移民として出ている。これが何よりも大きな転出である。現在においては、すでに3戸が今西を去ろうとして行き先きはそれぞれ東和歌山・大阪・丹波市と決めている。

転入としては5～6年前左垣内・大谷よりいずれも下原に入って来ている。転入は大字外からは少なく、辺鄙なところからやゝ開けている下原上原へ入るといった大字内の移動で大字外からの移転はまずない。

次に職業について述べる。

まず、職業分類をしてみると、89人中農業に従事しているもの46．林業に関係しているもの41．サービス関係に入るものは2という数になる。

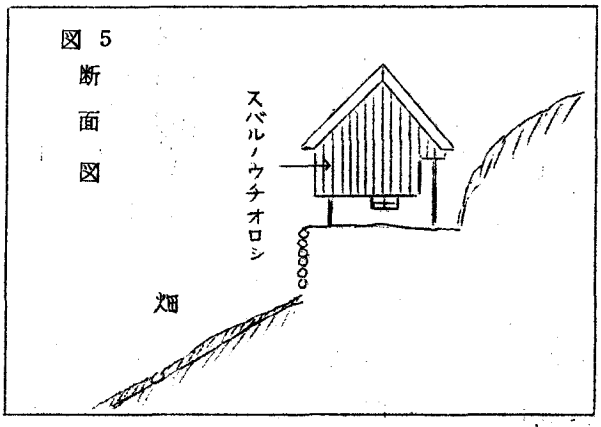
十津川奥地であるということと仕事の性格の上からいっても農業に従事するのは女、林業に関係するものは男となっている。

農業から金銭収入を得るということは耕地面積がせまく急傾斜をなしているということから全く考えること出来ない。そのため男の山仕事に金銭収入をたよることになる。今西には山の

個人持ちは非常に少ない。附近の山の持主に日雇いによるか、あるいは何年かの契約で山の管理に当っているのがそのほとんどである。（小出記）

(2) 住　居

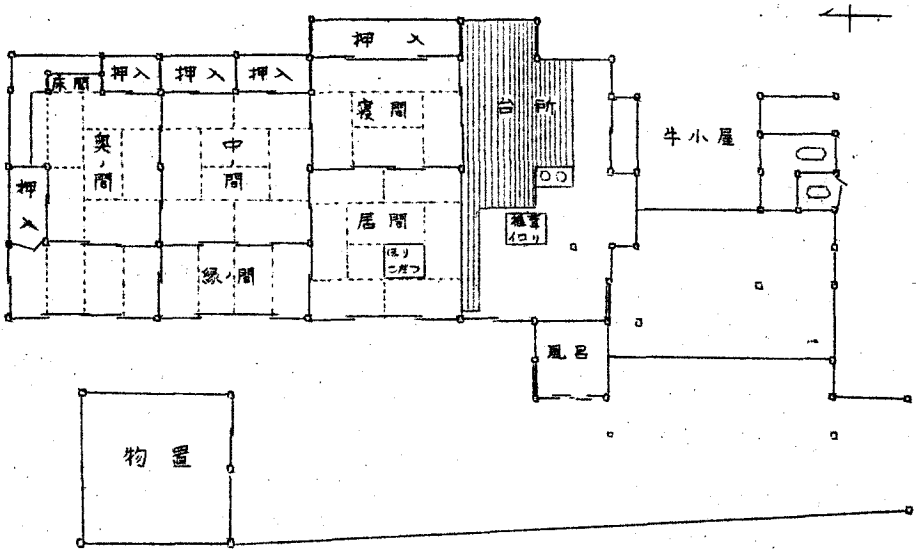
河の流域に沿って部落が発達する。今西もその例にもれず、甲喰川と堂中川の合流点に発達しているが、川との関係は余りみられない。つまり河床より約２０～３０ｍも上位に立地している。そして数少ない緩傾斜地を利用して階段状に土地をけずり住居がたてられている。



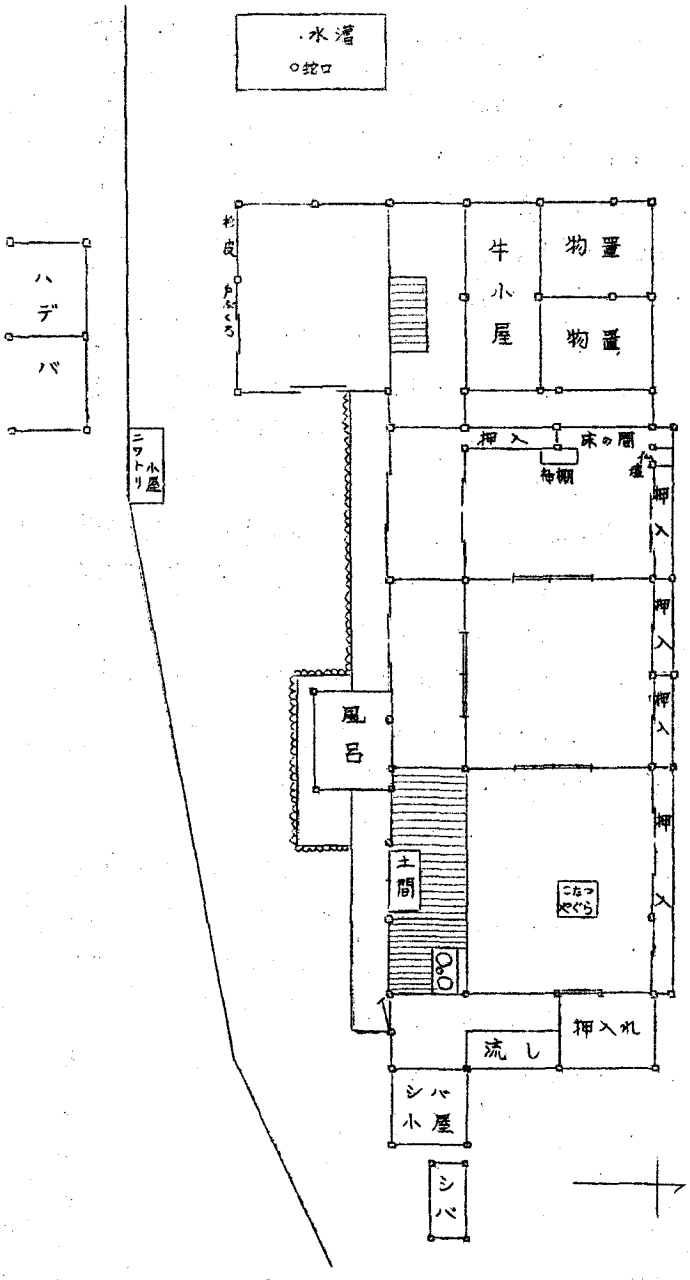
住居は、いわゆる「十津川式」で奥行小さく間口が非常に大きいのが特色でこれも地形の制約である。したがって、間取りも横目の字の間取りともいわれ横に長くのびている。

材料は附近に豊富にある木材がつかわれている。十津川式の最も大きな特徴は、壁に土壁がないことである。山は泥板岩質で壁土を得にくい。また壁土に混ぜる稲わらも思うにまかせない状態でもあるし、土壁をするには竹をあまねばならないのでその竹とても得にくいという理由か※

図 6　間　取　図　　十津川村今西　　U　家



間取図　十津川村今西字釜中　T　家



※らであろう。また、土壁だとある程度の幅をもつ。しかし板を外から張るだけでは柱の厚さだけ広く使えるからでもあろう。

屋根はヒノキまたはスギの皮または板のそぎ葺きであった。瓦も相当普及しているが林道の開通によって運搬が容易になると今後トタンの使用も増えるだろう。（小出記）

(3) 農　業

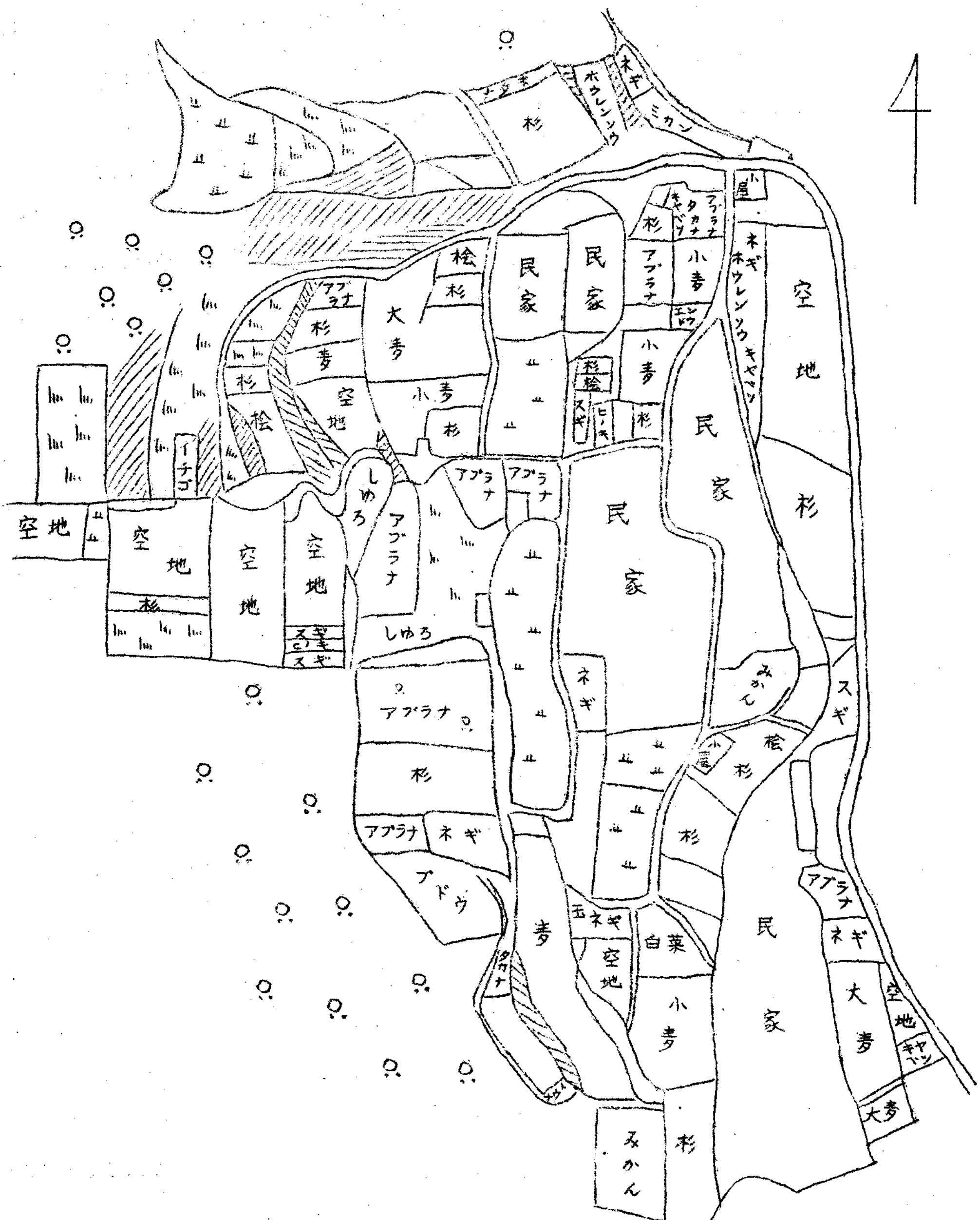
当地は小坪瀬に比して小さく、面積は３２８町４反８畝２２歩であり、そのうち畑１１町３反９畝１歩．田は４町５反８畝８歩であり、田は畑地の約３分の１程度である。また小坪瀬でみられなかった藪地があり、１反８畝１６歩と、ごくわずかながら存在する。山林は２６８町２反４畝２１歩と圧倒的に多い。いかに山の中であるかゞうかがわれる。また平坦部には見られない秣場があり、４３町４反２畝２歩を占めている。宅地は６反６畝４歩であり、この中に５３戸が存在する。１戸当たり約１畝あまりの敷地の上に生活し

ていることになる。

さて、この狭い土地での一年間の収穫高を示すと、米４２石・麦３５石・大豆1.1石・小豆５４石・玉ねぎ４１石・里芋1万斤となっており、その他に椎茸１２０斤・製茶３８０斤がとれている。この地も小坪瀬と同じく自給自足形態であるから、作物の種類が多く、主食でないかぎり一種のものを多量に生産するということはほとんどみられない。また土地の人の話では当地域は土地が肥えていてよく栽培できるそうである。丁度我々が調査に入ったころはタカ菜あぶら菜・キャベツ・ホウレンソウ・ネギ・ソラマメなどが１０平方米程の土地に混植されてあった。一枚の畑で一種類だけというのは、大麦や小麦のほか見あたらなかった。そして上と下の畑の間に高低の差がひどいときには石垣をつみその上で茶を栽培していた。また荒地のようなところではしゅろを植え農具に役だたせている。またこの地でも小坪瀬にみられたと同じく杉・檜の苗が沢山植えられていた。やはり自給できる程度の作物があれば他はすべて林業に土地を向ける方が良いようである。傾斜が２０～３０度以上の畑がほとんどであることは耕作の困難を想像させるが農業は小規模であるから女子が生産に従事している。男子はすべて山に入る。水田も非常に少なく収穫高も各家の消費分だけがやっとであるが自給は出来る。しかし配給米ですます場合もある。配給米は、小山手にある農協支店を通じて得られる。農機具についてはクワ・スキ・カマなどは松柱から購入している。しかし、耕転機などはまだ使用されていない。もし購入されたとしても、土地が狭いことと、傾斜が急であることによって使用は無理であろう。耕やす方法としては古くから牛が使われ、二軒に一頭の割で二カ月交代で飼育されている。水は谷水を利用して、水路はホリドイまたはイゼ（赤土などでこしらえた水路）で水を入れていた。馬場平ではビニールパイプを使っていた。ここには一軒あるだけで家の上下左右に水田が棚のように存在していた。いわゆる棚田である。現在では他の地域でもこのようにビニールパイプに移行しつつある。田植えは５～6月始めにかけて行なわれ、とり入れは11月なかばまでにやる。麦まきは１１月２０日までにやり、麦刈りは6月である。むしろ・籠とかいった諸道具は平谷から購入するが、自分の家で作る場合もある。肥料は化学肥料に変遷してきて永井より購入している。家畜は牛・綿羊・豚・鶏といったもので、特に鶏はどの家も数羽飼育している。副産物としては十津川の特産物ともいうべき椎茸ぐらいのものである。菌を入れるのにほど良い時期は、秋１０月末から１１月はじめ（３０日間）で、とり入れるのは3年後の秋である。味は天然培養の方が良い。乾燥は椎茸乾燥場で、薪・炭を燃料として鉄板を利用している。釜中の玉置家では最近山梨県から乾燥ガマを購入し、一度に大量の乾燥をみているそうである。干椎茸は和歌山県田辺あたりから買いにくるし、また大阪方面へ出す場合も

ある。大体１００匁４００円程度、食事は〃けんずい〃を含めて４食で、そのうち朝晩は「かゆ」である。飲料水は４年程前から１Kmも離れた所からビニールパイプで引いて来ている。→

図　7　　　　耕作景観一例（今西）



→以前はホリドイを利用していたようだ。（松村記）

(4) そ の 他

今西に於ける教育施設といえば「今西小学校」1つである。この小学校は十津川の中でも、小規模の学校の部類に属し、児童数21名．クラス2学級．先生2名といった状態である。遠隔地域の子供などは朝早く6時頃に起きて通学している。学校は山また山に囲まれている為、のんびりとした閑静な空気をかもし出している。しかし子供達が狭い運動場でボール遊びをしている姿を目にするにつけても、何か寂しげな感じがしないでもない。

今西へ入って来ている行商人としては金魚屋・花屋などは全然なく、薬売りは富山から春秋2回、4人の人が入っている。また高市郡から来る場合もある。店屋は2軒あったが今はなくなってしまったので、日用品や駄菓子の類は重里．永井まで買いに出ている。また婚礼の道具といった大きな買物は新宮まで買いに行くのである。病人などが出た場合重里診療所にたよっているが平谷に開業医があって診察して貰うこともある。

交通としては一般に旧道は利用しなくなった。林道が開けたため重里．平谷へ出る場合は材木運搬トラックに便乗といったケースが非常に多く、急患のような時は重里からタクシーを呼ぶ。単車は大体2軒に1台を持っている。しかしバスの便の為に小原へ出る道を使用する事もある。また平谷から那智合を通って今西へ入る道もある。

電気は昭和24年に開設され、その為現在ではラジオは1軒に1台ぐらい持っているし、電気洗濯機や螢光灯のような文化設備もほとんどといってよい程使用している。

次に行事についてのべてみよう。

○ 大晦日

昔は晩のうちに正月の食物は炊いておいた。夕飯は早い程良いといって「八ツ」に食べ、その時必ずといってよい程「コンニャク」を食べた。またゴボウ・コイモなどを味なしで炊いて神様に供えた。

○ 正 月

旧正である。この頃は正月休みとして、1週間が休みとなっている。元日は朝早く起きて、米・大豆・塩・アズキ・サカキ2本・しめなわを持っていって若水を汲んだ。若水は神様へ供えたり、顔を洗うのに使用し、また雑煮を炊くのにも使った。鏡餅は三重がほとんどであってみかん・干柿・山草・コンブを供えた。

氏神まいりは早い程良いといって朝早くまいった。雑煮は当地に於ては元日の朝だけであって、あとは大晦日に炊いたむしめし（白ごはん）を食べる。

○　七　草（7日正月）

七草・トウフ・米・モチを入れて七草のぞうすいを炊く。現在はほとんど行なわれない。

○　小正月

「正月サマ（正月の神様）は１５日アガル（帰られる）」と当地の人はいう。弁当・スシ・ミカン・モチを飾り物と一緒に持っていく。方角は決めていない。

○　節　分

ヒイラギ（鬼のキンタマツキ）といわしの頭を割竹にはさんで入口にさした。大豆をいって「福は内」と言って内へまき、「鬼は外」といって外へまき、まき終わってから鉄砲を撃った。これは摩除けのまじないである。また年占といってイロリに大豆を１２個ならべて、その年の天気の占をやった。また大豆をエビス様に供えて最初に雷のなった時に食べると幸運な事が起きるという。

○　3　月

祖霊社（小安地蔵尊）を祭る行事がある。モチツキをして甘酒も作る。またアズキだけをすって塩なしのダンゴを作った。

○　5　月

5月の節句にはチマキを作るぐらいのものである。

○　6　月

田植えの終わった時にはサナブリといってモチをつき、酒を飲んで田植えが良好に進んだ事を祝う。（付．酒といっても現在は清酒が殆んどで、どぶ酒は作らない。）

これと反対に稲のとり入れ時には、ボタモチやアワモチを作る。またアゲズシ・サクラズシを作って収穫を祝うのである。雨乞は今頃は全然行なわないが、昔は高野山の火を貰って来て荒木神社へ供えたそうである。

○　秋祭り（9月１9日）

荒木神社のお祭りである。祭りといっても太鼓・かねの鳴物入りとは違ってきわめて質素な祭礼である。家々ではアズキメシ・アズキダンゴを作る。また荒木神社へ奉納するモチを作る。そして玉垣内から神主を呼んでモチマキが行なわれる。（岡田記）

十　津　川　の　生　活

民　俗　学　究　研　会

◇　はじめに
一．村の構成
二．生産民俗
　　1.　林業と山の神
　　2.　農　耕
三．日常生活
四．信仰と行事
五．外部との交渉

◇　は　じ　め　に

紀和山地の奥深く、執拗に蛇行する十津川の本支流の河曲(わ)に、また見上げるような急勾配の山畑(そば)のいささかの緩斜地にささやかな集落を営んで、不断の洪水や地辷りに脅えながらも、乏しい生活を生き抜いて来た十津川郷の村々は、久しく「秘境」とか「僻地」の語を冠せられて、世俗の「文化」から程遠い隔絶された世界と目されて来た。

たしかに十津川郷の民俗は極わめて濃厚な残存度を保有し、また住民自身も大和の一隅にありながら国中(くんなか)（大和平野）をヤマトと呼んで自らを別国扱いしてきた傾きはあるが、その民俗や歴史をつぶさに検討するとき、この地域が完全な自給自足によって外部の世界とは無縁の生活を営んできたものでもなければ、また乏しい食料資源の故にかえって外界との交渉に依存し、あるいは生活の資を補うために季節的または半恒久的に外部に出働きせねばならず、一方その交通の不便さの故に世に容れられぬ人々の逃避の場となって、こうした亡命者が中央の文化の荷担者として住民に優遇され、これに加えて定時不定時の宗教伝道者．商人．職人の出入も案外頻繁で、その意志の有無に拘わらず文化伝播者として大きな役割を果たして来たことが明らかとなって来る。こうした刺激が、時に伝統的な皇室との関係と相俟って、勉学への熱意を誘致し、十津川人士特有の気風を醸成するきっかけとなったことは否定できない。

以下僅かの紙数で西川本流筋の村々を中心に採集した民衆生活の記録の一部を民俗学的に辿ってみることとするが、本総合研究のテーマたる僻地教育の場の根本的な構造をある程度まで描き出すことが出来ればしあわせである。

なお本研究の主な参加者は服部明（一部四回）．川畑堯一（文科四回）及び福島一人（一部

三回）指導教官は林宏助教授である。

一．村の構成

十津川村７区５５大字のうち、西川筋は西川区に所属し、同区１１大字４５０戸の中、上湯川筋の出谷・上湯川を除き９大字３００戸余が西川筋にあり、そのうち今西・大谷だけが支流の奥に、他は本流沿いに布置している。地形の関係上、民家は僅かの居住適地を求めて数戸ずつ一時には一戸一散在している場合が多いので、各大字（ダイジ）は若干の字（あざ）にわかれ、各字が更にいくつかの小単位にわかれている場合が多い。字は一般にバン（番）と呼ばれるが、今西ではクミ（組）と称し、西中ではカイト（垣内）の語が併用されている。但し重里の串崎や金剛川の上の松柱（出谷北部）のような大きな字では、その下の小単位がバンと呼ばれる。大字の住民は自分の大字をヂゲと呼び、その領分をオオリョウと称しているが、串崎・松柱等の場合はやはり字がヂゲとなる。次に各大字の字名と戸数を記してみると、

迫西川（はさし）―上番（上谷）４．中番（本地下（ほんちげ））１２．辿（たわ）１．湯野々４

小坪瀬―後記

小山手―栃尾番１３．瀬戸番８．下向（しもむき）番１０．片川（かすこう）１３

西　中―光野番（光野垣内）８．奥野番（奥野垣内）９．矢倉番（矢倉垣内）８．佐田番（佐田垣内）１２．前田番（垣内とはいわず）８

今　西―下原下（しもした）組６．下原上（うえ）組６．上原下（かみした）組１．上原上（うえ）組７．福長組２（内１は三阪（さんざか）に）釜中組３（内１は馬場平（ばばだいら）に）

玉垣内―玉垣内番１２．宮の平番８．谷合番０

永　井―ヒララ番１４．オウジ番１４．

重　里―田野々．田良原．殿原．椎平．串崎

などにわかれ、その下に多数のバンがある。

西川区全体を代表して区長がおかれ、任期二年、役場で区長会を持つ。各大字は惣代によって代表される。惣代は昔の庄屋に当たり、以前は人民惣代、戦時中は駐在員とも呼ばれた。任期一年、西川区の区会には１１人の惣代が集まる。各バンには一人の商議員がいて惣代を補佐し、草案を作製して大字の総会に諮り、大字の相談ごとを決める。税金や電気料の徴収などの事務も取り扱う。任期は二年。また各バンにはクミガシラ（バンガシラ）がいて惣代からの指令を戸々に伝達し、バンの雑事を担当。フレガシラ、または札番とも呼ばれた。任期は一年、まわりもち。バンではバン会をもち、クミガシラの家で不定期に寄り合ったが、永井や小山手

ではクラブを利用する。その他、神社関係では氏子総代があって総代と共に集まり、また地主総代は土地関係のことを管掌し、土地台帳・地籍図・帳面を保管する。

村民の日常生活は地縁的結合たる大字を共通の基盤とし、橋梁・道路・学校の修理・夏草刈など協同のフシンを行なうが、大きな大字ではバンがフシンの主体となる。葬式・誕生など吉凶にはバン中が手伝い、田植などにはバンを単位としてテマ（ユイ）の交換が行われる。勿論大字が小さい場合はそれが単位となり、嫁どりの酒ツリなどは大字の範囲を越えて近在のお祭のような騒ぎだった。

血縁的な集団としてホンヤとインキョの連繋があるが、本分関係の上下意識は意外に弱く、本来本分家の紐帯維持の大切な行事であった元朝のカドワケさえも血縁を無視して最寄の家同志で行っていた例が少なくない。同姓の間でも血縁関係を有しない場合が多く、その場合大字内の旧家を頼ってその名字を貰ったもので、これをミョウジオヤとしてカドワケを行った例も多い。新たに村入りする場合の手続きもきわめて簡単で、別に藷草鞋親（ぬれわらじおや）を頼むこともなく、大字の惣会へオミキを出す程度で済んだ。

経済的な米・麦・タネの頼母子（たのもし）講・宗教的な伊勢講・庚申講などの組織は戦後殆んど解消してしまった。

以前は村有林（郷山）や大字の共有林が多かったが株山として細分されて個人有林となって村外に転売されて了った場合が多く、これが出稼ぎを促進することともなったが、山林を手放さなかった今西や松柱では伝承が最もよく保存されている。

各戸は独自のヤミョウ（家号）を有し、現在も呼称として用いられる。離村・入居はかなり頻繁で、家屋敷から田畑山林まで一切の権利と義務を買って入ることを「カトクを買う」といい、その場合ヤミョウまで継承し、前住者の墓所の祭祀をうけついで、わが家の祖先と同様丁重に祭っている例が多い。

次に一例として小坪瀬（こつぼぜ）のヤミョウと系譜を記してみよう。括孤内は名字。

●向番（むかい）　和平（わさら）（山本）→福屋（千葉）橋詰から入住・改称

中曾（ぞ）（山本）

田中（田中）一番古い家柄の一つ

山本（山本）山本一統のもと・退転

山本・田中・和平が一番古く、両氏は本分家の関係にあった。

●庵平（あんだいら）　大徳屋（田中）往来端に移転・新築・養子は浦高畑の長男

旧大徳屋（田中）大徳屋のいとこの次男が大徳屋旧宅に入居

皿屋（中村）

前田（前岡）上湯川大井谷から入居、本家は橋詰の中橋詰家

鳶屋（中村）皿屋のインキョ

貴津美屋（中村）皿屋のインキョ

中村（中村）北海道へ移住

ほかに、学校・同住宅・氏神国常神社・長昌寺址あり。

• 下番（した）

上郷（うえごう）　北本（原田）

井向（いのむかい）（中垣）→津本（大畠）井向家は小山手の中垣一統の本家．北海道へ移住．

津本家は現惣代

高畑（はた）（原田）北本先代の弟

浦高畑（田中）当主資恭氏は井向家の出．村議

下郷（したごう）　野佐古（のさこ）（東）

寒根（かんね）（山本）

寒根皿屋（かんねーさらや）（岡）オカともいう

• 上番（かみ）

瀬戸峯（せとね）　浦（うらぼう）（上坊）

野地（原田）原田一統の本家．当主は北本家の先代の弟

橋詰　中橋詰（前岡）上湯川大井谷から、庵平の前田家の弟ながら本家を継ぐ。

浦橋詰（田中）向番の田中家の弟

北垣内（千葉）向番の和平家址に入り、福屋と改称

森尾　森尾（橋本）→花屋（田中）

森尾家は伝説の九十九（つくも）七郎の最初の宅址．大阪へ退転．花屋は庵平大徳屋当主の弟

中森　中森（山本）退転

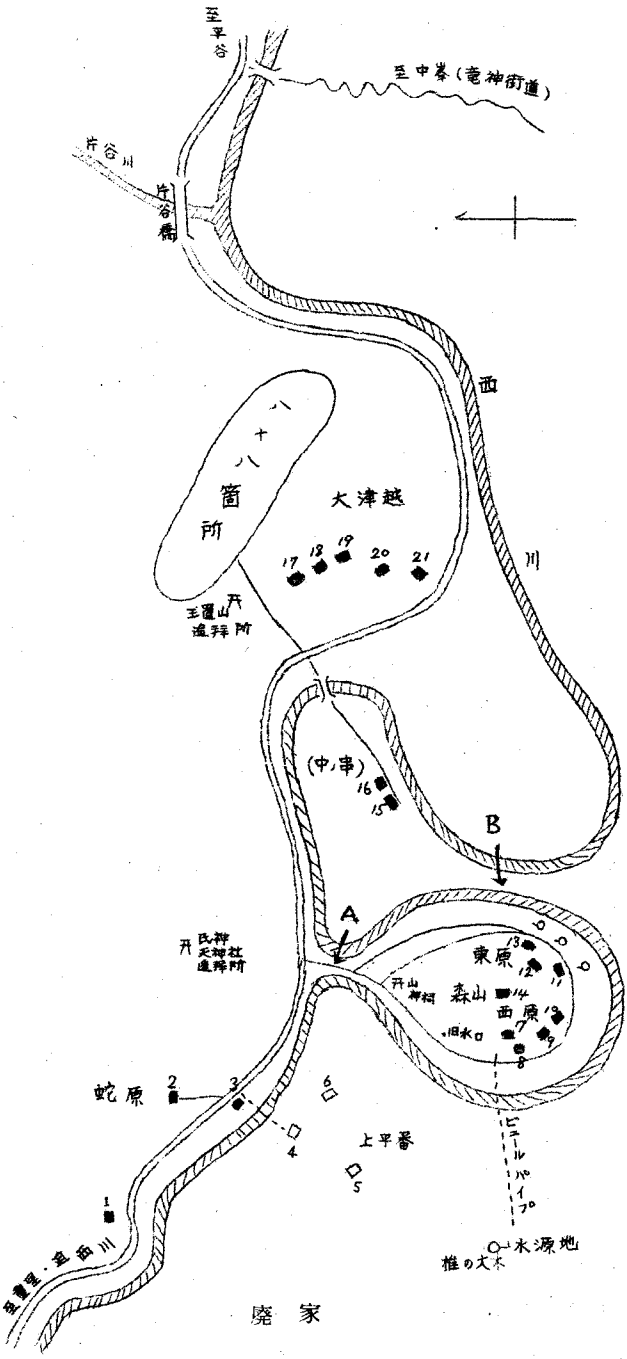
朝原（くえのはら）　今は九重原と記す

中上（なかうえ）（熊井）

中平（なかだいら）（山本→光野）光野は樫平の人．中平家のカトクを買って入住

別に重里串崎の小字名と各戸のヤミョウの分布を付図として挿入する。

重里串崎概念図



蛇　原

1.蛇原（榊本→大江）

2.吉本（吉本）

3.大津屋（榊本）食料酒類販売

上平番

4.中（榊本）大津越へ転住廃家

5.坂本（千葉）紀州へ退転

6.中南（中南）廃絶．最古の家筋．新宅桝屋などはこの分れ

西　原

7.上西（千葉）

8.中沢（鎌塚）

9.新宅（榊本）原住者は中南の分れ．明治22年北海道へ移住したあとへ入住

10.下根（シモネ）（榊本）

東　原

11.神屋（深瀬）

12.上根（ウエネ）（千葉）

13.峯宇城（ミネウシロ）（鎌塚）

14.森（大谷）森山の頂にあり．松柱の大谷の分れ

(中の串) 東原の一部

15.岡（鎌塚）

16.本屋（ホンヤ）（榊本）精米綿打直し

大津越

17.中屋（深瀬→榊本）もとの中屋（深瀬）は西宮市へ移住したが西川一の山もちで今の中屋は上平から来住（中家）深瀬氏のヤマモリをしている。

18.桝屋（榊本）上平の中南の分れ。

19.切畑屋（切畑）3代前に紀州から来住

20.大浦（榊本）

21.下根分家（榊本）ヤミョウなし

※→

→※地峡部Aの巾はわずかに１６ｍ．Bの巾は２０ｍしかないのでトンネルで抜いて廃川地を水田化する話もある。
串崎の中心は森山の丘を中心とする東原と西原で、陽ざしをうける東南側斜面は蜜柑畑となり、十津川一の産額を有する。日当たりの悪い西北側は樹林におゝわれ、その中にもとの水源があり、渇水時は更に下方崖下近くまで湧水を汲みに出かけた。戦後はビニールパイプで谷の対岸から引水し、一部開田工事さえ行なわれている。

二．生産民俗

十津川の生産活動の主柱はいうまでもなく林業であり、一方農業は食料のごく一小部分を提供するに過ぎないが民俗学上興味ある伝承を数多く留めている。輸送・狩猟・川漁なども若干の生活の資を貢いだことは勿論であるが、ここでは直接林業ならびに森林関係資源の利用、および水田．熟畑．焼畑など農業関係の諸項につき民俗学的立場から略述することとする。

1. 林業と山の神

山林業は元来非常に危険な職業であるため、山の神を中心とする祭祀や禁忌は極めて厳重である。ソマ（伐採）の時はイゴヤ（杣小屋）を建て、傍に臨時の祭壇を設けてヤママツリ（またはヤマハジメ）を行ない、その夜は盛大に祝宴を張る。山の神はゴッツイことがお好きだからこうした折は殊に賑やかにやる。カシキ（炊事番）はわざわざ杉か檜で新しい杓子を作って毎朝の飯の初穂を先ず山の神に供える。山で弁当をつかう折も最初の一箸は山の神に供える。山仕事中はサル・イタチその他につきいくつかの厳重な忌言葉をもつ。女が入れば穢れるとし、炭焼小屋でも不浄中の女はカマに寄せつけぬ。

山の神は綺麗な女神で人間を大切になされ、人が崖を通る時谷側に手を拡げて守っていて下さる。その代りたたりも恐しく粗末にすれば覿面に報いがある。山の神は７人だともいい、小豆団子を７箇供える所もある。そのため７人で山仕事をすることを極端に忌み、この禁を犯したために不慮の災禍にあった話は数多い。ひいては７人旅、７人兄弟さえいかんという。西川でも各地に見られる７人塚もこうした伝承から生じたものであろう。

山で野宿をする場合は寝るのに必要な範囲に榊を四本立て山の神にコトワリを申してその中に寝ればどんなものが来てもサワラヌ。山で山の神を祭る際は、「俺等がここにいる間ここで祭らせていただきます。」とコトワリをいい、小屋を畳んで帰る時は「ここしもうて帰ります」とコトワリ、祭のタナなど一切取り払って来ないと、山の神がそこに残って、他の人が知らずにそこをアラせば必ず怪我をする。

山の神祭にケズリバナを供え、またオコゼを見せれば山の神がお喜びになるという伝承は紀

州と同様である。山中で鉈や莨入れなどをなくすると山の神に願掛けしていきなりそこらのシバ（灌木）にとびついてこれを相手に一人角力をとる。このシバズモウは真裸でやれば一層効目があり、これも山の神が女神だからという。

霜月7日は山の神の祭の日であるが、この日山へ行けば木の中へ数え込まれるとて絶対に山に入らぬ。正月16日はシガノアクニチとて山林の仕事に携わる者は山に入らぬ。山で怪我人が続出すれば必らずオヒマチをして酒や団子を供えて臨時の祭を行ない、その日はイック（1日）仕事を休む。

山で御詠歌を歌えば山の神が7里逃げる。田植唄や伊勢音頭も慎しまれる。

山の神を祀るのは下刈・ソマ・ダシ（木材搬出）・カリカワ（クダナガシ．ばらの流送）・筏師など直接木材の伐採．流送に携わる人々のほか、樽丸師・松烟つくり・椎茸栽培業者や炭焼師などで、この地域の住民のほとんど全部がこの神の加護を信じている。氏神の境内にヂゲ全体の山の神を祀る大字（例えば西中の鷹取神社境内）もあるが、迫西川のように戸々に山の神を祀る大字もあり、また部落で数ケ所に共同で祀っている所も多いが、祠を構えたものはごく少なく、大抵の場合、杉．檜．榊．樫．柞（ほうそ）．栂（とが）．ワカバ（譲葉）．バベ（ウバメガシ）などの老樹で以て象徴され、その枝を折っても大きなたたりがある。また岩角や自然石に祀り籠めた所もあり、その藪は古いオフダの納め場所となっている。フルヤマノカミとて以前に誰が祀ったとも判らぬが、山の神と伝えられる木が方々にある。（小坪瀬）

流送にあたり滝や急湍を越える際はその場のヌシ（主にナガモノ．大蛇）に対しヤミキが捧げられ、またテッポウセギを組んだ場合も水神にオミキを供える。最近伐採．搬出の機械化と林道の完成によっていたる所に架線が張られ、二つの流送組合もトラック業に転身し、こうした信仰は刻々失われつつある。

戦前まで村々の大きな現金収入源だった棕櫚は新しい繊維の進出によってその価値を失い、今やこの地の風土に適し然も軽量で高価な椎茸の栽培がこれに代わっている。比較的新しい産業たる炭焼は近年火鉢や炬燵の普及、椎茸の乾燥による需要の増大と輸送の便利化によって盛んとなりつつあるが、桑・カミソ（楮）（こうぞ）の栽培は養蚕．製紙の衰退によって衰え、墨の原料たる松煙作りや樽．桶の原料たる樽丸とり・蓑・籠・ロープの原料たるスクリの製造も全く姿を消した。

2. 農　　耕

乏しいながらも水田は誠に貴重な存在で取り入れ完了まで厳重な禁忌が守られた。

大晦日には田にも畑にもタマグシを立て農具．山道具をまとめて餅を供える。小正月の農

耕予祝行事は稀薄である。ノウシロ（苗代）じめやワサウエ（初田植）についても特に行事は見られぬが、種籾まきは本宮神事（4月15日）を規準とし、日中にまけば種がハウといい、ヒカゲリを見て植える。田植はシツケといい、今もテマ（ユイ）で行い、近年までは田植唄も盛んに歌われて田植は賑やかな最も楽しい行事の一つだった。苗をとる時はウネの端からとる。真中からとればトリキルとて忌む。苗を括った藁の輪の中へ苗を植えると年内に死ぬ等田植に関する禁忌は煩瑣なまでに多い。苗の左右の間隔をコアイ．前後の間隔をマチバという。サナブリにはマゼメシ・ボタモチなどを作り、ヘヤのエベッサマに一握りのエベスナエ（糯苗）を供えた。田植までに刈り溜めた草や笹（タシバ）を田に踏み込んでおく。草刈唄も歌われた。

土用丑にはウシヤスミとて、牛を川で水浴させ、オサソリという小麦団子を栗の枝につけて田畑一枚毎に供え、子供がタバッて食べれば夏負けしない。虫送りもこの日またはその前後に盛大に行なわれた。小山手栃尾では「サネモリサンがトオルゾ虫モケラモオントモセー」と唱えつつ鉦や太鼓で行列し、携えたタイマツやベントウを川に流し、また「フンドウ（不動）．シャカ　モンジュ　フゲンミロク　ヤクシ大菩薩」と唱えながら鉦や太鼓をすっかり洗った。雨乞いもよく行われた。高野山奥の院まで二人の代表が火をタバリに行き交代でもって休まず走る。西川の総社川合神社で各大字の代表にわけ、更にバン毎に持ち帰って川原や山上で大焚火をした。小山手瀬戸番の弁天森の弁天さん重里の金剛弁天・松柱のキネコの宮なども雨乞の神として知られ、盛大に雨乞踊が行なわれた。刈初めは行事を伴わぬが、コナシアゲがすむと丁寧な家ではセイコウ祝いとして一寸御馳走し、イノコを以て総仕上げとする。イノコヤスミは旧10月の1番か2番イノコでヂゲ中休んで餅をつく。

田の神という意識はないが、イノコノ神サマはエビス大黒だといい（今西）、また庚申サマは百姓の神様だとする信仰が強く、庚申講が殆んどなくなった今日でも丁重に祭られている。

畑作は水田の少ないこの地域では重要な地位を占めるが、傾斜地における作業は大変な苦痛を伴う。老人は畑をカートという。家の直ぐ下の畑をネキガート．その下をナカガート．一番下の川に近い畑をウラカイトといい、家の上の畑をキシガイトという。ブトの多い頃の畑仕事には藁苞（つと）にグサラ（襤褸（ぼろ）布）を詰めてくるんだカビ（上湯川筋ではカッコ）に火を点けて腰に下げる。堆肥は畑にだけ入れ、その置場をイヤナ又はコエオキバという。黍や芋の肥には萩の花の咲く頃刈ってその儘やる。牛を飼う人はヤマゴエをオサ（畝）の中へ入れた。ダルゴエ（下肥）は主な肥料である田植後クサナヤに刈り込んでおいたカリオキを畑に草が生えぬように敷いてやるが、これをツチゴエといい、この作業をヤラウという。ドヨウグサとて夏に刈るのをムギゴエといい、里芋など秋作のあとに畑に入れた。その後に刈る草がカリオキである。

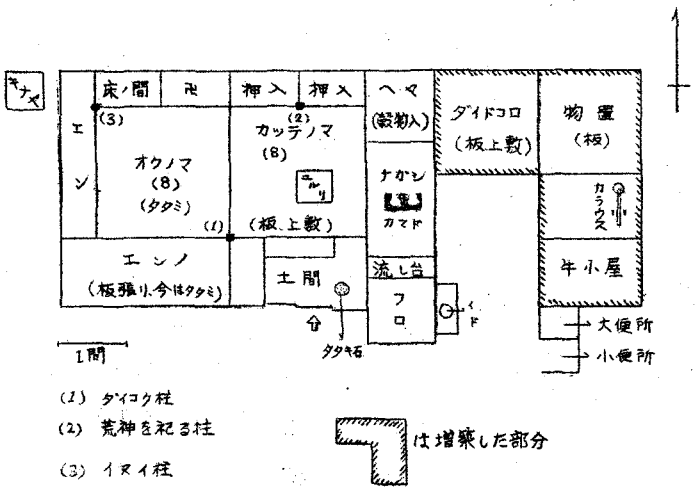
焼畑は一般にヤマバタといい、そのために山を焼くことをハタヤキ又はノヤキといった。今は全く行なわれぬが、以前はよく山を焼いて大根を作った。粟やソバもよく出来た。大体一年きりだったが、三年続けた人もあり、大抵は個人でやった。焼畑予定地のサイメン（境）に作る防火線をヒバチまたはヤキバチといい、ワカミズ汲みに使ったタイマツを点火に用いると火がアマラン（延焼せぬ）といった。

畑作についても数々の禁忌や俗信がある。

三．日常生活

住―十津川の代表的な居住様式は傾斜地の一部を削って創った平坦面に建てられた並列型の住宅である。切妻平入りの母屋の各部屋はもとより、厩舎．作業場．風呂場．便所．土蔵までが等高線に沿って一列にならび、こうした様式の民家が夫々に適地を選んで散在し、ジグザグの急な小径がそれらを結んでいる。昔は四間取りの家も多く全部草茸きだったというが、その後カワ茸きやソギ茸きに変わった。それさえも不自由になって今はトタンのナマコに変じつつある。台風の通路にあたり、しかも風当りの強い斜面上の家々は棟や軒を低め、二階建ては皆無に近く、棟には石を置き、屋根面も石や半割りのまき（ドウブチ）でおさえ、またウワゴマイ（横木）でおいて石を並べたものが多い。土壁は土蔵にしか見られず、それさえもサヤで守り、一般には板壁を主とし、軒先には70cm位のウチオロシの板を垂直に打ちおろし、ノキテンジョウを張って軒が吹き捲られるのを防ぎ、妻の破風（スバル）にもフキオロシ（またはスバルイタ）を妻壁と平行に一面に張って横なぐりの風雨を防ぐ。

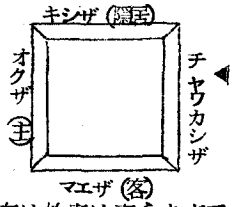
右図の間取図に見られるとおり山家としては部屋が割合に広いのは士族だから刀槍を自由に使えるようにするためだといい、ナカノマやオクノマの前面に設けた六間巾のエンノ（縁側）も出陣の折の準備をするためだと村人は言っている。



重里串崎　榊本家の間取図

米作を主とする国中

の農家に比してドマはずっと狭く奥に簡単な低いクド（ヘッツイ）があり、昔から炉と併用したという。ナガシ（タナモト）は今では板張りになっている。以前は谷からホリドイ（V字状の刻み目をつけた皮つきの杉檜丸太）で導いた水を貯えた庭先のイド（厚板張りの水槽）も今では直接ビニールパイプでナガシへ水を引くため、その価値を減じた。ナガシに隣るカッテノマ（またはダイドコロ）は板の間にミシロを敷き、ユルリ（囲炉裏）が切ってあり、西川筋での炉縁（ドイブチ）の名称と機能の一例として下に迫西川の場合を示す。ユルリの上には頑丈なジザー（自在鉤）が吊されて一斗も入る大きなカンスが掛けられ、カギは素朴なコザルによって上下される。ジザーは火の神の依り代として荒神サンとも呼ばれ、失せ物の場合これを藁で括れば妙に出てくる。今日ではユルリを板で蔽い、またはヤグラコタツに改造した家が多いが、歳末から正月にかけてユルリをあけぬと気の済まぬ家も少なくない。現在は炊事は専らクドで行なわれ、随ってジザーも今はクドの上に移されているが、クドの上の大鍋には昔ながらにツルがついている。トウキビを乾かすためのキビザオが炉の上に遺っている家もある。この室にエビスダイコクを祀る家もある。隣のナカノマは一般に家族の寝室にあてられ、もとはここにもユルリがあった。この室の前面に正面入口を設け、ドマは妻入りになった家が多い。



オクノマは客間で、タカガミ（神棚一般には床の間の上）ブツダン（一般に床の間の隣）がしつらえられ、ブツダンは廃仏以来先祖のユハイ（位牌）の安置所となっている。お大師さんの像を祀る家も多い。正月のエホウダナもこの室に設けられる。昔はオクノマに神様がいられるからオナゴは入ってならぬとされていた（迫西川）。ナカノマ又は、ドマの奥に小さなヒヤを設けて穀物を納め、また若夫妻の寝室とする場合もある。板の間を蔽うワラミシロ、いい所でガマミシロは殆んど姿を消し、大抵の家で畳敷きが普通となっている。今は無用となったエンノも畳やウワシキを敷いて小部屋として利用された家も多い。

斜面を削って作られた背戸の石垣はキシ・ヤギシ又はカエリイシガケと呼び、前庭を拡げるために設けた高い石垣は堂々たる偉容を誇り、士族の家格を示すささやかな門構えや松．梅などの古木と共に風雅な趣を創る。

穀物乾燥用の空地の不足を補うためのハデバは吉野山地特有の風物であるが、西川組では殊に壮大で、２．３列並べて大きな杉皮屋根で蔽った小屋風のものさえある。

食—地形の関係上水田はごく少ない。十津川有数の水田村といわれる今西でも一戸あたり二反一寸．松柱でも一反六畝足らず、他大字ではとるにたらずやせた急傾斜面の畑で作られる雑穀や芋もその乏しさを補いえず、野生の球．塊根の蒐集も日常生活の重要な一部であったが、

玉蜀黍・馬鈴薯・甘藷の普及は大きな救いとなった。

「振米」の伝えこそ聞かぬが、重病人があれば米粒を糸で繋いで湯呑の水に浸してその水を飲ませたといい（小坪潮）、お悔みの返事にも「コメヨウジョウも叶いませず」という。米のオカイが食べられるのは何かの祭か祝の折だけで、それが食べたさに病気になりたいとさえ思ったと述懐する老人もいる。ヨナベの夜食には米糠に塩を入れてねって食べさえした。それでも正月の餅．赤飯．農耕儀礼に伴うボタモチ、それに酒だけは米無しでは済まなかった。しかし兵役．出稼ぎは米の味を覚えさせ、更に戦時中の米の配給制度は十津川の食生活を一変させ、かって十津川の貧しさを嘲る言葉として用いられたデコマワシも若い人々の余り知らぬものとなった。

雑穀を総称してゴクモノというが、これさえも十分に食べられなかった。雑穀には名産のキビ（フクロキビ・ナンバキビ）（玉蜀黍）．イナキビ．トウキビ．タカキビ．アワ．ヒエ．大麦．小麦．ソバがあり、ヒエは備荒用に重視された。アワやソバはヤマハタでよく作られた。キビは碾き割って粥や飯に炊き、またその儘の形で小豆と共に炊きもした。またイリモノとて炒ってツツミに入れ学童の弁当にもなった。イナキビ・トウキビは搗いて粥にし粉にもし、また糯米のない時は正月の餅にもした。アワも粥．飯．餅に作られた。小豆は祝祭用の小豆飯のほか、麦やキビの粥に加えて味を増した。大豆は自家製の味噌・醤油・豆腐の原料となり、また煎って子供のおやつにした。

マイモ（里芋）は主食に近い役割を持っていた。オヤは塩水でよく炊いてその儘でも食べたが串にさしたりアブリコにのせたりして炙って食べた。これはオカズというよりは主食だった。串刺しの儘廻しながら食べる恰好がデコ（木偶）を遣う姿に似ていたところからデコマワシの称が生まれた。毎春訪れる淡路のデコマワシが何より待たれた時代の名残りである。オヤを蒸して輪切りにし藁を通してハデバで干したものは冬から春にかけての主食代用になった。子芋も煮たり炙って味噌をつけたりして食べるが、これも曾ては常食に類した。割り干しにしたズイキはワリナと呼ばれ、十津川本流筋や紀州からも買いに来たことがある。

サツマ（甘藷）が入ってからは忽ち普及した。これを蒸して輪切りにし藁に通して乾かしたものをカンコロまたはカンピョウといい、ふかしたり米と炊き合わせたりするが、戦時中はこのお蔭で随分と助かった。カンコロ一俵分と山をとりかえた人さえあった。

コンニャクの栽培は北部ほど盛んではないが、自家製の蒟蒻の原料にする。

大根は常畑でも作るが特にヤマハタでよくできた。昔はナと言えば大根葉かタカナ・チサナ位のものだった。

山地に自生する球塊根の類をホリモノといい、盛んに掘ってきて食べた。代表的な毒草マンジ

ヤク（彼岸花）の球根さえもオイモチと呼んでイカケで磨りとかして桶の中へ沈澱させ灰水を加えて何度も十二分に攪拌して綺麗な粉にして餅のように作り、テキで焼いて味噌や醤油をつけて食べた。ワラビ根やクズネは言うまでもなく、ウルネ（またはフド）（ホドイモ）やトコロも結構腹の足しになった。ヤマイモは珍味に属するがイカイゴ（零餘子）は食べなかった。

ゼンマイ．ワラビ．ゴンパチ（虎杖）．ミョウガ（ミョウガダケとコ）．ウド．タラ．クサギなどの山菜も栄養の補給に役立った。

トチの実も奥山まで拾いにでかけて大量に貯え、苦労してトチモチに作ったりもしたが、主に救荒貯蔵用のものだった。シイガシ．ホウソも食料として重要だった。栗．ガヤ（榧）．ハンダツ（木通）．サクランボ．ヤマブドウ．イチゴ類．マツイチゴ（松につくヤドリギの実）は子供たちを喜ばす。

茸は豊富で、蜂の子と共に秋の味覚を提供する。蜂蜜は貯蔵される。

山では兎．シシ（猪）．ニク（羚羊）．鹿などの肉が得られた（ニクの捕獲は云うまでもなく禁止以前の話である）。谷川ではアメノイオ（山女魚）．アイ．ウグイ．ウナギ等が捕れて食生活に変化を与えてくれる。

一般に生魚の手に入らなかった所だけに変わりものとして姿鮨が喜ばれる。正月前には一塩のサイレ（サイラ）．ウルメをつけ、婚礼にはサバが漬けられたがいずれも腐いた儘の姿のナラセズシ（ナレズシ）である。アイの鮨も喜ばれた。

茶は曾ては移出までしたが、酒は專ら移入に俟った。楽しみの少ない土地柄故に酒は大いに愛好され、五条からカチニンボウが売りに来るのを少しづつ買い、大量に要する時は新宮から買ったが、乏しい米を酒に醸す家もないではなかった。煙草は以前は自家で栽培したが、カシの若葉や椿の葉で巻いたシバマキは夙くから十津川名物として知られ、今も老人たちに愛用されている。

四．信仰と行事

幕末までの十津川郷には禅宗に属する寺院が５０もあり、西川区だけでも１０ケ寺・そのうち西川筋では重里田良原の福田寺・永井の興禅寺（玉垣内と仲間）・今西の泉昌寺・大谷の東光庵・西中の光明寺・小山手の玉蔵寺・小坪瀬の長昌寺・迫西川の清頭寺があって熱心な信仰を集めていたが、維新の廃仏棄釈にあたって寺々が幕府の権威を笠に着て世論をおさえていたと目した旧勤王派の人々によって徹底的に破壊され、仏像や石地蔵までも毀却され、各戸の仏壇も多く取り払われてしまった。そしてその後は神道一本の村として葬送さえも神式に仍ることとなった。現在は出雲大社教会に加入し、各区に祠掌一名を置いて神事・葬祭のことにあた

り、区から金を出して京・大阪へ神道の資格をとりに派遣している。十津川の総社としては古く熊野三山の奥の院と称せられた玉置神社があるが、西川区としては玉垣内宮の平の川合神社（天神社）を区の総社と崇め、各大字にあった夫々の氏神を明治の中期に全部これに合祀し、同時に各氏神に併祀されていた祖霊社も川合神社境内に移して一祠を建立した。旧地には夫々遙拝所を設けたが、次第に各大字に於いて氏神復活の傾向が生じている。祖霊社は廃止された寺院に代わる先祖の御魂の奉祀所として明治１０年頃から次々と大字毎に設けられたものである。こうして仏教信仰は払拭されたかに見えるが、高野街道その他古い道筋には地蔵その他の石仏が少なからず見受けられ、また串崎大津越の上には新四国八十八ケ所霊場があり、小山手片川（かたこう）の大師堂は今も地方からのお参りが多く、遍路や病者のこもりも行なわれている。棄却された苦の仏壇は今もブツダンと呼ばれて先祖のニハイ（位牌）の奉安所となり、祀られる先祖そのものがホトケサマと呼ばれている。熊野・高野を結ぶ要路にあたって古来遍路の往来が多く、大師信仰は未だに極めて濃厚である。その像を祀る家も多く、また各地に大師に因む遺跡や伝説がある。いろんなマジナイの呪言にもナムアビラウンケンソワカがついて廻る。

迫西川では不動尊を祀り、地蔵は迫西川や小山手でも祀り共に子安地蔵であるが、殊に小山手弁天森のそれは西川筋一帯の信仰を集めている。祭は双方とも旧正月２４日である。松柱の北のムネ（尾根）筋にも自然石ながら２ケ所に地蔵があり、時おり通行人のハナオリ（手向け）を受ける。小坪瀬下番下郷の寒根家でも個人で子安地蔵を祀って年に１回３．４月頃祭りを営み、子供たちを呼んで餅撒きをしている。あいには近い人がお参りに行く。

本願寺の教化活動は成功しなかったが、天理教は明治年間から入り、金光教も戦前から信者を持ち、戦後は日蓮宗・創価学会・阿弥陀教（大阪）など仏教系の信仰が喰い込みつつある。

氏神以外の神々の中で稲荷信仰が最も際立っている。氏神の境内に祀られている場合（川合神社・重里の森山神社）もあるが、個人の屋敷神として勧請（かんじょう）されたものもある。迫西川の稲荷は村の開祖桂又妙権太夫の勧請と伝え、２月初午には大字から祭を受ける。小山手栃尾番の三光神社も稲荷さんでアラガミサンだといい、杉の大木の根方に自然石を祀るだけでヤカタは無く、いわゆるキノネマツリの様式である。小山手と小坪瀬の庄屋が伏見から請けて来たものと伝え、祭は旧霜月２日。一年交替にトウヤをたて禊（みそぎ）をして丁重に祭ったという。西中佐田番の西川と大谷川に狭まれたベンテンサンと呼ばれる山嘴上にも鷹取稲荷を祀る。ここは旧氏神天登神社の址で、今は西中のヂゲの氏神になっている。玉垣内では金儲けの神様といい、屋敷に小祠を有する家が数戸ある。玉置山の摂社稲荷社は十津川の稲荷信仰の中心で、その初午祭には郷中から奉賽者を集め、殊に厄年にあたる男女は除厄参りが多い。玉垣内には稲荷さんを拝

む旨の人がいて遷宮や祭・ヤシキフセの時とか、身に祟るエキリョウ（生霊）・シリョウ（死霊）を抜く時に頼めばやってきて、自分の稲荷を拝んでくれる。

小山手瀬戸番弁天森の丘の上記子安地蔵の上段に祭られた弁天さんは雨乞いに特効があり、旧１０月亥の日にバンでお祭りをしゴク撒きをする。もとは弁天講もあった。重里椎平の西の金剛川（松柱川）の右岸にも重里の弁天又は金剛の弁天と呼ばれる弁天社があり、雨乞いに霊験があるといい篤信者が少なくない。祠の前や傍に大小多数の鉄鉾が奉納されている。

大将軍の信仰も可成り根強い。上湯川寺垣内のダイショウグンサマ程有名ではないが西川筋にも数ケ所で祀られている。迫西川では中番の雌雄の巨松の根本にダイジョウゴとて石を祀り、松平・西の両家でヤドをしていたが今はバン全部が順にヤドを勤める。旧霜月２３日の祭では、ダイジョウゴは１２人あるとて１２の膳に白い団子三箇ずつを盛って供え、これに白紙をはさんだ箸（コザイ）を立てるが、この箸は寺垣内のコザイと同様に方除けのマジナイとなる。小坪瀬橋詰の北垣内家では 同家の山の神と一緒にダイジョウゴを祀り、霜月８日には白い団子（餡をつけぬオハギ）と小豆団子（オハギ）を各４箇とお神酒・サイレの姿鮨を供えて祭る。小平瀬の下の入口の東尾の丘上に目通り８尺ばかりの檜の大木があり、これもダイジョウゴンの霊域で祠も石も全然無いが、火の神だといい、これを祀っていた東家の転居後は祀る者もないが、この山を買った人もこの木だけは伐らないでいる。重里の氏神森山神社（椎平）や玉垣内の秋葉神社にも末社として大将軍を祀り、祭神を大山祇命の女磐長姫命と称しているが、特別の信仰は聞かれなかった。

山の神の信仰については生産民俗の項で既に述べたが、水神についても厳しい信仰があり、大きな御利益（やく）の反面祟りを恐れられている。斜面の集落は一般に谷から飲用水や灌漑用水を引いているので、水神はその取入口即ちミナクチまたはミズモトに祭られる。別にヤカタは設けぬが、西川筋では山の神の場合と同様に大木があって、これをスイジンギ（水神木）として昔は普段もシメを張り、枝を折ることは勿論せず、嵐や老朽で倒伏しても決して伐らなかった。大抵は榊や杉の大木であるが、小坪瀬では梓（けやき）・檉・栃なども水神木となっている。上郷北本家の水神木は栃の巨木で、それにカズラが巻き上がって谷を越えて浦高畑家の檜に巻きついているので同家ではこの檜を伐ることが出来ぬ。もっともタニワタリフジ（スイジンカズラとも言う）は伐らぬとの伝承も手伝っていようが。ミナクチを一軒で持っていれば勿論イチブンで祭るが、数戸で共有する場合は当然共同で祭る。正月・盆・山の神祭の日にはここで水神を祭るが、水源が余り遠い所では他家との分水点まで祭りに行く。元朝のワカミズもここまで汲みに行くのが原則で、大晦日中にミナクチにシメナワを張り、榊．カザリ（羊歯）．蜜柑．洗米．

餅を供えておく。水神の正体はナガモノ（オジャ）だという。産後２０日間は水神様に遠慮してハシワタリを慎しむ。

火の神『荒神』に対する信仰も強烈である。ジザー（自在鈎）は火の神の憑り代であった。ユルリ（炉）の火は続くほどよいと言われ、「火が消えた」と言うと家が潰れたことを意味し、火を保たす（ヒドメ）ためには生しい樫のホタをユルリに燻べ、就寝前にこれに灰をかけてよく埋けておいた。火の管理は女の責任で、うっかり火種を絶やすような嫁は非難に値した。大晦日の夜炉にくべるゼニボタまたはヨツギボタはこうした伝承の残存である。山からゼニゴケ（タマヅタ）のよく巻いた樫の太いホタを地面に触らぬように負って持ち帰り浄所に置いておく。ツキヤクの女など触ってはならぬ。大晦日の夜これをユルリの四方から突込み、元朝の雑煮もこれを火種として炊く。この行事をホタマツリともいうが、ヨツギボタの語が能くヨツギ（世継）とヒツギ（火継→日嗣）の関連を示してくれている。永く保存されると火も穢れ易い。そこで正月前と盆前には必らずユルリとクドの灰を全部替え、鍋スミまで落してヒガエをし、塩と水で浄めてから新たに点火した。葬式の後は五十日祭のヒアケ（忌明）の折にヒガエをし、会葬して食事を呼ばれた場合も帰宅後ヒガエし家も塩水で清めた。女性はツキヤク中ヒマヤゴヤに入って別火した（永井など）が、ヒマヤの無かった所でも期間中は別の鍋で煮炊きしカッテから奥へは入らず、不浄期間が終わると川でミソギをしたり屋外で下湯を使ったりして身を清め、火ガエもした。出産後もウブヤアガリの折に火ガエをした。

庚申は前記の通り『百姓の神さん』（ツクリの神さん）としてどの大字でも信仰され、以前はバン毎に、または何戸かで講を組んでいたが今は殆どなくなった。小山手瀬戸番の弁天森の丘の上の庚申祠はバン中の祭を受けコウシンマチも厳重だった。今西では氏神の境内に祀り、各戸でもタカガミに祀られている。永井では一つの石に山の神と共に祀り込められ、玉垣内でもヤドに猿と鶏を描いた軸をトコに掛けて講をタイた。小坪瀬の下番７軒と瀬戸峯２軒で庚申様を祀っているが、今も庚申講を保存している珍らしい例である。庚申の夜はまわりもちのヤドで白い団子のゴクを作り、オミキを添えシメナワをつけてトウヤ（ヤド）の人が庚申に供え、団子だけは各戸に配る。戦前は庚申毎に９軒の家からトウヤへ米を持参し、各戸から一人ずつ出て小さな握り飯を作りアライヨネをパラパラと振りかけたもの９箇を庚申さんに供え、この夜は『人の噂をしても一晩中起きとれ』とて深更まで飲食しながら四方山の話をした。『話は庚申の晩にせい』（小山手）の言いならわし通り、この夜がお通夜の晩同様伝説や昔話の語り伝えられる重要な機会であった。七度目毎のナナコウシンにはゴクマイを出し合って餅を搗き庚申さんの前で撒いた。庚申はイリモノが好きで七品のイリモノを供えると喜ばれる。庚申の

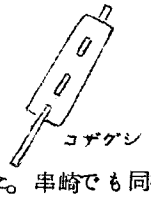
晩に藁をなぶれば手にタッてそこから腐る―庚申の晩には草鞋を作るな、それを穿けば釘を踏む。庚申の晩に夫婦が交われば双子や片輪の子ができるとか、庚申の晩に生まれた子はヌストになる―鉄の字の入った名をつければ障りがないとか俗信はきわめて多い。

エベス・ダイコクは一般には一まとめにエベッサマと呼ばれ、カッテノマかヒヤに祀り土蔵のある家ではそこに祀る。裾の神というほかに、百姓の神さんとかイノコの神さん（今西）と考えられている。サナブリには糯苗を供え、イノコの折にもイノコモチが供えられる馴染深い神様である。

チョウズ（便所）の神さんも身近な神の一つである。この神さんは盲で、弓を持っておられる。オ伊勢サンなど祀ってもこの神様が一番偉い。この神様が「天照（あまてらす）さんはこの国を開かれたのだから奥の間に行きなさい」とかいろいろ指図をして他の神様方の居場所を割り振りしたら自分の居る所が無くなって便所へ逃げ込まれたのだから正月には必ず祭らねばならぬという。便所の神さんは「箒の神さん」と一緒にお産に立ち合われるから、女が丁寧に祀れば美しい子が出来る。便所に唾を吐いてはいけない。乳が余って困る時にこの神様に預かって貰う。箒を跨げばお産が重い。箒は使ったら下へ置かずに必ず掛けておく。

伊勢講の組織をとどめる迫西川では正月3日・5月16日・9月16日と年3度ヤドへ米3合を持ち寄ってオヒマチをしている。小山手瀬戸番でも旧正月3日・5月5日・9月9日の三回、籤（くじ）引きできめたヤドへ米3合を持って集まり、午前は天照皇大神の軸を掛けて祭り、昼は会食する。西中でも同様の行事があった。山仕事の間に怪我人が3人も出ると、小豆団子などを供えて山の神を祭り一日休むが、これもオヒマチと言った。

正月の神はショウガツサマ・トシガミサマ・トシトクなどと呼ばれ、明き方・恵（え）方からやって来るというほか、バンジョの山から（松柱・小坪瀬）ともいう。小山手栃尾番では出雲の国から来るといい、ここでは正月様は大国主命だと言っている。正月の神霊を迎え送るという考えはきわめてはっきり窺われる。師走の13日を正月ハジメと言って先ずクドを掃き火ガエをするが、昔はこの日に正月サマを迎えにゆくとて、正月神の来る方向へ正月用の松や羊歯（しだ）を採りに行った所（大檜曾（おおびそ））もあるが、今は暮の27．8日頃恵方に向けて松．羊歯．ワカバ．榊などを採りに行くことを「正月迎え」と考えている。正月様を迎え入れる場所は古くはオクノマに吊り下げたトシトクダナ（またはエホウダナ）だった。タナをその年の恵方に向け、その反対側の縁（へり）に図のように細い檜の箸に白紙をとおしたコザグシを月の数に応じて12～13本立ててセンボンノボリと称し、タナには白紙を敷いて鏡餅三重（だいだい）．橙．オミキスズ（徳利）．串柿．炊いた小芋をのせた。串崎でも同様



なタナが設けられたようだが、今はどこでも簡略となった、というより姿を消してしまった。一体正月様は家内は１２人あると言って、供物は何でも１２人前用意し、閏年には１３人前にした。元朝雑煮を祝う前に家内揃ってスワリ餅またはイタダキ（今西）の膳を一人一人につけたが、現在ではその上にのせた柿や柑子を食べることによってトシガミ様から年をいただくといった考えが強いようである。

門松を括りつける杭をモチグイなどと呼び、これに小豆飯や白餅を載せた記憶が残っている所をみると、門松が正月神の憑り代と考えられた時代が推量される。

正月１５日は正月サマを送る日である。これを一般に正月サンオクリといい、小坪瀬ではカンモドシという。前夜に正月の飾りを全部外して一緒に束ねてエドコ（床の間）その他清浄な場所にヤスマセておき、１５日早朝（早いほどよい）「正月サマのベントウ」（赤飯の握り飯）を作って枝つきのシロワカバ〔葉軸が緑のユズリハ、「去ぬ（い）」に通ずるところから「イヌワカバ」ともいう。〕〔これに対し正月の飾りには軸の赤いワカバ「アカワカバ」を用いる。〕の葉にくるみ、先に片付けた飾りと共に家から離れた恵方へ送る（モドス）。山の木の根もと、谷間の石の蔭、家の檐（のき）先に置いたり、木の幹に括ったり木の俣に載せたりする。串崎では川に流すので「正月サマナガス」という。正月サマのベントウは子供達が探し廻ってタバッテ食べるが、魔除けになるとか夏負けせぬとかいう。

２０日のハツカ正月は正月の終わりである。

正月に対して盆行事は非常に簡略であるが、盆前に火ガエをした村もあったところを見ればこの祭が正月に劣らず大切なものだったことが判る。盆踊だけは至極盛大である。ホトケサマ（先祖）の去来も送迎も言わぬ。７日盆には墓をアラケル（掃除する）。今西では１３日の晩にタカガミとブツダンに大晦日のように供え物をするが別に棚を設けて位牌を飾ることもない。一般に１４日の夕方から墓参りにゆき、１５日には供物をタバッテしまう。

トシコシ（節分）は正月に次いで豊富な伝承を留めている。正月は人間のトシコシ、節分は神さんのトシコシと考えている。ヤキサシを作ってあらゆる出入口の戸袋や便所に挿し、また必ずユルリの目在鈎にさす。ヤキサシはオニノメッキ（オニノフングリツキ）（柊（ひらぎ））の小枝に焼いた魚の頭をつけるだけの所もあるが、杉．檜．竹の箸の先を割って柊の葉とくすべた魚の頭を一つずつ挾む所も多い。豆撒きには一緒に小石を投げて大きな音をたてる村もあり、また豆を炒る時、ババ（ウバメガシ）や柊の枝を焚いてパチパチ音をさせる所もある。西中や今西ではこの晩バン中から５尺位の青竹を持ちよって焚火の中へ突込んで破裂させ、これをオニヤライといった。その名のとおりいずれも大きな音によって魔を祓うためで、この夜鉄砲をうっ

たのも同様の趣旨である。柊の葉や豆によってさまざまな年占が行われ、またこの豆は落雷や地震による崩壊を防ぐ大切なマジナイになる。目在のヤキサシや炒豆まきの由来について興味深い伝承があるが、紙数の関係で省略する。

春秋の彼岸は墓参りと共に祖霊社の祭が行なわれる。

旧8月15日の芋名月には十文字に括った竹や杉箸の先に初掘りの小芋を刺して、カド（庭）に立てた高い竿に釣り下げ、旧9月13日の豆名月にも大豆のハツホを株ごと竿に下げ、またそれぞれ小芋や枝豆を炊いて神仏に供え、人間もよばれ、子供たちのタバリも行われた。名月は盆・八朔に続いて踊りの最後の機会であった。いずれも単なる月見ではなくて農耕儀礼としての収穫祭の俤が認められる。

ほかにも節供をはじめ数多くの年中行事が見られるがここでは割愛する。

通過儀礼（産育・元服・婚姻・葬送）、服制、動植物に関する伝承、口承伝承などについては全然触れず、その他の禁忌・俗信についても省かざるを得なかったことを遺憾とする。

たゞこの地域の信仰について特に気付いた特色を付記するとすれば、それは不遇な、または非業の最期を遂げた人々の霊魂—祀られざる魂—に対する深刻な畏怖の念であろう。どこの誰とも知れず途に倒れた山伏や遍路、この地域に数多い有名無名の落人の墓など今もハナオリ（手向け）が絶えず、崇りを怖れられながらも大なり小なりの御利益を授けてくれる。各所で聞かれるダル神—山道で人にとりついてにわかに飢渇感を覚えさせとり殺す—も山でかつえて死んだ人々の亡魂だと言われる。

以下この地域と外部との交渉を中心に、入って来た人や物—文化の様相を簡単に述べて一応のまとめとしたい。

五．外部との交渉

交通の不便な十津川郷でも西川区は全然本流に触れず、おのずから独自の地域をなしている。十津川では西川の人々を「か一組」と呼んでいるが、これはこの区の人たちが、例えば「どうしてそんなものを投げた」「か一投げた」とか「どうしてこんなことをしたのや」「おらぁか一した」という風に、「つい無意識に」といった意味でこのか一という言葉をよく挿し挾むからである。といってもこの区が郷内の他地区から、また郷外地域から隔絶されていた訳では決してない。西川筋と本流筋、更には紀州新宮方面とを結ぶ最大の機縁は筏であった。西川の筏は桑畑の小井まで下って七色の人に引き継がれ、蕨尾で酒を飲んで切り上げたが、蕨尾・平谷は本流筋から十津川に入る南の関門で川舟も夙くからここまで上っていた。西川の諸物資の最大量がここへ担ぎ下され、必要な物資も多くここで仕入れられた。平谷は西川の人々にとって

物資のみならずニュースの仕入れ地であり、外界の動静は逸早くここでキャッチされ、材木や椎茸・棕櫚毛などの相場の動きへの不断の関心も彼等を絶えず外界と結びつけていた。黒船の浦賀来航のニュースが驚くほど早く村民に恐惶を与えたのもこうしたルートによるものだろう。

現在西川筋の幹線は国道沿いの平谷・蕨尾から西川に沿って重里・玉垣内を経て西中佐田番までが県道で、それから先は三浦峠を越えて神納川谷に下り、更に伯母子峠・水峯の山路を辿って高野山に通ずる旧南高野街道のルートをとっているが未だに乗物の通行を許さない。西中から奥は西川に沿って迫西川まで自動車を通ずる林道が完成した。しかし、この西川本流筋の街道だけが平谷との連絡路だった訳ではない。中流から奥の住民はむしろ、南側の上湯川との境に連らなる中峯の尾根道を利用した。たとえば小坪瀬では大正末年頃までは中根から萩の辿に登り中峰に出て真砂瀬で西川本流へ下りて平谷へ出るのが普通の物資輸送路だった。小学生でも上級になればチンモチとして２０Km近いこの山道を平谷へ出て米一斗を担いで帰ったが、その頃で一升（１４銭）につき５銭の運び賃が貰えた。母親たちも一日がかりで山でフジカズラ（筏をしばる藤蔓）を集め、１０貫も担いで平谷へ持って出て漸く８０銭位になった。これも一日仕事だった。帰りには米を３斗も担いで来たが、子供達は母親の弁当を持ってついて行って帰りに米を担いで来たのだった。棕櫚のカワ（毛）も当時百枚で１５銭。平谷へ出る時は千枚位持って行ったが、小学生でも５．６年になれば５００枚位担げた。その頃は１０銭出せばサイラ（秋刀魚）が１２・３本買えた。小学校の学資位は子供たち自身で稼ぎ、卒業しても進学の余裕がないのでこうしてヘソクリを溜めて山小屋などで講義録を取り寄せて読んだ。一体に十津川では向学心が強く講義録で勉強したという人が多い。

西川の中流から奥の住民は紀州日高郡との交渉もかなり多く、日高川の支流小又川流域の谷谷は彼等の伐木や川漁の舞台でもあった。上記の中峯は十津川西境の大峠山から牛廻山を経て東へ延びて西川谷と上湯川の分水嶺をなし、また丸尾山から東北へ岐れる天上森支脈との間に豊かな松柱谷を囲む長大なウネ（尾根）であるが、その稜線が平谷と紀州の竜神を結ぶ古来重要な竜神街道であった。明治１０年頃に改修されて後は郵通道路となり人や物資の往来も繁く、西川筋の村々からもこのルートへ通ずる坂道が多かった。重里の大津越や椎平から直接この街道に通ずる道、田良原（重里）．永井．西中．小坪瀬から天上森支脈上のウネ道に出てこれに通ずる道、小坪瀬の奥の森尾から崩原を経て中峰に出るもの（この径は上湯川へ越える重要なルートでもあった）などいずれもよく利用された。迫西川から国境の尾根に出て牛廻山頂の東で中峰に会するルートも古くから西川上流と竜神を結ぶ重要な交易路だったが、今や自動車路線として開発する計画が進んでいる。迫西川から北へ十文字辿で国境の尾根にとりつき護摩壇

山を経て高野山や有田川上流へ抜ける間道もあった。

先にも触れたように、西川筋と高野山を結ぶ最も重要なルートは旧高野街道で、これは熊野と高野を結ぶ信仰の道でもあった。矢倉（西中）には当時宿屋もあってよく旅人が泊まった。古矢倉にも茶店か旅宿があったらしく、古矢倉坊主が釣天井を仕掛けたとか、釜中将監（しょうけん）が旅人を殺害したとか数々の所伝を残すが、今は家が一軒も無く、奥州べー（熊野・高野詣での人々をこう呼んでいる。）が打ち連れて通った時代を覚えている老人は少なくない。高野の奥の院で雨乞いのための貧者の一灯をいたゞいた若者たちが待ち焦がれる村人の姿を胸にしばしも休まず走り続けたのもこの道であるが、交易ルートとしてもこの道の価値は大きかった。紀の川谷を上って来る雑賀（さいが）の塩を高野まで買いに出たのもこの道である。幕末から明治にかけて茶と椎茸がこの道を遙々高野や大阪・堺まで運ばれていった。高野山まではヒヅケと言ってその日の中に届け、大阪方面への出荷はカミニモチとし五条を経由して二日の旅だった。戻りには米を買ってクジュウ（荷物を棒に通して肩に負うこと）てきたが、上荷持に出ると聞くと隣近所から当時出始めた金平糖（こんぺいとう）の注文が多く、あずかった天保銭の方が返り荷より重いことがあった。

西川下流の村々では川舟の便のある平谷へ出ることが多かったが、十津川谷上流やヤマトに用のある場合は今西から釜中・古矢倉を通りエグイモ坂を越えて川津へ出た。当時の川津の渡し場は今の橋から上のカワドだった。小森・小原方面へは今西から行仙嶽を越え、また玉垣内から直接小森へ出る道もあって、西川筋と十津川中流部を直結するルートとして、殊に役場が小森に、後には小原に置かれてからはよく利用された。昔の道は好んで尾根筋を辿り、所々に道しるべの石地蔵がおかれ、坂の上や水の出る所にはヤスバと呼ばれる休み場があった。盆前には大字やバンのフシンとして総出で道草刈りが行われた。

米麦・塩などの食料品は大正頃には主に平谷から入るようになったが、昔は一晩泊まりで果無（はてなし）山脈を越えて紀州の萩（旧三里（みさと）村）まで買いに出た。ブエン（生（なま））の海魚など見たこともなかった。海魚と言えば田辺商人が竜神から持って来る鰯の丸干しやイリジャコ.それにサバ．サヨリの塩干物、たまには鰹節、盆頃には塩干飛魚．正月前には塩サイレなどで、時には果無を越えて、あるいは平谷からもやって来たが、平谷まで川舟—そしてやがてはプロペラ船が上るようになったことは西川筋の人々にとっても大きな救いだった。それにつれて林道もだんだん奥へ延びて、今や西中までバスを通す話さえ出ている。

田辺商人は塩干物のほかに衣料（イチキモメンなど）や雑貨を持って月に１・２回やって来た。４０年ほど前までは中峯の竜神街道は馬が通わなかったので、彼等は天秤棒で荷を担いて来た。十津川の領分まではニモチを連れて来て、あとは部落毎に人を傭って荷送りした。一定

の宿に荷を預けて家々を廻り、夜分でも訪れた。たまのこと故家々でも一度に買い込むので荷は直ぐ捌けた。（この気風が手伝ってか、十津川は今も大阪のデパートの通信販売の上得意となっている）。しかし孤高を尚ぶ十津川気質はこれらの商人の宿所へでかけて一緒に酒を飲んだり世間話をしたりすることを快しとしなかった。魚が新宮から川舟で上るようになってからも田辺商人は黒い風呂敷に衣料や雑貨を包んでカロウて（背負って）来た。下からも新宮の商人がやって来たが田辺商人にはかなわなかった。

必需品の一つである酒だけは昔からカチニンボウによって五条から運ばれ、五条酒として喜ばれたが、一度に沢山入用な場合は新宮から上げた。五条からは墨・筆・衣料も入って来た。

こうした商人の来往のほかにも此の地域はさまざまの階層・職種の人々によって訪れられた。古くは大塔宮一行をはじめ、戦国の頃と推定される釜中将監・山坂正之坊・千葉弾正・矢倉右京・コタカビョウイン（カバンドウ）・九十九七郎・桂又妙権大夫など夥しい落人たちがこの山中に逃避の場を求めて伝説の主人公となった。彼等は時には村々に禍をもたらしたが、すぐれた文化の担い手でもあったろう。中央からの文化の波はこうした形でも山奥深く伝えられた。近くは天誅組残党の来村は、とりわけこの西川区にとり大きな刺激を与えた。中央の政治的変動はこの山村にもひしひしと感じられ、郷土の禁裏守護の勤番はこの山里と都を直接に結びつけた。郷民あるいは失意の他郷人で村々に寺子屋を開いて学問を教え勤王を説く者も多かった。こうして培われた勤王の熱意あるいは中央文化への憧れが十津川の人々の間に根強い向学心を植えつけた。いうまでもなく学問はそのまま出世の道にも通じていた。

山伏もよくやって来て病魔退散、ヤシキブセ・方除けなどの祈禱にあたり村民の教化に竭くした人もあった。遍路もよく来て泊まった。またこの地域からも四国八十八ケ所巡拝に出かける人が少なくなかった。今なお根強く残る大師信仰はこれらの人々や頻繁な高野山との交渉によって育てられた。

職人としては紀州から鋸の目立てや桶屋が来、屋根葺きには郷内の武蔵・小湯辺の者が多かった。樽丸トリは熊野・葛川・北山から来、木挽や鋳掛屋も時折村を訪れた。昔は栃の大木が多かったから木地屋が来て樸を作っていたというが、その屋敷址と伝えるものは見当たらぬ。昔はよくカワラコジキと呼ばれる者（サンカ）が来て夜中に鈎を仕掛けて鰻など捕っていた。正月になると万歳や猿廻しが訪れ、コジキもよくやって来た。春先には淡路の恵比須三郎というデコマワシ（人形遣い）が2・3人連れで村々を廻り、娯楽の乏しいこの山里では淡路のデコマワシといって待ち詫びたものだった。昼間はカドヅケして夜は大きな家に泊まり、草鞋ばきで集まった村人たちにエンノで熱演してくれた。毎年きまってやって来る越中富山の薬屋も

ニュースに餓えた村人にとっては待ち遠しい存在だった。

僻地であって然も僻地ではなかった十津川の特殊な性格はこうして築かれたのであるが、交通や通信の便利化はある意味でこの山村の人々の異常なまでに強い知識欲を低下させ、徒らに利益のみを追う平俗な村のくらしが身について来た。今日この地域の教育への関心の低さを嘆く前に、今一度その伝統を振り返って見ることが必要なのではあるまいか。

マスコミが地域社会に及ぼす影響

新　　聞　　部

一．序　論
二．新聞と山村民
三．ラジオと山村民
四．テレビと山村民
五．結　論

一．序　論

文明が進むにつれて人間は人間が作り出した生産物によそよそしくされ、敵対され、支配されるようになって来た。ここ数十年来、急速に進展してゆく機械化によって、あらゆる生産物から、人間は自分自身までも疎外されるという奇妙な現象を呈している。近代の産物、マスコミュニケーションもこれらの例外ではなく、ますます増大するマスメディアにより、都市の人間は、マスコミに支配され、画一化されて来ている。

かくして都市はマスコミに振りまわされ、マスコミのない生活はとうてい出来得ないといった様に「生きる権利」として不可欠なものとなっているのに対して、一般にマスコミとは縁の遠いものとされている僻地の現状はどうであろうか。近来、マスコミと縁の遠い地域においても都市の進展に従い、このマスコミュニケーション、また他のあらゆる生産物を通じて日増しに都市化されてゆく現状は見逃がせないものである。

事実我々が調査を行った奈良県の僻地と呼ばれる地域社会「十津川村」においても、近年総合開発事業の推進により、ダム建設・道路増設等による近代化にともない、そのいきおいにのって急激なマスメディアの浸透は、この地域社会の人々の生活を大きく変貌させている。

ここでわれわれはこのような都市化されつつある僻地におけるいろいろの変革の歩みに触れることはさておいて、その中でもマスコミュニケーションに関する問題をとりあげてみようと思う。マスコミの僻地社会への浸透、いいかえればこれらの地域社会の人々は、資本主義社会の中に、有無といわさず、くり入れられ、より広がりつつある環境をどう意識し、如何に対処しているのかを見ようとしたものである。

他の開けゆく平地農村の如くこれらの山村はマスコミをもはや娯楽ではなく「生きる権利」として使用する段階に至っているのであろうか。今なお残っている農山村のおくれ、ゆがみは

マスコミをどのように変えているのであろうか。

このような問題点に基いてわれわれは、

① マスコミュニケーションの受け手としての大衆はどうあるのか。

② マスメディアの普及状況及びそれを疎外するもの。

③ マスコミにより与えられた内容をどのようにうけとめ、消化しているのか。

④ それが地域社会及び村民にどのような影響を与えているのか。

等の諸相を見きわめることにより、地域社会の現状とマスコミュニケーションがそこに及ぼす影響を究明しようとした。

a．調査年月日　昭和３５年７月

b．マスコミの浸透率を地域別に見るために僻地の中でもダム建設などにおいて近代化のすすみつつある地区から漸次山奥へ入ってゆくという調査方法をとった。すなわち、まず第一にはダム建設に人口が増大している平谷・重里より次第に山村．永井．西中．小山手．小坪瀬．迫西川へと入っていった。

c．調査方法は戸数が多く又人家が離れて点在しているため、全部を調査することは不可能でもあるので、住民登録により次のようなランダム法をとった。

平　谷	５戸当り１戸ランダム		重　里	３戸当り１戸ランダム	
永　井	３戸	〃	西　中	３戸	〃
小山手	３戸	〃	小坪瀬	３戸	〃
迫西川	２戸	〃			

また、調査用紙によって戸別訪問式をとったので、実際に見聞することが出来た。

d．ここで我々は調査用紙の内容に一寸触れておこう。

① 新聞・ラジオ・テレビ・週刊誌・広報の月刊誌の分布度

② ニュース・娯楽の分布

③ 日刊誌の分布種類

④ 五大紙講読年月

⑤ 聴取時間及び講読時間

⑥ 新聞記事に対する意識及び信頼度

⑦ 新聞に対する要望

⑧ 主として聞く放送名

⑨ 社会問題に関する関心度及びニュース源は何によるか．

⑩ マスコミの大人・子供及び生活様式に及ぼしている影響

⑪ 政治への関心度・政党支持

⑫ 子供達の遊びにはマスコミがどう影響しているか．

等の質問事項を設けた。

e．調査の結果をより明確にするために、その地理的概況を追って見よう。

奈良県十津川村は全国で一．二をあらそう大きな村で紀伊山脈の中心部十津川渓谷の大部分を占めその面積は奈良県の約5分の1に相当する670Km²の面積を持つ。

地勢は至って急峻で至るところ山また山という状態で谷沿いの部落のながめはどこからもシャットアウトされている。耕地は狭小で村内で生産される主食量では村民一カ月を養うのに精一ぱいであり、主に配給にたよっている。しかし、村の大部分が山林であるため、林業の従事者が大部分で山林経済と強い結びつきを持っている。

村は大きく地勢もけわしいため、またその上都市から離れているため、従来までは交通に全くめぐまれず、各部落間では、封鎖的な生活を送っていた。しかし総合開発事業の推進によって昭和34年、5新道の改良を見、また10本に余る林道の開設によって村の交通、運輸状態は一変した。

現在この村では電源開発のため二つのダム工事が行なわれている。これは年間、6億キロの電力を生みだす大きなものでこのため200余の水没世帯を出すこととなる。このような工事が行なわれる間、十津川村の人口推移は、はなはだしく、一度大きなダム工事などが着行されるとさながら一つの小都市を思わせる。人口の増加．村の急激な都市化が見られる。

その土地面積は下表のようである。

地名	宅地 (h)	田 (h)	畑 (h)	山林 (h)	原野 (h)
平谷	291	275	1,143	5,432	645
重里	281	265	874	8,765	370
永井	60	183	663	2,803	90
西中	182	293	888	9,169	610
小山手	83	420	977	51,731	338
小坪瀬	42	436	769	61,866	477
迫西川	16	47	298	83,342	0

総合的に見てこれらの地域は山林・原野に比して田畑が少なく、またその田畑も、山を切り開い

て開墾したものや、山間のごく小さな盆地を利用して、原始的な方法で農業を営んでいる者が多く、したがって、農業生産物には多くを望めない状況にある。

重里・永井・小山手・小坪瀬などにおいては後で示すように農林業者が多く、また、彼らが持っている耕作地は、各戸が離れている状態でもあるので分散状態である。

f．調　査　対　称

① 職業別分類（第1表）調査解答者

	山林労務者	農業兼山林	農業	木材ブローカ	小売	接客	医師薬済師	土木・大工	教育・事務	林業	運送	かじ屋	自由労働	無職その他
平谷	2	0	0	1	5	5	1	4	1	0	0	0	1	3
重里	6	1	3	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0
永井	3	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
西中	4	2	5	0	1	0	0	1	2	0	1	1	0	1
小山手	4	5	5	1	(イ)1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
小坪瀬	1	6	2	1	0	0	0	0	0	(ロ)1	0	0	0	0
迫西川	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	23	17	16	3	8	5	1	6	4	1	2	1	2	4

(イ)（大工兼）
(ロ)（椎　茸）

※　本調査は世帯別に調べねばならぬ箇所（設問）と個人的に調べねばならぬ箇所とがあるが、一世帯から不特定な地位にある一人を選び、世帯全部に関する事も代表して答えてもらった。この職業別はそういう意味において世帯としての職業を示すよりも被調査者個人の職業を示すものである。但し、主婦は夫と同じ職業とみなしている。

※　平谷において無職その他の比較的多いのはダムによって筏流しが出来なくなり、筏師が失業したものが全部で、以後は山林労務者になるものとみられる。

※　山村の特長として、単一職業で生計を立てている世帯はほとんどなく、いずれも2又は3の副業をもってはいるが、分類の都合上農業兼林業（山林労務）を例外として他は皆主とする職業によった。

最近平谷等西川筋は二つ野ダム建設のため各部落は住票に記載されていないが共通に戸数が増加している。これは、県道筋でバスの便がよく支谷の集落を背景とした商業が可能であるか

ら、自ら商業に転業したもの、他県からの転入商業者、それからダム工事による多人数のダム工事従事者、支谷からの移住などによるものである。

従って、この表からは明らかにされないが、平谷などにおいては商業戸数が圧倒的に多く、また専業農家は少く大低は農林業という兼業農家でありながら、ほとんどは、その収入源を林業に求めている。

ちなみに十津川村の産業別就業者数をあげてみるに、総数５８９５戸の中に製造業９５．御小売業２４１．サービス業２７８．計６１４という大なる商業戸数を示めている。しかし、これは平谷・重里等の工事現場附近に多く、それより奥の永井・小山手・小坪瀬・迫西川に入るとやはり従来と同じ、未開の相を示している。ここで特記すべきことは、これらの調査地域は皆無医村であることである。このような不利な条件が今だに在ることは地理的な悪条件による弊害である。

しかしながらここ数年来この地方は木材ブームが続き、山林所有者は比較的裕福な生活を送っている。

② 年令別性別分類（第２表）

年令（才台）	10～19		20～29		30～39		40～49		50～59		60～69		70～79		80～	
性別	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
平谷	0	0	2	3	2	1	4	2	3	6	0	0	0	0	0	0
重里	0	0	1	2	1	1	2	0	1	0	1	1	1	1	0	1
永井	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
西中	0	0	0	2	4	2	0	2	0	1	1	2	2	1	0	1
小山手	0	0	2	1	0	4	0	2	0	3	1	0	0	0	0	(不明 I)1
小坪瀬	1	0	1	1	0	3	2	1	1	0	0	0	1	0	0	0
迫西川	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	2	0	0	1	0	0
計	1	0	6	9	8	14	8	7	6	11	6	4	4	3	0	(不明 I)3

上表において全体的に１０代．２０代の生産年令者が少いことがめだつ。これらは、丁度高等教育受教者が、都市に出ているためである。また３０代の壮年期男子が調査戸数に比して少い。これは農業以外の生産年令者が都市に出かせぎに行っているためである。

また土地が狭いため、農業に実際従事しているのは女、または３５才以上の者というのが圧倒的に多い。

構成人員別家族数は５人というのが最も多く、ついで４人・３人・８人・６人・７人の順になっている。

家族数が８人以上というのは農業で土地が狭くまた谷合いの封鎖性を持った部落が多く、農業に頼らざるを得なくなり、土地分割はとうてい出来ないといったものが多い。

g．以上のように調査対称を分類し、戸別訪問を行なった結果のマスメディアの普及率を調査してみよう。

① マスメディアの分布度（第３表）

	調査戸数		新聞		ラジオ		テレビ		週刊誌		月刊誌		その他	広報等
地名	総数	総数／全世帯(%)	戸	%	戸	%	戸	%	戸	%	戸	%	戸	%
平谷	24	11	20	83	24	100	2	9	11	46	10	42	14	58
重里	13	16	6	46	13	100	2	15	2	15	4	31	6	46
永井	5	18	4	80	5	100	0	0	2	40	0	0	4	80
西中	19	26	12	63	19	100	2	11	2	11	2	11	11	58
小山手	16	29	5	31	14	88	1	6	3	19	0	0	9	56
小坪瀬	12	52	10	84	11	91	0	0	1	8	2	17	3	25
迫西川	6	30	3	50	3	50	3	50	0	0	2	34	4	67
計	95		60		89		10		21		20		46	

村役場の話によると〝広報〟（村報）〝十津川新聞〟は各戸毎に配っているとのことであるが意識している人は大部少ない。

これに反してラジオの普及率は目ざましいものがある。（これは後述ラジオと山村民）

迫西川は西川筋でも一番奥にあるのだが、その割にラジオ．テレビの普及率が多いのは地理関係において最も和歌山県に近く、そこからの影響が大であると考えられる。

また地理的概況でも示したように迫西川では山林が大きな比率を占めており、ここ数年続きの山林ブームにのっていることもあわせて考えられる。この村の家庭は全部山林を大なり小なり所有しており、生活も豊であり、市内における何はなくともテレビだけはというような風潮は見られない。

② 新聞・ラジオ・テレビのうち２つ以上を組み合せて持っている世帯分布。

大低の家庭が新聞とラジオを持っている。

平　谷（75％）　重　里（38.46％）　永　井（80％）

西　中（52.6％）　小山手（25％）　小坪瀬（75％）

迫西川（16.6％）

なおこの中の①の表において新聞の中には村報を含まない。すなわち昭和30年に全十津川村に電気が入ったため、この時村民は一せいにラジオを買い入れたものである。また新聞は親．祖父の代からといって意識している者は少ない。

以上マスメディアの分布度も含めて概論としたが、それではこのような状態のもとにマスコミはどのような影響を与えているのであろうか。

二．新聞と僻地（山村）民

現在、新聞の普及率は目覚しいものであり、一般に云われる農山村及び僻地にも驚くべき程浸透していっていると云う事は、すでに行なわれたあらゆる調査結果によって実証されている。新聞を購読していない農山村民は極めて少ない現状である。このような状況において、僻地と云われる十津川地区ではどの程度の普及率を持ち、またそれがどのような意識の基に受けとられ、影響されているか等をここで考察して見よう。

日刊誌の購読率（第4表）

	調査戸数	購読件数	日刊紙数	朝日	毎日	読売	産経
平谷	24	20	27	7	5	10	1
重里	13	6	6	2	2	1	1
永井	5	4	4	2	0	2	0
西中	19	12	13	6	3	3	0
小山手	16	5	8	2	1	0	1
小坪瀬	12	10	14	4	1	0	5
迫西川	6	3	3	1	1	1	0
計	95	60	75	24	13	17	8

※五大紙の他、日経．大和タイムス．熊野新聞．紀南新聞が1軒づつ程度見られた。

第4表が示す如く、平谷ではほとんどの家が新聞を1つないし2つ取っているのに対し、重里．永井．西中．小山手．迫西川においては50％の普及率であり、2つ以上取っている家は全くない。

また、購読新聞名の調査結果によれば、毎日・朝日・読売・産経が大半を占め、各地区に1軒づつ程度しか地方紙が見られない。しかし他の一般農山村に見られる傾向として地方紙が70%を占め、20%程度が中央紙であると云うデーターと比較する時、むしろ都会的傾向に近いと云える。これは、この地域が他の農山村のように部落の成員が密集していず、その分散度が非常に高いため、パーソナルコミュニケーションの機会が非常に少く、他の農山村に見られる部落意識や集団意識が比較的少ない事により、外から知ることに対しては上からの制約を受けない事にもよっている。しかし、だからと云ってこの地区が国や世界の事に関心を持ち、積極的に自主的にマスコミに対処していると云うことは早計である。

このようなことについても漸次調査結果を参照しながら解明していこう。

小坪瀬では調査戸数12に対し10軒が購読しており、日刊紙数14を示している。地理的には奥に属するこの地区だけが、結果的に平谷と同程度のものを提している。更にこの地区のみが読売・毎日・朝日を押えて産経の講読率がトップである。これは産経が読売・朝日・毎日よりもずっと遅れて十津川に入ったため、地理的に近い平谷から漸次小山手までは他の三代紙にその販路を奪われたためである。即ち、この地区では都会のように一度に2．3の新聞を取り読み比べたりする必要も意識も経済力もない事をも示している。また、購読初めの年月日調査において、昭和30年がその大半を占めているのは、読売がその年に入りこんで当時の読売の購読数倍増策で、あれこれと宣伝をしたためだと云いうる。また、朝日・毎日を取り、しかも戦前から新聞を購読していた家はほとんどが旧家であり、奥に行く程この傾向が強い点等を考え合せても見ると、そこにはマスコミュニケーションに対する必要性にかき、積極的にマスコミュニケーションとの接触を求める働きかけは見られず、外的な力、即ち宣伝とか見え等による力が強く作用し、撰択の自由を持ちながら売手の働きかけに追従している範を脱していない。即ち、この地区においては、最近やかましく云われている農村の変貌として、マスコミュニケーションが地域社会においてもはや欠く事の出来ない生活材となりつつあると云う現実には、僻地の特殊性によってまだ至っていない状態と云える。

さらに、迫西川の様に奥に入れば部落総代の職にあるものは、その期間中、部落の費用で新聞が購読出来る仕組みになっている。これ等の事は都市化のあおり受けた平谷等には見られぬ事であり、奥に入ればまだまだ古い本家と分家関係に見られる上層民と下層民との支配と従属の関係が色を薄めたとはいゝながら残存し、形を変えながら再編成されている事を示すものであり、それが国や世界の動きを十分知る事の出来ない下層民、即ち上層を占める有力者の口からしかそのような事を知る有効な平だてを持たず、それに甘んじている下層民に彼等の意識と

生活の「ゆがみ」と「おくれ」の意識を助長させ、それ故にマスコミュニケーションの浸入をも疎外させる一面にもなっている。

新聞を受け取って一番最初に読むのは何欄か。（第５表）

	新聞購読数	一面	二面	社会面	地方版	論説コラム	小説	スポーツ	株式経済	その他
平谷	20	50(%)	(%) 0	(%) 15	(%) 15	(%) 0	(%) 0	(%) 5	(%) 0	(%) 5
重里	6	17〃	0	50	0	0	33	0	0	0
永井	4	75〃	0	0	0	25	0	0	0	0
西中	12	16〃	8.3	16	25	8	0	0	2	0
小山手	5	40〃	0	20	0	0	20	0	0	0
小坪瀬	10	40〃	0	0	10	0	20	10	10	0
迫西川	3	33〃	0	0	67	0	0	0	0	0
計	60									

この調査に対し、

一面と答えた者が、平谷では５０％．他の地区では平均３０％を示し、社会面や地方版の平均２０％程度に比して高率を示している。これは概してこの地域の政治意識が高いと云うのではなく、むしろ、（調査員達が調査中にいろんな面でも感じられた事であるが）村民達の意識の遅れに対する潜在的なコンプレックスの表層的反ばつ意識と、都会への憧憬の念、即ち、意識的にだけでも都会人と変っていないのだと感じさせようとする所から出た結果と考える方が正しいであろう。事実そのような意識は意外に強いのである。

また、婦人解答者は例外なく社会面・小説をあげ、山村業務と育児．家事とに追い廻されて社会の動き等を意識する暇はなく、たゞ夫に従属していれば良いと云う農山村、ひいては封建社会の女性像から少しも脱皮していない事も実証された。

更に、地方版を見ても株式欄や経済欄にはあまり関心を持っていないと云う結果は、近郊農村のように資本主義機構の中に完全にくみされてマスコミュニケーションなくしては一日も生活出来ないと云う程、都市経済の動きに密着していない事である。いいかえるなら、そこまでまだまだ近代化が浸透していない事であり、これからのダム総合開発等における近代化の波がこの地域をどのように変貌さすかが今後の問題として残されるだろう。次に、新聞をどの程度信用しているか、（調査時期がちょうど安保問題華かであった時だから、新聞全体と云うより、むしろ安保問題に中心がいったように思われる）の質問に対し、

新聞だけしか取っていない所（小山手・小坪瀬）はある程度信用すると云うのが圧倒的で、新聞と他の報道機関（ラジオ・テレビ・雑誌）とがある所では全部信用する、が２５％。ある程度信用する、が６０～７０％に及んだ。

この他、あまり信用しないと云う答は、その理由に「大げさすぎるから」とか、全面的に信用すると答えたものの中でも「新聞として見るから」と云った意見であった。これより、新聞に対しては、批判の余地があり、全面的には信用出来るものではないと云う莫然とした意識は持っているが、何ぜ信用出来ないか、なぜどこが信用出来ないか、にはノーコメントで明確な理由を持たず、そう答えるのが一般的であると云う意識から出たものである。具体的に記事についてどのような態度や意識で接しているかを見るため、安保問題を取り上げ、関心を持ち出した時期及び意見等を調査した結果、この問題に対する関心度は高かったが、関心を持ち出した時期においては、６・１５事件や岸渡米等を契機としたものが圧倒し、初めからと答えた者は皆無であった。即ち、彼等はこのような問題に対しても、三面記事的関心から離脱出来ず、全く違った次えの出来事としか受け取っていない。

この事は山村の封鎖性と村民の意識の低さを単に裏づけるものではなく、マスメディアの普及率が即ち文化意識の向上のバロメーターではない事を示すと共に、地域社会への今後のマスコミの対処のしかたに大きな問題を与えていると云えよう。

この地域にもマスメディアの普及は相当に進んでいるとは云え、まだまだ娯楽材としての域を脱していない現状である。

なお、各地区における新聞配送に関するデーターは次の通りである。

平　谷：	その日の１２～１４時に配達される。
重　里：	林道沿いは（１４～１６時）その他は１日遅れ。
永　井：	同　　上
西　中：	郵送による１日遅れ、一部無集配。
小山手：	同　　上
小坪瀬：	同　　上
迫西川：	郵送による２日遅れ、一部無集配。

都会においては１日遅れの新聞は最早や新聞紙以外の価値を持たない現状に対し、迫西川等に見られる２日遅れの新聞が配送されている事は、笑止にとゞめるべき問題ではなかろう。ラジオが入ったから新聞をやめた、と云う現実の声を考え合せる時、僻地における新聞の使命が

莫然としてくる。

最後に新聞に対する僻地民の要望をそのまゝ記載しておこう。

平　谷：「暗い面が多すぎる。もっと明るい記事が欲しい。それに記述が行き過ぎである。」（朝日購読）

「和歌山版がちょいちょい入るが奈良版ばかり入れてほしい」（読売購読）

「忠実に報道してくれれば他に文句はない。」（朝日．読売購読、共に保守系支持）

「戦記読物を載せて欲しい。」（朝日、保主系）

「商売上のヒントとなるような事を載せてほしい。」（読売）

重　里：「農業記事が欲しい」（朝日）

永　井：「公平な論調と責任ある態度を、一日遅れてくるが、もっと早くならないか。」（朝日、中立支持者）

西　中：「正確な報道を望む。」（朝日、中立支持）

小山手：「郵送でも良い、毎日くるなら引きたい。」（現在新聞なし、林道より山道4Km入る）

小坪瀬：「忠実な報道を望む。個人に対するスキャンダルは載せるな。」（産経、保守）

迫西川：「真実を明らかにする事」（読売、保守）

三．ラジオと僻地民

ニュースは主として何によって知るか．（第6表）

	解答数／調査数	新　聞	ラジオ	新聞とラジオ	テレビ	その他
平　谷	23／24	26%	61%	4%	4%	0%
重　里	12／13	8〃	66〃	8〃	16〃	0〃
永　井	5／5	40〃	60〃	0〃	0〃	0〃
西　中	18／19	16〃	66〃	5〃	11〃	0〃
小山手	15／16	13〃	87〃	0〃	0〃	0〃
小坪瀬	12／12	16〃	83〃	0〃	0〃	0〃
迫西川	6／6	0〃	53〃	0〃	67〃	0〃

娯楽は主として何によって取るか．（第７表）

	解答数／調査数	新　聞	ラジオ	テレビ	映　画	雑　誌	新聞とラジオ
平　　谷	２３／２４	４%	４８	８	３９	４	０
重　　里	１２／１３	０〃	７５	１６	８	０	０
永　　井	５／５	２０〃	６０	０	０	１０	０
西　　中	１７／１９	６〃	８２	１１	０	０	０
小　山　手	１５／１６	６〃	８３	０	０	０	０
小　坪　瀬	１１／１２	１８〃	７３	０	０	０	９
迫　西　川	６／６	０〃	３３	６７	０	０	０

農村には、戦争をはさんで急ピッチでラジオが普及してゆき、すでに全国の農家のうち半数以上がラジオを持っており、全世帯の９割以上がラジオ登録者であると云われている。現にこの地区でも９割以上がラジオを持っており、第６表・第７表でも示す通り、ニュースや娯楽源としては欠く事の出来ない存在である。農山村において、ラジオがこのような重大な位座を占める事は、「聴く事は読む事よりも、ずっとパーソナルな行動である。」と云う点にかかっているとみられる。このラジオのもつ特性は、インパーソナルな冷たい形式に常日頃慣れていない。したがって活字やそれを読むことに親しみもなく、それを苦手とするこの地域の人々を有力にとらえている結果である。しかもラジオは早い。交通不便な僻地に住む人々にとって、前日の日付の新聞をやっと昼すぎに受け取るこの地域の人々にとっては、ラジオはまさにその生活の現状に最も適合した条件をもったメディアである。

したがって問題は、彼等のラジオの聴き方について、より多くかかってくるわけである。

先ず、何放送を良く聞きますか、と云う質問において、ＮＨＫが圧倒的であり、ＮＨＫのみと云う家も沢山あった。また２・３の放送局名をあげた所でも第一にＮＨＫを上げており、ＮＨＫの予想外の聴取率に驚かされた。これはＮＨＫが他の放送局に比べて良く聞えると云う点や、ＮＨＫが農村むけの番組を多く含んでいる点等によるものであるが、次のどんな番組を好まれますか、と云う調査結果と併合してみると、そこには伝統的なものへの執着をも加味されていると言えよう。即ち、子供達には比較的民間放送が好まれるのに対し、壮年層には一般に古くから親しまれたＮＨＫが圧倒する結果からも裏付られよう。又、具体的な番組名においては、「お父さんはお人好し」「三つの歌」「浪曲」等が圧倒的に多く、示されている。即ち、

浪花節的演芸種目にその関心度が最も高い。これは昔も今も農山村では娯楽材的に手軽く共感をもつものをラジオに求めているという状態から少しも進歩していない事を示している。

さらに聴取時間についての調査では、夜の7時から9時頃までが大多数を占め、中には、朝起きた時から夜寝るまで一日中つけっぱなしにしていると答えた所も少なくなかった。長時間聞いていると云う人は、比較的に時間の余裕のある職業、例えば平谷における商業・旅館といった所である。実際にラジオが唯一の娯楽材であるとする林業や農業に従事する人々は平均2時間程度しかラジオを聴取する時間を持っていない。これは、農林業従事者は、家から一時間以上もの離れた田や山に仕事に行かねばならないため時間の余裕がない事を示すものであり、一方子供達も通学時間往復3時間というものが少なくないため、この地域では、ラジオは主に老人と主婦の娯楽材となっている。

このような状態は、ラジオは「唯ひとつのもの」となりやすく、その一方向性と特性のために、真偽のわからないまゝで、彼等の勝手な理解にまかされてしまったり、さらに「他力本願的な気分」の僻地民をマスコミュニケーションの魔力にかからせる根拠のひとつになりがちである。即ち、ラジオは農山村民の身辺に最も広範に入りこんでいるにもかかわらず、マスコミュニケーションの流れが持つ一方性を無抵抗な彼等に押しつけ、結局、農山村民の生活のテンポに相応することなしに彼等の生活と意識の「おくれ」と「ゆがみ」を一層強める方向に作用している結果となっている。この地域ではこのような点においても新しい変革への歩みがまだ見られていないと云えよう。

四。 テレビと僻地民

文明の光がさして来たとはいえ、このあたりのテレビの普及率はまだまだ低く、調査戸数95の内テレビのあるのはわずかに10戸にすぎず、これも、あって相応と思われる文化的な生活をしている家庭だけにしかなかった。ここには机のない家があってもテレビのない家はないと云う都会の風潮とはほど遠いものがある。

テレビについては調査対象戸数が10戸にすぎず、全体の約十分の一にしか当たらないので、ここにその現状の詳細を提示するのにとどめる。（第8表）

次頁の示す如く、その購入動機に至っては極めて消極的なものであり、初めから娯楽材として購入している。また家族全体が見られる家庭向番組を大低の家庭では見ており、テレビを持つ家庭ではもはやラジオ新聞に対する関心度が非常に少なくなっている。

この傾向はマスコミュニケーションの受け手として充分に成長していない農山村民、マスコミの報道を独自では消化しえない彼等、即ち、娯楽材としてしかマスコミに対処していない→

（第 8 表）

	職業	月収	購入年月	購入の動機	聴視可能な放送局名	家族が楽しみにしている番組名（5つ）	※備考
平谷	かっぽう旅館	不明	s.34	営業上必要であるから	NHKのみ	すもう 野球	
	〃	〃	s.36	〃	〃	お笑い三人組 事件記者 親バカチャンリン 私だけが知っている 私の秘密	
重里	教育長	〃	34.12	欲しいから	NHK 読売 朝日 毎日	ジェスチャー バス通り裏 ホームラン教室	
	農	〃	35. 2	ラジオ学校生の息子が組んだ	NHKのみ	舞台中継 ニュース	
西中	〃	〃	34.10	映画に行かれず、娯楽がない	〃	すもう お父さんはお人好し	(1)
	農森林組合員	50000.-	34.12	娯楽・政治への関心が高まるので	〃	バス通り裏 親バカチャンリン お笑い三人組 お父さんの季節 ホームラン教室	(2)
小山手	農林	不明	34. 3	映画がみられない（これ迄は年一回位みた）	NHK 東海	とんま天狗 白馬童子	
迫西川	林	15000.-	34.12	教育の為．総合的にものをみられる	NHK 徳島 四国	私の秘密 歌の広場 お父さんの季節 お笑い三人組 ハリマオ	(3)
	〃	20000.-	〃		〃	ハリマオ ダイヤモンドアワー トンマ天狗 白馬童子 スーパーマン	
	農林	27000.-	〃	隣りが買ったから家もまけずに．子の為もあって…	〃	野球プロレス、スモウ お父さんはお人好し 白馬童子	

※備考 (1)老人夫婦と幼児の3人暮(2)保守系(3)迫西川では殆んどの家が同時期に買っている。

→と結論ずけられるだろう。一般に新聞を良く読むものはラジオも良く聞く層であると云う、媒体は媒体独特の心理的アッピールの仕方も持っているのだと云う事に気づいていない状態である。この根本的な事が真に理解されない限り、また必然的にそれが理解される段階に至らない限り、僻地へのマスコミュニケーションの浸入には限度が生じるだろう。このことは、マスコミの受け手である村民にも、売り手である物に取っても深く考慮すべき問題であろう。

更にこの地区において考慮すべき点は、新聞．ラジオ等の普及阻害要因をともなった地理的条条件の至難性である。

テレビにいたっては、テレビセット代5万に対し、アンテナ代が100万円もつくと云う現状であり、それでNHKしか入らないと云う状態では正常なマスコミの普及は望めないだろう。また、アンテナのおかげで、調査表に見られる如く、一度に数件が購入すると云う結果を提しているのである。

このように見てくる時、意外に地域社会へのマスコミュニケーションの普及をはばむ原因がその地理的条件にある事が明確となり、それに対しての働きかけも案外行なわれていない事を改めて知る事が出来る。

五．結　　論

都市ではマスコミュニケーションの普及によって文明生活化が促進されて行くのに対して、農山村では都市化が進むにつれて次第にマスメディアが浸透して行き、マスコミュニケーションが普及していくと云った傾向をたどっているといえよう。

即ち、そこには受け手としての積極的な働きかけはなく、近代化の波に押し流されて受けるという消極的な態度が見られる。　平地農村がどんどん資本主義機構の中にくみされ、マスコミを通していろいろなニュースを取り入れなければ一歩も前に進むことが出来ないという状態、言い換えれば、農村においてもマスコミは最早や娯楽材ではなくして生活材であるという傾向と見比べる時、その地理的弊害等により、この十津川地域ではまだ娯楽材としての域を脱していない現状といえる。一般の農村に比べて、その近代化とマスコミへの対処において、いささか遅れた状況にあるといえるのではないか。

しかし一面において、他の農山村がその部落の集中性、集団性によって持つ傾向、マスコミュニケーションのメディアを受けとる農民の受け取り方が農民に独特な根深くからみついた性格上、与えられたものは歪曲されるか部分的にしか摂取されないという事が多いのに対し、十津川地区はその集落の分散度が非常に高いため、パーソナルコミュニケーションの機会が少く、前述の一般農山村に見られる弊害はない。そのためマスコミュニケーションの働きかけに対し

ては自主的に応答出来る状態であるが、いまだ娯楽材としてのみしかマスコミの必要性を感じていないこの地域の人々には、自由意識と撰択権を持ちながらそれを使うすべを知らず、一方的マスコミの流れに追従しているのが現状である。そして、消化力を持たぬ村民に表層的・断片的な知識が投げこまれ、二見高度の意識があるかに見える半面、自己の空白を認識することによる潜在的コンプレックスが生じ、これが都会人への憧れの気持や、それに近づいているのだと空いばりさせるような状況を呈している。即ち、この地域でのマスコミュニケーションの影響はいたって表層的なものであり、むしろ村民の意識を前進させる事なく、足ぶみの状態から引き出す事が出来ないとでもいえる。しかしどのような状態の基にでも、一旦入りこんだマスコミュニケーションというものは、こんどはそれを取り除くとなる時、初めて、マスコミがいかに地域社会に密着していたかを知ることが出来るものである。この事がマスコミの地域社会に及ぼす影響の最も効果の多い点であり、それ故に、マスメディアの普及に力を入れる事も意義が出るのである。最後に、この調査では、すでに他の農山村で調査された結果が、この十津川地域でも、例外なくあてはまる事の実証データーにしかすぎなかった点も多々あるが、僻地という地域性故の特色もマスコミュニケーションの面にもはっきり表われて来ている事が知られたし、又、今建設中の二つのダム工事が今後いかにこの地域を近代化に導き、それがマスコミ発展にいかに影響するか、残された問題は大きいし、興味あるものと云えよう。

地域における職業期待調査

職業教育研究会

一．緒　　言
二．十津川村の概況
三．調査地の概況
四．調査方法及び日程
五．調査校の現況
六．調査結果及び考察
七．現在生徒の実状及び希望調査
八．父兄の希望調査
九．結　　論

一．緒　　言

我々職業科研究会は十津川村に於ける地域社会、特に産業構造．生産技術を調査し、これが中学校に於いて実施されている職業（技術）教育との結びつきについて、及び現行職業教育の実態を把握して教育上の資料とすることを目的とした。以上の目的のために予備知識として地域の社会的条件．自然的条件の概要を調査した。調査方法及び日程については、卒業生の動向調査．在学生徒の希望調査．父兄のアンケート希望調査の３方法で、昭和３５年９月２３日から２８日までの６日間．５名が現地調査に従事した。調査対象地域は此度の調査指定区域の西川区に存在する十津川第五中学校（平谷）．同第六中学校．同第六中学小坪瀬分校を選んだが、卒業生の動向調査で第五中学が資料の点で不明であったので、この分のみ平谷とほゞ同一条件にある十津川第四中学校（折立）を対象とした。

二．十津川村の概況

〔面積〕当地域の総面積は６６９.７７平方Kmで、その広さは東西３３Km南北３２Kmに及び奈良県全面積の１８％約１／５をしめる。そのうち山林が６４４.９５平方Km・耕地６.５７平方Kmその他１８.２５平方Kmとなっている。即ち、山林が十津川村全面積の９６％をしめ、耕地がわずか１％に過ぎない。

〔人口〕

戸数	人口				人口密度
	総数	男	女	1戸数当り	
2,726	13,339	6,880	6,459	4.88	18.7

第１表　　戸数及び人口

註．３４年度住民登録調べ

昭和３４年１０月現在、戸数2,７３６戸．人口１３,３３９人である。最近の開発事業による一時的入居者を加えると、約2万人になるが、これら入居者は上記の数字に入っていない。転出者を見ると、東海近畿地方への転出が多く、殊に県内への転出が多い。このような人口変動は村内経済の変動につれて変化を示している。

〔交通〕地域の中心を流れる十津川にそって五条市から和歌山県新宮市に至る国道１６８号線があるが、地勢上交通に恵まれず、不便を尚きわめているが、森林開発によって林道が開設され、かなり交通問題も一新されてきた。これによって関東阪神からの経済圏との結びつきは勿論、資源の開発に欠くことのできない交通の発達は目ざましいものである。

〔産業〕十津川の産業は主に林業と農業、その他に分けられるが、云うまでもなく産業経済の構造は山林の経済によって支えられている。即ち、村全面積の９６％までが森林によって占められ、農耕地は僅か１％に過ぎない。最近の電源開発事業の導入で経済の動向は上向きを示しているが、やはり十津川村に於ける経済源は林業によるところが大きい。

(イ)林業―上記に述べた如く十津川総面積の９６％が山林で、十津川の経済源となっている。木材の価格は安定しているし、山林経営の条件は除々に改善され、村民の経済に大きな影響を示している。また、未開の地まで林道が進出し、今まで輸送に困難であった地域が開発されて、林業経営の近代化に向って前進している。私有林４９,１５２町歩の中、５７％の２７,８６１町歩が村内住民の所有であるが、やはり規模の大小関係があり、小規模（１町未満）の場合は、その９０％が少しの農業との兼業であり、主として薪炭林が多い。中規模以上は用材林の経営が行なわれており、いわゆる山林労務者を傭って、この経営に当っている。

(ロ)農業―十津川は林業を主体とし農業は副業的に営まれていることが多い。農家戸数1,４００に対して、水田・田畑の耕地は極めて少なく、一戸当水田８ａ・畑1.４ａ・計２２ａであり、奈良県下一戸当り平均５０ａと比較するとその４５％を経営するに過ぎない。また地型から考えると、農業経営の条件は極めて悪く、低生産であり、米麦の村内自給は二ケ月足らずである。農業経営の労働は婦女子によるところが多く、林業に附随して、専業農家は少ないが近年農業経営に対する努力がはらわれている。―以上、村政報告書に基く―

三、 調査地の概況

(a) 人口及び戸数（第２表）

(b) 交通―平谷は国道１６８号線沿いに位置し、五条市．和歌山県新宮市へのバス交通の中継点となっていて、十津川村では最も発達している。重里では西川を約８Km支流に逆登って位置し、小坪瀬は更に重里から１５Km奥地にある。この地区は勿論バスの便はなく、林業開発で

大字名	戸数	1人世帯	2～5人	6～11人	12人以上	人口
平谷	206	32	109	62	3	894
重里	79	8	37	33	1	393
小坪瀬	37	13	11	13	0	156

第 2 表　　34年12月現在

林道がかなり開かれたが、車・単車のない人にとっては、徒歩以外にたよるものがない。

(c) 産業

イ—林業　各地区を通じて、わずかな山林を維持し、山林労務者として林業関係に従事することが多い。山林労務に関しては決定的な資料がつかめないので省略する。

ロ—農業

大字名	農家戸数	人口			農耕地面積 a				
		男	女	計	田	畑	果樹園	その他	計
平谷	24	77	83	160	65	48	24	0	137
重里	54	155	139	294	330	150	36	8	527
小坪瀬	19	54	58	112	183	234	10	9	436

第 3 表　　昭和34年12月現在

この表の中平谷・重里地区では専業農家は皆無で、兼業農家ばかりであるが、小坪瀬では反対に殆んど専業農家で兼業農家は少ない。

主な生産物は米・麦の他、コンニャク・果樹(柿)菜種等である。

ハ—商業　開発工事による入居者の急増によって、旅館・商店などが急増しているが、どちらかといえば村外資本に圧倒されている型である。殊に平谷地区はこの傾向が強い。

(資料は村政報告書による)

四・調査方法及び日程

a　調査方法　(i)　卒業者名薄による中学校卒業後の動向

(ii)　生徒希望調査

(iii)　父兄アンケート希望調査

b　顧　問　平田善文(林学研究室)

c　調査員　稲田清明　上浦一道　沢田八郎　辻井和夫　山本欽一(計5名)

d　日　程　昭和35年9月23日～28日(6日間)

五． 調査校の現況

	所在地	教師数	生徒数	設　備（職　業）
5　中	平　谷	6	104	少ない
6　中	重　里	5	52	やゝととのいつつある 昭和34—35産業教育指定校
6　中 小坪瀬 分　校	小坪瀬	2	24	少ない

第　4　表　　昭和35年9月現在

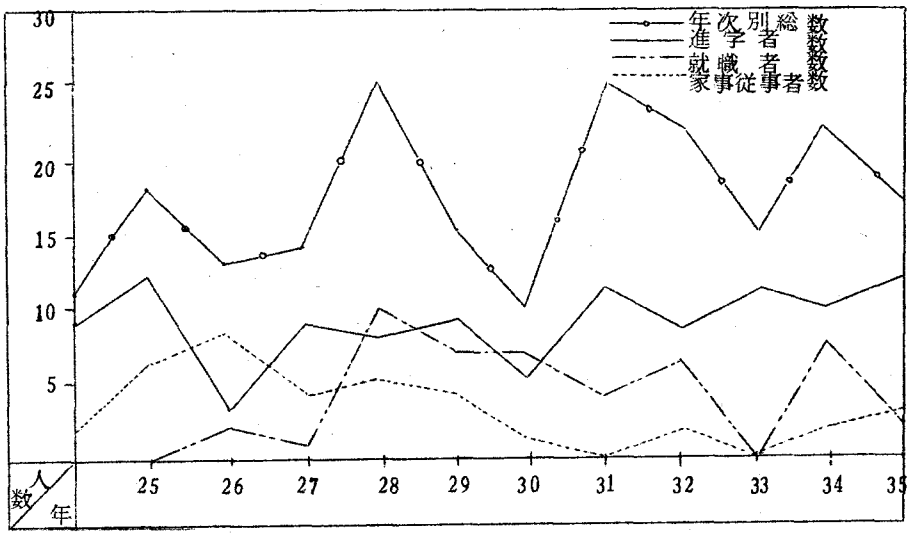
六． 調査結果及び考察

(A) 生徒の卒業後の年次別動向調査について

このことについての調査結果は第1図から第6図に示す通りである。この中第1図から第3図までは学校別・年次別の実数の各々の動向であり、第4図から第6図までは、各々学校別・年次別の総生徒数の中に占める%である。この表からみると、生徒の卒業後の進路については（勿論決定的なものでない）学校別にみた場合、かなりの地域差がはっきりと認められた。

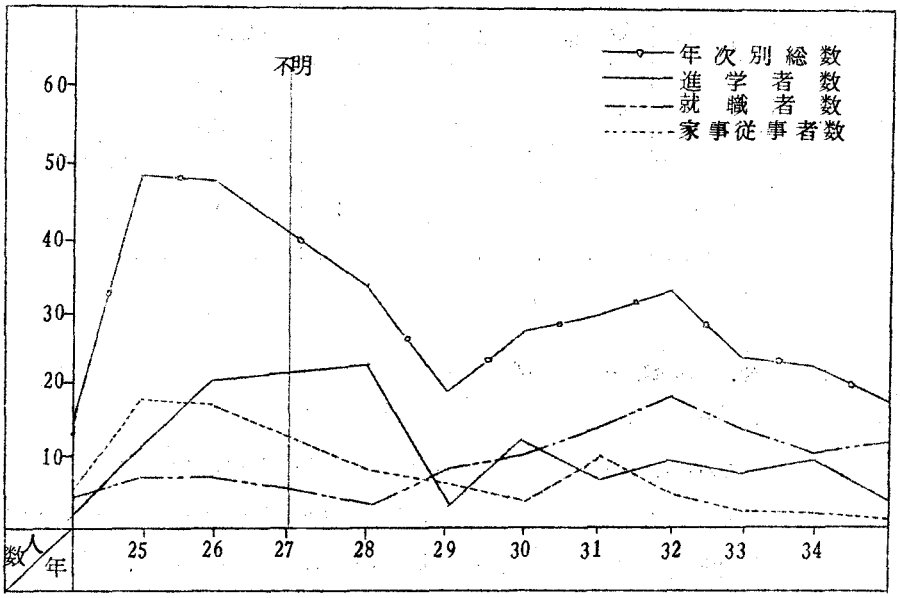
第 1 図

第四中学校に於ける（男女）卒業生の年次別進路状況（人数別）



第 2 図

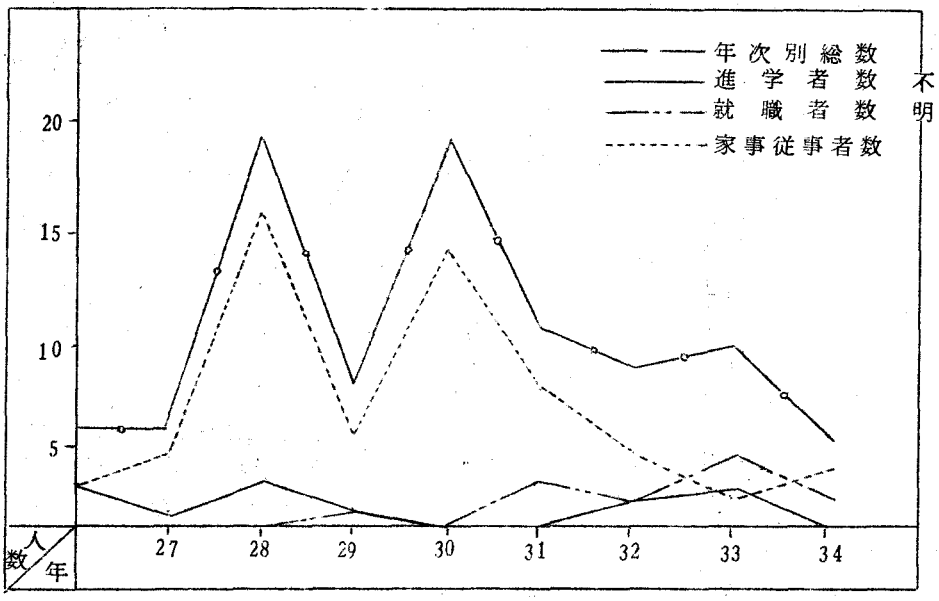
第六中学校に於ける（男女）卒業生の年次別進路状況（人数別）



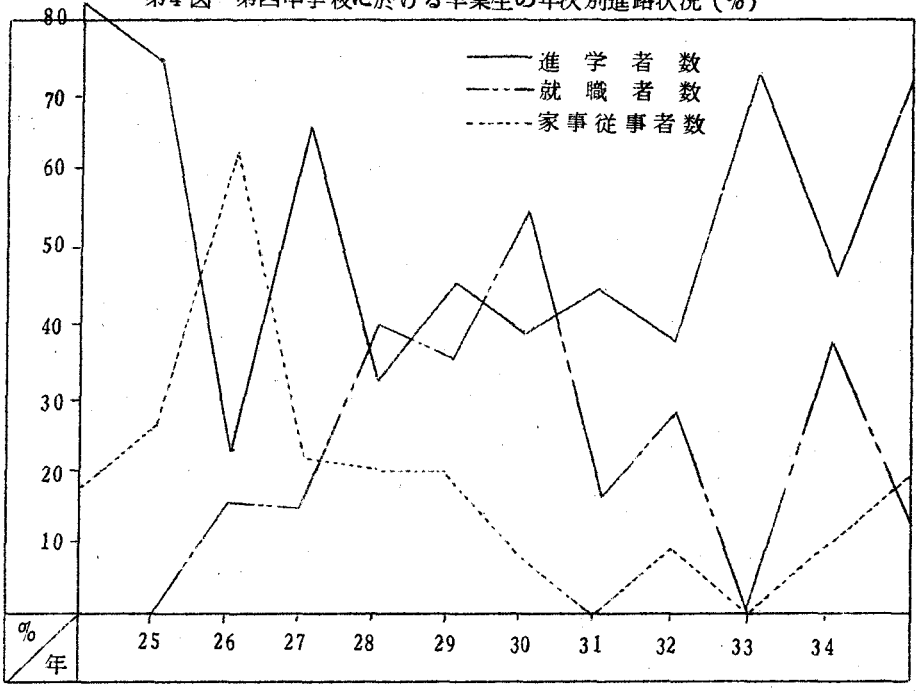
昭和３５年９月現在

第 3 図

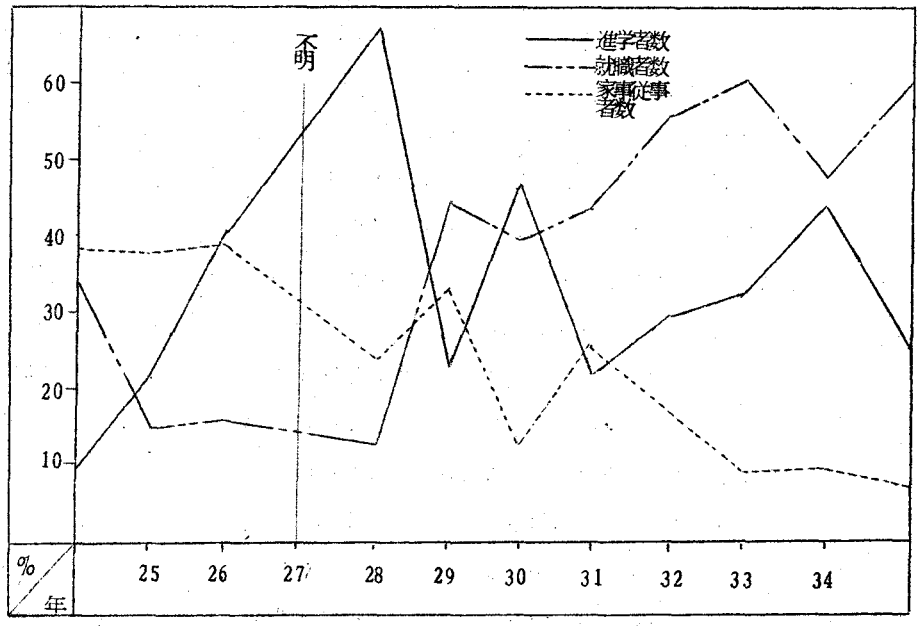
第六中学校小坪瀬分校に於ける年次別進路状況（人数別）



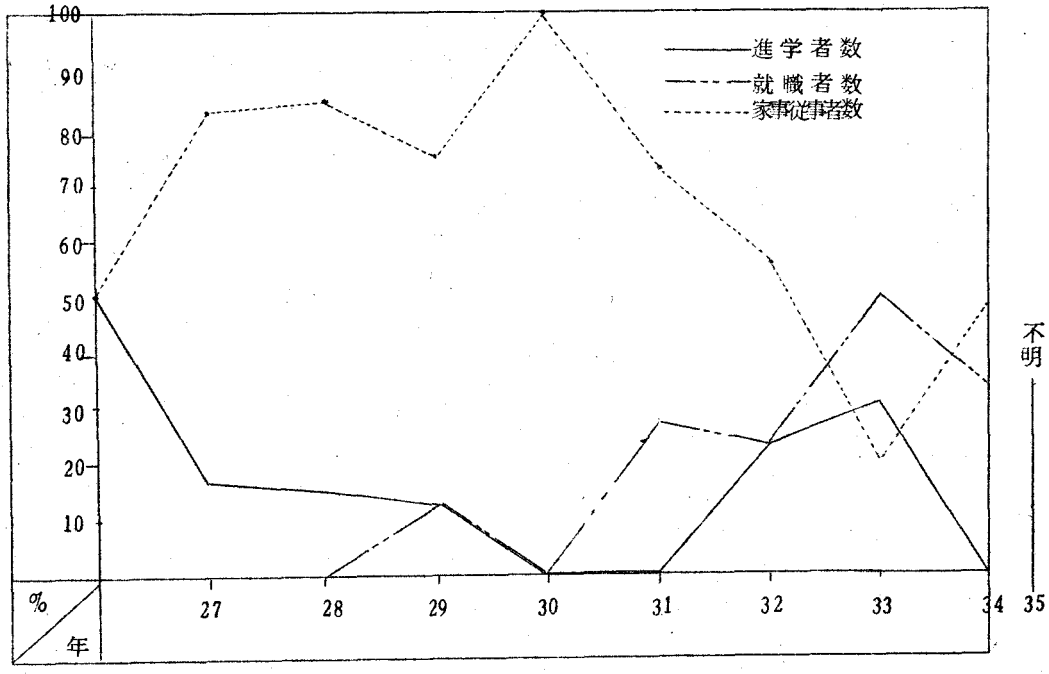
第4図　第四中学校に於ける卒業生の年次別進路状況（%）



第5図　第六中学校に於ける卒業生の年次別進路状況（%）



第６図　第六中学校小坪瀬分校に於ける卒業者の年次別進路状況(%)



a—第四中学校では進学率は各年次を通じて他の学校よりかなり高率である。就職率は昭和30年をピークとして次第に減少し、家事従事率も同様に減少の傾向にある。これは平谷と同様、交通が他の地域より著るしく発達していること、それにつれて文化・社会面の浸透が早く、而もこの地域の経済的な豊かさが各年を通じて進学率を高めた結果であろう。

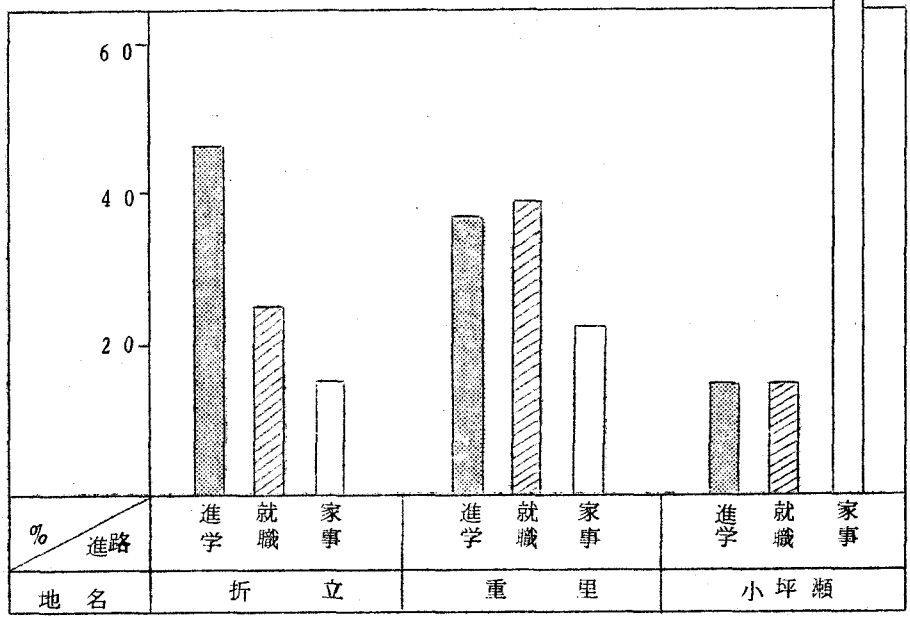
b—第六中学校では年々進学率と家事従事者の割合が減少している。反対に就職の割合は28年から急激に増加している。重里に於いて進学率が低下の傾向にあるのは、学力の低下に原因しているのではないか。しかし就職者が多く、在村者が著るしく低下しており、これは山村経済のひっ迫によるかとも考えられる。文化生活の浸透がこの地域の生徒に都会へのあこがれを抱かしめた例が多いかも知れない。

c—小坪瀬分校に於いては就職・進学者が漸次増加しつつある。が他に比して低率である。家事従事者は年々その大半を占めていることは、奥地の地理的・社会的条件の中にあって、特に地域の発達がそのわく内に限られた結果であろう。

(B) つぎに学校別に卒業生の動向についての数は、第７図であり、三者三様の傾向を示している。即ち、第四中学校では進学率が半数近くを占め、就職・家事従事は少なく、殊に家事従事者は１５.６％の低率である。第６中学校では就職者率が進学よりわずかに多く３８.９％であ

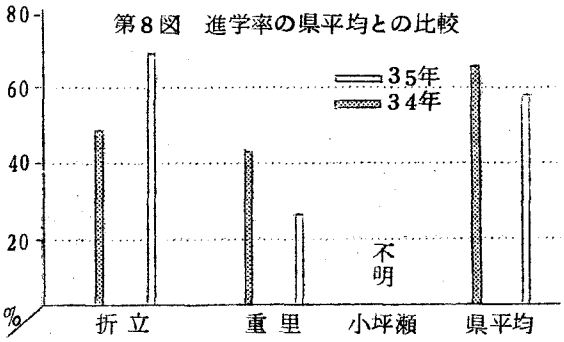
り、やはりこの地区に於いても家事従事者が少ない。一方小坪瀬六中分校では家事従事者率が７０％の高率であり、進学・就職者は１４.６％の低率である。調査実数が極小であるとしてもやはり交通・文化・経済面でかなりの差があるためだが、一面就職者が少ないことや、父兄の９２％が山林労務者として日常の生計をたてていることから判断して生徒も卒業後家事に従事することになるのであろう。又林業関係の好景気が反映している結果でもあろう。

第７図　学校別卒業生の動向（３５.９現在但し一部不明あり）



(C)　卒業生の各進路の実態について。以上進学・就職及び家事従事者の概況に基いて各々の進路を分析してみた。

ⓐ　進学について・・調査学校別の進学者については既に述べた如く地域差が認められたが、この進学者数と、県平均との比較が第８図である。



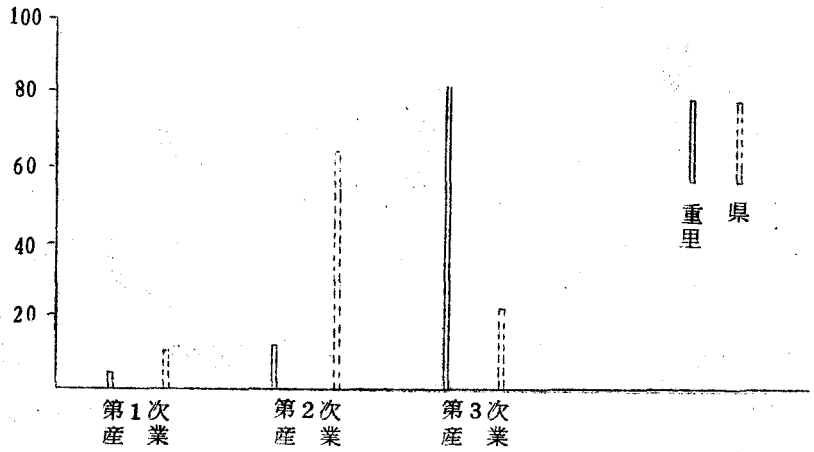
第８図　進学率の県平均との比較

これを見るとわかるように調査地と県平均と比較して、３５年度の折立に於いては７０％の進学率であるがこれは実数が極小なための変動であり傾向には大差がないと見てよく、平均して１０～１５％低い結果になっている。部落別に見ても特に労務者の多い地域が平

均して低率を示している。それは交通環境の問題はあるとしても、地域的・経済的な問題が大きく作用しているようである。進学のコースについて考えて見ると普通課程がやや多く、而もやはり十津川高校へ進学する者が多い。村外・県外の進学は少ない。

ⓑ 就職状況について

調査地区に於ける就職の状況は約３０％が就職し、村外への就職者が多い。これら地区に於いても地域的な差はあるが、進学率と同様就職者率が次第に増加している。これは逆に家事に従事する者が減少している傾向にあると言える。近時何れの農山村に於いても見られる現象である。就職の状況を県の平均と比較してみると第二次産業への就業者が多いのに比べて、西川区では第三次への就業率が高い。しかも第三次産業の中で就業者の半数がその他の産業に入り、産業別の動向ははっきりつかめない。このことは十津川村や他の山村についても言える。ここに重里に於ける就職状況を示したが、他の部落についても同様の傾向が出ている。



第９図　就　職　状　況　（昭和３４～３５年）

ⓒ 家事従事について

中学卒業後家事に従事する者は年々減少している。進学率・就職率の上昇から、当然の現象だが、これは最近の産業界の好景気と文化面の急激な発達が山村にも反映している結果で都会へのあこがれが家事に従事したがらない結果を生んだものと考える。県全体の一般的な現象であるが、地域産業振興上の大きな問題点となろう。家事に従事する者の大半は家事に従事しながら、山林労務者として働き農業は婦女子により営まれる場合が多い。

(D) 性別による進路動向について

性別による卒業生の動向調査の結果については第五表に示す通りであって、この表からみれ

ばその地域の特色は女子の進学率の多いことで、男子の進学率が低い。これは地域の経済的条件に支配された家計の収入を男子が負担していることが解る。因に男子の就職状況は殆んど村外に出ている現況である。而も3～5年たって戻るケースが多いといわれる。地域別にみた場合の実態調査結果は第6表から第8表である。小坪瀬のみが上記のケースと相反する結果が出ている。このことについては小坪瀬の地域の交通及び経済関係に由来したものと考えられる。

第5表　第四中・第六中・同小坪瀬分校の全卒業生に対する性別進路状況比較

動向＼人数	男子 進学	男子 就職	男子 家事	男子 農業	男子 不明	女子 進学	女子 就職	女子 家事	女子 不明	合計
人数	100	95	86	1	27	12.5	64	92	14	604
%	16.5	15.7	14.25	4.47	0.16	20.7	10.5	13.5	2.3	100

（35.9現在・1部不明を含む）

第6表　性別進路状況　（第四中学校）

6—1　　単位 (%)

年	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
進学	100	75	20	50.0	26.0	25.0	0	30.5	18.1	40	18.1	100
就職	0	0	20	12.5	46.0	62.5	100	15.3	36.3	0	72.7	0
家事	0	25	60	37.5	13.3	12.5	0	0	9.9	0	0	0
不明	0	0	0	0	13.3	0	0	53.7	36.3	60	9.9	0

6—2　　単位 (%)

年	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
進学	66.6	60	33.3	83.3	40	58.2	62.8	58.2	54.5	90	73.9	37.5
就職	0	0	0	0	30	16.6	25.0	16.6	18.1	0	0	25.0
家事	34.4	40	66.6	16.7	30	25.0	12.5	0	9.9	0	18.1	37.5
不明	0	0	0	0	0	0	0	25.0	18.1	10	9.9	0

6—3

方向＼性	男子 人数	男子 %	女子 人数	女子 %
進学	42	38.90	65	60.80
就職	34	31.50	13	12.15
家事	15	13.80	22	20.28
不明	17	15.70	7	6.55
合計	108	100.00	107	100.00

第7表　性別進路状況　（第六中学校）

7—1 男子　　単位 (%)

年	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
進学	9.54	21.75	35	不	63.7	0	40.0	15	43.75	23.2	30	25.0
就職	38.16	17.4	20	〃	9.1	58.4	39.8	45	43.7	68.8	60	50.0
家事	28.58	30.5	40	〃	22.7	50.0	20.0	40	12.5	7.5	10	0
不明	28.58	30.5	0	〃	0	0	0	0	0	0	0	0
農業	0	0	0	〃	0	0	0	0	0	0	0	12.5

7—2 女子　　単位 (%)

年	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
進学	0	24	48.1	不	66.5	36.4	54.4	33.3	13.33	44.4	54.4	25
就職	0	12	7.41	〃	8.35	36.4	36.3	44.4	66.7	44.4	36.3	65
家事	100	44	37.0	〃	24.95	272	9.1	222	20.0	11.1	9.1	0
不明	0	20	7.41	〃	0	0	0	0	0	0	0	0

7—3

方向＼性	男子		女子	
	人数	%	人数	%
進学	51	31.80	54	37.20
就職	57	35.70	42	29.90
家事	41	25.70	37	32.85
農業	1	1.60	0	0
不明	10	6.25	7	5
計	160	100.00	140	100.00

第8表　性別進路状況　（第六中小坪瀬分校）

8—1 男子　　単位 (%)

年	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
進学	26.3	0	22.2	0	0	0	16.6	20	0	不
就職	0	0	0	25	0	0	0	60	0	〃
家事	25.0	100	77.8	75	100	100	83.4	20	100	〃

8—2 女子　　単位 (%)

年	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
進学	0	20	10	25	0	0	33.3	40	0	不
就職	0	0	0	0	0	50	66.6	40	40	〃
家事	100	80	90	75	100	50	0	20	60	〃

8—3

方向＼性	男子		女子	
	人数	%	人数	%
進学	7	17.10	6	12.50
就職	4	9.75	9	18.70
家事	30	73.20	33	68.80
計	41	100.00	48	100.00

七。 現在生徒の実状及び希望調査

以上が西川地域に於ける現在迄の過去１０～１２年間の卒業生の卒業後の進学・就職及び家事従事の三項目にわたってとりまとめたものである。

次いで現在就学中の生徒について１年生から３年生迄の各学年毎に卒業後の希望についてアンケート調査を行いとりまとめてみた。

調査対象学校及び生徒数は次の表の通りである。

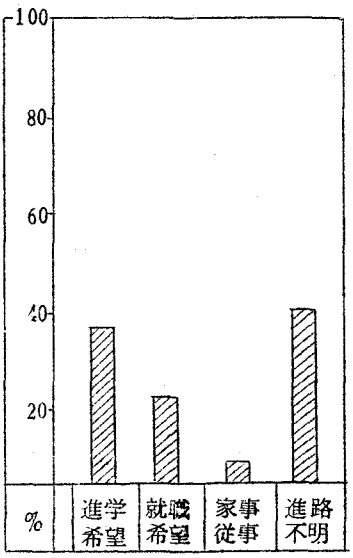
	教師数	１年		２年		３年		計	備考
		男	女	男	女	男	女		
第五中	6	１９	２２	１７	１８	１５	１３	１０４	アンケートは全部回収
第六中	5	１８	6	6	6	9	7	５２	
小坪瀬	2	2	7	4	5	5	1	２４	

第 9 表

上記の表に於ける三校の生徒１８０人に対して行なったアンケートの結果は第１０図のようになる。第１０図について進学希望者が３４.２％と約１／３をしめている。次いで就職希望者２１.８％であり、家事従事者が約４％と以外に少ない。又不明と答えた者が多い。

第 １０ 図

三校全体の希望進路の比率
（平谷．重里．小坪瀬）
（1.2.3年男女）

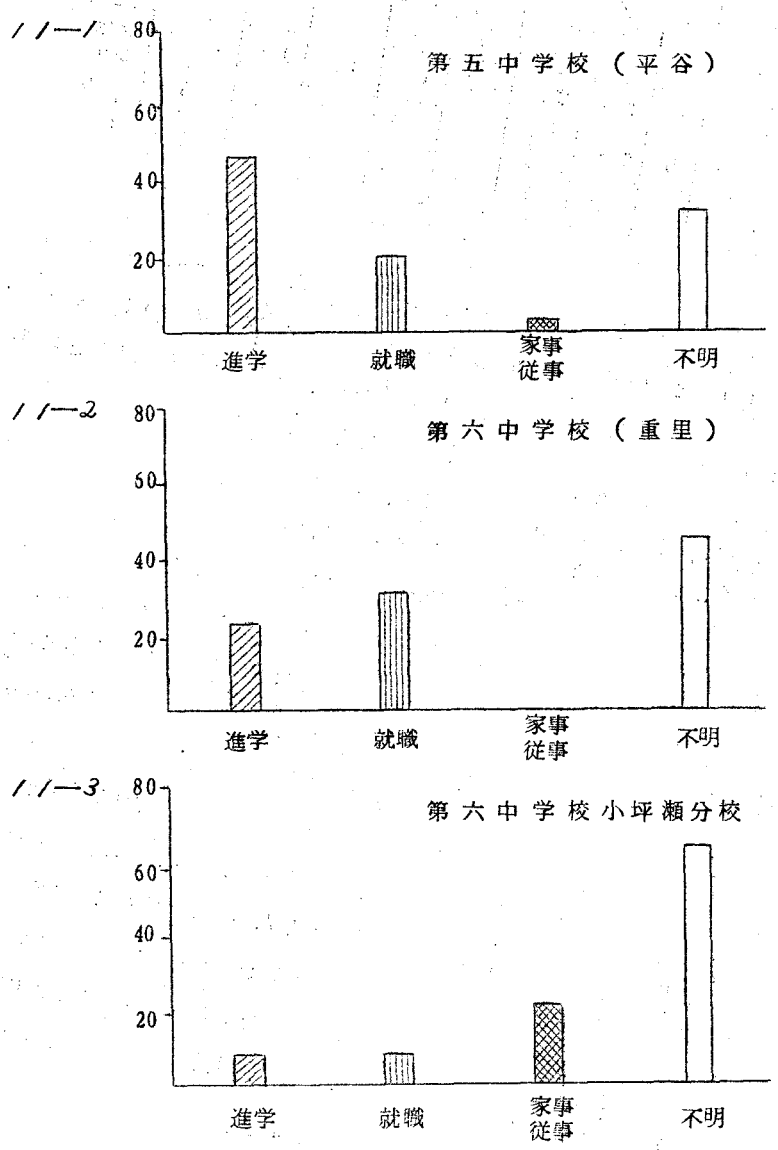


また、希望進路について学校別に考察すると、第１１図から十津川に於いては比較的交通の便利な、また経済的に恵まれている平谷（第五中学校）に於いて、進学希望者がその半分であり、地域全体（第１０図）と比較してみると大差はない。しかし第六中に於いては逆に就職希望者が多く、家事従事者が全くないのは、経済事情や交通等の諸条件が作用しているのではないだろうか。第六中の分校小坪瀬については不明者が圧倒的で1.2年男女を通じて進学．就職とはっきり決まっているものは1人も存在しない。また他の二校に比較して家事従事希望者が多いのは見のがせない結果である。以上により各校区の社会環境によって生徒の希望する進路が明確に現われているし、上述の卒業生の進路状況と一致した結果が

出ている。

以上西川地区内に於ける生徒の希望調査結果をとりまとめたものであるが、次にこれらの生徒の各希望別に教科との関連性を参考として調査してみた。その結果については第１０表である。

第１１図　学校別の希望進路の比率



第１２表　第六中学校に於る進路別希望者の教科に対する態度

12—1

		男女の別	英語	数学	社会	理科	国語	職家	図工	音楽	体育
進学希望者（男子48名 女子）	好き	男	87.0	25.0	25.0	25.0	12.5	50.0	25.0	12.5	87.5
		女	75.0	25.0			50.0	50.0	25.0	50.0	
	普通	男	12.5	12.5	62.5	37.5	75.0	37.5	37.5	62.5	12.5
		女		50.0	25.0	75.0	25.0		25.0		50.0
	嫌い	男		62.5	12.5	37.5	12.5	12.5	25.0	25.0	
		女		25.0	25.0	25.0		25.0		52.0	25.0
	役立つ	男	75.0	87.5	50.0	62.5	75.0	25.0			50.0
		女	50.0	50.0	50.0	50.0	75.0	75.0		25.0	
	普通	男	12.5	12.5	37.5	25.0	25.0	50.0		25.0	25.0
		女	50.5		25.0						
	役立たず	男	12.5		12.5			12.5	87.5	62.5	25.0
		女							25.0		

12—2

		男女の別	英語	数学	社会	理科	国語	職家	図工	音楽	体育
就職希望者（男子79名 女子）	好き	男	22.2	22.2	44.4	33.3	11.1	66.6	44.4		55.5
		女	28.6	14.3	14.3	28.6	14.3	57.2	42.8	28.6	42.8
	普通	男	33.3	55.5	44.4	44.4	55.5		22.2	22.2	22.2
		女	71.4	71.4	57.2	28.6	85.8	28.6	57.2	57.2	57.2
	嫌い	男	33.3	11.1		22.2	11.1		11.1	55.5	
		女		14.3	28.6	42.8				14.3	
	役立つ	男	11.1	66.6	44.4	66.6	77.7	22.2			11.1
		女	14.3	57.2	28.6	14.3	57.2	85.8			
	普通	男	11.1	11.1				11.1	22.2		
		女	28.6	14.3	57.2	71.4	28.6			28.6	14.3
	役立たず	男		11.1					22.2	22.2	11.1
		女	42.8						71.4	57.2	57.2

12—3

		男女の別	英語	数学	社会	理科	国語	職家	図工	音楽	体育
進路不明（男子8名 女子15名）	好き	男	46.7	33.3	20.0	6.7	6.7	53.3	40.0	13.3	66.6
		女	12.5	12.5		12.5	50.0	87.5	62.5	62.5	12.5
	普通	男	26.7	40.0	53.3	80.0	73.4	40.0	46.7	40.0	20.0
		女	50.0	12.7	62.5	50.0	25.0		25.0	25.0	50.0
	嫌い	男	26.7	26.7	13.3	6.7	20.0			33.3	
		女	12.5	50.0	12.5	25.0	25.0	12.5		12.5	12.5
	役立つ	男	53.3	73.4	40.0	20.0	60.0	40.0			
		女	25.0	50.0	37.5		50.0	75.0			
	普通	男	13.3		26.7	40.0	13.3	26.7	20.0	26.7	33.3
		女	25.0	12.5	12.5	50.0	12.5			12.5	12.5
	役立たず	男							40.0	40.0	26.7
		女	12.5		12.5				37.5	25.0	37.5

一般的には、男子の進学希望者は、各教科全般に平均した熱意を示している。女子の進学希望者についてもほゞ同様のことが言えるのであるが、その傾向が第六中学校においてはやや低い。結局全科目に平均した力をもって取り組んでおる者は、少々の経済的難点、その他の障害があっても進学を希望していると言えるのではなかろうか。

次に就職希望者についてみると、片寄った科目に力を集中する傾向が見うけられる。女子についてもまた似かよった数値を示している。これは今後の学習指導に1つの問題を提起しているのではないだろうか。

また、進路不明者については男女共に全体に分散していて著るしい傾向は見うけられない。これはまだ自分自身の進む方向が決定せずに迷っている為であろう。表中生徒の希望進路の如何にかかわらず、職業家庭科に対する熱意の高さが認められる。それに職業家庭科が卒業後も役立つと答えている者がかなり大きなパーセンテージを占めている。これは職業家庭科の一般教育としての重要性を物語るものであり、また生徒の自主的実践的態度の浸透を示しているものにほかならない。しかしまだまだ不完全な点は多いがこれは今後の技術・家庭科教育が解決してくれるだろう。

また学校別に見ると職業家庭科に関する限り国道筋の第五中学校より約8Km西川を逆上った第六中学校の方が私達の目に映ったところでは充分とは言えないまでも設備が整い教師及び生徒の熱意もすこぶる高いことが理解される。なお小坪瀬分校の資料は絶対生徒数が極少なので、結論を出すまでに至っていない。

次に中学校職業家庭科に関する事項を生徒がどれ位実際に経験しているかを調べた。

第11表では上記で得た結果の平均値を百分率で表わしたものである。しかし小坪瀬分校の結果は生徒の実際数が極少なので正確な結論は得られてない。この表によると学校差は殆んど見うけられないが「知らない」と答えた生徒が意外に多かった。残り半数近い生徒が「知っている」と答えているところから知らないのではなくして忘れているのであろう。これは実習の伴

第11表　職業家庭科に関する知識調べ

中学	項目＼学年・男女別	1年 男	1年 女	2年 男	2年 女	3年 男	3年 女
第五中	経験有	25.2	26.5	33.9	30.0	36.4	26.4
	知っているか無経験	24.9	19.3	22.2	21.2	23.0	19.6
	全々知らない	49.8	54.1	43.8	48.8	40.6	44.0
第六中	経験有	16.0	12.5	44.9	27.1	34.7	24.7
	知っているか無経験	19.9	8.7	10.1	19.1	22.2	24.3
	全々知らない	64.2	78.8	45.0	53.8	43.1	51.0
小坪瀬	経験有		31.6		17.5	32.5	22.5
	知っているか無経験		25.0		26.5	34.0	0
	全々知らない		43.4		56.0	43.5	77.5

わない机上のみの勉強に終っているからではないだろうか。

八。 父兄の希望調査

私達は次に各学校と深い関係にある生徒の父兄に対し現在就学している生徒の希望調査との関連した希望調査を実施し生徒と父兄との関係の概要を知った。

調査方法はアンケート形式による回答を以ってとりまとめたものである。調査対象地域・調査数は次のとおりである。

第12表　回　答　率

種類／地域別	所在地	対象生徒数	配布数	回答数	回答率	備　考
第五中学校	平　谷	104	104	80	77%	全回答 136
第六中学校	重　里	52	52	40	77%	
小坪瀬分校	小坪瀬	24	24	16	66%	

第13表　父兄調査に於ける家の職業

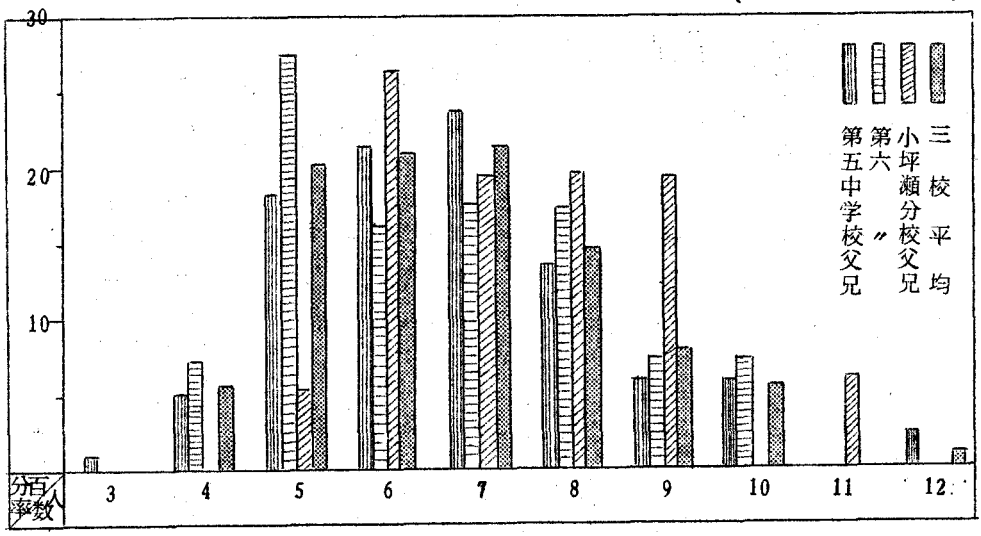
	職業別数／回答数	百分率	第五中学校 職業別数／回答数	第五中学校 百分率	第六中学校 職業別数／回答数	第六中学校 百分率	小坪瀬分校 職業別数／回答数	小坪瀬分校 百分率
農林業（山林労務者）	78/136	57.4	35/80	45.00	28/40	70.0	15/16	92.5
公務員	9/136	6.6	5/80	6.25	4/40	10.0	0	0
会社員	3/136	2.2	2/80	2.50	1/40	2.5	0	0
医師（歯科医含む）	2/136	1.5	2/80	2.50	0/40	0	0	0
商業（店・旅館を含む）	17/136	12.4	13/80	16.25	4/40	10.0	0	0
土木建築業（大工・左官）	10/136	7.3	9/80	11.10	0	0	1/16	7.5
無職	1/136	0.7	0	0	1/40	2.5	0	0
無解答	13/136	11.0	13/80	16.25	2/40	5.0	0	0
	（全体）		（学校別）					

この表に於ける農林業は、農業及び林業の専業ならびに山林労務者を含んでいる。しかし農業を専業としているのは少い。農業は副業的な存在にある。まず第五中と第六中。第六中とその分校の小坪瀬校との比較を考えて見たい。この表から農林業は第六中は第五中に対して23.6%・小坪瀬分校は本校の第六中に対して23.9%増加して、奥地程高率を示す。小坪瀬分校の

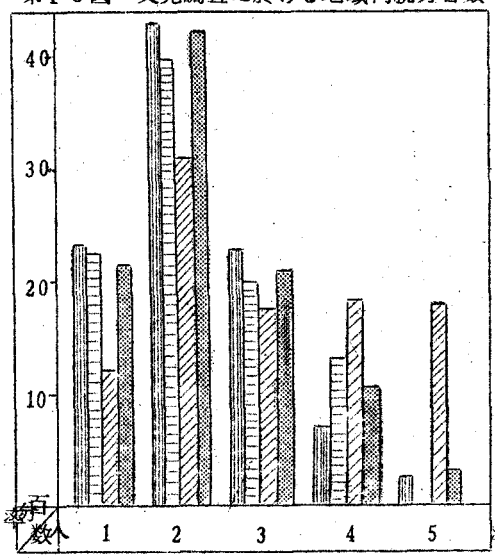
山林労務者は９０％の高率である。　これは全く全部が山林関係者であると言っても過言ではないだろう。戸数・人口も多く他地域より交通にめぐまれた平谷地域では山林労務者が約５０％近く占め、他に商業・会社員・土木建築業など職種が多く見ることが出来る。以上の事だけでも地理的条件の地域差がみられる。小坪瀬地域に於いては山林労務者以外の職業は全く成立たないとも言える。次に職業成立に地域差を持ったそれぞれの地域での家族関係を示そう。

第１５図　父兄調査に於ける家族構成人員

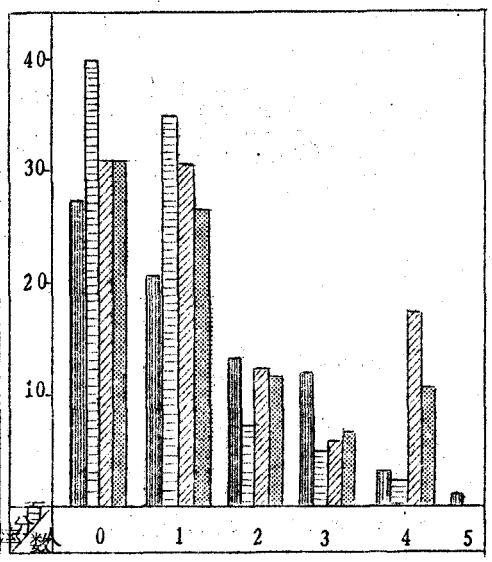
（昭和３５年９月現在）



第１６図　父兄調査に於ける地域内就労者数



第１７図　父兄調査に於ける家族中地域外に就職している者



第１２図に於ける家族構成人員の三地域の平均を見ればそのピークに５人６人７人に集中していることがわかる。平谷地域と小坪瀬を見較らべてみよう。平谷地域では５人～７人までの範囲の家族が多く、小坪瀬は６人～９人の範囲に分散して多く成っている。そこで次に家族構成人員のうち地域内で就労している者の人数をしらべたのが第１３図である。第１３図の地域内労務者は全体として三地域共に平均している。即ち2人というのが４０％前後で一番多く、次いで１人と３人がほゞ三地域とも同様な傾向（平谷地域．重里地域．小坪瀬地域の順に少しばかり全体的に低い）にあり、約２０％前後をして示している。また、回答数の少なかった小坪瀬地域に４人～５人が地域内で就労しているのがやや多い。

そこには兄弟．親子で山林労務についていることがうかがわれる。次いで第１４図であらわしたものの職種と人数を、平谷地域．重里地域及び小坪瀬地域とに分けて示す。

平谷地域では、自動車運転手．女中奉公が８人．工員が７人．自動車修理工，会社員が６人．公務員・土木関係が５人、以下の職種があるが人数は少ない。左官・理容師・事務員・看護婦プラスチック加工者・電源公社員・店員・薬剤師・炭焼夫・洋裁見習人・クリーニング店員・農協員・歯科助手員など多くの職種がある。重里地域では、大工見習４人．洋裁見習３人．女中２人．店員２人．クリーニング店員１人等で、小坪瀬地域に於いては、大工見習３人．工員3人．理髪見習２人．自動車運転手・公務員・店員などである。これらの職業にどの様にして就職していったかという問題に直接ふれていないが、教師・先輩・知人の斡旋による就職が多い。

以上の家族関係を有する地域内の父兄の生徒及び学校教育に関する希望調査を試み、将来の地域の生徒動向えの関心の程度を知った。その結果、

第１４表　父兄の子供に対する希望

	回答数	百分率	第五中学校		第六中学校		小坪瀬分校	
			回答数	百分率	回答数	百分率	回答数	百分率
就職	34/136	25.40	19/80	23.75	13/40	32.50	2/16	12.50
家事従事	11/136	9.00	3/80	3.75	5/40	12.50	3/16	18.75
進学	62/136	44.50	46/80	57.50	12/40	30.00	4/16	25.00
不明及び無記入	29/136	21.10	12/80	15.00	10/40	25.00	7/16	43.75
	（全体）		（学校別）					

第１０図に見る生徒自身の希望と見較らべてみると同様な傾向をみることが出来る。生徒より父兄の方がはっきりした返答がえられている。というのは、父兄の場合の方が不明及び無記入が少ない。

次に地域別にこれらの調査項目について比較する時生徒動向及び生徒調査と同様な地域差が認められる。即ち平谷にある第五中は進学希望している父兄が５７.５％で就職希望の倍以上の高率を示している。重里にある第六中学校に於ては就職希望の父兄と進学希望の父兄とがほゞ同様である。就職・進学の具体的な方向は別に述べる事にして、第五中・第六中の存在する地域差と経済的条件が原因されると考えられるのであるが、就職及び進学への父兄の希望に著しい差が認められた小坪瀬分校は対象数が著るしく少ないので比較をさけたいが、不明及び無記入の４３％は就職・進学に対して地域差から生れて来る認識不足と言える様なものが表１４より感じ取られる。

第１５表　就職希望の条件

	第五中学校		第六中学校		小坪瀬分校	
	／	百分率	／	百分率	／	百分率
村外就職	１３／１９	６８.０	１２／１３	９２.３	１／２	５０.０
村内就職	３／１９	１６.０	１／１３	７.７	１／２	５０.０
不明及び無記入	３／１９	１６.０	０	０	０	０

第１６表　進学希望の方向

	第五中学校		第六中学校		小坪瀬分校	
	／	百分率	／	百分率	／	百分率
普通高校	３２／４６	６９.５	７／１２	５８.５	１／４	２５.０
工業高校	９／４６	６９.５	２／１２	１６.６	１／４	２５.０
商業高校	３／４６	６.５	２／１２	１６.６	１／４	２５.０
不明及び無記入	２／４６	４.５	１／１２	８.３	(農高) １／４	２５.０

第１５表でわかるように第五中、第六中の父兄とも大半が村外就職をさせる事を希望し、それが就職する者にとっての条件かもしれない。言い換えれば十津川村、特に平谷に於いても職種が少く、その為に父兄が望む職業が少ない事が考察されるのである。家事従事などの中には、〝長男だから継がせる〟というのも含まれている。第六中学校で村外就職を希望する父兄が、９０％以上ある。　これは、重里地域の社会で安心して父兄が子供を職業につかせる事が出来ないという裏付けと村内と異った社会で子供を育成しようとする気持の表われと思う。また、重里地域は中学生卒業時の適当な職業が少ないことも言える。

第１６表の進学希望の方向については全地域の進学希望率は前の説明の通りであり、地域別に於いても同様な傾向がみえる。普通高校希望が多い。第五中学校の父兄に工業高校希望がやや多いのも目立つ。

父兄調査を総合して、父兄は子供に対して割合はっきりした希望を示されていると思う。

九．結　　論

以上西川地域全体及び地域内にある学校別の卒業生の動向．生徒調査並びに父兄の実態調査を実施し、これに基く進学・就職及び家事の項目について調査した結果その実態並び動向の傾向を把握することが出来た。即ち、

① 生徒の動向調査に於いては更に同じ項目について僻地といわれる地域に於いても西川流域に存在する学校別にみた場合、山間の僻地乍ら交通の開けた地域の学校・中間的な位置にある学校・奥地にある学校との間に比較的大きな実態の差があることを認められた。即ち、第四中については進学者が多く、第六中については就職が多い。第六中小坪瀬分校では家事従事が多い。進学者が年々増えつつあるが、山村ではまだ就職者．家事従事者は社会構成や産業構成の中で卒業生が社会的役割．生産技術の発展改良への役割として重視されている。これらを遂行するような人間に教育することは我々の役目であり、山村の要求する希望であろう。教育の重要さを更に感じる。次に二つのアンケート調査について各々一応の結果が得られた。

② 生徒に実施したアンケート調査を回収して調査全体に目を通した場合１年生に於て特に無解答者の多かったことがめだつ。また、この調査が９月下旬であったにもかかわらず３年生に卒業後の進路不明者のあったことは生徒と父兄の意見の喰違いから生じているものではないだろうか。職業家庭科に関しては学年・男女の差・卒業後の進路希望等に全く左右されず職業家庭科に対する熱意はすこぶる高く、また、卒業後も職業家庭科は実社会に於て役立つと解答した者が約半数に達していることは職業家庭科の一般教育としての重要性を如実に示しているものと思う。

③ 父兄調査の結果から、父兄がその就職に於いても、進学に於いても、判断に地域差が見られ、山林労務者の多い小坪瀬地域などには、より正しい職業的教育が必要ではなかろうか。そしてそれらの教育は父兄に理解させることが大切である。

職業・家庭科が技術．家庭科が教育課程の改正に従って技術及び家庭科に移行されつつあるが、この度の調査結果から、この教科を通じて、一般教育としての必要性にも増して、就職率の高い点から、より高度の生産技術的な教育内容と設備が極めて大切であることが痛感された。

児童のアニミズム
―都市と僻地の比較を中心として―

心理学究研会

一、研究目的
二、調査方法
三、調査対象
四、データの処理
五、結　果
六、考察およびまとめ

一、研究目的

ともすると、我々は、僻地を因習的な封建遺制の典型的なものと簡単に考え、僻地の後進性を結論付けるきらいがある。

奈良県は、全国的にも僻地の多い県であるが、最近の国土開発事業に伴い、その発達に目ざましいものがあると推定される。即ち僻地は、後進性から近代的な生活様式、ないし文化へと徐々にではあるが、連続的な変化の過程をたどっていると考えられる。

本研究は、変りゆく僻地の実状に関し、その生活様式（環境）に対する、子供の発達的な特性を、アニミズム的思考の一側面から究明しようとするのが本旨である。

ピアジェは、幼児の自己中心性という、非常にあらわな特徴を幼児の会話の研究の中に見い出した。つまり、幼児の会話の中には、仲間がそばにいることがきっかけとなってしゃべってはいるが、それは相互に通じ合っているのではなく、各自が勝手にしゃべっている集団的独語と名づけられるようなものである。児童が自分中心の世界にだけ生きているという、この自己中心性に伴なって、児童は関係の理解の不能、綜合力の欠除、偶然と必然の混同というような傾向が現われ、さらにアニミズム、人工論、実念論というような幼児特有の世界観を作り得ることを、明らかにしている。そして、アニミズムについては、たとえば、木や石でも自分と同じように生命を持っているというように、自分以外のすべてのものに生命や、意識があると考える幼児特有の思考特性を意味するものであると述べている。さらに、ピアジェはアニミズムについて次の四つの段階に区別した。

第一段階　4才～6才

すべてのものに生命を与える。

第二段階　6才～8才

動くものすべてに生命を与える。

第三段階　8才～11才

自分の力で動くものに生命を与える。

第四段階　11才以後

動物、植物にのみ生命を与える。

このように、アニミズム的思考は年令に伴っていろいろ変化するが、児童の自己中心的思考の解消と共に、アニミズムも崩壊していくものである。

発達は、個体と環境との相互作用である。従って、地域における風俗、習慣、伝統等が直接、間接に児童の思考形式に作用していると考えられる。そこで我々は、都市の児童と僻地の児童のアニミズム崩壊過程がどのようにちがっているか、また生活環境がどの程度児童の思考に影響を及ぼしているかについて研究しようと試みた。

二、調査方法

1. 知能検査

知能検査は、知能をコントロールし、都市と僻地児童のアニミズム的思考の比較において、できる限り、条件を等しくするために、小学1年、3年、5年に実施した。

小学1年、3年の児童には、低学年用田中B式知能検査、5年には、高学年用田中B式知能検査（いずれも金子書房版）を用いた。

2. アニミズム検査

問題作成にあたって、我々は予備調査を行い、問題項目の妥当性を検討し、又、問題項目が、都市と僻地の両方に共通なものを選ぶように留意した。問題は以下の六領域に分けられ、各領域に三問題作られた。

1. 動　　物　　犬、鳥、魚
2. 植　　物　　木、花、草
3. 動くもの　　自転車、トラック、飛行機
4. 自然現象　　月、雷、星
5. 自分で動くもの　　時計、水車、扇風機
6. 静的なもの　　ローソク、ラジオ、電話

以上の１８問題のそれぞれについて

……は生きているでしょうか。

こたえ（生きています。生きていません。わかりません。）

なぜ（……）

という質問を行った。問題の順序は、月、時計、犬、ローソク、自転車、木、雷、水車、鳥、ラジオ、トラック、花、星、扇風機、魚、電話、飛行機、草である。テスト実施にあたり小学１年はまだ言語能力も十分発達していないので、面接法を用い、小学３年、５年、中学１年、３年は質問紙法を用いた。

3. 家庭環境診断検査

環境の一要因である家庭環境を調査するため、田研式の家庭環境診断検査（日本文化科学社版）を小学３年、５年に用いて、アニミズムと家庭環境との関連を明らかにしようとした。この検査の適用範囲が小学４年以上であるため、小学３年に実施するにあたって、我々は、文章表現を平易にする若干の工夫を加えた。

三、調査対象

小学校

		飛鳥	平谷	重里	西中	小山手	小坪瀬	合計
一年	男	21	15	9	1	4	0	50
	女	20	17	8	5	1	0	51
	計	41	32	17	6	5	0	101
三年	男	26	20	7	2	2	0	57
	女	23	10	9	4	2	1	49
	計	49	30	16	6	4	1	106
五年	男	30	12	7	2	3	2	56
	女	22	10	8	2	1	4	47
	計	52	22	15	4	4	6	103

中学校

		三笠	平谷	重里	小坪瀬	合計
一年	男	28	32	18	6	84
	女	24	27	13	1	65
	計	52	59	31	7	149
三年	男	26	22	5	1	54
	女	25	15	6	2	48
	計	51	37	11	3	102

以上の対象の中から我々は、知能指数が、９０～１０９の間の児童を抽出した。（但し、小学校のみで、中学校はコントロールしなかった。）そして、対象を次の二グループに分けた。

Ａグループ：奈良市内

飛鳥小学校、三笠中学校

Ｂグループ：十津川筋

平谷、重里、西中、小山手、小坪瀬の各小学校

平谷、重里、小坪瀬の各中学校

人数、ＩＱの平均、ＳＤは次の如くである。

		Ａグループ			Ｂグループ		
		Ａ	$\bar{X}$	ＳＤ	Ｎ	$\bar{X}$	ＳＤ
小	１年	２２	９９.１	4.6	１３	９６.３	2.8
	３年	２３	９９.１	5.９２	３８	９５.２	4.6
	５年	２５	９８.７	5.4	２８	９９.９	6.0
中	１年	５２			９７		
	３年	５１			５１		

調査は、１９６１年６月中に行われた。

四、　データの処理

以上のようにして得られたデータを、我々は、次の段階を経て処理した。

1. 全被験者についての知能指数の算出、及び、知能指数９０～１０９までの児童の抽出。（Ａ．Ｂ両グループについて）
2. Ａ．Ｂ両グループについて、アニミズム検査の各領域（前記６領域）に於ける割合（パーセンテージ）の算出。
3. Ａ．Ｂ両グループの家庭環境診断検査の得点から、パーセイタイル・ランク、及び、それに基づくプロフィールの作成。
4. アニミズム検査について、Ａ．Ｂ両グループ間の差をx^2（カイ２乗）検定し、有意差の認められた領域について理由の分析。
5. Ａ．Ｂ両グループの家庭環境検査について、t検定で有意差の検定。

五、　結　　果

(1) Ａ．Ｂ両グループ間の小学１年、３年、５年の知能の検討。

Ａ．Ｂ両グループの児童の知能検査の結果は、ＴａｂｌｅＩの如くになる。

ＴａｂｌｅＩより、１年では、１％レベルで、都市と僻地の間に有意差が見られたが、３年、５年では見られなかった。

Table Ⅰ.　学年別平均知能指数

		都　市	僻　地	P
1年	N	41	53	P＜0.01
	$\bar{X}$	103.4	82.8	
	SD	11.1	11.5	
3年	N	47	56	
	$\bar{X}$	93.1	92.4	
	SD	14.46	8.5	
5年	N	49	49	0.1＞P＞0.05
	$\bar{X}$	100.15	94.8	
	SD	14.73	16	

(2) 児童のアニミズムの検討

(A) 無生物に対する発達段階別アニミズムの反応の検討

次のTableⅡ.Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ.Ⅵは小学1年、3年、5年、中学1年、3年の生物でないものについての反応数、及びパーセンテージである。

Table Ⅱ.　(小学1年)　　(　)内は%

	生きている	生きていない	わからない	P
A	153 (58.3)	102 (38.9)	7 (2.8)	0.02＜P＜0.01
B	112 (72.7)	36 (23.4)	6 (3.9)	

Table Ⅳ.　(小学3年)　　(　)内は%

	生きている	生きていない	わからない	P
A	131 (47.5)	129 (46.7)	16 (5.8)	有意差なし
B	217 (48.1)	164 (36.3)	70 (15.6)	

Table Ⅳ.　(小学5年)　　(　)内は%

	生きている	生きていない	わからない	P
A	108 (36.5)	143 (48.3)	45 (15.2)	有意差なし
B	119 (35.8)	174 (52.4)	39 (11.8)	

これらによると、A.B両グループで有意差がみられたのは1年だけであるが、3年ではAグループの方が、「生きていない」と反応する傾向が強い。また5年になると、ほとんどその差はみられない。

Table Ⅴ.　(中学1年)　　(　)内は%

	生きている	生きていない	わからない	P
A	104 (16.7)	435 (69.7)	85 (13.6)	P＜0.01
B	269 (23.8)	645 (57.2)	214 (19.0)	

Table Ⅵ.　（中学３年）　　（　）内は％

	生きている	生きていない	わからない	P
A	136（22.5）	364（60.3）	104（17.2）	P＜0.01
B	229（37.7）	278（45.7）	101（16.6）	

両学年ともに、A．Bグループ間に１％レベールで有意差がみられる。

(B)　各領域別反応数の検討

Table Ⅶ.Ⅷ.Ⅸ.Ⅹ.Ⅺ.は、小学校１年、３年、５年、中学１年、３年について、６領域の各々についての反応数、応び、パーセントを表わしたものである。

Table Ⅶ．（小学１年）　　（　）内は％

領域		生きている	生きていない	わからない	P
動物	A	66（100）			
	B	38（97.4）	1（2.6）		
植物	A	41（62.1）	25（37.9）		P＜0.01
	B	33（84.6）	5（12.8）	1（2.5）	
動くもの	A	39（59.1）	26（39.4）	1（1.5）	
	B	28（72.0）	11（28.2）		
自然現象	A	46（69.7）	18（27.3）	2（3.3）	
	B	30（76.9）	7（18.0）	2（5.1）	
自分で動くもの	A	37（57.8）	25（39.1）	2（3.1）	
	B	25（71.4）	8（22.9）	2（2.9）	
静的なもの	A	31（46.9）	33（50.0）		0.02＜P＜0.01
	B	29（74.3）	10（25.7）	2（3.3）	

Table Ⅷより、植物、静的なものの領域でそれぞれ１％レベルと１～２％レベルで有意差がみられた。植物では、生きていると答えたものの割合は都市の６２.１％に比べ、僻地は８４.６％と僻地の方が高い。また静的なものでは都市の４６.９％に比べ、僻地は７４.３％となっている。動くもの、自然現象、自分で動くものでは、都市と僻地で有意差はみられないが、僻地は自然現象の７６.９％が最高で、自分で動くもの７１.４％が最底といずれも都市と比較して高い割合を示す。また生命を与える程度を高い順からいうと、都市は自然現象、動くもの、自分で動くもの、静的なものとなり、僻地は自然現象、静的なもの、動くもの、自分で動くものの順になっている。

Table Ⅷより、自然現象、自分で動くものに有意差がみられる。自然現象に生命を与える点では、Aグループが高い反面、「生きていない」とする割合が、Bグループに高

Table Ⅷ.　（小学３年）　　（　）内は％

領　域		生きている	生きていない	わからない	P
動　物	A	69（100）			
	B	112（98.2）	1（1）	1（1）	
植　物	A	51（73.9）	13（18.8）	4（6.1）	
	B	73（66.4）	30（27.3）	7（6.3）	
動くもの	A	33（47.8）	35（50.7）	1（1.4）	
	B	51（45.9）	48（43.2）	12（10.1）	
自然現象	A	45（65.2）	17（24.6）	7（10.1）	0.02＜P＜0.01
	B	66（57.9）	21（18.4）	27（23.7）	
自分で動くもの	A	30（43.5）	37（53.5）	2（2.9）	0.02＜P＜0.01
	B	52（46.4）	42（37.5）	18（16.1）	
静的なもの	A	23（30.0）	40（61.3）	6（8.7）	
	B	48（42.1）	53（46.5）	13（11.4）	

く、しかも「わからない」とするものが、Bグループに高い。自分で動くものは生きていいる」と答えた割合は、Bグループの方が高く、また、「わからない」の割合も高い。領域別に、「生きている」と答えたものの割合の順位では、A、B両グループとも、自然現象が一位で、静的なものは四位となり、Aでは動くものが、Bでは自分で動くものが二位となっている。A、B両グループで、「生きていない」と答えたパーセントは、すべての領域において、Bグループの方が低い割合を示しているが、1年で見られた程の差が3年ではみられない。「わからない」のパーセントはBグループの方が高い。

Table Ⅸ.　（小学５年）　　（　）内は％

領　域		生きている	生きていない	わからない	P
動　物	A	75（100）			
	B	78（94）	2（2.4）	3（3.6）	
植　物	A	69（92）	6（8.0）		
	B	76（90）		7（8.0）	
動くもの	A	23（31.1）	45（60.8）	6（8.1）	
	B	21（26）	46（65）	7（8.3）	
自然現象	A	37（50）	14（18）	23（31）	
	B	41（50）	24（29.0）	17（20.7）	
自分で動くもの	A	28（37.8）	44（60）	2（5.4）	
	B	32（38.1）	47（55.9）	4（4.7）	
静的なもの	A	20（27.0）	40（54）	14（19.0）	
	B	25（29.7）	48（57.1）	11（13.1）	

Table Ⅸ より、各領域において、A．B両グループ間に有意差がみられなかった。

Table Ⅹ.　（中学1年）　　（　）内は%

領域		生きている	生きていない	わからない	P
動物	A	159（96.8）	4（2.6）		
	B	271（95.8）	4（1.4）		
植物	A	149（95.5）	2（1.3）	5（3.2）	
	B	264（93.3）	2（0.7）	17（6.0）	
動くもの	A	18（11.5）	125（80.2）	13（8.3）	0.02＜P＜0.01
	B	50（17.8）	195（69.4）	36（12.8）	
自然現象	A	42（25.8）	79（48.5）	35（21.5）	P＜0.01
	B	93（32.6）	96（33.7）	96（33.7）	
自分で動くもの	A	25（16.0）	118（75.6）	13（8.3）	P＜0.01
	B	73（26.0）	172（61.2）	36（12.8）	
静的なもの	A	19（12.2）	113（72.4）	24（15.4）	P＜0.01
	B	53（18.8）	182（64.8）	49（16.4）	

Table Ⅹ より、動くもの（1～2%レベル）、自然現象（1%レベル）、静的なもの（1%レベル）と無生物全部について、A．B両グループ間に有意差がみられた。即ち、Bグループは、無生物に対して、生命を与える傾向が、Aグループよりも大であることが明らかである。

Table Ⅺ.　（中学3年）　　（　）内は%

領域		生きている	生きていない	わからない	P
動物	A	152（99.3）		1（0.7）	
	B	151（98.6）		2（1.4）	
植物	A	140（91.5）	4（2.6）	9（5.9）	
	B	146（95.4）	2（1.4）	5（3.3）	
動くもの	A	24（15.9）	104（70.7）	21（13.9）	P＜0.01
	B	49（32.7）	87（58.0）	14（9.3）	
自然現象	A	48（31.1）	64（41.2）	39（25.8）	P＜0.01
	B	82（53.6）	35（22.9）	36（23.5）	
自分で動くもの	A	41（26.8）	95（62.1）	16（10.5）	P＜0.01
	B	54（35.3）	78（51.0）	21（13.7）	
静的なもの	A	24（15.7）	101（66.0）	28（18.3）	P＜0.01
	B	44（29.0）	78（51.3）	30（13.2）	

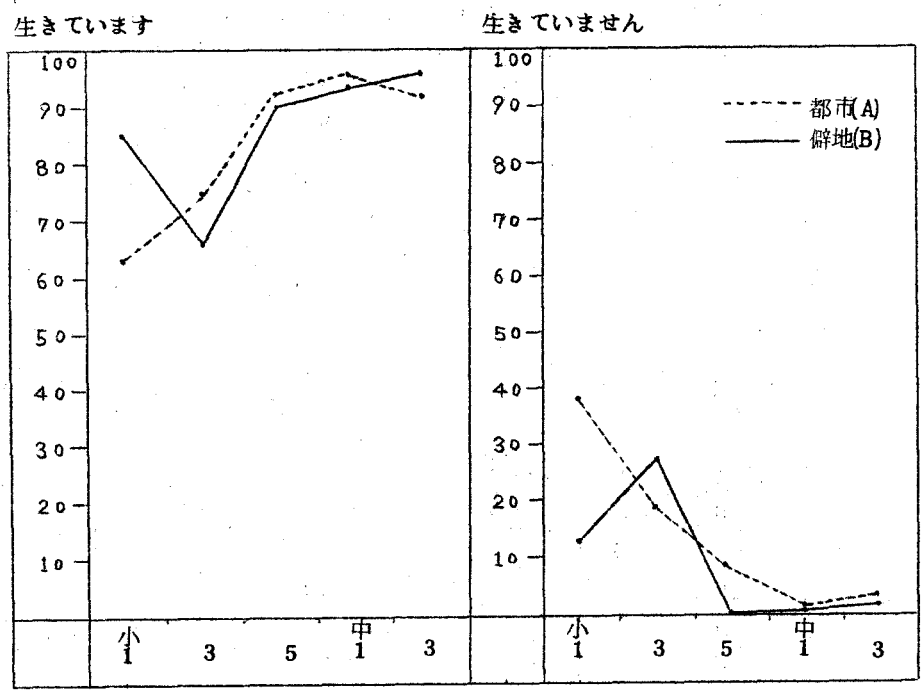
Table Ⅺ より、A．B両グループ間に無生物の領域（動くもの、自然現象、自分で動くもの、静的なもの）に、それぞれ1%レベルで有意差がみられる。各領域で、生きて

いると反応した割合は、Aグループに比べBグループはそれぞれ高いパーセントを示している。特にBグループの自然現象の割合は、53.6％で半数以上の生徒が生きていると反応している。また、A．B両グループは「生きている」という反応を各領域で中学1年よりも高く示している。各領域について、「生きている」と反応した割合を高い順に示すと、A．B両グループとも、自然現象、自分で動くもの、動くもの、静的なものとなっている。

(C) 各領域別反応の発達的変遷の検討

Fig Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ. は、年令による反応のかわり方を領域別にグラフにより見たものである。

Fig Ⅰ. 植　　物

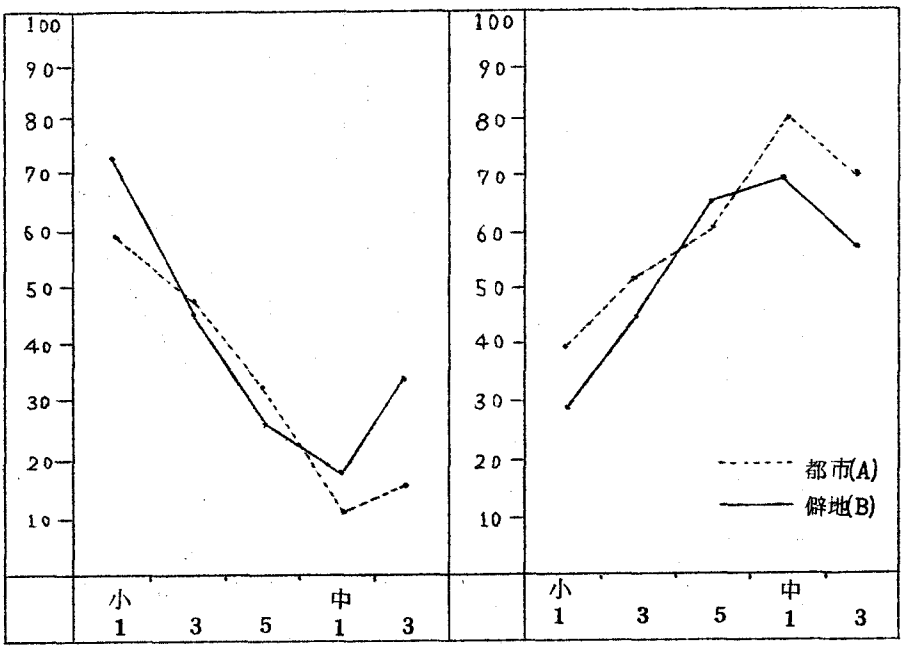


小学一年では、両グループの間に1～2％レベルで有意差がみられるが他ではみられない。植物が生きているという概念は年令の増加にともなって上昇している。

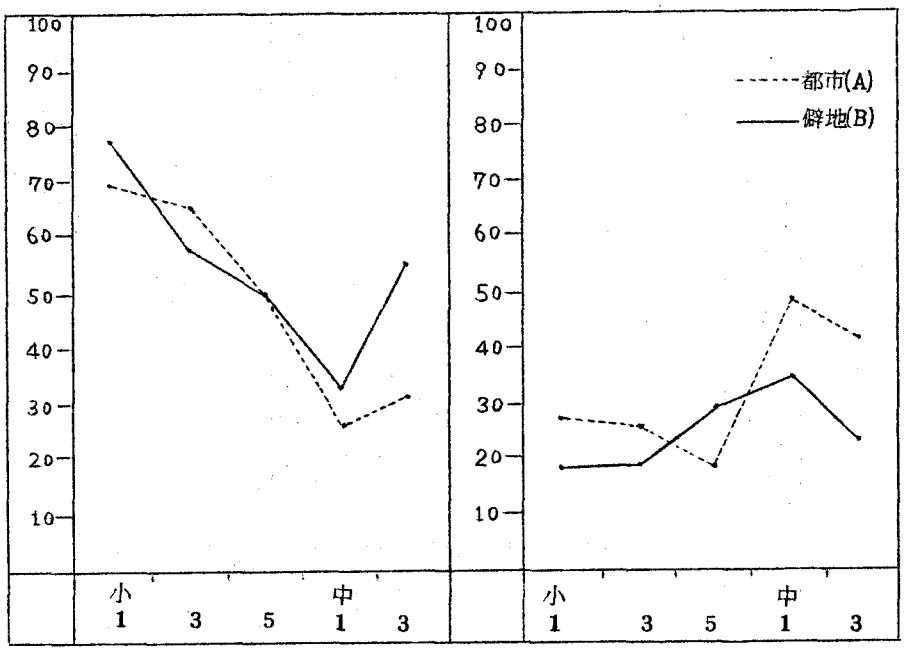
Fig Ⅱ. 動くもの

小学校1年では、A．B両グループとも動くものに生命を与える割合が高いが、年令の増加にともない少なくなっている。中学3年になるとA．B両グループで「生きている」という反応が増加している。

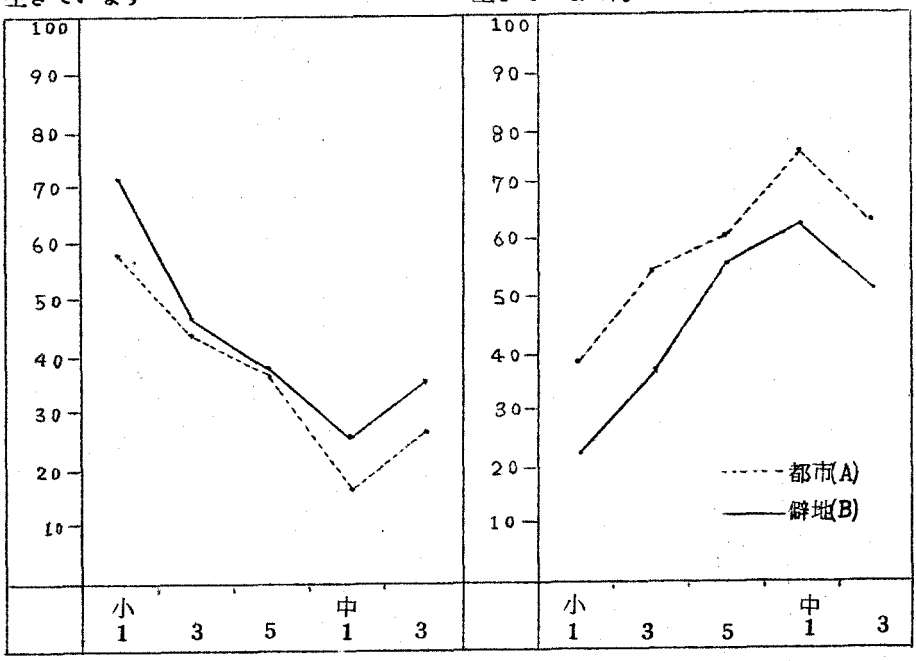
生きています　　生きていません



生きています　　生きていません



生きています　　生きていません



生きています　　生きていません

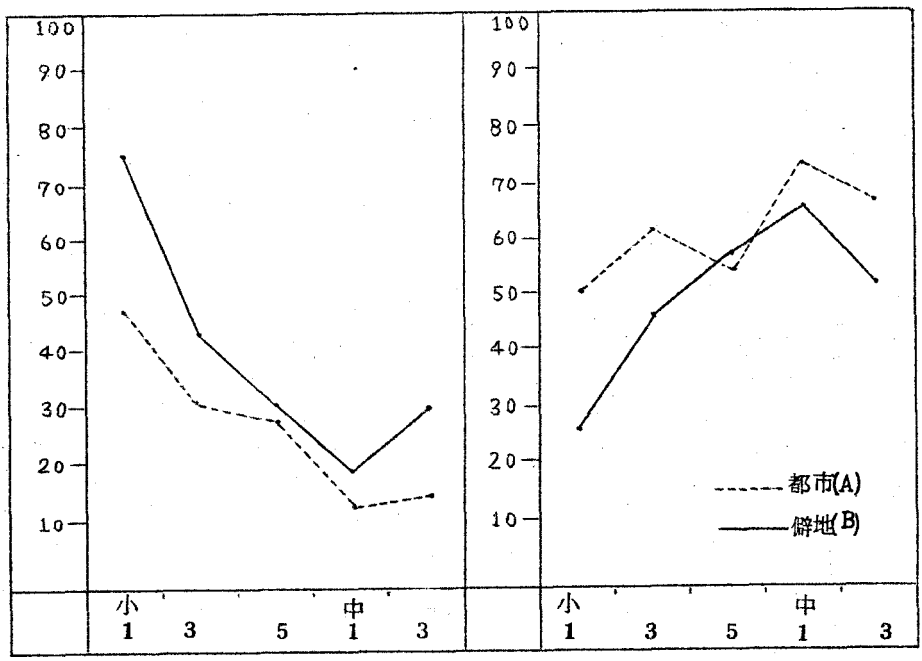


Fig Ⅲ. 自然現象

有意差は、小学3年、中学1年、中学3年にみられた。小学1年から中学1年まででは、生きていると反応した割合は生令の増加に伴って減少している。他の無生物の領域に比べ、各学年にて、それぞれ高い数を示し、特に中学3年では、中学1年よりも高いパーセンテージを示す。

Fig Ⅵ. 自分で動くもの

グループ間の有意差は小学3年、中学1年、中学3年にみられた。小学1年から中学1年までは生命を与える割合が年令とともに減少しているが、中学3年では中学1年に比べて増加している。小学3年では、「わかりません」のパーセンテージがAグループに比べBグループが高い。

Fig Ⅴ. 静的なもの

小学1年、中学1、3年で、それぞれ有意差がみられた。小学1年ではA．B両グループの間に大きな差がみられる。中学1年までは、両グループとも生命を与える傾向が、年令とともに減少しているが、中学3年ではわずかながらその傾向が中学1年よりも増加している。

(3) 反応理由の検討

A．B両グループ間に有意差がみられた各領域の中で、特異なものについて、その反応理由をあげると次の様になる。

Table Ⅻ. 木についての理由（小学1年）　（数字は実数）

生きています				生きていません			
都市		僻地		都市		僻地	
立っている	2	立っている	1	じっとしている	2	たおれる	1
伸びる	3	おじさんが木をたきつけにしない	1	歩かない	1	理由なし	1
根がある	1	風がふいたら動く	2	動かない	3		
水をのむ	1	植えてある	1	木は細いし、かける	1		
青い葉がある	2	かれていない	1	大きくなるのは水をやる	1		
理由なし	3	理由なし	5	理由なし	2		

Table XIII　月についての理由（小学３年）　（数字は実数）

生きています				生きていません				わかりません			
都市		僻地		都市		僻地		都市		僻地	
動かない	1	明るいから	2	月は動かない	2	うさぎがいないと思う	1	火がもえているかどうかわからない	1	月の国と違うから	1
光っている	1	東から西ににしずむ	1	酸素がない	1	あつい光を出す	1	理由なし	2	夜出るから	1
動いている	1	地球があるから	1	息をしない	1	理由なし	3			理由なし	12
毎日出る所が違う	1	動いている	5	手足がない	1						
明るいから	1	思うから	2	ものをいわない	1						
照らしている	1	人間が生きているから月も生きている	1	理由なし	3						
うさぎがいる	1	うさぎがいる	1								
理由なし	1	空に見える	1								
		理由なし	5								

Table XIV　月についての理由（中学１年）　（数字は実数）

生きています				生きていません				わかりません			
都市		僻地		都市		僻地		都市		僻地	
動いている	4	光っている	16	動、植物でない	2	太陽の力をかりている	1	生きているかいないかわからない	1	生きているかいないかわからない	1
光っている	4	活動している	1	何も住んでいない	2	空気、谷、川がない	3	生きていない	1	はっきりしない	1
ふん火口が出来ている	1	でこぼこがある	1	同じ所を回っている	1	生物ではない	4	観測していない	1	行ったことがない	1
火山がなる	1	動くから	5	自然になったもの	1	地球全体に暗くなる	1	動くかどうかわからない	1	光っている	2
太陽と地球の間にあり地球に照らされている	1	太陽のまわりを回る	2	物を食べたり飲んだりしない	1	月がついてくるように見えるだけ	1	わからない	1	夜見えるだけ	1
炎が動いている	1	かがやいている	1	光っている	2	自分で光を出していない	3	理由なし	7	月に行っていないのでわからない	1
地球をまわる	1	酸素がある	1	月は同じ所にいる	1	動物、植物がいない	4			生物がいるかいないかわからない	1
まるくなったりかけたりする	2	夜出て昼なくなる	1	どこにもいかない	1	息をしていない	1			月の事をよく勉強していない	1
星の明りが見える	1	地球がまわっている	1	宇宙にある	1	月は土のかたまり	1			夜照らす	1
理由なし	1	太陽がかけてできたもの	1	自分で光を出していない	1	水がない	1			理由なし	19
		理由なし	3	空気も水もない	1	月は完全にひえきっていない	1				
				岩石のかたまり	1	月にいっていないが生きていない	1				

				理由なし	3	宇宙をまわっているだけ	1				
						食べ物がない	1				
						月は凍っている	1				
						人間がいない	1				
						地球と似ている	1				
						思った	1				
						動いていない	1				
						好きな所に行けない	1				
						理由なし	3				

Table XV　月についての理由（中学３年）　　（数字は実数）

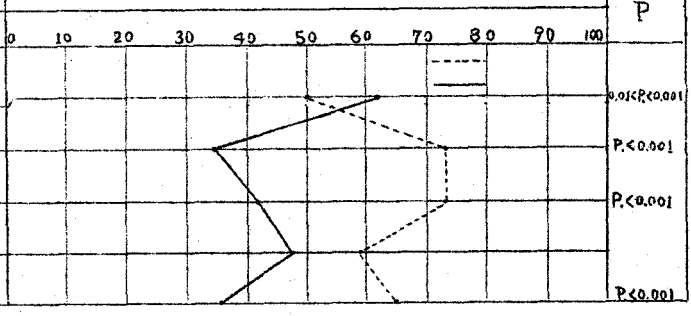
生きています				生きていません				わかりません			
都市		僻地		都市		僻地		都市		僻地	
動かない	1	明るいから	2	動かない	2	うさぎがいないと思う	1	火がもえているかどうかわからない	1	月の国と違うから	1
光っている	1	東から西にしずむ	1	酸素がない	1	あつい光を出す	1	理由なし	2	夜出るから	1
動いている	3	地球があるから	1	息をしない	1	理由なし	3			理由なし	1 2
毎日出る所が違う	1	動いている	5	手足がない	1						
明るいから	1	思うから	2	ものをいわない	1						
照らしている	1	人間が生きているから月も生きている	1	理由なし	3						
うさぎがいる	1	うさぎがいる	1								
理由なし	2	空に見える	1								
		理由なし	5								

(4)　家庭環境についての検討（小３、５年）

Fig V、VIは、A、B両グループの小学３年５年の児童の家庭の一般状態、子供のための施設、文化的状態、家庭の一般的雰囲気についての得点の平均を表わし、得点からパーセンタイルランクを作成し、それに従ってプロフィールを記入したものである。

Fig V.　小学３年の児童の家庭環境について

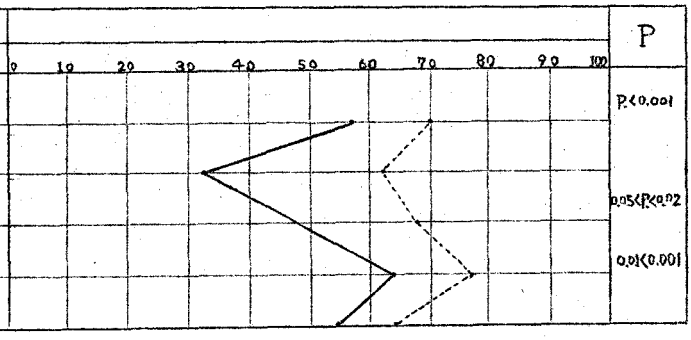
	得点の平均		P
	都市	僻地	
A・家庭の一般状態	52.2	56.3	0.01<P<0.001
子供の施設	41.2	32.8	P<0.001
C・文化的状態	33.9	26.3	P<0.001
D・家庭の一般的雰囲気	34.7	33.1	
E・両親の教育的関心	5433	47.5	P<0.001



FigV より、A．B両グループ間に、家庭の一般状態、子供の施設、文化的状態、両親の教育的関心に有意差が見られた。Bグループは家庭の一般状態に、Aグループは、子供の施設、文化的状態、両親の教育的関心にそれぞれ優位を示している。

Fig VI　小学５年の児童の家庭環境について

	得点の平均		P
	都市	僻地	
A・家庭の一般状態	59.2	55.6	P<0.001
B・子供の施設	38.5	3214	
C・文化的状態	30.1	26.6	0.05<P<0.02
D・家庭の一般的雰囲気	3778	33.8	0.01<0.001
E・両親の教育的関心	53.9	51.1	



FigVI より、A．B両グループ間に、家庭の一般状態、文化的状態、家庭の一般的雰囲気にそれぞれ有意差が認められ、Aグループの方が優位を示している。

六、　考察およびまとめ

1.　知能についての検討

TableIより、都市の方が僻地に比べて全般的に知能が高いと考えられる。

2.　アニミズムの検討

小学１年では、都市と僻地の間に地域差、即ち無生物の各領域に、僻地が都市に比べて高いアニミズム的傾向を示していると考えられる。僻地の小学１年の児童は植物を生きていると反応したものが多いが、これは生物学的に植物を生きていると反応したのではなくアニミズム的に反応しているものと考えられる。（TableXIIより）。以上の如く、小学１年では各領域に、僻地が都市よりも高いアニミズム的傾向を示していると考えられる。僻地の生活

環境の貧しさ、風俗、習慣、伝統が僻地児童の思考形成に大きな影響を及ぼし、これが都市との差を生ぜしめた原因であろう。

小学3年、5年になると都市と僻地のアニミズム的傾向がほとんど同じもの（Fig.Ⅱ.Ⅲ）、都市に接近しようとするもの（Fig.Ⅳ.Ⅴ）、に区別されるが全般的には都市と僻地の間に大差はないと考えられる。学年が進むにつれて生活環境が拡大され、友人関係、マスコミの影響、児童の学習活動等がほとんど同じになり、これが都市と僻地の差を生ぜしめない原因と思われる。

中学1年では都市と僻地の各領域に差が認められ、僻地の方が高いアニミズム的傾向をどの領域にも示している。直感的思考を脱して、論理的に物事を考えようとしはじめる時期であり、知識の不足が僻地の高いアニミズム的傾向を示したものであろう。また、小学3年、5年で都市と僻地のアニミズム的傾向が接近するように考えられたが、中学1年では、再び地域差が顕著に表われ、思考形成に大きな影響を与え、都市と僻地の差を生ぜしめたものと思われる。

小学1年から中学1年までは、都市の僻地も無生物に生命を与える割合が減少し続けているけれども、中学3年になると中学1年よりも、都市、僻地ともに高いアニミズム的傾向を示し、しかも僻地の方が都市に比べて高いアニミズム的傾向を示している。その理由の第一は、必要な知識の不足であり、第二に青年前期の心理的特性である。青年前期になると、生活空間が急激に拡大し分化する結果として、自分が今まで信条としてきた原理は次々に不充分さを示すため、原理の再吟味と再建との必要が常に痛感される。そして生命に対する新たな疑問が、中学1年よりも3年に高いアニミズム的傾向となって現われてくるものと思われる。

3. 家庭環境について

家庭環境では、全般的にみれば、都市の方が僻地に比べて優位を示している。僻地の近代化は、都市の水準に達するまでには、まだまだ長い期間が必要であろう。そして、都市に比べてこの環境の劣性が、僻地におけるアニミズム的思考の形成と崩壊過程に、殊に幼児期、児童期初期の段階で影響を与えるに違いない。

〔附記〕　我々は、この研究調査にあたり都市、僻地の3グループをつくることによって、"近代化とアニミズム的思考"の関係を明らかにしようと計画したが、　第一に経済的理由から、また被験者数の不足から、この度の綜合学術研究の課題にそった問題の究明が充分にできなかった。多くの時間と労力を費しながら、当初の意図にそった充分な調査ができなかったことを心から遺憾に思う次第である。なお、本調査実施にあたり、奈良学芸大学心理学研究室の諸先生、対象校の諸先生に大変おせわになったことを心から感謝しています。

十津川村教育史

文科・社会科

はじめに
概観
一。義務教育の成立
1. 学校の起り
2. 義務教育の普及
(1) 小学校
(2) 高等小学校
(3) 学事問題
二。戦後教育の発達
1. 民主教育発達の課題
2. 学校設置問題
3. 民主教育の育成
(1) 高等学校
(2) 社会教育事業
(3) 小学校
(4) 産業経済
4. 結語

はじめに

戦後我が国の民主化は、まず教育の面に現われた。しかし16年たった今、その歴史を振り返ってみる時、我々は、我々の教育が、真に民主化の道を歩み、その道を進展しつつあるかに深い疑念を抱くのである。むしろ我々の教育は、徐々に戦前の国家理念貫徹のために利用された道具としての教育と同様の方向をたどりつつあるのではないかと考えるのである。

また、我々の目は、現在深刻な問題になりつつある学校差の激化と、学令児童と社会の期待との葛藤が生みだす社会問題に向けなければならない。ここに改めて教育の本質と目標を再検討しなければならない身近な問題を見いだすのである。しかしこれらの問題は、今は我々の直接の課題からはずれるものであるが、常に、共に内在する問題として考えねばならないであろう。

ここに我々が調査した十津川村教育80年の歴史は、大きくは戦前と戦後に区分されるのであるが、それは決して切断されたものではなく、常に80年のどこを捕えても共通の悩みを持

ち、一つ十津川村のみでは解決できない問題を含んでいるのである。たゞ残念なことは、十津川村に関する他の分野の研究が確立して居ないため、客観的な判断が下されなかったことは、我々の調査研究が単に報告書の形を取らざるを得ないのであるが、なお我々は、現在教育史に関する多くの出版物が、多分に理論に走るきらいがあるのに対し、それを非難するわけではないが、今一度これら理論に対し、実証的研究の必要性を痛感するのである。

ここに取り扱つかった資料は、全て現在十津川村役場に保存されているものであるが、十分の準備も、整理もしないまゝ活字になることを遺憾に思う。たゞこれを機に、今後我が国教育の発展のために、誤った指針を与えないためにも、過去の教育発達の歴史を厳密に分析して行きたいのである。

概　　観

十津川郷の文化は、玉置神社を中心に古くから芽ばえて居たが、元来十津川郷の歴史については、諸々の説があって未だ確認出来ない。玉置神社の起源についても延喜式及び六国史には見られないが、大和志によると、

> 玉置山．有正殿若宮白山宮稲荷祠本地仏刹神楽殿巨鐘一口。　日応保三年　未三年未三月初三日鋳。

とあり、少なくとも平安後期には存在していたのである。また古記録（十津川村宝蔵文書）によると、

> 白鳳二年天武天皇の軍勢に加わり粟津が原に戦い功あり、三光の御旗を賜わる。

とあるが、ともかく早くから皇室とも関係してその加護のもとに発展したようである。

紀伊風土記には１７世紀、

> 大阪御陣の時十津川の者一統玉置大膳直虎に従ひて戦功あり東照神君是を褒して十津川一統の者に優復を賜ふ。十津川五十九箇村皆租税なし農民皆二字帯刀を免されるこれなり。

とある。ここに言う十津川５９箇村とは、明治２年十津川郷が奈良県下に置かれた時に、十津川郷６０箇村に決められ、明治２２年町村制が実施されると共に従来の村は大字に改称され、翌２３年７区５５大字に区画され現在に至っているものである。

しかし、十津川村は地形的に極めて険　で、面積において、奈良県の約５分の１に相当する６７０平方m．東西３３.４Km．南北３２.８Kmと全国でも最も大きな村の一つであるが、海抜、1.０００m級の山々と、深いＶ字型の渓谷を成す山林は全村の９６％に及び、残り数％の平地にしても本流十津川を中心に無数の支流に沿った川辺に、極く狭く点々とあるのみで、まさに

広漠な土地柄なのである。だから村民は必然的に豊かな経済生活を営む条件にめぐまれずこのことはまた十津川村の人々が、ほゞ変化していないことからも理解されるのであるが、そのためにも免租されて居たのであって、必ずしも古来の由緒あることのみが、免租地であらしめた十分な理由ではなかろう。

しかし古来中央と関係を持って居たことは、早くから文化に接する機会にめぐまれていたわけで、近代に至るまで文化的意識に於ては、僻地の概念をそのまゝ適用できる程低いものでは決してなかった。「歴史的にはこの地方が僻　地と格づけられるのは、江戸時代になってからのことであり、むしろ近代に入ってからの事である。換言すれば、他の地方が発展するのに、地理的条件がいっそう　となり、十津川地方の発展が停滞したからに他ならない。」

（「十津川郷の成立」永島福太郎）

一．義務教育の成立

1. 学校の起り

十津川郷の教育事業が、具体的に現われて来るのは、江戸時代も後期のことである。安政元年（１８５４）丹波亀山の藩士長沢俊平が、十津川郷に来て、経義を講じ、また、同５年郷民は梅田雲浜と互いに交遊するに及び、ここに教育への関心は徐々に高まった。

大字山崎．野尻家に伝わる年代記によると十津川村は、元治元年（１８６４）

> 四月二十日京都より王命によって中沼先生並加藤謙次郎の両人罷下り折立村松雲寺にて文武館を開き翌丑の正月迄松雲寺にて相勤有之候処正月より下之宮へ文武館を相建引移りに相成候。

とあるように、朝廷の儒宮中沼了三を得て、文武両道の教育にのり出すに至ったのである。以来文武館の教官は、郷内の文武の指導・講演をしてまわった。明治６年には、大字川津に尚志館が設置され、初めて英語の教育がなされ（これはまもなく中絶した。）、また、同７年には、大字平谷に誠之館が設けられ、三村・四村・東村・西川地区の生徒を収容して教育が行なわれた。（明治４年吉野全部が第二大区と称し、十津川村は六小区．中野村寒野川組．上下村組．三村組．東村組．四村組．西川組に編成された。なお同年１１月大和各県を廃し改めて、奈良県を設置し大和一円を管轄されることになった。――県令四条――）こうして十津川村は、比較的早くから教育事業に着手したのであるが、これは、古来勤皇忠君に明暮れした十津川郷民に取って、江戸中期以後の国民文化の著しい発展は羨望の的であり、めぐまれない郷民に取っては、憧憬の至りであった。また郷中の有識者にあっては、あせりとなって表われて来た結果が早くから教育事業を手掛けることになったのだろう。勿論、郷民に対して中央から示唆が与え

られたことは十分うかゞえるところであるが。

かくして十津川郷の学校は出発したのであった。

2. 義務教育の普及

(1) 小　学　校

我が国の近代教育制度は、いうまでもなく、いわゆる明治5年（1872）頒布の「学制」に始まる。学制の趣旨は、四民平等の原則に立って、固く一般人民に学問を広め、身を修め、才芸を長ぜしめ、近代国家の一員たることを望んだのであった。この学制の頒布にあたっては、政府から「学事奨励に関する被仰出書」なるものが布告されたが、これの意味する所は、封建的身分を廃止し、実利実用を重んずる極めて進歩的なものであったと言える。具体的な方策としては、フランスの制度を模したものであったが、全国を8大学区に分け、各々に32中学区を、また、中学区をさらに210小学区に分け、人口600に対して小学校一つ設けることになったのである。このようにして、政府の中央集権的意図にもとずく教育の基礎は、確立した。明治19年の改正された小学校令第一条には、「小学校ハ児童身体ノ発達ニ留意シテ道徳教育及ビ国民教育ノ基礎並ビニ其生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」とあるように小学校教育は、国家発展の主旨に沿って、その目的を明確にしたのである。

さて十津川村における事情はと言うと、明治30年頃までの資料は全然ないが、各校の創立年月は次の通りである。内原尋常小学校・明治6年8月創立。小森・小原・武蔵・大野・高滝平谷・樫原・那知合尋常小学校・明治7年創立。旭・谷瀬・上野地・五百瀬・川津・風屋・滝川・山崎・池穴・小井・湯之原・上葛川・神下・竹筒・玉置川・折立・桑畑・七色・重里・今西・西川・小山手・小坪瀬・出谷・上湯川尋常小学校・明治8年創立。沼田原尋常小学校・明治9年創立。込之上尋常小学校・明治17年創立となっており、人口約12,000の村に36の小学校が創立されている。これら多数の学校が設立されたのは、たゞ地理的環境による理由のみと考えられるが、それでもなお義務教育の徹底を計るためには多くの困難をかかえていたことがうかゞえる。表1.2は、ともに就学状況を知らせるものであるが、これらからわかることは、女子の就学率が男子に比して、また、絶対的にみてもはなはだ悪いことである。中でも貧窮による不就学が圧倒的に多いことは十津川民の経済生活がいかに低水準に置かれていたかということが言えるであろう。又その他に属する者の多くは、親の無理解と子供の学校嫌いによるものと思われる。たゞ、子供の学校嫌いによる場合、それは、通学の困難が大きく原因しているものと思われる。後に具体的に示すが、山と谷、そして道とはいえ年少児童にはあまりに険しい山道。数キロもある通学道路、これらは学習意欲すら減退させるものである。

疾病による不就学者の中には多くは唖．盲．白痴等の身体障害による原因が強く推測される。

しかしこれら二つの表が示す通り年々徐々に就学率は向上する傾向を示していることは、なお初期においては教育意識の不発展の情況にあったことを示すのである。合わせて、常に学事奨励が行なわれていたことも。

尋常小学校就学生徒数年令別表

年度	明治25年			明治26年			明治27年		
年令＼性別	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
6 才	106	75	181	92	52	144	93	63	156
7 才	105	44	149	95	67	162	101	65	166
8 才	116	53	169	127	75	202	92	65	157
9 才	109	45	154	124	55	179	122	59	181
10 才	113	30	143	111	46	157	124	53	177
11 才	84	33	117	108	31	139	100	39	139
12 才	85	22	107	92	26	118	113	29	142
13 才	82	14	96	62	19	81	75	21	96
14 才	23	4	27	2		2	1	2	3
合計	823	320	1,143	813	371	1,184	821	396	1,217

尋常小学校学令児童不就学数年令別表

年度	明治25年			明治26年			明治27年		
年令＼性別	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
6 才	9	38	47	18	46	64	14	48	62
7 才	23	76	99	10	37	47	7	41	48
8 才	12	45	57	8	49	57	10	44	54
9 才	11	65	76	5	50	55	7	51	58
10 才	13	90	103	9	67	76	6	43	49
11 才	8	81	89	14	86	100	8	74	82
12 才	10	76	86	8	89	97	16	171	187
13 才	21	73	94	16	85	101	10	75	85
14 才									
合計	107	544	651	88	509	597	78	496	574

〔表 1〕

				明治28年			明治29年			明治30年			明治31年			明治32年		
				男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
就学義務ノ既ニ生ジタル者	就学	現在就学児童		610	461		605	445		599	334		592	520		599	564	
		卒業者	本年卒業者	90	39		101	58		146	53		109	54		106	54	
			前年以前卒業者	393	88		212	62		54	20		192	84		193	103	
			計	483	127		313	120		200	79		301	138		299	160	
		合計		1093	588		918	565		799	407		893	658		893	747	
	不就学	現在不就学	本年半途退学者	貧窮	7	9		5	15		0	0		3	15		0	0	
				疾病	4	4		0	0		1	3		2	7		0	0	
				其他	19	29		20	55		32	13		20	32		12	22	
			前年以前半途退学者	貧窮	4	12		7	5		1	4		4	14		1	52	
				疾病	3	1		2	1		4	1		0	1		0	2	
				其他	32	31		49	66		28	27		0	43		0	0	
			計		69	86		83	142		66	48		29	112		13	76	
		不就学	貧窮		18	127		23	134		51	324		12	56		4	38	
			疾病		4	41		7	18		8	81		3	11		1	7	
			其他		18	51		24	84		23	88		7	17		6	18	
			計		40	219		54	236		82	493		22	84		11	63	
		合計			109	305		137	378		148	541		51	196		24	139	
	総計				1202	893		1055	943		947	948		944	854		917	886	
就学義務ノ未ダ生ゼザル者					26	14		76	84		17	6		119	144		95	73	
総合計					1228	907		1131	1027		964	954		1063	998		1012	959	
歩合	就学義務ノ既ニ生ジタル男女就学率				80.23%			74.22%			63.65%			86.00%			90.96%	
	同上男ノミノ就学率				90.93%			87.01%			86.48%			95.00%			97.38%	
	同上女ノミノ就学率				60.84%			59.91%			42.93%			75.00%			84.31%	

〔表 2〕

明治３１年の部内学事の状況を示すと次の通りである。

甲　第二十一号

明治三十一年学事年報別紙

調査及進達候也

明治三十二年一月二十四日

十　津　川　村　役　場

吉野郡役所御中

一．部内学事の状況

施設上前年ト敢テ異ナルコトナシ。学事ノ現状ニアリテハ年ト共ニ民心ノ教育必要ヲ感ゼルニ至レリ。

一．学令児童

就学奨励ヲ施行セル二部内各地ニ委員ヲ置キテ専ラ其衡ニ当ラシメリ。就学児童ノ女七十五人ヲ増セルハ女子教育ノ必要ヲ感ゼルニ由レリ。

一．小　学　校

学校数及ビ住地ニ於ケル変更ナシ。其設備ニ至ッテハ供給事ニ従ヘリ。修業年限学級編成ニ関シテハ前年度ニ於テ縷述ノ如ク補習科ノ教授ヲ小学科正科教授時間内ニ編入シテ同時ニ授業シ得ルノ至便ナルコト旧年一月二十二日其為ノ允許ヲ得爾来運行シツツアリ。歳月ノ未ダ浅キヲ以テ其結果ニ至リテハ茲ニ証憑スル程ノモノナキガ如シト。シカレドモ該科ノ本科ト通シテ教授シ得ルコトハ両科相待ッテ其経過好果ヲ見ルニ至ラント密ニ希望ヲ懐キツツアリ、亦学校衛生ハ個人的ニ留意シツツアリ。教員ノ需要毎歳欠員多クシテ全村部内ニ配置セル未ダ半バナリトス。――以下略――

一．授業状況

五時間ヲ以テ普通ノ学科ヲ教授シ一時三十分ヲ以テ武術ヲ錬磨ス、尚毎週一時間口生ヲ一場ニ集メ修身上ノ講話ヲナス。

一．学事巡視及奨励

村長巡視数回学務委員ノ巡視数回ナリ。教員生徒ノ奨励ニ致リテハ教員ニハ若干当座金ヲ以テシ生徒ニ対シテハ物品ヲ口時シ共ニ奨励ノ途ヲ開ケリ。

この報告書からも十津川村各小学校は、なお基礎段階から発展しようとしているところにあることがわかるのである。しかし教員の欠員・不足ははなはだしく、表３でもわかるようにその数は徐々によくなっているとはいえ、一校に一人ないし二人いればなんとか授業が行なえる

尋常小学校									
年度	学校数	修業年限	本科教員			専科教員	生徒数		年間平均授業日数
			正教員	准教員	代用教員		男	女	
明治32年(1899)	36校	4年	20人	10人 雇11人			699人	564人	238.2日
明治35年(1902)	36校	4年	21人	8人	11人		644人	579人	269.4日
明治38年(1905)	35校	4年	21人	11人	6人		575人	593人	237.4日
明治44年(1908)	32校	4年 5校 6年 27校	24人	6人	7人	20人	834人	689人	238.5日
明治44年(1911)	31校	4年 3校 6年 28校	32人	6人	2人	20人	935人	867人	255.6日

〔表 3〕

と言う、現在から考えると、およそ想像のつかない状態であった。明治32年の学事報告には「教員ノ需要ハ常ニ教員デ訴ヘツツアリ・・・云々」とあるが、十津川村へ就職を希望する教員が実際にはなかったようである。

ともあれ、多くの困難を含みつつもその外形はしだいに整えられて行き、学校教育の行ない得る最少限度の体裁は保持しつつ、十津川村小学校の基礎は確立したのである。

(2) 高等小学校

明治19年の小学校令は、小学校を尋常・高等の2段階に分け、修業年限は、尋常・高等各各3カ年又は4カ年と定め、従来明確にされていなかったものがここに規定された。しかし詳細事項に至っては、多くが、府知事や県会に委任された。当時奈良県は、大阪府に属し、大阪府では、郡に一戸長管轄内の町村を一学区として尋常小学校一校・一学区ないし数学区を連合して高等小学校を設ける方針を取った。

十津川村では、明治32年大字平谷に平谷高等小学校が創立され、34年に大字上野地に中野村区高等小学校、神下に葛川高等小学校・折立に折立高等小学校が創立された。

表4は、高等小学校の規模を示すものであるが表でもわかるように教員の不足ははなはだしいものだったと思われる。

明治40年重ねて小学校令は改正され、尋常小学校は6年・高等小学校2年必要あれば3年も認めることになったが、十津川村例規通牒明治40年6月25日公布のものによれば、

高等小学校									
年度	学校数	修業年数	本科教員			専科教員	生徒数		年間平均授業日数
			正教員	准教員	代用教員		男	女	
明治34年 (1901)	2校	4年	2人				58人		191.5日
明治35年 (1902)	4校	4年	4人		2人		126人	42人	238.2日
明治38年 (1905)	4校	4年	3人	1人	1人	1人	164人	53人	257.2日
明治40年 (1907)	4校	4年	5人		1人	2人	134人	66人	248.2日
明治42年 (1909)	4校	2年	3人	1人			53人	26人	240.2日
明治44年 (1911)	4校	2年	3人	1人		1人	60人	30人	245.5日

〔表 4〕

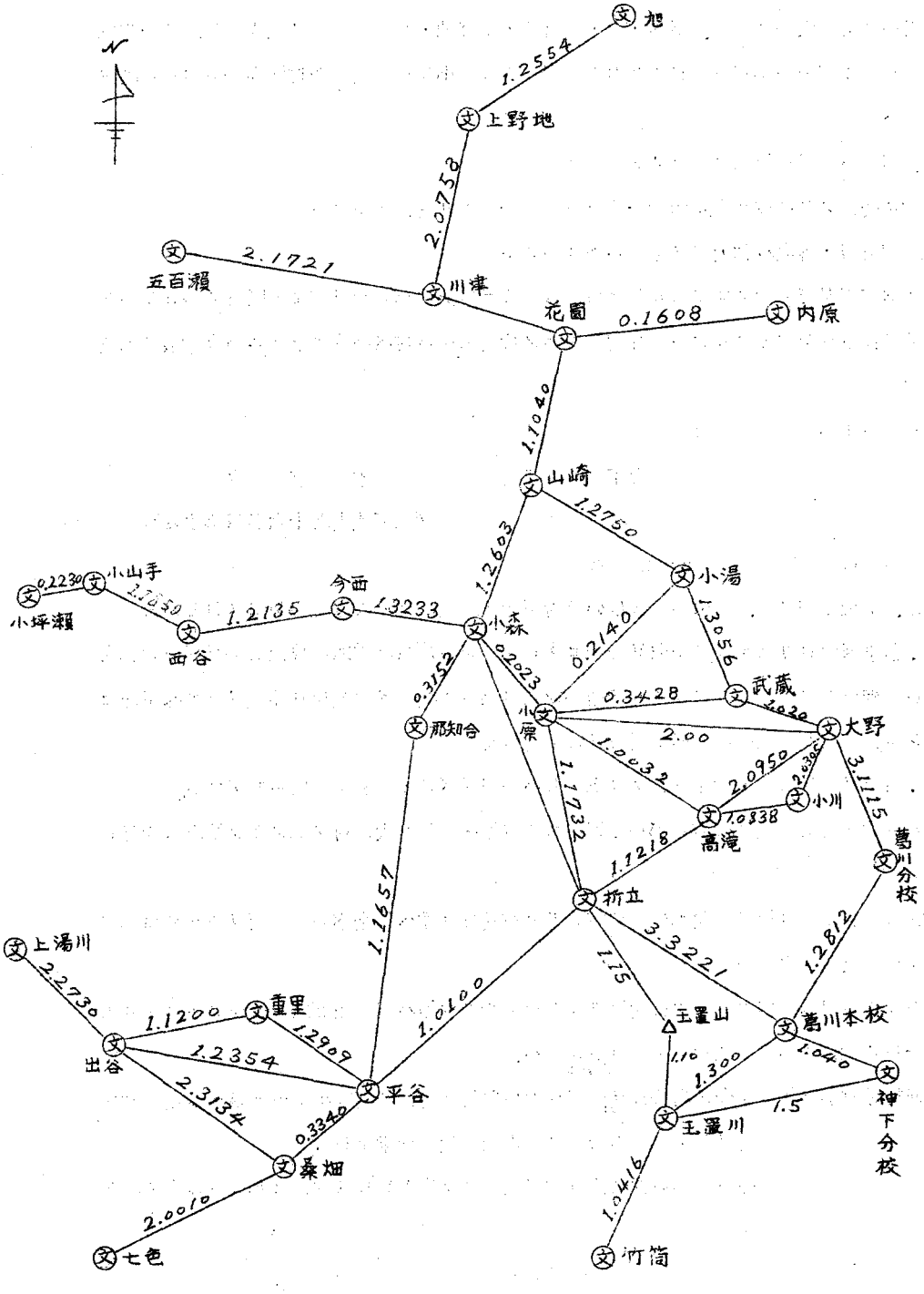
小学校令ノ改正ニ依リ来ル41年4月ヨリ旧令ノ高等小学校第一学年ハ全然廃止ニ帰シ事実上尋常小学校第五学年児童ノ収容ヲ要シ従テ之ニ対スル設備ヲ忽ニスルニ於テハ実際ノ支障ヲ来スベク候間此際設備ヲ完成シ来学年第五学年児童ノ就学ヲ奨励シ改正実施ノ為就学ノ成績ニ頓挫ヲ来サザルヤウ豫テ御注意相成度其筋ヨリ示達ノ次第モ有之此段及通牒候也・・・・・云々とあるように取りはからわれたものと思われる。

(3) 学事問題

すでに見たように、十津川村の義務教育は、外見だけはすみやかに確立した。しかし次に示す明治44年の部内学事の状況には、

本村初等教育ノ現状ハ地域ノ険悪ト面積ノ広漠ニ依リ小学校数実ニ参拾有余職員亦五拾有余名ノ多キニ上リ本部内（吉野郡）他ニ其類ヲ観ザル所ナリ。為メニ管理ノ不行届トナリ教育者ハ新知識ノ欠乏トナリ施設経営ヲ要スベキ事業多クアリテ完全ニ行ハレズ義務教育年限延長ノ趣旨ハ素ヨリ内容ノ刷新ニアルコト論ヲ俟タザル所ニシテ然カモ之レガ監督指導鞭韃スベキ組織ナリ村ニ学務主任アリト雖モ事務ノ繁多ハ日々月々激増シ簿冊堆襄ニ埋レ畢竟諸簿ノ整理ニ汲々乎トシテ尚日モ足ラザルノ実況ニシテ未ダ之レハ改善ノ機運ニ際会セザルヲ遺憾ノ極トス。と内容の矛盾を切に訴えているのである。次頁は、学校間の里程であるが、これらの山間に存在する学校が、明治44年の小学校令により廃校又は統合される時には数々の事件を生み出した。次に示すものは、我々が得た史料のほんの一例であるが、それにしても十津川村の特殊性

十津川村国民学校所在地並ニ里程図



を如実に表わしている。

協　　定　　書

一．改正小学校令実施ノ為メ、長殿・旭・宇宮原・上野地・林及ビ高津ノ六大字ヲ以テ一学区ヲ組織シ来ル四十一年四月一日ヨリ中野村区尋常高等小学校ヲ現中野村区高等小学校ニ設置スルコト。

但、旭ニハ尋常科第四学年迄ノ分教場ヲ置クコト。

二．前項ニ関係ノ各学校ハ来ル四十一年三月三十一日限リ廃止スルコト。

但、沼田原・谷瀬ハ其大字ノ協定ニ委スルコト。

三．大字宇宮原児童通学ノ便ヲ計ル為メ鉄線渡設置ヲ村会ニ建議シ且毎学年区費ノ内ヨリ金四円宛造舟費トシテ補助スルコト。右関係大字ノ代表者中野村区高等小学校ニ集金凝議ノ末協定候也。

明治四十年九月二十九日

大字長殿　代表者　　岡　本　宇　平

（以下代表者十六名省略する）

十　津　川　村　長　　中　隆　一　郎　殿

しかし、上協定書には、区内から激しい反対が起り、次のような意見書が出されている。

第一．各学区内ヨリ区民ヨリ全権ヲ委任セラレタル委員戸数及学区費負担費額ヲ率トシ其人負ヲ御役場ヨリ指定シ各区ニ於テ選挙シ学区毎ニ本問題ヲ討議シ其要領ヲ役場へ報告セシム。議長ハ区長或ハ役場出張員ヲ以テ之ニ充ツ。

第二．村会ヲ臨時召集シ意見ヲ聞クコト。右ハ中野村区ノミニ限ラズ他ニモアラン。

若シ誤テ村会ヲ開カズ直ニ郡長．答申スルガ如キアラバ大淀村ノ二ノ舞ヲ演出スル恐レアリ。

右第一各学区ニ於テ異論ナク　。決定ナリセバ其写ヲ添ヘ村会議員へ書面ヲ以テ御議問アルモ差支ヘナカラン。

現今御役場へ答申カ上申カ惣代等ヨリ為シアルモ右等ハ或一派而区ノセシコトニテ区内一般ノ意見ニハ無□□拙者ノ意見トシテハ、

中野村尋常小学校　現今ノ高等校ヲ充実シ附補習科（将来ノ高等小学校ヲ設ケン為メ補習科ヲ代用ス）各分校ノ五六両年生ヲ就学セシム。

経費ハ中野村区内（沼田原長殿ヲ除ク）ヨリ支弁スルコト現今ノ如クス。

旭分校　区内四学年迄就学。現今ノ旭小学校ヲ起用。経費旭区

谷瀬分校　同上。現今ノ谷瀬校。経費ハ谷瀬宇宮原両区

上ノ地分校　同上。現今ノ上ノ地校。経費　高津・林・上ノ地ノ三区

沼田原及長殿ハ致方無ク大塔ヘ依嘱セシムルカ或ハ現今ノ通沼田原分校ヲ設ケントス。

(以下省略)

十一月二十四日

津　東　芳　吉　郎

中　村　長　殿

今西
中根　両　助　役　殿

ここに改正小学校令に伴う学区問題は、一時谷瀬区児童の集団欠席を引き起すまでに拡まった。このように、地理的条件と合わせて貧困により、十津川村教育の発展は限りない困難を示した。次に示す表5．6は、それぞれ当時の学校予算を示すものであるが、寄付金による収入の多いことは著しい特色と言わねばならない。基本財産より生ずる財産は大部分が学校自身の所有する森林より生ずるもので、学校林は年々奨励され、ふえる傾向にある。また、明治40年からは、高等小学校に授業料が課され、それによる収入がこれらに加算されるこうになった。

学事問題の解決は教育発展の条件になる。十津川村においては、小学校令改正毎に多くの問題を生じたが、明治44年以後は、概ね安定性を取りもどし、戦前にいたるまで、たんたんとした道を歩んだものと思われる。

公　学　費　表

			明治38年度	明治39年度	明治40年度	明治41年度	明治42年度	明治43年度	明治44年度	明治45年度	大正2年度
小学校	尋常	支出合計	7009円	7180円	7247.787円	11306407円	13106000円	13080824円	10511円	11670円	16485円
		収入合計	6611	7.357	7619272	11433831	3510000	13526812	2283	3360	17214
	尋常高等	支出合計	1048	1347	1420587	2809783	3445000	3442533	2283	3676	5394
		収入合計	1581	1368	1526662	2706361	958000	3020445	1215	1306	5494
	高等	支出合計	729	783	878922	0	0	0	0		
		収入合計	612	797		0		0			
総計		支出合計	8804	9522	9994896	14140192	16551000	16547357	14486	15723	22689
		収入合計	8804	9.522	9994896	14140192	4448000	16547357	3498	4666	22708
村費総金額					11976126	11032373	12499490	12499490	14454		

〔表 5〕

公立小学校収支表（明治43年）

名称	収入 授業料	収入 基本財産ヨリ生ズル収入	収入 寄附金	収入 其他学校ニ属スル雑収入	収入 合計	支出 経常費	支出 臨時費	支出 合計
	円	円	円	円	円	円	円	円
旭 尋常小学校	0	0	45437	351307	396744	386244	10500	396744
谷瀬 〃								
高津 〃								
五百瀬 〃								
川津 〃								
花園 〃	0	121810	70620	404510	596940	577460	19480	596940
内原 〃								
山崎 〃								
小湯 〃								
小森 〃								
小原 〃	0	0	57698	401965	459663	426103	33560	459663
武蔵 〃								
大野 〃								
高滝 〃								
竹筒 〃								
玉置川 〃	0	21000	40965	302042	364007	361007	3000	364007
樫原 〃								
那知合 〃								
桑畑 〃								
七色 〃								
重里 〃	0	0	78470	648641	727111	721111	6000	727111
今西 〃								
西中 〃								
小山手 〃								
小坪瀬 〃								
出谷 〃	0	0	1480322	1476372	2956694	379034	2577660	2956694
上湯川 〃								
上野地 尋常高等小学校	60400	0	45437	270775	376612	366112	10500	376612
葛川 〃								
折立 〃								
平谷 〃	52800	178107	106166	543005	880078	871078	9000	880078
合計 31	128400	1043594	3295519	12077844	16547357	13566977	2980380	16547357

〔表 6〕

二。 戦後教育の発達

1. 民主教育発達の課題

長きにわたった大戦は、みじめな敗北をもって終わった。占領下・空虚と激しいインフレーションに、国民にはともすれば文化さえ忘れがちな苦しい生活が後に残った。しかしこのような中にもいち早く新らしい民主教育は手がけられた。昭和２１年には末川博氏を十津川村に招いて講演会を開き、民主主義のあり方について教示を得検討したのであった。

戦後民主教育は、「教職員追放令」の公布をもってその性格を明らかにした。続いて、「教育基本法」「学校教育法」の公布、及び「六三三制」の実施、また翌昭和２３年「教育委員会法」の公布、「教育勅語等排除に関する決議」の衆議院可決等をもって戦後民主教育は急速に進展するのであるが、終戦直前戦況の悪化と国民経済の困窮は、十津川村内にも深刻な影響を与え、教員の減少をまねき学校の整理廃合を行なわざるを得なくなった。

学制改革準備委員会は昭和２２年町村教育協議会に切り換えられ、僻遠地十津川村にも教育は新精神にのっとり再出発した。当時の模様を「村政概況報告書」は次のように記している。

一。小学校及中学校六三三四制中所謂六三制は既に昨年度より実施せられ国民学校は小学校に改められ本村に於いては中学校六校を設立せられ熱誠なる教職員の努力によって教育の民主化がその歩みを続けつゝあるも当校は地理関係よりして校数は全国首位をしめている。之により現に教育者が如何に辛酸をなめつゝあるか推して知るべしである。教育の成果は教育者その人の努力によって得られるものであり能へるならば各中学校に専任校長を置き、活発なる民主教育の推進をはかるべきである。是第一条件である。第二条件は学校必要教材等の完備である。従来の教材にては、新教育の資となるものは皆無である。第三条件は建物設備である。現下の状勢よりしては建築物の新設は非常なる困難を予想されるべきであるが凡ゆる手段をとって早急に建築することが望ましい。

2. 学校設置問題

表７は、昭和２３年新学期に当って新設された中学校分校をも含めた十津川村内の全学校表であるが、特に新設された中学校においては内容の充実・不充実はさておき、広大な土地柄からして１１校のみでは果たして生徒が十分通学可能な条件を満たしていたであろうか。こゝで当然学校建設問題が起ってきた。

昭和２４年３月５日

四 村 区 区 長　殿

・・・（前　略）・・・区民各位よ、じっと胸に手を当てゝ各位の生計を熟考してみよ、

十津川村村立小・中学校表　　昭和２３年４月１日

小学校名	学級数	教員数		生徒数		
		男	女	男	女	合計
旭	2	1	1	16	16	32
上野地	6	3	4	96	97	193
五百瀬	2	2	0	27	22	49
川津	2	1	1	22	18	40
花園	3	2	1	51	62	113
内原	2	1	1	24	15	39
山崎	2	1	1	30	31	61
小湯	2	1	1	28	22	50
小原	3	2	1	54	39	93
武蔵	2	1	1	31	19	50
大野	2	2	1	27	17	44
高滝	1	1	1	16	14	30
葛川	3	3	1	38	37	75
玉置川	2	1	1	22	11	33
竹筒	2	1	1	27	24	51
折立	3	2	1	53	49	102
平谷	6	6	1	129	108	237
那知合	2	1	1	22	30	52
桑畑	2	1	1	21	20	41
七色	2	1	1	14	21	35
重里	3	2	1	50	54	104
今西	2	1	1	16	9	25
西中	2	1	1	25	24	49
小山手	2	1	1	23	22	45
小坪瀬	2	1	0	17	18	35
上湯川	2	1	1	24	21	45
出谷	3	1	1	47	44	91
合計	67	42	28	950	864	1,314

中学校名	学級数	教員数		生徒数		
		男	女	男	女	合計
第一中	3	4	1	42	43	85
五百瀬分	1	0	0	17	8	25
第二中	3	3	2	51	42	93
第三中	3	4	1	39	48	87
大野分	1	0	0	12	10	22
第四中	3	4	1	26	28	54
葛川分	1	0	0	16	17	33
第五中	4	6		66	66	132
第六中	3	4	1	56	61	117
出谷分	2	2	1	21	30	51
上湯川分	1	1	0	4	11	15
合計	25	22	7	350	364	714

〔表 7〕

新築などとは及びもつかないことである。或る者は此れが出来なければ新設せねばならんと言うが此れが出来ないと言う理由を吾々は絶対に発見出来ないのであります。もし有りとすればその者は現在の世流に逆行する古い十津川式の抜けきらないゆえんである。今一度じっと胸に手を当てゝ各位の生計を熟考してみよと申し上げたい。果して新築などということが言えますか。吾々は新築には絶対反対であるが為に新築しなければならないとすれば出来るだけ吾々の負担を軽減する法をとるべきであってその為には折立を含む組合立で行く可きであります。此の方法もとり得ずに四村区丈での設立すると言う方針を吾々は絶対反対するものであります。何故ならば、上述の通り新築の経費を負担しきれないのは勿論の事、わずか３０分で往復出来る所に中学校があるのに家計を失う様な経済的負担をして往復１時間半も要する通学をしなければならない義務は無いと思うの

である。従って吾々の子弟は残念ながら上述の理由により第四中学校に依って我々国民に課せられた義務教育を受けさせたいと考えるのであります。右の通りに付き各位の御了解を求めると共に、今後宜敷く御願い申し上げます。

以下３１名連署　　印

我々はこれに類するものを実に１４文書記録しているが、表７でも解るように、第一中学五百瀬分校・第三中学大野分校・第四中学葛川分校は、それぞれ専任教師を一人も持たず、かつそれらは、五百瀬小学校・大野小学校・葛川小学校にそれぞれ同居し、各々の小学校は６学年中学校は３学年を通じて２人ないし３人の教師をもって授業は開始されたのである。次に示す歎願書は、このような事情に鑑み出されたものである。

歎　願　書

一．十津川村立第一中学校五百瀬分校へ専任教官１名増員されたし。

理　由

十津川村立第一中学校五百瀬分校学区域は、十津川村の北部に位し戸数僅かに７０戸、生徒数７５名なるも、地域的の関係から分校を認められ設置されて居ります。．．．（中略）・・・然るに本年４月からは１名を減ぜられ３名の先生で小学校1.2.3年を１学級．4.5.6年を１学級．中学1.2.3年を１学級として授業せられております。先生が４名の時ですら不充分な教育より受けることが出来なかったものが、１名減ぜられましたので益々手が足らず・・・（中略）・・・全く形式的なもので、他校の教育に比較して率直に申し上げますと、６辺教室へ入れて６辺出し、それで６時間の授業したというような現状です。担任の先生が校務の為出張不在中の時などは、弁当を食いに学校に通う位なものです。・・・（中略）・・・せめて義務教育である中学の形式に近いだけの教育でも受けられる事の出来るよう特別の御詮議を賜り、一日も早く我々の希望の実現するよう父兄等、連署を以って歎願申し上げます。

以下４７名連署　　印

表８は、２３年度の中学校予算を表わしているが、これを見ても当時の貧弱な内容がうかゞえるのである。しかしこれら諸々の問題も徐々に我が国経済の復興と、国民生活の安定と共に同年第五中学校玉置川分校．第六中学校小坪瀬分校．第七中学校の創立を以って次第に解消の方向へ向った。なお、玉置川分校設置に関しては、次のような問題があった。

中学校予算表（昭２３年度）

中学校名	予算
第一中	13,166円
五百瀬分	5,863円
第二中	12,554円
第三中	12,257円
大野分	5,717円
第四中	10,624円
葛川分	6,259円
第五中	15,902円
玉置川分	
第六中	13,741円
小坪瀬分	
上湯川分	5.367円
出谷分	8,562円
第七中	
合計	110,012円

〔表８〕

文化号外

昭和２３年１２月３１日

十津川村長　鎌塚平馬　殿

奈良県教育委員会内吉野事務局長

新制中学分校設置に関して

・・・（前略）・・・

昭和２１年４月から６・３制実施以来中学校教育義務制と成るや私達玉置川中学校就学児童は暫定的に設けられたる隣接和歌山県九重中学校玉置口分校に委託され、通学していたのであります。然るに、九重村に於いては本年当初より、一村一校の目標にて学校統一を行い今や県の指示を受け統合を実施しました。自然玉置口分校は、無くなるのであります。地勢的に隣接中学校へは遠距離にて絶対に通学出来ぬ玉置川であります故、子弟の義務教育の課程を修得出来る唯一の道は、玉置川に分校を設置して頂くことであります。何卒玉置川に中学校分校を設置下さるやう懇願致します。

・・・（中略）・・・願はくは、地勢上の条件と部落民一同の熱意とを御理解下さって是非分校設置下さらん事を一同連署し御願い申し上げます。

昭和２３年１２月２５日

以下３７名連署　印

隣接中学校への通学距離

十津川第４中学校（折立）	１０Km	片道 3.5 時間
同葛川分校	１２Km	〃 4.0 時間
和歌山県九重中学校	１０Km	〃 3.0 時間

右通学不可能なり。

ともあれ表９でもわかるように、教育予算は年々増加し表１０も示す通り教員も増員され、問題解決の方向へ向っていることがうかがえるのである。

十津川村財政予算表

年度	教育費		産業経済費		総予算	
	円	%	円	%	円	%
昭和24年度(1949)	864,500	3.7	8,461,200	38.1	22,766,604	100
昭和25年度(1950)	3,184,059		10,337,281		43,208,076	
昭和26年度(1951)	27,743,155	25.9	46,931,519	43.7	107,651,960	100
昭和27年度(1952)	12,969,587	11.6	43,730,361	37.0	112,021,095	100
昭和28年度(1953)	8,518,739	6.3	60,429,519	44.9	134,541,192	100
昭和29年度(1954)	37,866,270	13.0	88,342,200	304	290,324,147	100
昭和30年度(1955)	25,163,293	13.2	99,840,900	528	190,099691	100
昭和31年度(1956)	13,143,450	5.5	143,722,965	60.0	239,357,987	100
昭和32年度(1957)	37,917,095	22.7	40,298,900	23.8	167,198,705	100
昭和33年度(1958)	27,032,600		25,388,700		145,394,100	
昭和34年度(1959)	44,476,500	18.1	18,930,600	7.7	245,947,471	100
昭和35年度(1960)	35,316,000		201,176,000		451,258,000	100

〔表 9〕

小学校・中学校・学校数・教育数・生徒数

年度	小学校							中学校						
	学校数	学級数	教員数				生徒数	学校数	学級数	教員数				生徒数
			校長	教諭	助教諭	計				校長	教諭	助教諭	計	
昭和25年度	27	68	23	16	32	78	1,754	12		5	27	10	46	849
昭和26年度	27	70	24	24	23	76	1,631	13	32	5	34	9	48	750
昭和27年度	29	70	22	24	28	74	1,549	13	31	7	28	9	44	765
昭和28年度	29	69	24	22	28	74	1,443	13	31	7	27	11	45	788
昭和29年度	27	70	23	26	25	74	1,460	13	33	7	28	15	50	810
昭和30年度	29	70	25	25	26	76	1,522	13	35	7	32	11	50	797
昭和31年度	30	72	25	26	27	78	1,641	13	50	7	34	9	50	802
昭和32年度	30	71	25	31	22	78	1,743	13	34	7	35	6	48	664
昭和33年度	30	78	26	41	17	84	1.921	13	34	7	38	4	49	644
昭和34年度	30	87	26	49	19	94	2.162	13	34	7	37	5	49	609

〔表 10〕

3. 民主教育の育成

(1) 高 等 学 校

十津川村において、高等学校は、旧来の私立中学文武館を以って昭和２１年いち早く手掛けられたことは、すでに村政報告書も示す通りであるが、開校にあたって昭和２２年鎌塚平馬村長より、次のような文書が村内各中学校長へ送られた。

拝啓・・・（前略）・・・惟うに従来非常に教育に恵まれなかった本村の女子も茲に高等教育の道が開かれることになり、村民をあげて欣快に堪えない事と存じ上げます。此の時機に当り本校では家庭上其の他各種事情に依り止むなく学業を中絶された方々、其の理由の如何を問わず向学心に燃える生徒を詮衡の上編入学を認める事にいたしましたから御多用中恐れ入りますが貴大字に於て該当者御調査御勧誘の上編入学の資格その他についても本校へ御問合せ下さい。出来るだけ便宜を計ります。本月１７日までに必着するよう御配慮相煩せたく御願い致します。なお、経済的理由の為折角の向学心を断念なされる方もあるかと存じますが、これについては奨学金制度（月額三百円近く倍額になる）もあります。（あまり制約を受けませんので他の地方に於ては現在非常に利用されています。）また、教師の点については現在着々整備して居ります。女子専任教師も４名（女子大学出１．女高師出２．洋裁専門教師１）既に内定いたし近日中に着任いたすことになっております。女生徒も現在２０名あり、男子に伍して愉快に勉学いたして居ります。本県１６校の高校中その一つを本村のみの高校として存続させて戴きました吾々村民としましては十二分にこの学校を生かして使わなければならないと存じます。・・・（中略）・・・どうぞ十津川の発展のためにひいては日本復興のため一人でも多く本校へ進学するよう御薦め下されたく重ねてお願申上げます。　　敬　具

８　月　３１　日

奈良県立十津川高等学校長　五十嵐梧棲

十　津　川　村　長　鎌塚平馬

各新制中学校長　　殿

女子教育向上の目的のため平谷家政女学校を開校し修業年限一年．学科．公民．職業．家庭の内容を以って定時制課程新設の申請書が、吉野地方事務所長・大西才一へ出されている。

(2) 社会教育事業

戦前にも、青年団及び大日本婦人会等各種団体があったが、昭和１９年４月９日の大日本婦人会の目的をみると、

日本婦人ノ伝統的精神ヲ発揮シ、国土防衛ノ基礎訓練ヲ練成シ其ノ成課ヲ家庭ニ及ボシ戦意ヲ昂揚スルト共ニ必勝ノ信念ヲ堅持シ以テ婦人ノ報国使命ヲ達成セシムルニ在リ。

しかるに終戦を経ていたるところで民主々義が叫ばれるに及んで昭和２２年の村政概況報告書は次のように意義目的を正している。

文化を叫ばれる昨今、本村に於ても青年連盟．婦人会．その他文化クラブ等の発生を見、教養の向上・社会奉仕・十津川的文化の創造等に真剣な足並を続けある事は村将来の為に喜ばしい事である。・・・（中略）・・・他をはいせざるを得ず本村にあっては華やかな文化のみを念ずるよりも、真に十津川の開発の為の文化運動こそ最も重要視すべきである。将来十津川教育振興会．青年連盟．婦人会育友会．その他文化団体を軸として本村文化向上の活発なる運動を展開しなければならない。

このように単に学校教育のみならず、一般社会教育にも熱を示し、その発展には、大いに期待する所があったのである。又、昭和２１年か２２年の夏、奈良師範学校山岸五平．寺尾勇．小川庄太郎の三氏が十津川村で新文化運動に関する講演をしている。

(3) 小　学　校

我々は小学校に関しても通学不便を訴える陳情書を数々記録してきた。そして表7.8.9を以ってしてもわかるように徐々に充実しつつある事はうかゞえると言えよう。２4.２5年頃には各学校共々子供会が結成された。それらは皆地域的特性をもつものであって、学童の自主自律性を養うことが目的とされ、父兄と共に「仲良クラブ」「のんきクラブ」「にこにこクラブ」「ラッキークラブ」等活動は活発である。しかしなぜこのように子供会を設けさせるに至ったか。平谷小学校の場合はこうである。

民主々義教育が叫ばれる今日、特に強く言われている言葉は学習の生活化と子供達の生活の場を十分に与えてやることであろう。然して、子供達の生活は即ち社会生活であって、たゞ単なる学校生活ではないと思う。唯学校のみに限られたる社会生活ではなくして、それが一般社会または家庭生活との深いつながりがなくてはよりよい社会人としての完成は望まれないであろう。・・・（中略）・・・そこで度々ＰＴＡの会合や母親たちの話題ともなり、色々と連絡協議した結果、どうかして児童生徒の校外指導を行って毎日の校外生活でのよりよき進歩向上へとその焦点が向けられることになった。・・・（後略）・・・

このような十津川村学令児童にとって一年または二年に一度の修学旅行は、憧れの的である。修学旅行はすでに明治４０年にも見られるが当時は、

旅行地ハ唯ニ遠隔地ニ限ラズ又汽車汽船ノ便ニ依ルヲ主トセズ、森林山野ノ徒歩旅行ヲモ

選ブベシ。

とその主旨は身体を鍛えることにもあったようだ。近年に至っては、数校の小学校または中学校が合併して旅行し、その行動内容に於ては、近畿地方を中心に、バス・汽車・船等に出来るだけ多くの乗物を利用し、あやめ池等の遊園地等も行程に含む多彩性を持ち、小・中学校共3泊4日・3000円前後の修学旅行をしている。

(4) 産業経済

終戦を迎えた十津川村産業経済は、ひとえに五条・新宮を結ぶ産業道路の開通にかゝっていた。昭和22年の村政概況報告書は十津川村産業経済の危機を、

生産的方面に於て或は消費方面に於て近世急速の進歩を遂げた資本主義的生産機構の中にあって、本村亦その生産様式に於ては、向上の一途を辿ったとは言え、生産方面に於ては、旧態依然なりの有様なり。

消費面に反し生産方面に何んら見るべきものなきは、同一収入に対し支出の膨張で破産状態を意味して居る現状なり。

と訴えているように、農業生産高は、まさに破局の状態にあった。

昭和24年

利用区分別面積（公簿面）			
種別	反別	総反別に対する比	備考
田	233町8反2畝08歩	0.8%	175.256坪08
畑	477〃7〃2〃20〃	1.7〃	
宅地	58〃4〃1〃26〃	0.2〃	
山林	25205〃5〃7〃19〃	92.3〃	
原野	1371〃6〃9〃18〃	5.0〃	
池沼	2〃24〃		
計	27337〃2〃6〃25〃	100〃	

所有地分分別面積					
種別	内閣	運輸省	村有	村内人	村外人
田	0.1反		9.0反	2,197.5反	31.5反
畑	0.6		13.6	4,663.1	94.3
宅地	0.1坪	0.1坪	3.1坪	567.5	13.4
山林		1.0〃	232615	16,7,586.9	61,206.4
原野	0.8		2.8	13,713.4	
計	1.6	1.1	232,900	188,734.3	61.3445.6
所有歩合			8.5%	69.0%	22.4%

〔表11〕

たのみの木材は、明治２２年の風水害の時、政府の見舞金３万円を植林にまわしたのであったが、全県下の１３％にまで減少した。表１１は十津川村土地利用区分を示すものであるが、山林面積中採木可能な山林は、ごく少数であった。（昭和２２年村政概況報告書による。）このような中で村政は産業開発には、多くの予算を投じ、主に産業道路の建設．植林の徹底を計ったのであった。近年五条・新宮間の国道は開通し、電源開発によるダム建設は、このような十津川村に明るい希望を投げかけているといえよう。

最後に、次の表は興味ある表であるが、その示す特徴は、本人の勉強ぎらいと、家庭の無理解によるものが圧倒的に多いということだ。しかし、通学距離の６Kmを越える者が、小学校でなお７７名．中学校では１０Kmを越える者が数人いる。このような環境の中にあって、いきおい教育に対する関心はうすれ、本人は勉強ぎらいになることも考えられるのである。明治維新までの外見華やかな生活、士族の称号を賜わった十津川民にも、経済生活の困窮は今日でさえ文化をよせつけない地域をつくったのである。

長欠児童生徒調査（昭和３２年）

理由区分 ＼ 学校別 男女別			小学校 男	小学校 女	中学校 男	中学校 女
欠席理由別欠席者数	A、本人によるもの	本人の疾病異常	6	7	4	6
		勉強ぎらい	2	3	6	2
		友人にいじめられる				
		学用品がない				
		衣服や学用品がない				
		学校が遠い		3		
		その他		7		1
	B、家庭によるもの	家庭の無理解	7	5	4	5
		家庭の災害				1
		家族の疾病異常			1	1
		教育費が出せない				
		家庭の全部又は一部を負担させなければならない				
		その他				
		合計	15	25	15	16

〔表１２〕

(4) 結　語

以上で我々の調査報告は終った。しかしまだまだ調査すべき問題は残っているし、紙面の都合で我々の調査したものだけでも十分記載することが出来なかったことを非常に残念に思う。ともあれ、十津川村教育の問題点のいくつかは今明らかにされよう。そして近年そのいくつかは改善されつゝある。しかし我々は、あえて言わなければならない。我々が実際に接して痛切に感じたことは、肝心の教師に改革意欲の薄弱なことだ。この問題は、我々自身でも大きく取り扱うべき問題であるが、同時に経済状態の低いことは、何をおいても十津川村教育発展のガンになっているといえよう。我々は、現在にあって民主々義の育成発展を最大の目的としなければならないが、そのた

めにも教育の重大性は論を待つまでもない。しかし現実には僻地教育や、同和教育が問題になる程、教育の民主化は進んでいないのである。これらの問題が何に起因しているかを追求することは今はさしひかえねばならないが、一つに経済的な要素が左右していることは大きな事実である。

我々は今や教育者自身の意識的向上を計らねばならないと同時に、僻地教育の社会的認識を高めねばならないことを提言してこの論を結ぶのである。

なお、この論稿作成にあたっては、本学池田．木村両教授の助言と、十津川村教育委員会及び小原小学校の親切な協力を得、末筆ながら我々三人は心から感謝いたします。

執　筆　者
赤築博道・押谷一彦・田中嘉明

へき地児童の学力

教育研究会

一．序　　論
二．第一次調査の概要
　1. 調査目的と方法
　2. 調査結果と分析
三．第二次調査の概要
　1. 調査目的
　2. 調査方法
　3. 調査結果と分析
　　A．外的要因
　　B．内的要因
四．結　　論

一．序　論

学力の問題は終戦後、新教育が軌道に乗るや、まもなく社会一般の声として盛り上ってきた。また、実証的な研究も行なわれるようになってきて果して学力は低下しているのか、或は新しい学力が芽生えつつあるのか論争されてきたのであるが、そしてそれはまだ解決されたわけでなく、むしろ我国全体で唯今進行実験中といってよいのであるが、文部省が昭和３１年度から全国的に小中学校を中心に各教科にわたって継続して学力調査を行ないその結果が発表されるに及び、改めていろいろの学力の問題を提起するようになった。その一つは、僻地の学力は特に劣っており、都市との差違は拡大されつつあるということである。その要因もいろいろ分析されているのであるが、特に奈良県のように僻地学校の多い所では重大関心事である。もちろんそのような調査による学力自身の問題もあるけれども、ここでは一応教科学習の成果としての学力を考え、奈良県における実情を明らかにしその問題点を学問的に研究していきたいということは我々の前からの願であった。そこで今度教育研究会では、総合学術研究の一環として僻地の学力の問題を取り上げることになった。そこで先ず第一次調査によって僻地の学力の実体を明らかにし、その結果に基づいてへき地の学力を規制する要因を明らかにするため第二次調査を行なった。第一次調査によって僻地の学力が低いことが明らかになると共に特に複式学級において学力が低い事も明らかになった。そこで第二次調査は複式学校を中心にその原因を

追求する事にあったが、そのてがかりとして学力を規制する背景としての個人的．家庭的．学校的．地域的要因を総合的に究明することにしたのである。

なお、第一次調査についてはすでに昭和３５年秋に「僻地児童の学力」中間報告としてまとめて発行しているのでこゝでは簡単に結論を中心にまとめ、第二次調査に重点をおいて報告することにした。

二．　第一次調査の概要

1.調査目的と方法

第一次調査研究の目的は僻地の児童の学力の把握にある。そのためには種々な方法が用いられねばならないが先ず他の地域との比較が有効であると思われる。従来の学力調査も大体同様であるが、我々は身近かな活動領域である奈良県下の最近の実態を我々の手によって総合的に把握しようとした。そして、比較研究のための地域を三類型にしぼり、対象児童を低・中・高学年を代表するものとして、２年．４年．６年生とし、教科は今回は国語．算数．理科．社会の４教科に限定した。昭和３５年４月末日に一斉に実施したのである。

調査問題の作成については種々の観点を必要とするであろうが、今回の調査においては、その客観性を保持するために地域的偏向の少ない標準化された問題作成に傾注した。そして学習過程を考慮し、まず１年．３年．５年修了時の問題を作成した。問題作成時の基本資料として用いたのは第一に奈良県下各学校にて採用されている１０数種にのぼる「各教科教科書」・「学習指導要領」・「学習指導書」、第二に、現在現場教育において最も多く用いられるところの１０数種にのぼる「標準学力テスト」・「各教科問題集」等である。

研究会として問題作成の手続上、以上の資料に基づいた資料分析のため、国語．算数．理科社会の４グループに会員を分け、各グループにより単元項目が設定された。その上での総合的な問題構成にあたってはいわゆる「標準的な学力テスト」の形式を基本的なものとして考慮することとし、全員による検討・討議の結果一応の予備テスト問題を得たのである。その上奈良市内の某小学校でこの予備テストを実施、その結果を分析の上、別紙本テスト問題を作成したものである。

第　１　表
地域別対象児童数

学年＼地域	都市	農村	山村	計
学校番号	旧奈良市	磯城郡	十津川村周辺	
	101～102番	201～202番	301～311番	
2　年	82名	82名	101名	265名
4　年	104名	73名	101名	278名
6　年	103名	79名	71名	273名
計	289名	234名	293名	816名

2.調査結果と分析（詳しいデーターは省略する）

算数において、総点では２年．４年共に都市農村山村の順に有意差が認められた。（１％水準）しかし、６年において農村・山村間に有意差が認められない。項目別に見ると「数」の領域では都市山村間には有意差が認められる（１％水準）。しかし農村・山村間には有意差が認められない。また、「計算」の領域においても同様の事が言える。「量と測定」「図形」「数量関係」の領域においては都市・山村間に１％水準で有意差が認められる。また、農村山村間では２年・４年共に１％水準で有意差が認められるが、６年において「図形」の領域を除き有意差が認められない。山村の単式学級と都市・農村と学力を比較してみると２年・４年共に都市・農村・山村の順に有意差が認められる。（２年生の農村・山村間は５％水準、他は１％水準）しかし６年において農村・山村間に有意差が認められない。また、山村の単式学級と複式学級を比較してみると２年生においては有意差が認められないが４年生においては単式学級の方が良いことが認められる（0.1％水準）。しかし６年においては複式学級の良いことが認められる。（１％水準）

理科において、総点では２年生・４年生共に都市・農村・山村の順に１％水準で有意差が認められるが、６年生では農村・山村間に有意差が認められない。領域別にみると、６年生において山村の児童の「自然への関心」が農村の児童のそれよりも強いことは興味のあることだ。山村の単式学級と都市農村と比較すると２年生６年生共に農村山村間に有意差が認められないが４年生においては有意差が認められる。山村の単式学級と複式学級を比較してみると２年生４年生においては単式学級の方が良いが６年生になると有意差が認められない。

社会科においては、総点では２年生．４年生共に都市農村山村の順に有意差が認められるが６年になると農村山村間に有意差が認められない。山村の単式学級と都市農村との比較では都市・山村間には１％水準で有意差が認められるが農村・山村間には有意差が認められない。山村の単式学級と複式学級の比較では２年生において平均点の上では単式学級が複式学級に比べてすぐれているが t 検定では有意差が認められない。しかし４年生．６年生においては２％水準で単式学級がすぐれていることが認められる。

国語科において、総点では２年生．６年生において都市・山村間には１％水準で有意差が認められるが農村・山村間は有意差が認められない。領域別にみると「文字力」については都市山村間は１％水準で有意差が認められる。農村・山村間では４年生を除き有意差が認められる。「文法力」については都市・山村間には有意差が認められる（１％水準）。農村．山村間では有意差が認められない。「理解力」については都市山村間では有意差が認められる。また、農

村山村間では6年生を除き有意差が認められる（2年生では5％水準．4年生は1％水準）。山村の単式学級と都市農村の比較では都市・山村間は1％水準で有意差が認められたが、農村山村間は有意差が認められない。山村の単式学級と複式学級の比較では2年生では5％水準．4年生で1％水準で単式の方が良いことが認められた。しかし、6年生において有意差が認められなかった。

個々の科目別考察は前述のとおりであるが、4教科を通じていえることは、都市・農村・山村の地域別全体の比較から各学年を通じて都市・農村・山村の順に学力差が認められた。しかし、都市は農山村を断然リードしているのに対し、農・山村間では高学年に至って学力の有意差はない。また、農村地域の標準偏差は他地域に比べて一番大きい。都市・農村・山村の単式学級の比較及び山村における単式学級と複式学級との比較から山村の単式学級は農村とほとんど学力差がなく、山村の複式学級が劣るという状態である。また、全地域を通じて中学年児童の学力がのび悩んでいることがうかがえる。

以上このテスト結果から今後の課題を設定し、一応の仮説を立ててみた。これはあくまで仮説であって今後私たちの手で実証してゆくつもりである。

(1)算数の計算能力には地域差が認められないが応用問題を解く能力が地域によって相当の差を示しているのはなぜか。農・山村特に山村では読解力が劣り、文章化された問題は最初から解けないときめつけている児童が非常に多い。これはテスターが口をそろえて言うところである。それに実生活において数量関係に疎遠である。しかし計算問題などは形式的操作によって解けることからそう劣っていない。すなわち、形式的操作の問題は比較的差が少ないのであるが、文字式による表現の問題、特に事実問題については非常な差が認められるのは、へき地における数量生活の貧困という条件に起因するであろう。

(2)読解力において地域差がきわめて大きいのはなぜか。これはへき地児童の身辺に書物がきわめて少ないし、父兄などは教科書さえあれば勉強できるしそれで十分だと考えているから、へき地児童が読書から遠ざかり、読書意欲がうすれているのではないか。また、読解力は文字を知っているか、いないかによって相当違うことなどから、地域によって字が目にふれる率の多少による原因もあろう。

(3)社会における公共施設の理解で地域差が大きいのはなぜか。これは完全な生活経験の相違である。

(4)全般に中学年児童の学力がのびなやんでいる。特に複式学級では、はなはだしいのはなぜか。8才～10才の児童はちようどアニミズム脱出時期であり、科学的思考がだんだん芽生えてく

るのである。この大切な時期に教育的条件を整えればのびるだろうと思われる。しかし現状ではそうではない。一般に低学年と高学年を最も重要視し、中学校をおろそかにする傾向がある。特に複式学級では教育方法の困難さが大きな問題であろうが、これについては更に考究を必要とする。

(5)農山村間ならびに単式学級・複式学級間では低・中学年間において学力差が認められるが、高学年に至っては差がなくなっているのはなぜか。これは今までの低中学年の時の傾向から比較して農村の高学年が停滞しているということである。当然もっと伸びなければならないのに伸びていない。故に山村と差がなくなっているので山村が特によくなったものではない。何故農村の高学年が伸びなやみになっているのかは、それについて深く掘下げていかなければならないだろう。

(6)農村地域は標準偏差が大きいのはなぜか。これは出来る者と出来ない者との差が大きいということになるが、それが何故であるかは、これも農村児の学力の問題として考究しなければならないだろう。

(7)都市が農村・山村にかけ離れてよいのはなぜか。一般に学力に及ぼす要因として、個人的要因・生活的要因・教育的要因の3つに分けられるが、都市が農山村を断然リードしているのは恐らくこの3要因が何れも秀れているためであろう。このことは他の学力調査を参考にしても伺えることである。

以上を簡単にまとめれば、都市が農山村にどの点においても秀れていることはもっともなことであると認められるし、算数の応用問題や国語の読解力や社会の公共理解について地域差が目立つことも一応考えられるであろうから、こゝで問題となることはむしろ山村でも複式学級が劣っており、その中でも中学年に学力の伸びなやみがあるということであろう。故に今後はこれを中心に追求していかなければならない。小学校中学年の学力に問題があることは、昭和34年度の大阪府教育研究所の学力調査にも報告されている例もあるのであるが、そこに何か児童発達上の共通の問題があるのかもしれない。その他に農村の学力の問題も出てきたのであるが、ここではへき地の学力をテーマにしているので特に上に掲げた問題について深く究明していく必要があると思う。

（なお、以上の詳しい内容は教育研究会発行（昭和35年秋）の「へき地児童の学力・中間報告」を参照せられたい。）

三． 第二次調査の概要

1.調査の目的と方法

第一次調査によって学力の問題をしぼることが出来たので第二次はそれに基づいてその問題に影響する要因を総合的に究明し学力向上のための方策を見い出そうとするものである。第一次調査において「山村」とせられた十津川村を選び、又対象校については、単式・複式学級形態を中心に地域交通などを参しやくし、第一次調査校中より単式一．複々式二の計三校を選んだ。また第一次調査によって中学年（4年生）が一番問題の多い学年であることが明らかになったことから第二次調査においても第一次調査での4年生の子ども（現在5年生）のみを対象とした。正確さを期するためには、対象学校や学年．生徒数を広げる必要もあるが経済的．時間的制限のため以上の程度に止まらざるを得なかった。

なお調査目的から学力を規制する要因をとり出す必要上、多くの問題を含むことを考えつつも、一応次のように仮説的に分類した。学力を規制する要因を内的要因と外的要因に分類し、内的要因を児童が生れつき持っているものや外部の影響をあまり受けないものとし、知能・身体・性格・興味・態度及び習慣を含めてみた。外的要因としては子どもに対し外部から影響を与えるようなものとし一応 家庭環境・学校環境及びそれをとりまく地域環境に分類した。その上で家庭環境を子どもの勉強施設・家庭の文化状態・教育的関心。学校環境を学校規模・学習指導・人間関係・地域環境を自然環境と社会環境に分類した。

調査紙作成にあたっては、我々で作成できない性格・知能・興味は市販のものを利用した。（知能検査は田中教育研究所の田中B式を又学習興味については田中教育研究所のもの、又性格検査は日本精神技術研究所のクレペリン検査を使用。）その他の調査紙作成にあたっては、「学習指導要領」心理学．教育社会学などの参考書及びそれに関係のある種々の研究書などを参考にして1ケ月余りかかり作成した。

第2表　学校別・対象児童数

	対象児童数	対象学年
A校（単　式）	25名	5　年
B校（複々式）	4名	5　年
C校（複々式）	5名	5　年

これらによって同じ山村でありながら学力差のある単式と複式の学校を比較対象しながら、その背景にあって学力を規定している主要なものは何かを追求していこうとするのである。昭

和３６年５月４日～７日まで学校別に３班に分れて実地に各調査を行ったものである。

2.調査結果と分析

A．外的要因

i．地域環境

吉野熊野総合開発に伴ない久しく文化の進展から取り残された吉野山地に一大変化と恵みをもたらした。しかしまだ文化的な面における不自由さは測り知れぬものが感じられる。日々の新聞もとかく遅れがちになり、公共施設・娯楽設備が極めて貧弱で、巡回映画や学校のスライドがわずかながらも、人々の慰めとしての役割を果している。そして、体育館を兼用する公民館が最大限に活用され、A校地域では、テレビや卓球台が設けられ、或いは講演会場・結婚式場として解放されている。ラジオの普及率が高く、９０％近い数値を示している。A地域は、中でも地理的条件に最も恵まれ、その上、学級編成も単式学級の形態をとっているので、地域の人々は、辺地という意識をほとんど持っていない。それがバス交通の路線から外れたB．C校地域になるとその文化的な面はひどく悪くなってくる。それでは人々の生活状態及び教育関心にふれてみよう。村の大部分が山林であるだけに、村民の生活は山林経済と強い結びつきを持っており、わずかながらもほとんどの家が山持ちである。しかし他人の山へ日給８００円から1,２００円で山林労務者として働き一家の生計を支えている。その上家族数が多いので決して裕福な生活ではなく、所得税を納めているのは全体の１２.８％にすぎず、大半が低所得者という事から生活水準の低さが判断できよう。親達の朝早い仕事と加えて労働の激しさから、子供の学習をみてやる家庭は少ない。父兄の要望にこたえて、宿題を与えても勉強してくる児童はいつも同じであり、中には「すべて先生まかせ」の親もいる。教師側からすれば、せめて生活指導だけは家庭でもやってほしいという要求が起る。また、経済的に余裕のある家庭の子供は、比較的成績上位者なので授業参観にくる父兄の顔ぶれが限定される。そして教師がぜひ相談したい父兄は、日々の生活に追われ、我が子の教育にかまってやりたくても、手が届かないようである。学校―地域を結ぶ婦人学級は、各地域共、発足の歴史が浅く、目下地域の婦人すべてが参加出来る様な体制に導いてゆこうと努力している。最後に、子供の将来について地域の人々はどの様に考えているのだろうか。

家計の貧しさから、義務教育を終えるのを待望んでいる親が少なくない。従って上級学校へ進むものは、各地域共、二割程度になる。残りの者は、何らかの技術を身につけようと大工たたみ職工．クリーニング．美容師等の就職を希望する。特に次男以下の若者達の離村傾向は年々増してゆき、長男だけは親の家業を継いでいるが、山林労務者を嫌いやはり将来性のある

職業を求めて都市へ行こうとしている。以上にのべた事柄から明らかなように教育に対する関心は、どの地域においても積極的な態度を示すものとそうでないものとの差が著しいと云えるのではないだろうか。

Ⅱ．学　校　環　境

(A) 学校規模・教具

(1) 教師並びに児童数

第 3 表

	1学年			2学年			3学年			4学年			5学年			6学年			計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
A　校	10	10	20	9	11	20	13	8	21	13	9	22	10	15	25	14	11	25	133
B　校	0	6	6	3	5	8	2	6	8	4	5	9	2	2	4	4	4	8	43
C　校	6	1	7	1	3	4	2	2	4	4	4	8	3	2	5	3	2	5	33

教師数ではA校7名（単式）．複々式のBC校2名という状態である。生徒数からみれば当然のようだがBC校では1.2.3学年4.5.6学年の2組編成である。これは学習を行なう上に非常なむりを生じている。その上事務上の仕事は学校が小さくても同じであってそれだけ少ない教師には一層大きな負担となる。これが授業に大なる影響を与え児童の学習活動．能力の低下の一原因となっていることはみのがせない。この事務負担を出来るだけ少なくすることは特に小さい学校において重要である。

また、勤務年数も短かく、毎年のようにはげしい異動があることは学習内容や方法において非常な無理と無駄を生んでおり、子供の悩みでもある。このことは、A校（単式）においても変りないのである。

次に、児童数をみてもわかるように、このような少ない数では社会性を養う集団指導もやりにくいし、また、個別的な指導においても競走意識が少なく、学習刺激も意欲も余りない。このことも学力向上をさまたげる一原因となろう。

(2) 児童の通学範囲

へき地における子供の通学範囲は遠く広い。交通の便がなく、遠方では6Kmもある所から悪い山道を2時間近くも歩いてくる状態だが、生徒は元気であまり気にしないようだが、子供の身体にも限界があり肉体的疲労が重なり授業に対する意欲にも影響し、学力低下の一要因とみてよいのではないかと思う。これは特に奥地にあるBC校ほどそうである。

(3) 教師の悩み

これは主にＢＣ校において聞いたものであるが、へき地教師全体の悩みでもあろう。

(イ) 学校の仕事に関することでは、

(1) 教師数が少ないから、雑役が増え、研修の自由と機会がない。

(2) 教具教材は高級なものがあるわりに、ぜひ必要なものにかけること。

(3) 複々式では学力差・体力差が大きく、教授上無理が生じる。

(4) 家庭の教育関心が低い。

(5) 医者が少なく健康管理に不安を感ずる。

(6) 人事配置の不合理。

(7) へき地手当が少ない上、校長は管理職手当をもらうと複式手当がもらえない。

(ロ) 私的家庭的なこと

(1) 文化度低い。時代の流れにおくれる上にテレビも入らず娯楽がない。

(2) 物価が高い。

(3) 若い教師は結婚の心配。

(4) 自分は辛抱しても子供の教育に不安。　　等々がある。

こういう悩みはへき地の奥になる程ひどいものになるのであるが、これらのことが子供の学習にすぐ反映しているわけである。

(4) 教具教材

この教具教材を考察していく為に、総括的と教科別とに分け、学習指導要領の最低基準を基にし、どの程度へき地学校の教具教材がこれに達しているかを調べた。

(イ) 総　括　的

ＡＢＣ３校共割合高価な物がそろっているが、常に利用されるべき必須的なものが少ない事に注目すべきである。またそろっていても、複式・複々式学級形態により、授業時間数も少なく、また分量も少ないことから利用される機会も少ないにちがいない。これがまたつもりつもって学力差の生ずる原因にもなるように思う。

(ロ) 教　科　別

ａ．社　会

この教科は完全に調べられなかったので、調べられた範囲での結果から言うと、常識的な、また身近かな教材が不足している。

b．算　数

教具は社会と同様に不そろいである。特に基本的なものが不足している事は学習にも影響を及ぼすと考えられる。

c．理　科

全体からみて教具教材は不足しているとはいわれない。しかし複々式学級では指導をうける時間数が少なく、余り利用されていないのではないか。

d．音　楽

楽器類は割合良くそろっているが、弦楽器類が案外少ない。また、レコードもそろっていない。この事は鑑賞を十分に出来ないということであろう。

e．体　育

どの学校も山間部に位置する為、運動場が狭く、運動設備は割合少ない。その為子供達の遊びも単純で変化に乏しい。このことは、運動場で観察していても明瞭である。

f．家　庭

最も教具が不足している。これは(イ)家庭は家だけのものとされ、学校ではおろそかにされがち、(ロ)他の教科のために時間をとられ、家庭の実技の暇がない。(ハ)家庭の教材は家にある物が多く、必要な時は、持参させる。からである。

g．図　工

最も教員が充実している。これは或程度のものは入手し易いということであろうか。

h．国　語

これはほとんど教具は使用されていない為に省く。

(B) 教　育　財　政

第 4 表　一般会計の中の教育費の占める割合

項目＼年度	32年度（33.3.31現在）	33年度（34.3.31現在）	34年度（35.3.31現在）
歳出合計	153,264,540	144,416,831	233,434,450
教育費	37,586,246	26,704,553	40,303,000
百分率	24.5	18.5	17

第５表　教育費の内容

項目＼年度		３２年度	３３年度	３４年度
教育費		１００	７１	１０７
教育費	教育委員会費	１００	１０４	１０８
	小学校費	１００	８３	８９
	中学校費	１００	１９７	１２７
	教育事務委託費	１００	１１２	１０６
	社会教育費	１００	１２８	１０４
	教育諸費	１００	１４２	１９４
	営繕費	１００	４８	１０２

まず十津川村の教育財政状況を見よう。第４表に於て一般財政は、３４年度には３３年度の1.6倍にも増加している。これは総合開発の進展に伴なう収支の増加の結果と推察される。これに比して教育財政の一般財政中占める割合は、減少の道をたどりつつある。確かに教育財政は増額されており第５表の内訳表に於ても見られる通り全体としては上昇の傾向にあるが、一般財政の増加率に歩調をあわせていないのである。これは特殊な事情の下にある村政の目標が産業経済．産業観光に存する為であると思われる。そして開発事業がピークに達する昭和３４～３６年までは教育財政の軽視されるであろうことは否めない。

第６表　小学校費

年度	３４年度		３５年度		３６年度	
職員給	110,900	100	13,000	118	296,000	259
諸手当	30,500	100	57,000	187	113,000	370
旅費	22,790	100	243,000	107	259,000	114
需要費	270,000	100	3,745,000	139	3,435,000	127

第５表より教育費の内容そして第６表よりさらに小学校費とその内訳をみると、教育費の中では大体どれも上昇の傾向にあるが、小学校費が少し減少してきている。小学校費の中で児童に直接結びつきのない職員給・諸手当が2.5～3.5倍に増額している。それに比して図書．地

図・理科備品・その他いろいろな設備器具の為の需要費があまり増額していない。

第７表　調査校に対する村予算

調査校＼年度	３４年度	３５年度	３６年度
A 校（単 式）	１３７,５００円	１９７,８００円	２００,５００円
B 校（複々式）	７３,７００円	１０５,４００円	１００,０００円
C 校（ 〃 ）	７０,４００円	９７,９００円	８４,１００円

第８表　３６年度の予算の内訳

	A校（単 式）	B校（複々式）	C校（複々式）
消耗品費	６９,９００円	３０,９００円	２６,８００円
通信費	１２,０００円	７,３００円	７,３００円
修繕費	８,２００円	４,１００円	４,１００円
図書代	１４,７００円	１４,７００円	１４,７００円
地図掛図	１７,７００円	１７,７００円	１７,７００円
その他 器具代	７８,０００円	２５,３００円	２３,５００円
計	２００,５００円	１００,０００円	８４,１００円

小学校の教育費は首長によって目主的になされていて設置者負担主義で法定設置基準もなく地方財政に頼っている現状である。調査したへき地の三校は、都会の学校とは格段の差がある。都会の学校には多額のＰＴＡ寄付金もある。へき地のためには国家に法定設置基準を作ってもらって、漸進主義での格差解消を行なっていくべきだが、地方公共団体も貧窮であり、今日のように地域差がはなはだしいことは学力の地域差とは無関係ではない。

さて次にへき地３校の学校予算の児童一人当りの年間教育費をここに示してみると、A校（単式学級）１６,６８４円・B校（複々式学級）１６,１２１円・C校（複々式学級）26,000円となっており、C校の年間教育費が他の２校に比べてずっと多くなっているのは、その地区の教育財政とも関係あろう。それだけに教育的関心が大きいと考えられ、同じような学校規模学級編成でありながら、C校の学力がB校よりも勝っているのは教師にもよるが物的な面とも関係があろうと思われる。

(C) 学習指導

学習指導についての学校差を特に重視して調べようと思ったが、現地に来て教師が異動の為にほとんど変っていたり、その他の悪い条件によって充分調べることが出来なかったのは残念であった。

唯、カリキュラムの中の算数だけをとりだして単式学級と複式学級を比較してみることにする。単式学級も複式学級も単元．題材．指導内容はほとんど変わらないが、時間数において単式学級では２１時間・複式学級では１５時間になっている。また、単式．複式学級の年間授業時間数を見てみると「数」では単式学級３５時間・複式学級２５時間、「計算」では単式学級１３３時間・複式学級１１８時間、「数量関係」では単式学級２０時間・複式学級１７時間、「量と測定」では単式学級３０時間・複式学級２６時間、「図形」では単式学級３３時間・複式学級２９時間となっており、合計時間数では、単式学級２５１時間・複式学級２１５時間となっている。後者は文部省の示している学習指導要領第四学年算数科の年間授業時間数２１０時間より少し上まわっている。しかし複式学級という形態は単式学級に比べて単に学習指導時間だけでは割切れないのであって、その内容．方法がむしろより重要であるが、これが調べられなかったことはこの調査の弱点ともいえるが、今後この方面の研究が開拓されねばならないと思う。

(D) 教師と児童の人間関係

児童が教師に対してどのような感じを抱いているかを質問紙によって調べたけれども、このような事は質問紙だけによって調べられるものではないけれども、事例として調べてみた。

（問） あなたは先生と一緒にいるのがいやだと思うときがありますか。

（問） 先生と遊んだり、仕事をしたり話をしたりする時、あなたはいつも先生に遠慮しますか。

（問） あなたは先生に褒められた時、急に先生が好きになるようなことがありますか。

（問） 先生が上手におもしろく教えてくれる科目は好きになりますか。

このような質問をもっと多く示したのであるが、これから一般的な考察をするためにはもっと徹底してやらねばならないので今後に期しておきたい。今回の調査ではすでに前年度の担任教師がＡＢ校では変っていることもあり意味が薄かった。

Ⅲ．家庭環境

ⓐ 家庭の文化状態

へき地とはいっても、９１.２％の家庭にラジオがあり、家庭における重要な娯楽となり、また社会を知る為の窓となっている。新聞は３０軒のうち２６軒とっている。しかし１日遅れの

新聞でありニュース性に乏しい。また、子供新聞ではバス沿線のA校地区の児童の1／3はいつも読んでいるが、B校地区．C校地区では1人として時々もみていない。テレビではA地区は1／3ぐらいの家にある。しかしB地区C地区では全くない。これはBC地区ではテレビがうつらないからである。また、半数以上の児童の家には何の辞典も持ってない。このようなことから児童の間接経験の範囲はせまいことがうかがえる。が、特にテレビのないBC地区ではそうであろう。

ⓑ 子どもの勉強施設

勉強机・本など勉強するための最低限度の設備は80～90％近く整っているが、教科書以外の本となると半数近くは持っていない現状である。

ⓒ 教育的関心

子供と親への質問（調査紙）

(1) 子どもさんの勉強についてどうされますか。

㋑ いつもやかましくいう。	11人
㋺ 時にいう。	13人
㋩ 放っておく。	4人

(2) あなたの両親はあなたの勉強や行動について心配していますか。

㋑ 大変心配する。	6人
㋺ 心配する。	20人
㋩ 無関心	5人

(3) あなたが勉強についてたずねた時あなたの両親はどうしますか。

㋑ 今忙しいからといって教えてくれない。	5人
㋺ わかりやすく教えてくれる。	24人
㋩ すぐ答を教えてくれる。	3人

以上は調査の一例であるが、これらから親達の教育的関心について言うことは早急であるが、実情は関心を持っていてもみてやれないということであろう。両親は子どもの勉強に何を望んでいるかといえば学校で放課後を利用して勉強させて欲しいというのが圧倒的に多いのである。そして子どもの意欲がわくよう徹底的に指導して欲しいと訴えている。両親は仕事にでるため子どもの勉強が十分みてやれないと父兄は訴えている。即ち子どもは学校にやっていればそれでいいという考え方も非常に多いのである。全面的に学校を信頼し学校に頼っているのであるが、PTAとかその他会合には欠席が多い。これは男は夜明けと共に山仕事、女は畑仕事とい

うのが普通であるからである。要するに子どもだけは何とかしたい。勉強させたいというのであるが仕事が忙しいため十分なことができないで終っているようである。

B．内的要因

① 知　能

第 9 表　知能分布

知能段階	指数	人数		
		A 校	B 校	C 校
最　優	150以上	0	0	0
優	130-149	1	0	0
中の上	110-129	7	0	2
中	90-109	11	2	3
中の下	70- 89	4	1	0
劣	50- 69	0	1	0
最　劣	49以下	0	0	0

僻地3校の5年生（対象人数A校．23名・B校．4名．C校5名）の田中B式知能テストによる上の表の結果であった。3校の平均知能はIQ93である。共に余り秀れた者も劣った者もいないが平均ではやはり都会（奈良市調査校のIQ110）と比べて低いようである。

② 興　味

田研式学習興味診断テスト用紙使用によるテストの結果は次の如くであった。

第10表　3校教科別興味順序

教　科	興味パーセンタイル
家　庭	64
図　工	59
国　語	58
音　楽	56
理　科	55
算　数	46
社　会	41

これらからみてA校・C校はB校に比して各教科において興味高いようであるが、やはり学力においても高いのと相応じている。

全体的にみて、家庭・図工・音楽などに興味を高く持っているのは知的な教科に弱いということが逆に表現的・製作的なものに興味を持つのであろうか。しかしこれはまた教師の影響もあることだろうから簡単には言え

ない。

③ 学習態度及び習慣

第１１表　学習興味診断テストによる学習態度

態度段階	人数		
	A 校	B 校	C 校
最優	1	0	0
優	3	0	0
中の上	5	1	1
中	9	1	1
中の下	3	2	1
劣	4	0	1
最劣	0	0	1

第１２表

項目		人数		
		A 校	B 校	C 校
勉強時間を決めているか	決めている	14	2	2
	決めていない	10	2	3
勉強の予定をたてるか	はい	10	1	2
	いいえ	13	3	3
予習復習をするか	いつもする	2	0	0
	時々する	21	4	4
	しない	1	0	1
学校での勉強は楽しいか	楽しい	20	3	5
	楽しくない	4	1	0
学校をよく休むか	時々休む	7	2	2
	休まない	14	2	3
宿題をするか	しない	1	1	0
	する	22	3	5
家での勉強続行時間	10分	3	1	0
	30分	5	1	3
	1時間	13	2	2
	2時間	3	0	0
先生が話している時よく聞くか	はい	20	4	4
	いいえ	4	0	1

学習態度はA校は人数が多いだけに上下に分布しているが、何といっても中が多いのは普通であろう。BC校は人数が少ないので何ともいえないが、中よりも下の方に位している。このことは前の教科興味とも多少関連しているかもしれない。

子供の勉強のことについては、これ位ではまだ実際の状態を把握することは難しいが、積極的に計画的に予習をする傾向は少ないことは認められるのであって、学習意欲や興味の有無もあるが、前述の家庭環境も無視することが出来ないであろう。例えば、学校を休む理由として「家の仕事が忙しく手伝をする」があるがこれは家庭での学習を妨げる大きな壁である。

㊅ 性　格

方法としては「内田クレペリン精神検査用紙」を用いた。その判定基準は「実用クレペリン内田作業素質検査手引」を用いた。対象は前と同じである。

第13表　結　果

曲線型		A類			B類			C類			D類		E類		F類		
		a	a'	a'f	b	b'	b'f	c	c'	c'f	d	dp	f'p	P	f(A)	f(B)	f(C)
人数	A校	1	1	2	1	3	2	0	0	6	1	1	0	0	0	3	4
	B校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	1
	C校	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	1
	合計	1	1	2	1	3	2	0	0	9	4	2	0	0	0	3	6

上の図表から特に注意を引くのは、C'以上のいわゆる処遇上、特別考慮のいらない児童が、$\frac{10}{34}$で、性格面での要注意児童が$\frac{24}{34}$即ち70％強も占めている事である。

児童が「クレペリンテスト」という型の変ったテストを受けて、異常に興奮し情緒の不安定をきたしたのではないかと考えられるが、それにしても異常な者が多すぎる感がある。特にA校では僅か25名であるのにA類からF類までの多くの型を含み、B．C校ではC・D・F類に位しているということはいかにへき地のこれらの子供が性格的に偏しているかを示すものである。もっともこれでへき地の一般論とすることは出来ないし検査ももっと多角的にやらねばならない。

C．まとめ

以上第二次調査の結果をまとめてみると、学力を規制する内的．外的要因をいくつもあげてその中から特に複々式学校が同じ地域の単式学校と比較して不利になっている条件を見い出そう

としたのであるが、山村として共通点を多く持ちながらなお差違を認められたことは、

1. 学校が小さいということから派生してくる問題であるが、教師にとって事務的負担が大きいこと。予算の関係上、教具教材も十分に使えないこと。複々式学級そのものからくる学習　上の困難、児童が少ないために協力的な競争的な学習もやりにくくて意欲も興味も低いこと。これらが学習及び学力にはマイナスになっていることが表われている。
2. 環境的に言って、複々式の地域はまだ文化的な生活に不便であり教師にとっては生活上の不便不安が強いこと。

   父兄も山に働く者が奥になる程多く、子供の教育について余りかまってやれないこと。

   文化的にもテレビもまだみえない奥地に比較してA地区のようにテレビもよくみえ、バスも通っている所では子供の経験興味が広いことも事実である。
3. 子供自身の内的なものについては、調査自身もかんたんで深くみられなかったが、複々式校の方が興味や態度においてやや劣っていることがみられた程度である。たゞし、4年生に問題があると前に言ったが、それが何であるかは他の学年との関連から発達的な問題として把えなければならないのであって、今回はそれが出来なかった。結局4年生の児童を通じて学校や家庭や地域の問題がどうそこに集約的に表われているかをみることになった。

結局以上の3点については今まで都市とへき地を比較した時に表われた差違であることは、従来の調査からも分ることであるが、山村の中の単式と複々式の比較においても同様のことがはっきり表われているということがわかった。このことは文部省の昭和35年度の学力調査の中のへき地の学力の項において分析されていることと相応しているのである。それを我々としてはもっと学習指導の面において深くつっこんで調べたかったのであるが、その点が十分出来なかったことは残念であるが、今後の研究にまたなければならない。内的要因の項の分析がかんたんになったのも紙数のために大分に省略したことによるが調査そのものも更に慎重にやらなければならないことである。ともかく、我々の調査によって具体的にへき地でも奥にある複々式校及びその地域が尚悪い条件にあることがいろいろの点から実証されたことで、それらが互いに深く関連して根強いものであるからこれらを取除いていくのも容易でないが、どこからか手をつけなければならないのであって、その方策も各方面から考えていく必要がある。

四。結　論

第一次調査の結果から多くの仮説を立てその中から特に山村へき地の複々式校に焦点をおいて第二次調査をし、その学力規制要因を究明したのであるが、それに基づいてへき地の学力を

向上させるための条件として言えることは、

1. 複々式学級の解消と学習指導の能率化、教師が少ないことからくる負担の重圧を軽減するためには、教師をふやすこと、すなわち2名を3名にすればそれだけ学習指導を能率化することであろうし、複々式を解消することでもある。早急に出来なければ教材教具の充実を図り教師が十分に研究し、指導出来るように行政当局の措置が望まれる。
2. 児童の経験の拡充。狭い経験領域に閉されている子供に直接間接の経験を豊富にし、それを質的にも量的にも拡充していくことで、学習・興味も学習意欲もこれに関連し、学習効果従って学力をあげる基礎となるものである。
3. 文化的な生活の向上、児童の経験を拡充するためにはその背景となる家庭や地域の生活条件が文化的にならなければならない。これは容易なことではないけれども、テレビをみえるようにし、車を利用するなど、生活の機械化合理化を少しでもしていくことは可能である。それによって生活に余裕をもつようになれば、教育的関心も実質的に高まり、それが子供の学習経験や能率を高めていくことになる。全国的な学力調査でも都市の住宅地域が秀れているのはそのような文化的な条件が有力に働いているからである。またこのことは教師の生活の向上も十分考慮せねばならないことも含んでいる。教師の生活の不安が結局授業に影響してくることを考えるとその安定向上が自他共に望まれるのである。
4. 複式学習指導の改善。以上3点は何れも必須的基礎的なことであっても急速に一度に望めないかもしれないが、そのような方向への努力と共に現在の状況において進めるべき努力としては複式の学習指導のあり方をもっと究明してその特性を発揮しながら有効に生かしていくことで、例えば小人数を生かしての個別指導など、内容的にも方法的にももっと研究されてよいと思う。
5. この種の調査では内的要因の究明はいろいろの関係でむずかしいものであり、特に4年生を問題として取り上げたことの研究が今回はやれなかったが、上述の学習指導法の研究と共に今後の課題として残されたものである。

十津川地方における児童生徒の言語実態調査

国　語　国　文　会

一．はじめに　～調査経過その他～
二．調査の目的・方法等について
　1. 調査目的
　2. 調査方法
三．調査結果
　　～部門別整理表とその解説～
　1. 音韻調査
　2. アクセント調査
　3. 語彙調査
　4. 語法調査

一．はじめに　～調査経過その他～

私ども国語国文研究会員は、本調査の一環として、「十津川地方（奈良県吉野郡）の児童生徒の言語実態」の調査を行なった。

一昨年より話がもちあがり、昨年8月頃から、臨地調査に臨む作業にとりかかった。

本学鈴木教授を煩わし、11月に第一次案を作成した。それによって、予備調査を行なって、不備な点を修正、本案を作成した。

被調査校の都合・気候条件・経費・講義との関係で、4月12日（水）～16日（日）を臨地調査日と決定。人員は、「音韻・アクセント・語彙・語法」の四部門について、各部一人ずつ計4人で出発した。

平谷．重里の小・中学校教職員、また、地方住民の皆さん方の御協力により、一応目的を達成できたつもりだ。

調査結果は部門別分担制でまとめた。この報告が僅かなりとも、国語教育の面で役立てばと願っている。

二．調査の目的・方法等について

1. 調査目的

言語教育を進めて行く基礎は、当然児童生徒の日常の言語生活の実態をとらえ、指導の重点を決めることにあろうと思われる。

マスコミの発達で、いかに山間へき地であろうとも、共通語が滲透しているとはいうものの方言には根強いものがある。十津川地方の大人が話す方言に関しては、調査がかなり行なわれているようだが、児童生徒が話す方言については、まだなされていない。我々は、言語教育、(小・中学生)に資するために、大人とも比較しながら、共通語との差違点をさぐったのである。

要するに、本調査の目的は、「児童生徒の言語実態—共通語の滲透状態—の調査」ということにある。

2. 調 査 方 法

まず、「音韻・アクセント・語彙・語法」の四部門に分け、一般的に言って、平谷と重里地区で、各々小学校3年・6年・中学校3年それに大人(青年・壮年・老年)を対象に調査した。各被調査者に、調査票(下図)を記入してもらった。当然のことであるが、児童生徒の場合、出来るだけその土地で、両親が生れたもの、悪くとも片親は十津川生れのものとした。大人の場合、出来るだけその土地で生まれ、生活しているものを選び、悪くとも十津川村内の出身者であることを条件にした。全てプリントを使用して行なった。

調 査 票	被調査者 氏 名	調査日	調査者名
性別・年令	(男・女) 満 才		
出 生 地			
職 業	(1)農業 (2)商業 (3)工業 (4)林業 (5)公務員 (6)サービス業 (7)無職 (8)その他		
学 歴	小学校 年・中学校 年・尋常小卒・高等小卒・師範卒・中学卒・高専卒・高校卒・大学卒		
家族構成	続 柄	年令(満才)	出 生 地
Mass Media に接触するか	ラジオ(有・無)よく聞く・あまり聞かない・聞かない		
	テレビ(有・無)よく見る・あまり見ない・見ない		
	新 聞(有・無)よく見る・あまり見ない・見ない		
標準語(共通語)をどう思うか	①しゃべりたいと思う ②特にしゃべりたいと思わない ③無関心 ④しゃべりたくない		
備 考			

三。調査結果

1. 音韻調査

音韻調査　近畿方言調査簿（西宮一民編．近畿方言学会刊）の調査項目を全て調査することにしたが、質問語は小学校6年生でもよく知っているものということを原則に取捨選択し、その「語」をプリントにして、それを被調査者に読んでもらったり、質問法（ヒントを与える）によったり、とにかく自然なことばの摘出に努めた。（児童生徒の場合は前者を、大人の場合は後者を使用することが多かった。）そして、全てテープレコーダーに録音した。

被調査者数

平谷	小6	男 2 名	女 2 名	
平谷（第五中）	中3	男 3 名	女 4 名	
重里	小6	男 3 名	女 3 名	
重里（第六中）	中3	男 3 名	女 3 名	
平谷	成人		4 名	
重里	成人		2 名	
	計		29 名	

（イ）母音について

1. 〔i〕と〔ju〕の混同の有無

平谷の大人は「岩」「祝い」に〔ju〕を用いているが、生徒の方は〔i〕を用いている者が多い。また、大人は全て「イク（行く）」であるが、生徒の中には「ユク」が入って来つゝあるようだ。平谷の方がその傾向が大である。「カイ（粥）」が大多数で、共通語とは異なって、かなり混同している。

2. 〔u〕〔m〕〔ŋ〕の混同の有無

大人の中に「イゴク（動く）」を使う人がいる。

3. 〔e〕〔je〕〔we〕〔e:〕

「田植」の時〔we〕となる以外は〔e〕で問題はない。

4. 〔e〕〔je〕〔i〕〔he〕

「～へ行く。」を大人は「～イイク」というが、生徒は、「～エユク」という。「蝿」を「ハイ」という者がいる。

5. 〔o〕 〔wo〕

生徒は正しく〔 o 〕というが、大人は「本を」の「を」を〔wo〕とする。

6. 〔o〕 〔wo〕 〔βo〕 〔bo〕 〔jo〕

頗．直す．頬．遠い．塩など異音はないが、「頬」は非常に言いにくそうだった。

7. 〔ai〕 〔ae〕 〔æ:〕 〔ɛ:〕 〔e:〕 〔a:〕

「大工．大根．絵をかいた．無い．町へ出たい」など殆んど正しい。

8. 〔au〕 〔o:〕 〔o〕

「コーテ（買って）」が一般的だが、平谷では「カッテ」も云う。「拾う」は、大人では「ヒラウ」、生徒では「ヒロウ」となり、生徒は正しい方へ向っている。

9. 〔ia〕 〔ija〕 〔wa〕

「見合」「似合う」「場合」の三語について、大人では〔ja〕が優勢だが、生徒では〔a〕が多い。「具合」を大人は「グワイ」というが、生徒は「グアイ」に近い。古音は、この地方でも消滅に向っている。

10. 〔ui〕 〔ii〕 〔i:〕 〔i〕

「痒い」「悪い」について、大人では、「カイイ」「ワリイ」が多い。それに対し、生徒では「カイイ」は多いが、「ワリイ」より「ワルイ」が優勢となっている。こういう結果が出てくるのは、「痒い」が生活語で、「悪い」は、学校でよく使う語であるからといえよう。

11. 〔ei〕 〔ee〕 〔e:〕

時計．栄養．先生．生徒などの漢字音の「エイ」が「エー」となる場合が多い。

12. 〔oi〕 〔o:i〕 〔ee〕 〔ei〕 〔ii〕

「濃い」を「コーイ」とか「コイイ」という。「良い」を関西式に「エエ」というのは皆無である。

13. 〔i〕→〔e〕

箒．鉛筆．針と糸．狐などにおいて一般的にイ段音とエ段音と交替するものは少ない。（但し、二重母音の場合は除く。）

(2) 子音について（14～34）

14. 〔g〕 〔ŋ〕

聞き取り方がむずかしく、少しは誤りがあるかもしれないが、鼻濁音は確かに存在する。

15. 〔k〕 〔kw〕

〔kw〕は全く見られない。平谷．81才．女の「クワシ」が一例あったのみである。

16. 〔g〕 〔gw〕

〔gw〕も全く見られない。重里．71才．女の「トングワ」一例あったのみである。〔kw〕〔gw〕共に近い将来消えてしまうだろう。

17. 〔s〕 〔ʃ〕

大人の場合「匙」が少し怪しいだけである。

18. 〔Z〕 〔dz〕 〔ʒ〕 〔dʒ〕

〔Z〕と〔dz〕の区別は、余り明確でないものが多いが、どこか違うのは確かである。だが、規則的ではないようだ。「雑魚」は大人も生徒も「ジャコ」である。大人（老人）には「「タンジャク（短冊）」が残存している。これは「語い」によるものか。

19. 〔Z〕 〔dz〕 〔d〕 〔r〕

〔Z〕を〔d〕とか〔r〕とかに誤まる極端なものはない。18.19.を通して、ザ行の発音には、一般に非常にぎこちない感じである。

20. 〔d〕 〔dz〕 〔Z〕 〔r〕 〔d͡〕 〔nd〕

〔r〕と〔d〕を誤まるような極端な例はない。

21. 〔ʒ〕 〔dʒ〕 〔r〕

調査語、地震．味．紅葉の三語とも〔ʒ〕であった。

22. 〔ʒ〕 〔dʒ〕 〔r〕

調査語、虹．時間．手品の三語とも〔ʒ〕であった。21.22より「ジ」と「ヂ」の区別のないことがはっきりする。

23. 〔Z〕 〔dz〕 〔r〕 〔d͡〕 〔nd〕

小豆．図画．水．地図は〔dz〕で〔dz〕を〔r〕〔d͡〕〔nd〕に誤まるような例はない。

24. 〔Z〕 〔dz〕 〔r〕 〔d͡〕 〔nd〕 〔z͡〕 〔nz〕

調査語、ずいき．ズボン．鈴では〔Z〕又は〔dz〕である。

25. 〔ʒ〕 〔dʒ〕 〔d〕 〔dz〕 〔Z〕 〔r〕

十回．順番は〔ʒ〕、「珠数」は問題であった。というのは、この地方には全然仏教が入っていないので耳なれないらしい。しかし老人の〔ʒu ʒu〕には、注意してよかろう。

26. 〔b〕 〔b͡〕 〔mb〕

〔bimbo:〕は当然であり、問題はない。

27. 〔ts〕〔t〕

大人では正しいが、生徒では「釣」「松」の「ツ」は非常に言いにくそうである。

28. 〔r〕〔d〕〔d͡〕〔dz〕〔Z〕〔ʒ〕〔dʒ〕

蓮根．来年．りんご．ろうそく．まだら．両方、重里・71才・女の「ジョーホー」を除いて正しい。

29. 〔m〕〔b〕

煙．鞭．眠い．蟬、「ネブタイ（眠たい）」が少し入ってくる以外、唇音交替例はなかった。

30. 〔w〕〔b〕

調査語、茶碗．雛．当番．唾に関しては問題ない。

31. 〔ʃ〕〔ç〕

「舌」「足」は〔ʃ〕で正しいが、「七」「一つ」「人」など余りはっきりしない。老人（平谷・81才・女．重里・71才・女）が、「舌」を「ヘタネ」といい、「七」を「ヒチ」というのは、昔〔ʃ〕と〔ç〕の混同のあったという証拠であろうか。

32. 〔S〕〔h〕

「〜ハン」など関西式のいい方はない。

33. 〔t〕〔s〕

「傘さいセ行け」式の言い方はない。

34. 〔K〕〔h〕〔ç〕

「猫」を「ネホ」という式のものはない。

(3) 音　節

35.短・長

一般に、一音節語を関西式に二音節に引くものはほとんどないが、（子供には皆無である。）大人には、その語を強調しようとしてか、「蚊」を「カー」とする人がいた。

36.長・短

「オーサカ」を「オサカ」とするものはないが、大人には「サトー（砂糖）」を「サト」という例もあった。（平谷・65才・女）

37.清・濁

共通語とはちがって、「センダク（洗濯）」の方が多い気味だが、反対に共通語で「ムズカシイ（難しい）」を大人は全部「ムツカシイ」と清音としている。生徒の方も高学年になるに従って「ムツカシイ」が増してくる。この二語の例からも、清濁混同しているものがかなりあ

るように思われる。

38. 転　倒

「ツゴモリ（晦）」とはいわず、関西方言式に「ツモゴリ」というのが普通である。目立つほどの転倒はなさそうである。

39. 撥　音

「アマリ（余り）－副詞」は少なく、「アンマリ」が普通である。他には、「昨日」を「キンノ」、「昨夜」を「ユンベ」というのが若干あるくらいである。

40. 促　音

「トクリ（徳利）」はなく、「トックリ」とつまっていう。しかし「松山」を「マッチャマ」とはいわない。

41. 拗　音

「動詞＋よる」の言い方の調査。

五段動詞の場合は、調査語の内「クヨル（食いよる）」を除いて、全て「イキョール（行きよる）」の如く、「○ョール」式である。

この式は、上一段の「起きよる」「過ぎよる」にも見られる。

反面、五段の「食いよる」カ変の「来よる」、上一段の「見よる」、下一段の「受けよる」「混ぜよる」、サ変の「しよる」は、「クヨル」「ミヨル」「ウケヨル」「マゼヨル」「シヨル」と平谷地方では拗音化しない。

ところが重里地方では、平谷地方の拗音化しない例のうち「食いよる」「来よる」「しよる」を除いたもの即ち上一段及び下一段の動詞は全て「ミリョル」「ウケリョル」の如く、〔r〕音が入って来て拗音化する。

この「動詞＋よる」の調査から、十津川地方の特性及び平谷・重里間の地域差がはっきりしてくる。

㊟音韻の問題から離れるが、動詞の活用について見ると、例えば「見る」は「見ラン」（未然形）、「見レ」（命令形）に重里地方の「見リョル」（連用形）を考え合せれば、一段活用の五段化がうかがえる。　　（神田育典）

参考書　近畿方言調査簿（西宮一民編）
日本方言学（東条操編）
十津川音調（山名邦男・音声の研究－１９５１－所収）
標準語と方言第３集（国語シリーズ４３・文部省）

2. アクセント

かねて聞いていた通り、同じ奈良県にありながら十津川地方のアクセントは我々の使っているものとは全く違っている。一聞しても明らかにこれが東国式アクセントであることがわかる。

この調査は小中学生を対象として行ったもので、ノートに書いた文章を被調査者に読んで貰い、それをこちらの控えのノートに記し、その統計の中から出したものである。これには近畿方言学会編の『方言調査簿』のアクセント調査の部を活用させて頂いた。また、これを成人と比較したいとも考えたが、日数の少ない上に一人にかなりの時間を要する為、中途で用立たれたり、この土地の者じゃないという人に会ったりして、結局成人の部では完全に出来た人はなかった。また、これには一人が一人につききりになるため、子供達の方でも数多く当ることが出来ず、特に低学年になると字を読むのもたどたどしく、アクセントのなくなる者もあり、結局、

平谷小学校	6年生	4名	重里小学校	6年生	4名
中学校	3年生	8名	中学校	3年生	5名
				計	21名

という少数から出さねばならなかった。しかしこの中にはやはり字を読む為のアクセントが現われるのではないかと懸念されるし、例と違ったものが出たので訊き返すと訂正するものもあったりしたが、この少数の中にもほとんどの語が規律正しく同じアクセントを示している点から、何らかの法則らしきものを型づけることも出来よう。

尚、この地方の言葉の研究はかなり早くから行われているようで、こゝに「音声の研究」（日本音声学会編．昭和26年版）に山名邦男氏の研究もあり、これも参考にさせて頂いて、自分の調査を標準語或いは関西弁と比較しつゝ述べて行こうと思う。

〔十津川アクセントの特徴〕

標準語と比較するのに、今仮りに平板型をあげてみると、標準語の平板型は必ず最初の音が後よりも低いはずであるが、この地方のアクセントにはそれのないものが多い。ないというよりは、聞き分けのつかないと言った方が適当かもしれない。普段の会話でも注意し、音韻調査用の録音を聞いてみたが、やはりあいまいである。山名邦男氏は、「折立・平谷・重里等では全平調式になる傾向がある。」と記しておられる。

起伏型の場合でも同じことが言える。中高型の場合でも第一音節と第二音節の差はつけ難く、強いていうなら尾低型とも言えるようである。ところが、山名氏は、「然し乍ら之を丁寧に一つ宛区切って発音させる場合には(或いはくり返して読ませると、)中高型が保たれている」と言っておられる。残念ながら自分はこゝまで試みなかったが、中にははっきり第一音節を低

く読んでいる人も幾らか居たし、また各語によって一つ一つ違う人も居た。結局これは区別があるわけでもなさそうなので、ここでは標準語と同じ平板型・起伏型として取扱うことにする。

〔名　詞〕

o一音節　蚊ガ——。日ガ——。火が——。子。名。手。戸ガ——。葉ガ——。木ガ——。

自分の調べたこの9語の中では長音になるものは一語もなかった。所が音韻調査用の録音テープの中では「カァ（蚊）」「ヒィ（日）」と少々長めになっている。しかし、関西特有の屈折する語は見られなかった。従って、長音と決めつけるには短かすぎると言った所である。子供達に〝蚊がとんできた〟という意味のことを言わせると、「カァトンデキタ」と助詞「ガ」がぬけている。しかし、録音の中で80才の老人(女)は「カァガクイツイタ　(蚊が刺した)」とちゃんと助詞を入れている。この点についてはもっと詳しい調査が必要だったろうが準備不足でもあったし、幸いアクセントからはずれるので省かせて頂く。

自分の調べた中には長音はなかっよのでそれだけではアクセントは決められない。そこで助詞を連ねてみると標準語と異っているものがあった。「日が」「葉が」がそれで、いずれも平板型であるものはこゝではアクセントがついている。しかもそれは西国式アクセントでは正しいものである。〔但し関西人は助詞を省くため長音になりがちであるが、読字の場合はこうなる。(自説)〕こうしたあたりは同じ関西にあって何かを関係づけたいものである。

o二音節

この中では全く例外なく30語とも標準語と同じであった。たゞ蜘（くも）のクモになったのが二人だけあった。

ところがこれが助詞に連なる場合、次の様になっている。

ミズの	ヤマの	フネの
ミズへ	ヤマへ	フネへ
ミズも	ヤマも	フネも
ミズだ	ヤマだ	フネだ
ミズは	ヤマは	フネは
ミズを	ヤマを	フネを
ミズに	ヤマに	フネに

アクセントが第一音節に半分かゝっているのは先に説明した高低あいまいなことを示している。

この事から言えることは、

o頭高型の場合は全く標準語と一致する。

o尾高型の場合もやはり標準語と同じく、「の」を例外にしなければならない。

o平板型の場合は「へ」「も」が例外となる。勿論「の」は標準語と同じく平板型にはそのまゝつく。

ということになる。こゝで問題になるのはやはり平板型の場合であって、外にも平板型に低くつく助詞があるのではないかと予想される。なお、これらの中にも例外があったがその数は1～2名で、しかもそれは同一人物でない。

o三音節

20語調べて平板．頭高．中高．尾高と四種とも見られたが、この中には標準語との違いがかなり見られた。しかもその違いはいずれも関西のものと一致していない。これはこの土地特有のアクセントとして残ったものであろう。

〔例〕　イノチ　クスリ　ナミダ　タライ　メガネ　タマゴ　ミウベ

こゝにあげられるのはこの程度だが、資料が多ければもっと沢山現われたことだろう。

なお、この件に関しては、山名氏が平谷・重里以外の土地とも比較し、例をあげて詳しく述べておられるので、その中を探してもかなり見つかる。特に中高型の部に属するものが多いようだが、それらの中には自分の調査と違うものも2.3見られる。

〔形　容　詞〕

o二音節

「良い」と「無い」だけしか調べていないが、いずれも頭高型である。山名氏は「形容詞」の二音節語は頭高一型に統一される。」と説いておられる。

o三音節

1.	赤　アカイ	10.	熱　アツイ
2.	白　シロイ	11.	アカクナル
3.	遅　オソイ	12.	シロクナル
4.	速　ハヤイ	13.	アカカッタ
5.	軽　カルイ	14.	シロカッタ
6.	高　タカイ	15.	ウレシイ
7.	甘　アマイ	16.	カナシイ
8.	強　ツヨイ	17.	オイシイ
9.	厚　アツイ	18.	タヨリナイ

平板型と中高型とに分かれた。列挙した語を子供達がちゃんとこの二種に使い分けて読んで行く所は非常に興味がある。しかもそれらは全く標準語の場合と一致している。ところが、平板型の語を次の様に活用させるとこの様に違っている。

アカイ→アカカッタ（赤い）

これを標準語で言えば「アカカッタ」である。日本放送協会編のアクセント辞典によると、「この形は一代前には、アカカッタ・ツメタカッタ、だったと推定される。」となっている。同様に田代晃二氏著の「標準語のアクセント教本」でも重かったの如き「〜かった」は語源的には〜かったであっていいと思われるが、現在は〜かったとなっている。東京語の頭高化的傾向の一つのあらわれとも見られるであろう」と記してある。そうするとこゝでは一代前のアクセントがそのまゝ保存されているのであろうか。

○四音節

こゝには平板型のものがないように思える。標準語で平板型の「カナシイ」「オイシイ」までも中高型になっている。しかしこれには数多く当ってないので断言出来ない。

五音節の場合は標準語に従ってもほとんど中高型だし、

中板のものさえも中高に言うようだからこの地方では四音節以上の形容詞はすべて中高型ではないかと考える。

〔動　　詞〕

終止形の場合、二音節１２語のうち「オル（居る）」、三音節語１５のうち２語を除いて、大体標準語と変りはなかったが、これを活用させるとかなりの違いが表われた。その１つは丁寧語「マス」に連る場合で、この「ス」が無声化しない為か、最後まで同じ高さでついて来ている。

ナカナイ	ナケ	ナクナ
カカナイ	カケ	カクナ
オラナイ	オレ〔4〕	オルナ
アケナイ	アケヨ（4）	アケルナ
カケナイ	カケヨ（1）	カケルナ（5）
アルカナイ	アルケ	アルクナ
オヨガナイ〔2〕	オヨゲ	オヨグナ
アガラナイ〔1〕	アガレ	アガルナ

外の場合でもこの表でわかるように、平板型であるものが中高に、或いは中高のものが平板にとまちまちである。殊に「ナイ」に連なる場合は形容詞的になるためか、四音節以上の形容詞で述べた全中高型の見方がなされるようである。また、「居る」などは終止形のアクセントから違うためかなりの例外も生れている。また「掛ける」「明ける」などの命令形は意味がよくつかめないためか結果も乱れている。動詞についてはより一層詳しい研究が必要である。（萩原正見）

3. 語 彙 調 査

この語彙調査は近畿方言学会刊「近畿方言調査簿」の語彙の項から抜萃したものである。

第一に調査した語彙の中で、小学生から８０代まで共通語と全く、或はほとんど同じ語を使うのは「じゃんけん」「咳」「くしゃみ」「あした」「あさって」「こども」「ひゃくしょう」「こじき」「葬式」「らいねん」「薪」「踏台」「はたき」「にわとり」「おたまじゃくし」「つくし」「大豆」「さつまいも」「じゃがいも」「雷」「虹」「みずすまし」である。第二に共通語でないが（方言）、各世代同じ語を使うものとして「おにごと・いぬごと（鬼事遊び）」「おじゃみ（お手玉）」「さくばり（トゲ）」「あほんだら（馬鹿）」等がある。第三に一つの語に対して種々な言い方をするものとして、「片足飛び」「踵」「あぐら」「台所」「禿頭」「父」「母」「娘」「大晦日」「ざる」「とうもろこし」「平杼棒」「草叢」がある。「すわる」という語の場合に、「椅子」に対しては「すわる」「畳」に対しては「つくばる」「かしこまる」というように使い分けをしている。

以上は概略を説明したのであるがもう少し細部に目をやってみよう。

まず最初に重里小学校３年・６年．中学校３年の比較をすると、「鬼事遊び」は「おにごっこ」「おにごと」「おにごと」となり、高学年になるにつれて「～ごっこ」という幼児語が少なくなる。「片足飛び」は「ちぎっちょ」「けんけん」「ちんちん」．「あぐら」は「いたぐら」「いたぐら」「あぐら」．「台所」は「ながし」「ながし」「台所」となっている。

一方平谷小・中学校では「舌」は「したべろ」「したべろ」「した」．「踵」は「あしのとも」「とも」「かかと」．「あぐら」は「いたぐら」「いたぐら」「あぐら」．「娘」は「おんなのこ」「おんなのこ」「むすめ」となり、他の語においても高学年になるにつれて共通語を話す割合が高くなっている。しかし中には、「やまくずれ」「やまくずれ」「くえ」のように高学年になるにつれて方言を話す割合が高くなる語もある。これは大人の世界に入り、大人について山仕事等に行き、そこで大人の言葉を学ぶ、即ち生活と密接な関係が生じてきたからであろう。また、「結婚」「葬式」「大豆」「じゃがいも」等は共通語と同じであるが、これは子供の生活と関係がなかったり、農業として作る場合が少なかったりして生活と密接な関係

がないからであろう。即ち生活と密接な関係のある語句は方言を使う可能性が強いように思われる。

次に平谷と重里の学校差を見ると全体的に特別著るしい差はない。強いて例を出せば「鬼事遊び」と「蝸牛」位であろう。しかしこれは学校差というよりはむしろ地域においての差であろうと思われる。それでは平谷と重里との地域的見地からその違いを見てみよう。調査全体を通して言えることであるが、「鬼事遊び」を平谷では「いぬごと」といい、重里では「おにごと」と言っている。平谷小3・6．中3では「いぬごと」が100％．86％．84％で平谷では中3で「おにごと」16％が出てくるだけであり、一方重里では「おにごと」が44％．68％．76％で「いぬごと」は0％である。「蝸牛」は「鬼事遊び」のように大きな違いはないが平谷では「でんでんむし」、重里では「かたつむり」となって距離的にそう隔たっていない二集落において差が生じている例がある。

次に各年代層の違いはどうなっているか見てみよう。各年代とも共通語と全く同じものもあり、また「おじゃみ」「さくばり」のように方言として全く同じ語を使う場合が多いが、他の語において特に著しく差が生じているのは40代以上と20代以下である。わかり易いように表にしてみると次のようになる。

共通語＼年代層	80.60.40代	20代	児童・生徒
片足飛び	ちぎっと	ちぎっと・けんけん	けんけん
舌	ひた・へたね	した	した
踵	あしのとも・とも	かかと・とも	かかと・とも
あぐら	うたぐら	あぐら	あぐら
片目	がんち・がんち目	かため	かため
間食	けんずい	やつ・けんずい	やつ・おやつ
昨晩	やぜん・ゆんべ	ゆうべ	ゆうべ
親類	いっけし	しんせき・しんるい	しんせき・しんるい
便所	せんち	べんじょ	べんじょ
山崩れ	くえ	やまくずれ	やまくずれ
甲虫	かむとむし	かぶとむし	かぶとむし

このように40代以上と20代以下とでは相当大きな差があるが、20代以下に共通語化が

進んでいるのは戦後の教育を受けた、マスコミの影響。交通の発達により他都市に出かける機会が多くなったことなどが理由となっているのであろうが、共通語化を進めた一番の原動力は何といっても国語教育であろうと思う。戦前においても共通語を使うよう指導されたが、あまり形式主義になり効果がなかった。しかし最近になって教師自身が共通語を体得し内容的に共通語化を押し進めていったという考え方は私自身の独断であろうか。それではここで共通語化を進める条件にはどのようなものがあり、またどの条件が調査校の児童生徒をして共通語を話すように働きかけたか考えてみよう。共通語化を支配する条件には種々あるがこの中から、児童生徒に関係あるものを4つあげてみると、本人の生育地・両親の生育地・マスコミ・学校教育である。これを今回の調査の対象となった児童生徒にあてはめて考えてみると、本人・両親共に十津川で生育した者という条件の下に調査したのであるから問題にはならない。次にマスコミの影響であるが各個人ともテレビ・ラジオ・新聞の有無及び利用程度を調べたので、これと比較しながら共通語化を調べてみたところ次のような結果がでた。

平谷の小中学校	語彙／利用度	たいよう	おひさん	した	したべろ	あぐら	いたぐら	べんじょ	せんち
小3	よく利用する	54%	32%	40%	35%	0%	65%	40%	0%
	あまり利用しない	46%	68%	60%	65%	0%	35%	60%	0%
小6	よく利用する	56%	50%	70%	80%	0%	74%	45%	100%
	あまり利用しない	44%	50%	30%	20%	100%	26%	55%	0%
中3	よく利用する	64%	42%	84%	60%	75%	100%	68%	75%
	あまり利用しない	36%	58%	16%	40%	25%	0%	32%	25%

(注．重里小・中学校の場合も同じ傾向)

マスコミの影響については以上のような結果となったが、全体的に見た場合、マスコミの影響が強く表われていない。これは調査に欠陥があったということもあろうが、むしろマスコミは直接には共通語の理解を高めることに影響するが、話すことや、書くことにはそう強く影響しないということになるのではないかと思われる。しかしはっきりしたことは分らない。では学校教育はどうであろうか。生育地や居住状況が言語形成期の児童に影響力をもつことは大きいが、この影響力というのも地域社会の言語を獲得するのに作用するのであって、共通語を広めて行くことは少なく、却って共通語化を防げる傾向にあるのではないか。このように考えて

くると共通語が大巾に広げられて行くのは学校教育であろうと思われる。小学校3年生は方言を話す率が高いが学年が進むにつれて共通語に変る傾向があるというのも、小学校3年では両親や祖父母の影響が大きく、高学年になるにつれて学校における教育の力が影響を及ぼしたと説明できるのではないだろうか。これぱかりではない、先日市内で十津川から来られたある老人にお会いしたので、いろいろと聞いてみたところ、子供を通じて知った言葉（共通語）が相当あるとのことであった。このことからも両親等が児童生徒の言語を左右すると同時に、児童生徒を通じて両親及び祖父母までに共通語化が及んでいることも分かる。以上の結果から断定を下すのは危険であるが、共通語化を進める最大の原動力は教育であるという認識をさらに強めた次第である。（中尾和男）

共通語	方言（重里小学校・3年）			方言（平谷小学校・3年）		
鬼事遊び	おにごっこ	おにごと		いぬごと		
	56%	44%		100%		
肩車	かたぐるま	かたうま	てんぐるま	くびうま	かたうま	
	46	36	18%	94	6%	
片足飛び	ちぎっちょ	けんけん	けんば	けんけんとび	けんけん	けんば
	36	24	24	48	42	10%
	けんけんとび					
	16					
じゃんけん	じゃんけん	じゃいけん		じゃいけん	じゃんけん	じいけん
	94	6		62	30	8
ままごと	ままごと	みしやごと	みせやごと	ままごと		
	86	10	4	100		
舌	したね	した	へたね	したべろ	した	
	86	10	4	58	42	
踵	あしのとも	とも	かがと	あしのとも	とも	あしのうら
	42	30	18	92	4	4
	かかと					
	10					
禿頭	つるきん	きんかあたま	はげちゃびん	はげちゃびん	きんかんぼうず	きんかんあたま
	36	32	12	72	18	10
	きんかん	はげあたま				
	12	8				
片目	かため			かため	めっかち	
	100			94	6	
朝食	あさめし	あさごはん		あさめし	あさごはん	
	54	46		50	50	

間食	やつ	おやつ	けんずい	おやつ	やつ	
	78%	16%	6%	84%	16%	
今晩	こんや	こんばん		こんばん	こんや	
	66	34		62	38	
一昨日	おとつい	おととい		おとつい	おととい	
	94	6		86	14	
大晦日	おーつもごり	おーつごもり	おおみそか	おおみそか	おーみそか	おおつもり
	46	38	6	46	24	10%
	せっき	おおつもり		つもごり	せっき	
	6	4		10	10	
父	おとさん	とーちゃん	おとうさん	とおちゃん	とおさん	
	38	24	16	88	12	
	とおちゃん	とお				
	12	10				
母	おかさん	かぁちゃん	かぁさん	かぁちゃん	おっかさん	おかあさん
	38	28	14	92	4	4
	おかあさん	かあ				
	12	8				
娘	おんなのこ	むすめ	おんな	おんなのこ		
	32	28	24	100		
	名前をいう	あま				
	10	10				
こども	こども	ちびっこ	がき	こども	ちび	ちんぴら
	74	14	12	72	14	7
				がき		
				7		
親類	しんせき	しんるい	いっけし	しんせき	しんるい	
	66	26	8	78	22	
僧侶	ぼんさん	ぼうさん	ぼおさん	ぼんさん	ぼうさん	ぼうず
	38	24	24	68	20	12
	ぼうず					
	14					
きこり	きこり	やまいき	やまし	きこり	やまいき	
	88	6	6	92	8	
こじき	こじき			こじき	じんき	
	100			84	16	
腫物	できもの	くさりぶつ	はれもの	できもの	できもん	
	88	8	4	88	12	

共通語	方言（重里小学校・3年）			方言（平谷小学校・3年）		
咳	せき	せきばらい		せき	せく	
	70%	30%		94%	6%	
あぐら	いたぐら	あぐら	おたぐら	いたぐら	いたくら	ひざくむ
	55	16	16%	72	22	6%
	ふたぐら	ひざくむ				
	9	4				
台所	ながし	たのもと	だいどころ	ながし	すいじば	
	40	22	15	76	24	
	たなもと	かって				
	12	11				
居間	かって	いま	だいどころ	おへや	かって	おいえ
	52	24	12	28	22	22
	へや			いま	だいどころ	
	12			14	14	
便所	べんじょ	せんち		べんじょ		
	78	22		100		
ばか	あほんだら	あほ	ばか	あほんだら	ばか	すかたん
	50	44	6	62	22	12
				あほ		
				4		
うそ	うそ	うそっぱち	うそつき	うそ	うそっぱち	うそばち
	75	18	7	38	32	18
				うそつき		
				12		
いくじなし	こわがり	いくじなし	よわむし	いくじなし	こわがり	よわい
	25	25	21	56	36	8
	さぶしがり	おくびょうもの				
	17	12				
さかさま	さかさま	さかだち	はんたい	さかさま		
	65	20	11	100		
	あべこべ					
	4					
結婚	けっこん	よめいり	よめとり	けっこん	えんぐみ	
	86	7	7	88	12	
葬式	そうしき			そうしき	おくり	
	100			94	6	
かかし	かがし	かかし		かがし	おどし	
	66	34		92	8	

薪	たきぎ	わりき		たきぎ	まき	
	36%	14%		92%	8%	
ざる	かご	ざる	ゆずぎ	かご	ざる	かんご
	50	18	18%	52	42	6%
	かんご	いかき				
	8	6				
ごみ	ごみ	ほこり		ごみ	ほこり	
	32	18		58	42	
太陽	たいよう	おひさん		たいよう	おひさん	おひさま
	64	36		62	24	12
雷	かみなり	ごろすけ		かみなり		
	94	6		100		
夜業	よなべ	やぎょう		よなべ	やぎょう	よしごと
	80	20		72	14	14
天秤棒	おうこ	ぼう	にないぼう	おいこ	おいこ	てんびん	かたげぼう
	76	12	6	6	61	26	13
稲架	はでば	はぜば	いなぎ	かけぼし	はでば	さがり
	74	17	10	50	32	6
				はぜ	かけば	
				6	6	
山崩れ	やまくずれ	がけ	がけくずれ	やまくずれ	がけくずれ	
	64	24	12	88	12	
草むら	くさむら	はらっぱ	くさばら	くさむら	はらっぱ	くさはら
	40	24	18	82	12	6
	くさわら					
	18					
山頂	てっぺん	てっぺんちょ	ちょうじょう	てっぺん	ちょうじょう	てっぺ
	70	12	12	70	18	12
	てっぺ					
	12					
おたまじゃくし	おたまじゃくし	がいらご	がえらご	おたまじゃくし	かえるのこ	かいるの子
	80	12	8	86	7	7
蝸牛	かたつむり	でんでんむし		でんでんむし	かたつむり	
	72	28		58	42	
甲虫	かぶとむし	かむとむし		かぶとむし	かむとむし	
	94	6		88	12	
なめくじ	なめくじら	なめくじ		なめくじ	なめくじら	まめくじ
	50	50		69	25	6

共通語	方言（重里小学校・3年）			方言（平谷小学校・3年）		
みずすまし	みずすまし			みずすまし	みずむし	
	100%			88%	12%	
つくし	つくし	つくつくぼうし	つくしのぼうや	つくし	つくつくぼうや	つくつくぼうし
	84	12%	4%	70	12	12%
				つくつくぼうず		
				6		
とうもろこし	きび	なんば	とうもろこし	なんば	なんばきび	きび
	88	6	6	40	30	24
				とうもろこし		
				6		
さつまいも	さつまいも			さつまいも	さといも	
	100			94	6	

共通語	方言（重里小学校・6年）			方言（平谷小学校・6年）		
鬼事遊び	おにごと	おにごっこ		いぬごと	おにごっこ	
	68%	32%		86%	14%	
肩車	かたぐるま	くびうま	かたうま	くびうま		
	52	32	16%	100		
片足飛び	けんけん	けんけんとび	けんば	けんけん	けんば	かたあしごっこ
	52	16	16	86	7	7%
	ちぎっちょ					
	16					
舌	したべろ	したね	した	したべろ	した	
	48	36	16	85	15	
踵	とも	あしのとも	かかと	とも	かかと	あしのとも
	42	34	16	56	22	22
	かがと					
	8					
禿頭	はげちゃびん	きんかん	つるきん	はげちゃびん	かっぱ	
	52	24	16	93	7	
	はげあたま					
	8					
朝食	あさめし	あさごはん		あさめし	かっぱ	
	68	42		93	7	

間食	やつ	おやつ	けんずい	やつ	おやつ	
	60%	24%	16%	85%	15%	
明日	あした			あした	あす	
	100			85	15	
今晩	こんや	こんばん		こんばん	こんや	
	68	42		85	15	
昨晩	ゆうべ	ゆんべ		ゆうべ		
	92	8		100		
一昨日	おとつい	おとと い		おとつい		
	84	16		100		
大晦日	おーつもごり	おーつごもり	せっき	おうつもごり	おおみそか	おおつもり
	44	32	16	51	21	21%
	おおつもり			せっき		
	8			7		
父	おとさん	とうさん	とうちゃん	とうちゃん	おかさん	かあやん
	44	32	16	65	21	7
	おとちゃん			あーちゃん		
	8			7		
母	おかさん	かあちゃん	かぁさん	かぁちゃん	おかさん	かあやん
	30	30	16	65	21	7
	おかちゃん	おかぁさん		あーちゃん		
	16	8		7		
娘	おんなのこ	おなご	おんな	おんなのこ	あま	おねいちゃん
	44	32	16	65	21	7
	あま			おねえさん		
	8			7		
子供	こども	ちび	がき	こども	こ	がき
	60	24	16	43	35	15
				やつ		
				7		
親類	しんせき	しんるい		しんせき	しんるい	
	68	32		78	22	
僧侶	ぼうさん	ぼうさん	ぼんさん	ぼうさん	ぼんさん	ぼおさん
	56	32	12	51	35	7
				ぼうず		
				7		
きこり	きこり	やまし		きこり	そまし	
	92	8		93	7	

共通語	方言（重里小学校・6年）			方言（平谷小学校・6年）		
腫物	できもの	はれもの	くさりもの	できもの	でんぼ	
	84%	8%	8%	85%	15%	
咳	せき	こんこん	せきばらい	せき		
	76	16	8	100		
くしゃみ	くしゃみ	はっくしょん		くしゃみ		
	88	12		100		
あぐら	いたぐら	あぐら	ひざくむ	いたぐら	またぐら	あぐら
	46	38	16	86	7	7%
台所	ながし	だいどころ	たなもと	ながし	たなもと	
	52	24	16	93	7	
	かって					
	8					
居間	かって	いま	へや	かって	へや	ちゃのま
	60	24	16	65	21	14
便所	べんじょ	せんち		べんじょ	せんち	
	76	24		93	7	
馬鹿	あほんだら	あほ	ばか	あほんだら	あほ	ばかやろう
	62	30	8	49	22	15
				ばけなす	ばけ	
				7	7	
うそ	うそ	うそっぱち		うそ	うそっぱち	うそつき
	76	24		58	35	7
いくじなし	いくじなし	こわがり	さむしがり	とろくさい	さむしがり	よわむし
	44	32	16	37	28	21
	おくびょうもの			いくじなし	こわがり	
	8			7	7	
さかさま	さかさま	はんたい	あべこべ	さかさま	さかとんぼ	
	68	24	8	78	22	
結婚	けっこん	よめとり		けっこん	よめいり	
	84	16		93	7	
かかし	かがし	かかし	おどし	かかし	かがし	おどし
	53	26	16	58	35	7
薪	たきぎ	わりき		たきぎ		
	76	24		100		
ざる	かご	ざる	かんご	かご	ざる	かんご
	44	24	16	59	27	7
	ゆすぎ	いかき		ゆすぎ		
	8	8		7		

ごみ	ごみ	ほこり		ごみ	ほこり	
	84%	16%		65%	35%	
太陽	たいよう	おひさん		たいよう	おひいさん	おひさん
	84	16		72	14	14 %
夜業	よなべ	やぎょう	てつや	まなべ	やぎょう	てつや
	60	24	16%	59	27	14
天秤棒	おこ	てんびん	にないぼう	てんびん	てんびんぼう	おこ
	52	16	16	51	21	14
	かたげぼう	おうこ		にないぼう	おうこ	
	8	8		7	7	
稲架	はでば	はぜば		はでば	はぜば	はでは
	76	24		65	28	7
山崩れ	やまくずれ	くえ		やまくずれ		
	68	32		100		
草むら	くさはら	くさむら	くさわら	くさはら	くさわら	くさむら
	52	24	16	65	14	7
	はらっぱ			はらっぱ	くさばら	
	8			7	7	
山頂	てっぺん	ちょうじょう		ちょうじょう	てっぺん	
	84	16		58	42	
おたまじゃくし	おたまじゃくし	かえるご		おたまじゃくし		
	84	16		100		
蝸虫	かたつむり	でんでんむし		でんでんむし	かたつむり	ででむし
	54	46		47	46	7
なめくじ	なめくじ	まめくじ	なめくじら	なめくじ	なめくじら	
	76	16	8	52	48	
猿	さる			さる	えてこ	
	100			86	14	
とうもろこし	きび	なんば	とうもろこし	なんばきび	きび	とうもろこし
	52	24	16	65	21	14
	なんばきび					
	8					
じゃがいも	じゃがいも			じゃがいも	にどいも	
	100			86	14	

共通語	方言（重里中学校・3年）			方言（平谷中学校・3年）		
鬼事遊び	おにごと	おにごっこ	しんげき	いぬごと	おにごと	
	76%	16%	8%	84%	16%	
	くびうま	かたぐるま	ちちうま	くびうま	かたうま	かぜぐるま
	44	32	16	68	16	8%
肩車	かたうま			かたぐるま		
	8			8		
片足飛び	ちんちん	けんけん	けんけんとび	けんけん	けんけんとび	けんば
	44	16	16	84	8	8
	ちぎっと	けんば				
	16	8				
舌	したべろ	したね	した	した	したべろ	べろ
	60	32	8	42	42	16
踵	とも	あしのとも	かかと	かかと	あしのとも	かがと
	44	24	16	60	24	8
	かがと			とも		
	16			8		
禿頭	はげちゃびん	はげあたま	100W	はげちゃびん	きんかん	
	84	8	8	92	8	
片目	かため			かため	がんち	めっかち
	100			84	8	8
朝食	あさめし	あさごはん		あさめし	あさごはん	あさはん
	76	24		76	16	8
間食	やつ	けんずい		おやつ	やつ	おちゃ
	76	24		68	16	8
				けんずい		
				8		
今晩	こんや	こんばん	ようさ	こんや	こんばん	
	76	16	8	68	32	
昨晩	ゆうべ	ゆんべ		ゆうべ	ゆんべ	さくばん
	92	8		68	24	8
一昨日	おとつい	おととい		おとつい	おととい	さきのおとつい
	90	10		44	24	24
				さきおととい		
				8		
大晦日	おうつもごり	おおつもごり	おーつごもり	おーつごもり	おーつもごり	おおつもごり
	50	30	20	52	24	16
				おーつももり		
				8		

父	おとさん	とうさん	とうちゃん	おとさん	とうちゃん	とおさん
	52%	24%	16%	52%	16%	16%
	おとちゃん			とお	おとちゃん	
	8			8	8	
母	おかさん	かあちゃん	おかあさん	おかさん	かあちゃん	かあさん
	30	30	16	44	24	16
	かあさん	おかちゃん		かあ	かあちゃん	
	16	8		8	8	
娘	おんな	おんなのし	おなご	むすめ	あま	おんなのこ
	44	32	16	36	32	32
	おんなのこ					
	8					
子供	こども			こども	ちび	がき
	100			60	24	8
				ちんびら		
				8		
親類	しんせき	しんるい		しんせき	しんるい	
	60	40		50	50	
僧侶	ぼおさん	ぼうさん		ぼうず	ぼうさん	ぼんさん
	67	33		52	32	8
				ぼおさん		
				8		
きこり	きこり			きこり	やまし	ひよし
	100			76	8	8
				そまし		
				8		
腫物	できもの	くさりぶつ	かさぶつ	できもの	おでき	
	70	24	6	84	16	
咳	せき			せき	せきばらい	
	100			76	24	
くしゃみ	くしゃみ	はっくしょん		くしゃみ	はっくしょん	
	68	32		92	8	
あぐら	あぐら	ふたぐら	いたぐら	あぐら	いたぐら	うたぐら
	34	34	16	60	16	16
	うたぐら			ひざくむ		
	16			8		

共通語	方言（重里中学校・3年）			方言（平谷中学校・3年）		
台所	だいどころ	かって	ながし	ながし	だいどころ	たなもと
	64%	24%	6%	52%	24%	16%
	たなもと			かって		
	6			8		
居間	かって	とこのま		かって	いま	おくのま
	75	25		76	16	8
便所	べんじょ	せんち	こうやさん	べんじょ	せんち	
	60	32	8	68	32	
踏台	ふみだい	くろがけ	こしかけ	ふみだい	あしつぎ	ふみつぎ
	76	8	8	84	8	8
	ふみつぎ					
	8					
馬鹿	あほんだら	あほ		あほんだら	あほ	ばか
	67	33	6	60	24	8
				ぼんくら		
				8		
うそ	うそ			うそっぱち	うそ	
	100			54	46	
いくじなし	いくじなし	さむしがり	おくびょうもの	いくじなし	かいしょなし	よわむし
	52	16	16	60	16	8
	こわがり	さみしがり		おくびょうもの	どぐさい	
	8	8		8	8	
さかさま	さかさま	はんたい	あべこべ	さかさま	さかとんぼ	はんたい
	46	46	8	52	32	8
				さかさ		
				8		
かかし	かがし	かかし	おどし	かかし	かがし	おどし
	60	32	8	44	40	16
薪	たきぎ			たきぎ	わりき	
	100			84	16	
ざる	かご	かんご	ゆすぎ	かご	ゆすぎ	ざる
	60	24	16	36	24	16
				かんご	いかき	
				16	8	
ごみ	ごみ	ごみくず	ほこり	ほこり	ごみ	
	84	8	8	54	46	
太陽	たいよう	おひさん		たいよう	おひさん	
	92	8		60	40	

共通語	方言（重里中学校・3年）			方言（平谷中学校・3年）		
夜　業	よなべ	てつや	やぎょう	よなべ	てつや	やぎょう
	76%	16%	8%	60%	24%	16%
天秤棒	おこ	おーこ	ぼう	やまくずれ	くえ	
	60	16	88	84	16	
	にないぼう	おいこ				
	8	8				
稲　架	はでば			はでば	はぜ	はで
	100			52	24	16
				はぜば		
				8		
山崩れ	くえ	がけくえ	くれ	やまくずれ	くえ	
	60	16	8	84	16	
	くえがけ	やまくずれ				
	8	8				
草むら	くさわら	くさはら	くさむら	くさむら	くさはら	くさわら
	60	16	8	44	24	16
	くらわら	くさばら		かりば	くさばら	
	8	8		8	8	
山　頂	てっぺん	てっぺんちょ		てっぺん	ちょうじょう	てっぺんちょう
	92	8		68	24	8
おたまじゃくし	おたまじゃくし	かえるご		おたまじゃくし	かえるご	
	92	8		92	8	
かたつむり	かたつむり	でんでんむし	ででむし	でんでんむし	かたつむり	なめくじ
	52	40	8	52	40	8
なめくじ	なめくじ	まめくじ		なめくじら	なめくじ	まめくじ
	84	16		44	24	24
				まめくじら		
				8		
みずすまし	みずすまし	みずむし		みずすまし	みずむし	
	92	8		92	8	
猿	さる			えてこ	さる	
	100			50	50	
つくし	つくし	つくしのぼうや		つくし	つくつくぼうし	つくしんぼ
	92	8		44	40	16
とうもろこし	きび	なんば	なんばきび	きび	なんば	なんばきび
	76	16	8	52	24	24

共通語	80代	60代	40代	20代
鬼事遊び	おにごと いぬごと	おにごと いぬごと	おにごと いぬごと	おにごと いぬごと
肩車	くびうま くびぐるま	くびうま くびぐるま	くびうま くびぐるま	かたぐるま
片足飛び	ちぎっと	ちぎっと	ちぎっと	ちぎっと けんけん
ままごと	ままごとあそび	ままごとあそび	ままごと	ままごと
舌	ひた へたね	へたね べろ	べろ したべろ	した
踵	あしのとも とも	あしのとも とも	あしのとも とも	かかと とも
禿頭	はげちゃびんきんかん きんかんあたま	はげあたま きんかんあたま	はげあたま	はげあたま
片目	がんち がんちめ	がんち がんちめ	がんち がんちめ	かため
間食	けんずい	けんずい	けんずい やつ	けんずい やつ
明日	あした	あした	あした	あした あす
昨晩	やぜん ゆんべ	ゆんべ よんべ	ゆんべ	ゆうべ
一昨年	おつとし おととし	おととし おとどし	おととし おとどし	おととし おとどし
大晦日	おーつもごり	おーつもごり	おーつもごり	おーつごもり おーみそか
父	おとよ おとさん	おと おとさん	おとさん おとうちゃん	おとさん とおちゃん
母	おかよ おかさん	おか おかさん	おかさん おかぁちゃん	おかさん かあちゃん
娘	あま おんなのこ	あま むすめ	むすめ	おんな むすめ
子供	こども がき	こども がき	こども	こども
親類	いっけし しんせき	いっけし しんせき	いっけし しんるい	しんせき しんるい
きこり	そまし	そまし	そまし ひおし	きこり
あぐら	うたぐら	うたぐら	うたぐら	あぐら
台所	だいどこ すいじば	すいじば かって	すいじば かって	だいどころ
居間	かって	かって	かって	かって いま
便所	せんち	せんち	せんち	せんち べんじょ
ばか	あほんだら	あほんだら	あほんだら	あほ あほんだら
いくじなし	よわむし おくびょう	よわむし おくびょう	よわむし とろくさい	いくじなし
結婚	しゅうげん	よめいり	よめいり	けっこん
かかし	かがし	かがし	かがし	かがし かかし
ざる	いかき	いかき	いかき	かご いかき
太陽	おひさん にちりん	おひさん ひー	おひさん にうこうさん	おひさん たいよう
天秤棒	おーこ	おーこ	おーこ	おーこ てんびんぼう
稲架	はでば	はでば	はでば	はでば
山崩れ	山くえ	くえ	くえ	やまくずれ
草むら	かりば くさばら	くさばら	くさばら	くさむら くさばら
山頂	てっぺ	てっぺ	てっぺん	てっぺん

蝸　牛	かたた	かたた	でんでんむし	かたつむり
甲　虫	かむとむし	かむとむし	かむとむし　かぶとむし	かぶとむし
なめくじ	まめくじ	まめくじ　まめくじら	まめくじら	なめくじ
とうもろこも	なんば　なんばきび	なんば　なんばきび	きび　なんば	きび　なんば
じゃがいも	じゃがたらいも	じゃがいも	じゃがいも	じゃがいも

4. 語　法　調　査

1.語法の分野についても、吉野郡十津川村平谷・重里両地区に於ける児童生徒の言語生活の実態を知るべく調査にあたったわけであるが、今回はそのうち特に興味あると思われる「助詞」「助動詞」を採り上げることにした。調査にあたっては、両地域の中学生（3年）小学生（6年）及び20才前後．70才前後の一般人を対象とした。なお、これらの児童生徒は両親あるいは片親が当地出身である事を原則とし、一般人についても、当地出身者を選んだことは他の分野の場合と同じである。

調査方法としては、「近畿方言学会編　・方言調査簿」を参考に、小中学生に日常用語となっているもの、あるいは調査を必要とする助詞・助動詞の用法の明らかなもの、を配列し、それぞれについて予想される言い方を可能なかぎり列挙したプリントを配布し、被調査者には彼等が日常最もよく使用する言い方を選び、またそれらのことば群にない場合には、空欄に記入することを依頼した。こうしたプリント方式については多くの欠陥が伴うのであるがなるべく多数の被調査者を得たいため敢えてこの方法をとり、できるだけ多くの調査者を配して、より正確な結果を得るよう努力した。これによって得られた結果は次のようである。

2. 〔助　動　詞〕

o　使　　役　「ス・ラス・サス」

「戸ヲアケラス」が多いが、重里小の「アケラセル」は興味ある現象である。

過去になると「腰ヲカケラシタ」が一般人で、小学校では「サシタ」中学校では「サセタ」となっているのは、学校教育の顕著な影響といえよう。

o　可　　能

「字ヨーカク」「ヨーカカン」の形で表わす。

o　尊　　敬

「先生ガ本ヲ読ム」「本ヨミョール」がほとんどで、中学生の「ヨマレル」（1．2名）を除いては、尊敬の助動詞は存在しないようである。

o　打　　消「ン・セン・（過去）ナンダ」

「聞カン」「聞キャセン」「勉強セナンダ」が使われる。

o 願　望「タイ・ター」

「遊ビニ行キタイ」「行キター」の両方があるが、興味あることは、それに地域差が見られることである。すなわち、平谷では「タイ」が、重里では「ター」がそれぞれ年令に関係なく多くなっている。

o 断　定「ジャ・ダ・ヤ・（丁寧にいう場合）デス」

「学校ジャ」重里に特に多い。また丁寧な場合の「デス」は老令者にはみられない。

3.〔助　　詞〕

o 格 助 詞

(イ) 主　格

「子供ナキョール」のように、主格の助詞は省略されるが、小学校では助詞を用いた言い方を多く選んでいる。

(ロ) 目 的 格

「本ヲヨム」「本ヨム」二通りの形があり、むしろ助詞を入れる者の方が多い。

(ハ) 対象語格

（本のよめる人）の場合「ノ・ガ・ヲ省略」の様々の言い方があり、その用法は一定しないようである。

(ニ) 準体助詞

「行クノハスカン」「行クノン・・・」「行クノ・・・」「行クナー・・・」等の形がある。

(ホ) 並　列

「—ノ—ノ・—トカ—トカ・—ヤタラ—ヤタラ・—ラ—ラ・—ジャ—ジャ」という言い方がある。「行クトカ行カントカユーテ・・・」の形が最も多い。

「ヤ」では「—ヤ—ヲ・—ヤ—ヤヲ・—ヤラ—ヤラ」「—トカ—トカ」「—ラ—ラヲ」の形がある。

(ヘ) 場　所

「ニ」と「ヘ」の区別はなく、共に使用されるが、「イ」の形であらわれることもある。

「町イイク」。

(ト) 引　用

「ト」が「トイウ」の形で用いられる時には「チュウ」と、融合してあらわれる。また、

「ト」が省かれて、「木村ニウ人」となる。

(チ) 比　較

「コレハソレヨリ大キイ」となる。「ヨリ」の他「ヨカ」「ヨリカ」も少しある。

(リ) 限　定

「コンダケシカナイ」という形が多いが、老令者には「ハカ」「ハッチャ」がある。

o 接 続 助 詞

(イ) 順接条件

仮定順接条件「助ケテヤッタライイノニ」既定順接条件「雨フッタラ地カタマル」がそれぞれ最も多いが、仮定と既定とを明確に区別しない。また一般の人には各々「助ケテヤリヤイイノニ」「雨フリヤ地カタマル」の形が多い。

(ロ) 逆接条件

(デモ)「イクラ先生デモソレハヒドイ」が多いが「ヤカテ・ジャッテモ」がある。

(ケレド)「行キターケンド金ナーヨ」となるが、平谷では「ケド・ケレド」が時々使われるようである。

(ノニ)「セッカク植エタノニミナカレタ」がすべてであるが、「ノニカラ」が少しあるようである。

(ハ) 理由原因

「ヤカマシイカラネレン」は大体平谷に多く、「ヤカマシイスカネレン」は重里に多くある。「ヨッテン・サカイニ」もある。

(ニ) 同 時 態

「クイモーテ話ス」が最も多く、「ナガラモッテ・・・ツツモッテ．モテ」がある。

o 係　助　詞

(イ) 区　別

「雪アンマリ降ラン」のように「ハ」を省略することもある。「雪ンアンマリ降ラン」の「ン」を使う場合も多い。

(ロ) 強　意

(コソ)「今ナリヤコソ言ウンダ」が多い。「今ジャスカ．ヨッテ．サカイニ（一般）」もある。

(デモ)「子供デモ知ッテル」が大体一定して使われるようであるが、「子供デサエ．ジャカテ．ヤッテモ」等がある。平谷の中学生では特に様々な言い方があるようである。

(ハ) 限　定

小中学生には「タッター本シカナイ」が圧倒的に多いが、一般人には「ダケシカ．ハカ．ハッチャ」がある。ここでは共通語の滲透が強くあらわれている。

o 副　助　詞

(イ) 程　度

小中学生の「ホド」に対して、一般は「グライ」を多く使っている。重里中には「一里グライホド」がある。

(ロ) 限　度

「オレダケ行ク」がいずれも多いが、平谷では「バッカ」重里では「ダッケ」もそれぞれ使われるようである。

(ハ) 選択強意

「ナット．ナト．ナート．デモ」がある。「ドコヘナトカッテニ行ケ」。

重里では、学生・一般人共に「ナート」の形を多く使用し、平谷では様々な言い方がある。

また一般には「ナリト」から変わったと思われる「ナイト」が使われる。

(ニ) 列　挙

「柿ヤラ栗ヤラタベル」が多いが、「—ヤタラ—ヤタラ・—ラ—ラ」も使われている。

「—ラ—ラ」の形は一般人に多い。

(ホ) 不確定

「ドコドニアルヤロー」「ドッカニ」は平谷に多く、「ドコソニ・ドクソニ」は重里に多い。

o 文　末　助　詞

(イ) 疑　問

いずれも「カ」を用いる。「モウイヌノカ」

(ロ) 禁　止

小中学生は「ナ」・一般人は「ナヨ」の結果があらわれている。

(ハ) 念を押す

「ゾ・デ・ゼ・ヨ・ド」が使われ、重里中では「机ノ上ニアロウガイダ」の形がある。

「ド」はぞんざいな言い方である。

(ニ) 確定な断定

「行クヨ」が多い。女子には「ワヨ」がある。また平谷に「トモ」が見られるのはマスコ

ミの影響によるものだろうか。

(ホ) 強　調

「早ヨイコウラヨ」が最も多い。平谷小に「行コウッタラ」が多く見えるのはこれもまたマスコミによる影響であろう。他に「チュウノニ・チュウタラ」がある。

(ヘ) 疑　問

「デキタカー」が多く「カイ・カヨ」もある。

o 間 投 助 詞

(イ) 親　愛

「ノー・ネー・ヨー・ノーラ・ナー」

「ノーラ」は一般人に存し、中学生にも残っているが、小学生ではあらわれて来ないで、「ネー」がみえているのは、年令差による大きな相違である。

(ロ) 呼びかけ

「アンノラ」が多い。しかし小中学生ではむしろ「ノー」が多くあらわれて来ている。この地域ではよく「ノラ」がことばの終りに置かれる。「ノーラ」と発音する時は、それは念を押す意になり、「ノラ」は相手の同意を求める場合の言い方ということである。こうした特殊な言語にも当地方の人々の親しみやすい性格がよく表われているものといえよう。

3.以上の調査結果から我々は不十分ながらも平谷・重里に於ける児童生徒の言語生活の一部を知ることができよう。

願望の助動詞・選択の副助詞等にも顕著に表われているように、その地域差は大きい。この地域差は、方言の相違だけでなく、方言量においても異っているようである。主要交通路に面した平谷と、そこから奥にかなりの距離を隔てた重里とでは、自から児童生徒の生活環境も違って来るであろうことは肯首できよう。平谷の人々は奈良・和歌山両県の人に接する機会が多く、したがって方言量も増して来るのである。

また、年令差についても大きなものを示している。

前にも触れたように、「ノラ」は一般の人の間には現在も頻繁に使われているのであるが、小中学生、特に小学生ではその便が少なくなり、あるいは全くなくなっている。

彼等には、ともすると共通語を選ぼうとする傾向が見られる。こうした事実は調査法の欠陥もあろうが、小学生に於ける理解語彙・共通語の滲透度・マスコミの影響等から来る諸問題も無視することは出来ないのではなかろうか。

小学生と中学生とを比べてみると、同じことばでも、中学生は方言量が多く、小学生では限定された2.3の方言にとどまっている。その言語と子供の生活との関係や学校に於ける言語教育が、またそうした現象と強い結びつきをもっているであろうということは我々の推測するところである。

マスコミの影響その他による共通語の滲透が比較的最小限にとどまっているのは、やはりこうした地域に於ける特色と言うべきであろうが、それだけに我々は異なった心構えをもって、これらの地に当らなければならない。

例えば敬語の助動詞がみられないという事実は、児童生徒の敬語観念の甚少を物語るものであろう。

即ち、成人に比べると、言語への関心は強まって来ているというものの、児童生徒の言語生活に対する誤った習慣を是正し、正しいことばの使い方についての指導は、一層必要性を増しており、これこそ僻地に於ける今後の国語教育に課せられた最も重要な問題点としてうかび上って来ているものではなかろうか。

被調査者

平谷小学校6年生			8名
重里小学校6年生			7名
十津川第五中学校3年生			12名
十津川第六中学校3年生			11名
十津川村平谷	千葉秀樹氏	18才	男
〃 重里	深瀬好子氏	24才	女
〃 平谷	中川義親氏	72才	男
〃 重里	富谷ウメノ氏	71才	女

参考資料

「方言調査簿」　近畿方言学会編

方言辞典

大字阿町史—方言—（鈴木一男氏担当）

（田畠勤也）

平谷地区算数数学学力調査報告

算数数学研究会

一．研究経過概要
二．学力調査報告
　1. 実施した学力調査についての説明
　2. 採点結果の統計
三．教具・教材設備状況調査
　1. 調査のねらい
　2. 平谷地区小学校
　3. 平谷地区中学校
四．家庭における計量器具調査

一．研究経過概要

３５年９月２９～３０日、伺川における奈良県僻地教育研究大会に出席し、僻地教育全般についての概念・知識・問題点などをつかむことに努力した。また、授業を参観し、座談会に出席することによって、僻地教育に挺身する現場の先生方のなやみと喜びの一端を察することが出来た。

続いて、１０月１８～２１日の４日間にわたって、十津川村におもむき、平谷地区の小．中学校を歴訪、授業を参観したり、先生方と懇談。色々お話を伺ったり、この報告の主体をなす算数・数学の学力調査を行ったり、各学校にある算数・数学に関する器具．模型類の備品、生徒の家庭にある度量衡計器の実態調査を行ったりした。

現場の先生方の御指導と厚意ある御協力に感謝する次第である。

帰学後、学力調査に用いた答案の採点と統計、学校の器具模型．家庭の度量衡計器についての統計等を行って、この報告をまとめた次第である。

二．学力調査報告

1. 実施した学力調査についての説明

奈良県算数数学教育研究会は昭和３２年度より小・中学校合計９つの各学年にわたる学力テストを毎年実施している。

県下もれなく全学校が参加するまでには至っていないが、相当数の学校が協力参加されているので、統計数字に信頼がおけること、問題が概ね精選され妥当適切なること等の故に、平谷

地区の３小学校．３中学校で昭和３４年度の研究会の作成された問題を課してテストしてみた。

奈良県全体の分は３５年１月に実施され、平谷地区では３５年１０月に実施したのであるが、平谷地区では僻地の故か、奈良県全体の１月実施したテストには参加されなかったので、生徒にとっては初めてみる新しい問題である。

たゞ、１月と１０月とでは同じ学年でも実施した時期にずれがあるが、大した影響はあるまいと思われる。

実施所要時間は、小学校1.2年４０分．3.4年５０分．5.6年６０分．中学校各学年６０分である。

奈良県全体について、大・中・小の学校規模に応じて個人持点はどのように分布しているか、それと平谷地区で調査した学校の様子とはどうか、また、問題別正答率はどのようになっているか。即ち例えば文章題．量と測定．図形教材等については僻地の学校と平坦の学校では正答率がどうちがうかなど興味ある問題である。

しかし、僻地の学力実態調査と言っても、たゞ平谷地区に限り、しかも小・中それぞれ３校のみで生徒数も少ないこと故、たゞ１回のこのテストから決論的な判断を下すのは極めて危険である。

故に、この研究報告ではたゞ実施したテストについての綿密な調査統計を提出するに止め、それについての上記のような興味ある問題点についての解釈は、読者の賢明なる御判断にまかせることにする。

なお、奈良県算数数学教育研究会の昭和３４年度学力調査報告書には、各問題正答率の統計について各問題についての解答傾向が記載されているが、この報告では省いた。悉しくは、それを参照されたい。テスト問題をはじめ色々の点で資料を得たことを同研究会に感謝する次第である。

2. 採点結果の統計

○小学校一年

1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	132	7376	68.5	22.3
大規模	16	2306	70.0	22.7
中規模	92	4753	68.4	22.6
小規模	24	317	60.9	23.8
平谷三地区	3	83	45.7	
平谷地区 A	1	39	39.2	
〃 B	1	22	52.2	
〃 C	1	22	51.0	

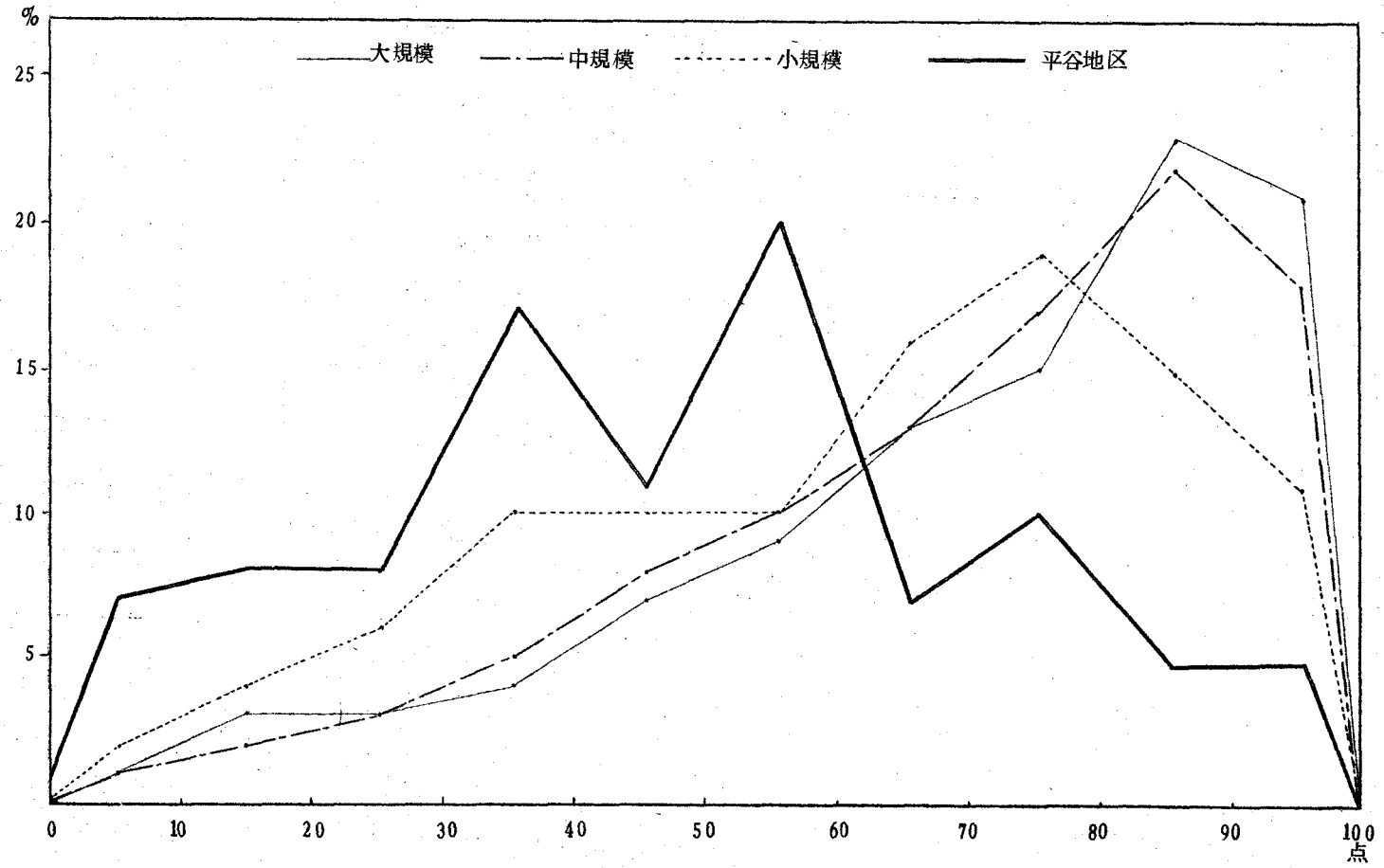
奈良県全体
小中各学年
以下同様

（注） 平谷三地区は奈良県算数数学教育研究会の34年度実施のテストを行っていないので、上記奈良県全体の統計数字の中には入っていない。なお、奈良県全体と云っても、地域的に広く分布しているとの意味で、このテストに参加していない学校は勿論統計の中には入っていない。

2. 個人得点分布表

学校規模 ＼ 得点段階		0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	30	65	180	251	372	547	713	978	1208	1602	1358	72
	%	0	1	3	3	5	8	10	13	16	22	18	1
大規模	人	10	15	62	75	93	151	210	292	356	529	492	21
	%	0	1	3	3	4	7	9	13	15	23	21	1
中規模	人	20	45	107	156	249	364	471	637	800	1026	830	48
	%	0	1	2	3	5	8	10	13	17	22	18	1
小規模	人	0	5	11	20	30	32	32	49	52	47	36	3
	%	−	2	4	6	10	10	10	16	19	15	11	0
平地	人	1	6	7	7	14	9	17	6	8	4	4	0
谷区	%	1	7	8	8	17	11	20	7	10	5	5	−
A	人	0	3	5	6	8	2	8	3	2	2	0	0
	%	0	8	13	15	21	5	21	8	5	5	0	0
B	人	1	2	2	0	1	3	5	1	2	2	3	0
	%	5	9	9	0	5	14	23	5	9	9	32	0
C	人	0	1	0	1	5	4	4	2	4	0	1	0
	%	0	5	0	5	23	18	18	9	18	0	5	0

3、得点分布グラフ（小学校一年）



4. 問題別正答率一覧表

領域	問題番号	奈良県34年度 正答率%	奈良県34年度 領域別正答率%	平谷地区 正答率%	平谷地区 領域別正答率%
I 数概念とその意味	1(1)	94		81	
	(2)	68		17	
	(3)	71		23	
	(4)	75		20	
	(5)	84		41	
	2(1)	87		63	
	(2)	86		69	
	(3)	91	72	76	43
	(4)	54		22	
	3	93		92	
	4(1)	75		39	
	(2)	65		28	
	5(1)	62		31	
	(2)	45		20	
	(3)	53		17	
	6	65		51	
	7	48		42	
II 計算	8(1)	91		65	
	(2)	66		61	
	9(1)	86		71	
	(2)	74		34	
	10(1)	84	69	55	45
	(2)	78		49	
	(3)	37		12	
	(4)	49		22	
	(5)	74		52	
	(6)	54		27	

領域	問題番号	奈良県34年度 正答率%	奈良県34年度 領域別正答率%	平谷地区 正答率%	平谷地区 領域別正答率%
III 計量	11(1)	92		77	
	(2)	56		40	
	12	62	69	25	52
	13	49		31	
	14	85		77	
IV 関係 割合と数量	15(1)	82		52	
	(2)	79		52	
	(3)	51	60	19	34
	(4)	58		34	
	(5)	30		12	
V とグラフ 統計的な表	16(1) ①	72		46	
	②	69		45	
	③	72	66	43	39
	④	71		46	
	(2)	35		16	
VI 図形とそれによる表現	17(1)	80		59	
	(2)	81		65	
	(3)	67		63	
	(4)	46	70	46	62
	18(1)	73		65	
	(2)	71		64	
	(3)	70		65	
	(4)	71		66	

○小学校二年

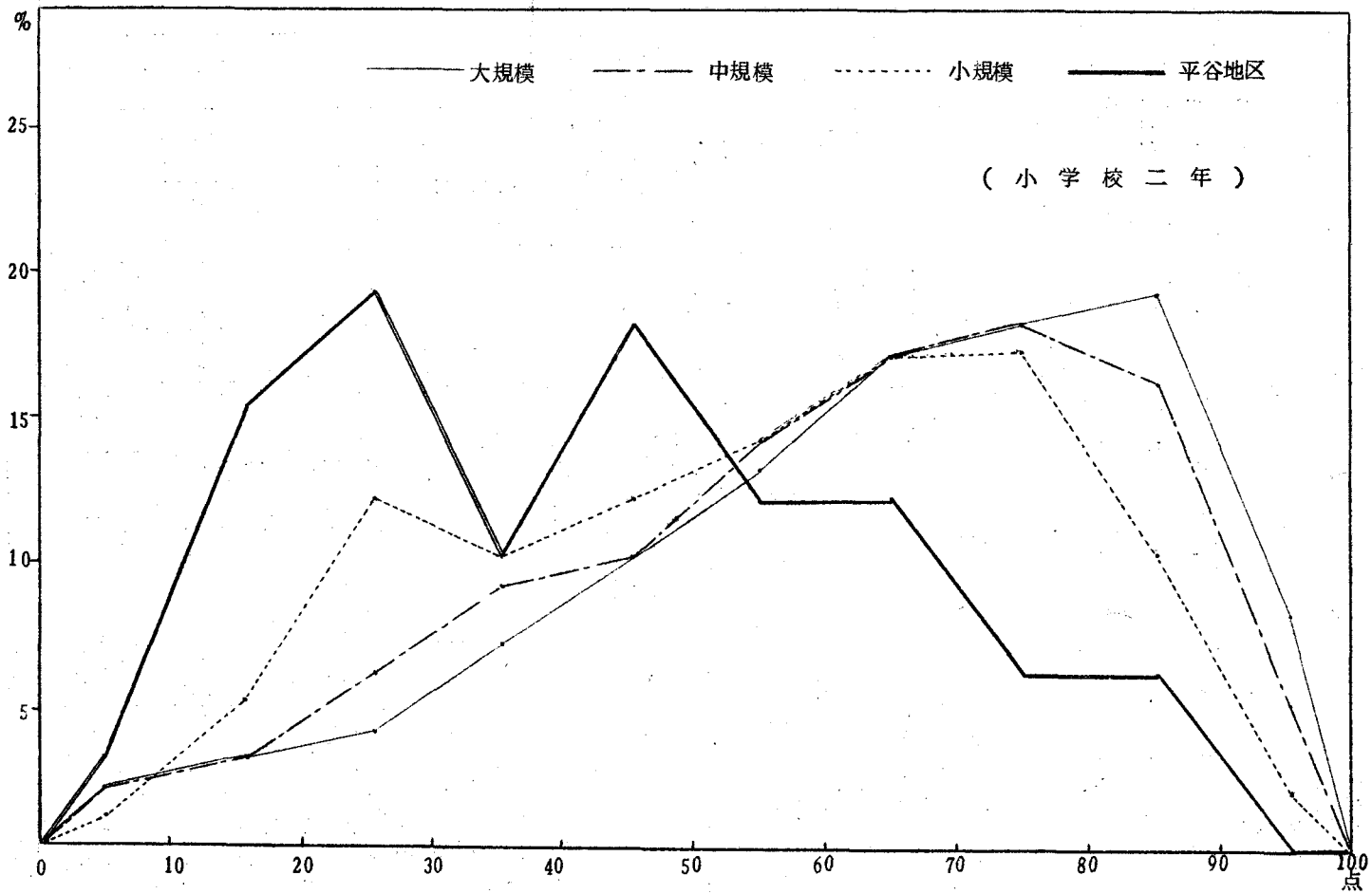
1, 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	131	7787	61.3	22.2
大規模	17	2744	63.8	21.8
中規模	91	4765	60.3	21.8
小規模	23	278	54.5	22.1
平谷地区	3	68	40.6	
平谷地区 A	1	30	30.6	
〃 B	1	23	54.3	
〃 C	1	15	39.6	

2. 個人得点分布表

学校規模 ＼ 得点段階		0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	24	131	259	419	610	782	1074	1288	1388	1318	478	16
	%	0	2	3	5	8	10	14	17	18	17	6	0
大規模	人	0	49	80	107	180	265	363	455	506	514	215	10
	%	0	2	3	4	7	10	13	17	18	19	8	0
中規模	人	22	78	166	279	403	485	672	787	836	776	256	5
	%	0	2	3	6	9	10	14	17	18	16	5	0
小規模	人	2	4	13	33	27	32	39	46	46	28	7	1
	%	0	1	5	12	10	12	14	17	17	10	2	0
平谷地区	人	0	2	10	13	7	12	8	8	4	4	0	0
	%	0	3	15	19	10	18	12	12	6	6	0	0
A	人	0	2	6	8	4	4	5	1	0	0	0	0
	%	0	7	20	27	13	13	17	3	0	0	0	0
B	人	0	0	0	3	2	4	3	5	3	3	0	0
	%	0	0	0	13	9	17	13	22	13	13	0	0
C	人	0	0	4	2	1	4	0	2	1	1	0	0
	%	0	0	27	13	7	27	0	13	7	7	0	0

3. 得 点 分 布 グ ラ フ


%
25
20
15
10
5
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
点
大規模
中規模
小規模
平谷地区
(小 学 校 二 年)

○小学校三年

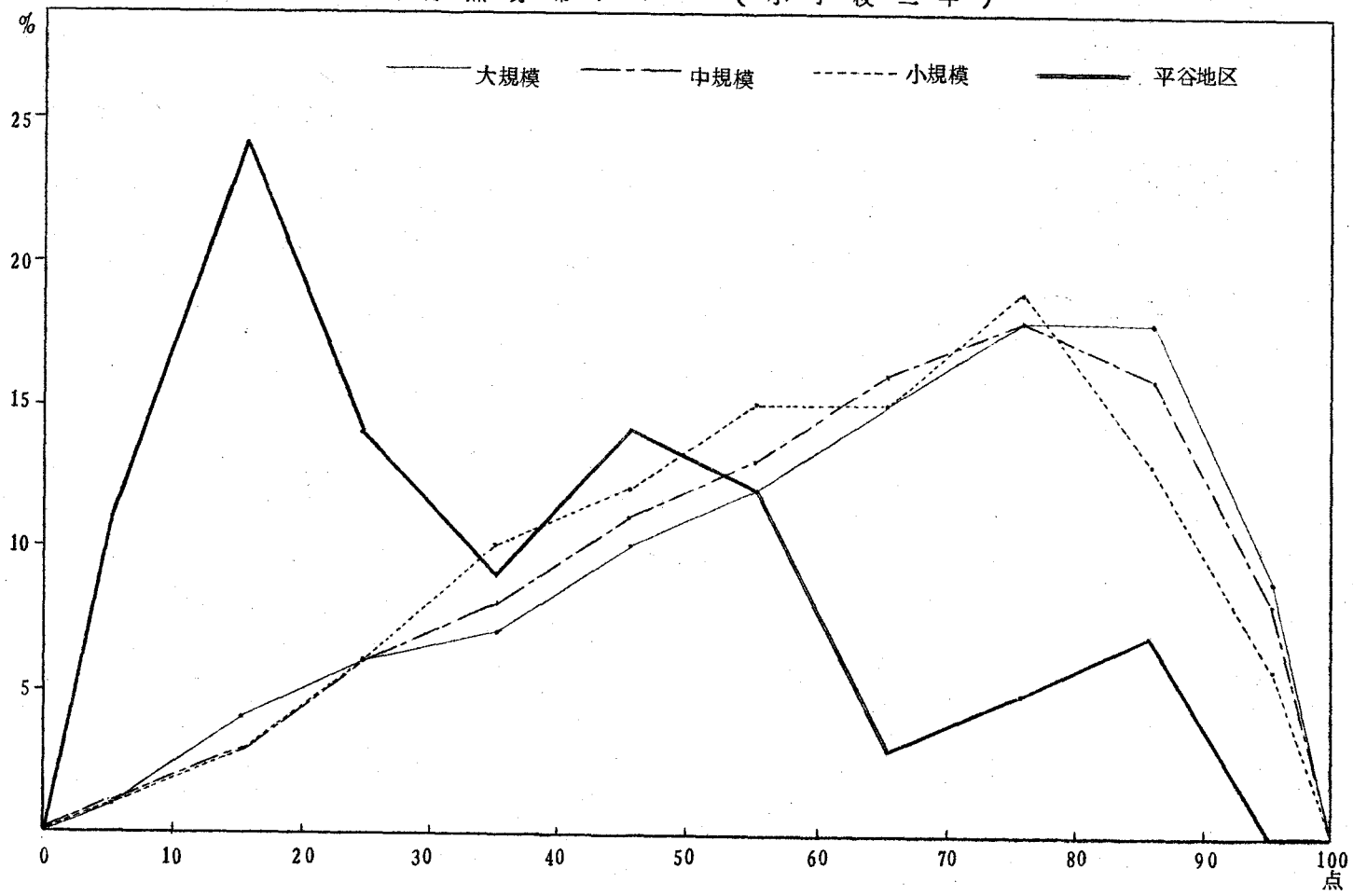
1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	133	9109	62.2	22.5
大規模	17	3443	63.4	22.5
中規模	93	5371	61.5	22.5
小規模	23	295	59.5	21.8
平谷地区	3	76	34.8	
平谷地区 A	1	34	25.4	
〃 B	1	26	35.4	
〃 C	1	16	53.9	

2. 個人得点分布表

学校規模	得点段階	0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	18	116	318	514	689	963	1146	1421	1635	1508	754	27
	%	0	1	3	6	8	11	13	16	18	16	8	0
大規模	人	6	39	116	192	223	347	424	525	609	632	317	13
	%	0	1	4	6	7	10	12	15	18	18	9	0
中規模	人	11	74	192	304	436	582	678	853	969	839	419	14
	%	0	1	3	6	8	11	13	16	18	16	8	0
小規模	人	1	3	10	18	30	34	44	43	57	37	18	0
	%	0	1	3	6	10	12	15	15	19	13	6	0
平谷地区	人	1	8	18	11	7	11	9	2	4	5	0	0
	%	1	11	24	14	9	14	12	3	5	7	0	0
A	人	1	8	7	7	2	4	4	0	0	1	0	0
	%	3	24	21	21	6	12	12	0	0	3	0	0
B	人	0	0	9	2	4	6	2	1	1	1	0	0
	%	0	0	35	8	15	23	8	4	4	4	0	0
C	人	0	0	2	2	1	1	3	1	3	3	0	0
	%	0	0	12	12	6	6	19	6	19	19	0	0

3. 得点分布グラフ（小学校三年）



○小学校五年

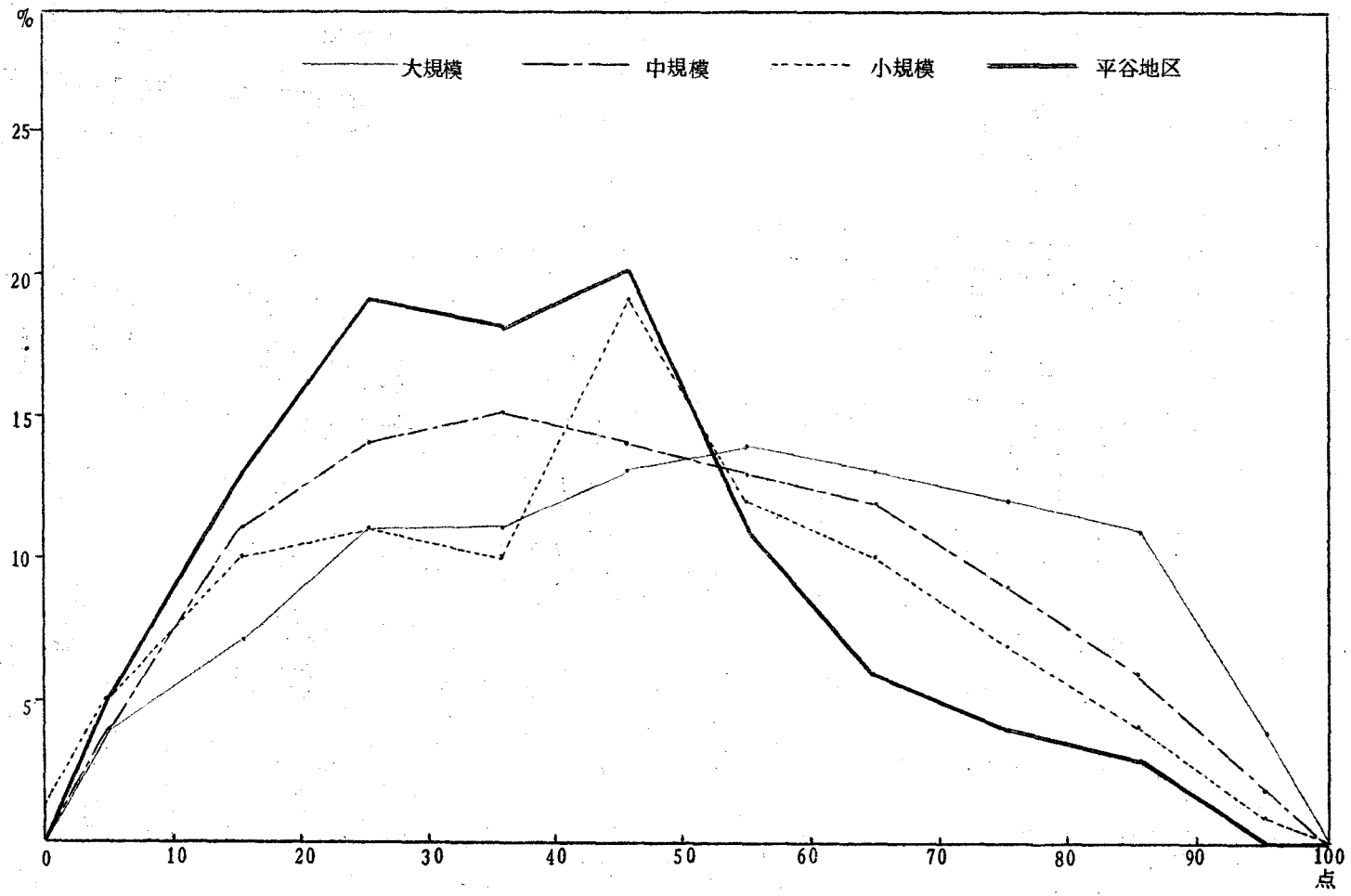
1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	131	10017	47.6	22.7
大規模	16	3557	52.1	24.5
中規模	92	6125	45.3	23.4
小規模	23	335	41.8	22.0
平谷地区	3	99	37.1	
平谷地区 A	1	50	36.3	
〃 B	1	28	38.2	
〃 C	1	21	37.6	

2. 個人得点分布表

学校規模＼得点段階		0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	58	422	964	1268	1351	1329	1331	1212	1043	759	263	17
	%	0	4	10	13	14	13	13	12	10	8	3	0
大規模	人	12	132	272	385	374	446	493	462	438	396	143	4
	%	0	4	7	11	11	13	14	13	12	11	4	0
中規模	人	42	272	657	829	929	821	797	717	581	351	116	13
	%	0	4	11	14	15	14	13	12	9	6	2	0
小規模	人	4	18	35	54	48	62	41	33	24	12	4	0
	%	1	5	10	16	15	19	12	10	7	4	1	0
平谷地区	人	0	5	13	19	18	20	11	6	4	3	0	0
	%	0	5	13	19	18	20	11	6	4	3	0	0
A	人	0	4	4	12	9	8	7	2	2	2	0	0
	%	0	8	8	24	18	16	14	4	4	4	0	0
B	人	0	1	6	4	5	5	1	3	2	1	0	0
	%	0	4	21	14	18	18	4	11	7	4	0	0
C	人	0	0	3	3	4	7	3	1	0	0	0	0
	%	0	0	14	14	19	33	14	5	0	0	0	0

3. 得点分布グラフ（小学校五年）



○小学校六年

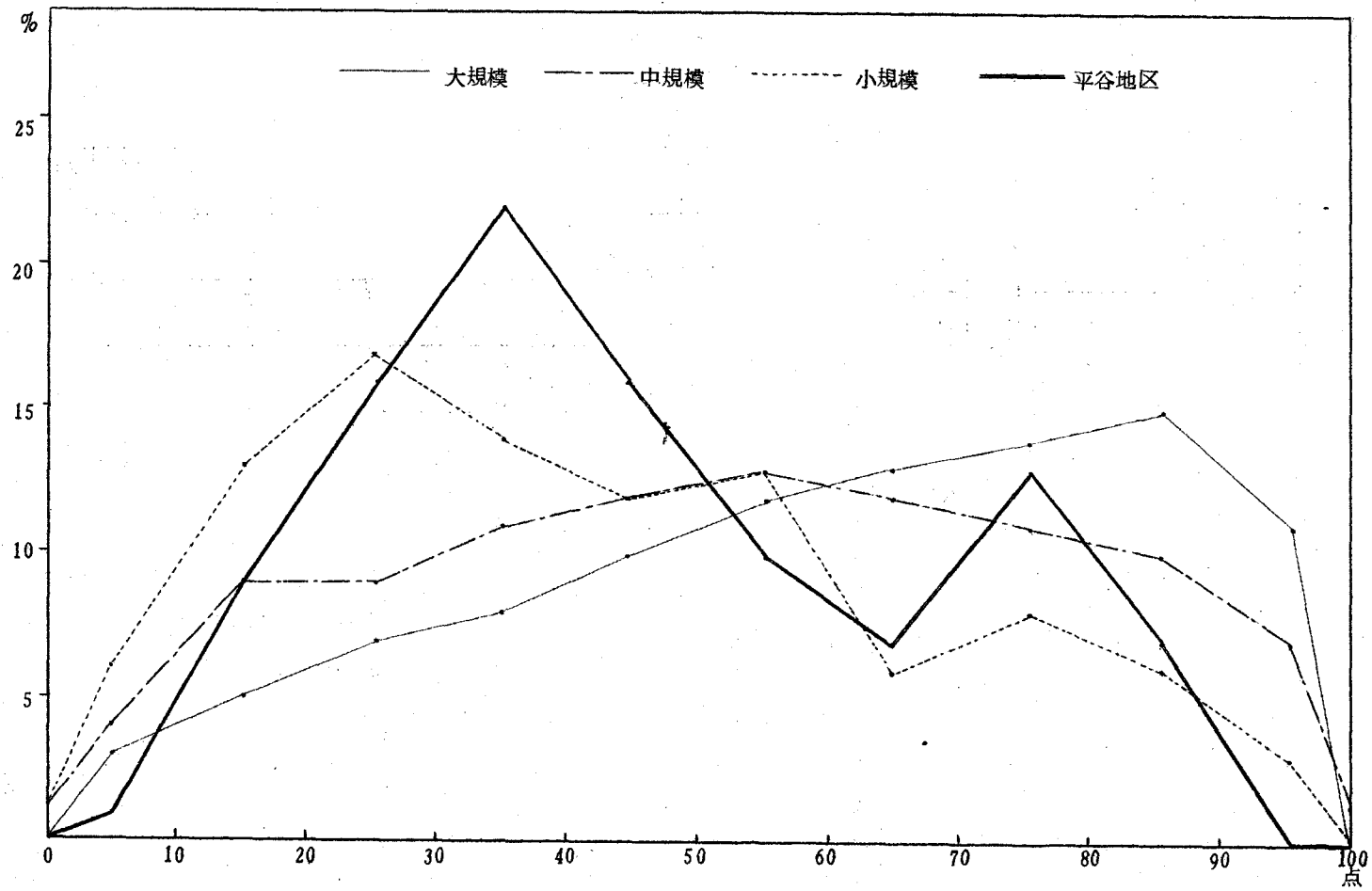
1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	129	10176	54.3	25.7
大規模	19	4154	59.2	25.5
中規模	87	5676	51.6	25.9
小規模	23	346	41.9	24.5
平谷地区	3	88	44.4	
平谷地区 A	1	43	42.2	
〃 B	1	23	45.1	
〃 C	1	22	48.3	

2. 個人得点分布表

学校規模	得点段階	0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	70	390	794	869	1028	1182	1255	1254	1236	1199	878	71
	%	1	4	8	8	10	12	12	12	12	12	9	1
大規模	人	12	113	252	305	330	403	491	542	596	619	458	33
	%	0	3	5	7	8	10	12	13	14	15	11	0
中規模	人	54	256	496	507	649	687	718	691	612	560	409	37
	%	1	4	9	9	11	12	13	12	11	10	7	1
小規模	人	4	21	46	57	49	42	46	21	28	20	11	1
	%	1	6	13	17	14	12	13	6	8	6	3	0
平谷地区	人	0	1	8	14	19	14	9	6	11	6	0	0
	%	0	1	9	16	22	16	10	7	13	7	0	0
A	人	0	1	3	8	12	6	4	2	4	3	0	0
	%	0	2	7	19	28	14	9	5	9	7	0	0
B	人	0	0	2	3	4	6	4	0	3	1	0	0
	%	0	0	9	13	17	26	17	0	13	4	0	0
C	人	0	0	3	3	3	2	1	4	4	2	0	0
	%	0	0	14	14	14	9	5	18	18	9	0	0

3. 得点分布グラフ（小学校六年）



○中学校一年

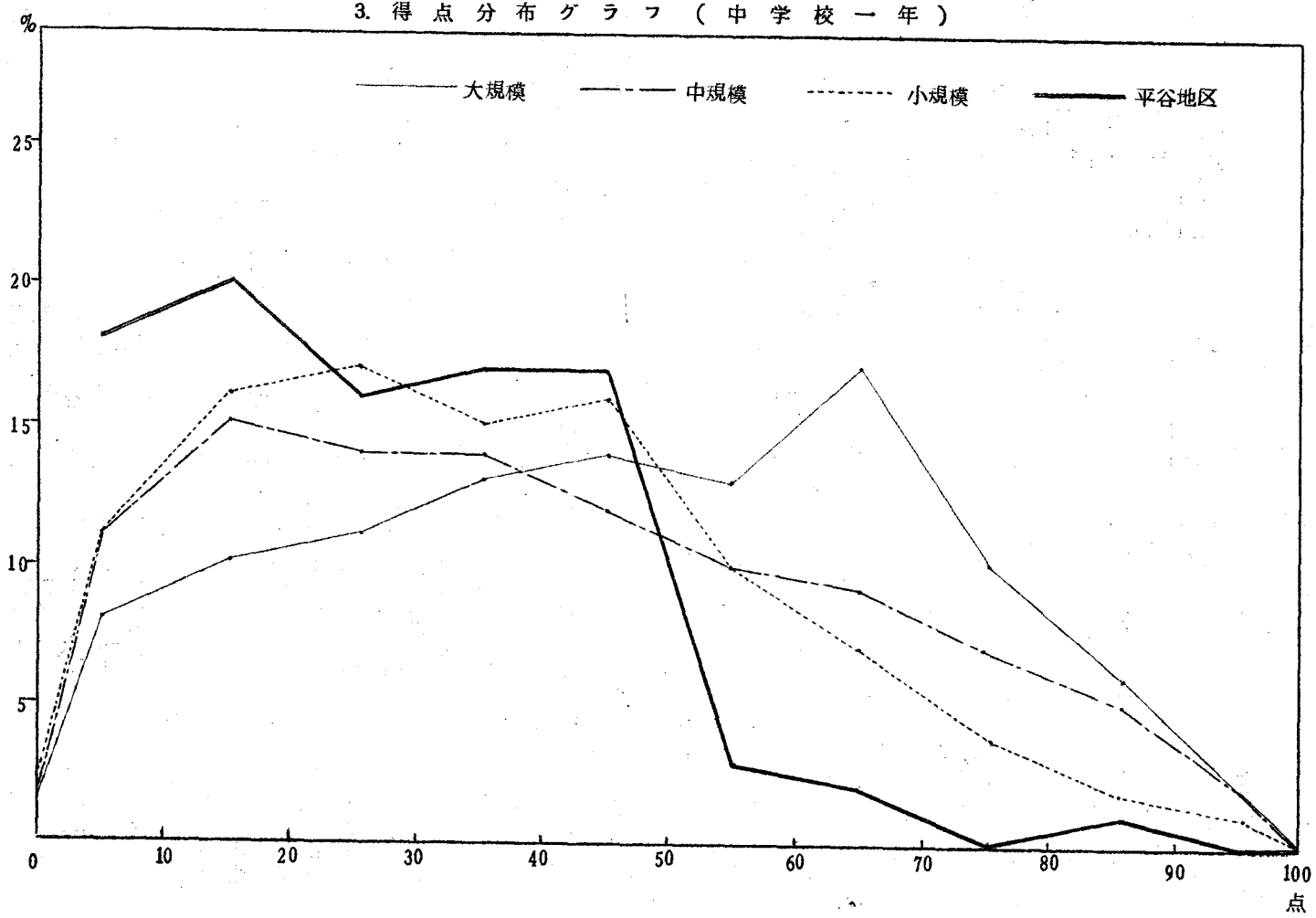
1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	65	8202	41.5	24.4
大規模	13	3695	44.9	24.3
中規模	31	3684	39.3	24.9
小規模	21	823	35.7	21.3
平谷地区	3	89	24.7	
平谷地区A	1	44	20.2	
〃 B	1	23	26.9	
〃 C	1	22	31.5	

2. 個人得点分布表

学校規模＼得点段階		0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	80	807	1062	1052	1116	1089	944	802	668	412	163	7
	%	1	10	13	13	14	13	11	10	8	5	2	0
大規模	人	25	302	381	412	483	511	485	423	374	209	85	5
	%	1	8	10	11	13	14	13	17	10	6	2	0
中規模	人	47	415	551	504	511	444	375	318	258	187	72	2
	%	1	11	15	14	14	12	10	9	7	5	2	0
小規模	人	8	90	130	136	122	134	84	61	36	16	6	0
	%	1	11	16	17	15	16	10	7	4	2	1	0
平谷地区	人	5	16	18	14	15	15	3	2	0	1	0	0
	%	6	18	20	16	17	17	3	2	0	1	0	0
A	人	2	14	7	5	8	8	0	0	0	0	0	0
	%	5	32	16	11	18	18	0	0	0	0	0	0
B	人	2	1	7	4	5	2	0	／	0	／	0	0
	%	9	4	30	17	22	9	0	4	0	4	0	0
C	人	1	1	4	5	2	5	3	／	0	0	0	0
	%	5	5	18	23	9	23	14	5	0	0	0	0

3. 得点分布グラフ（中学校一年）



○中学校二年

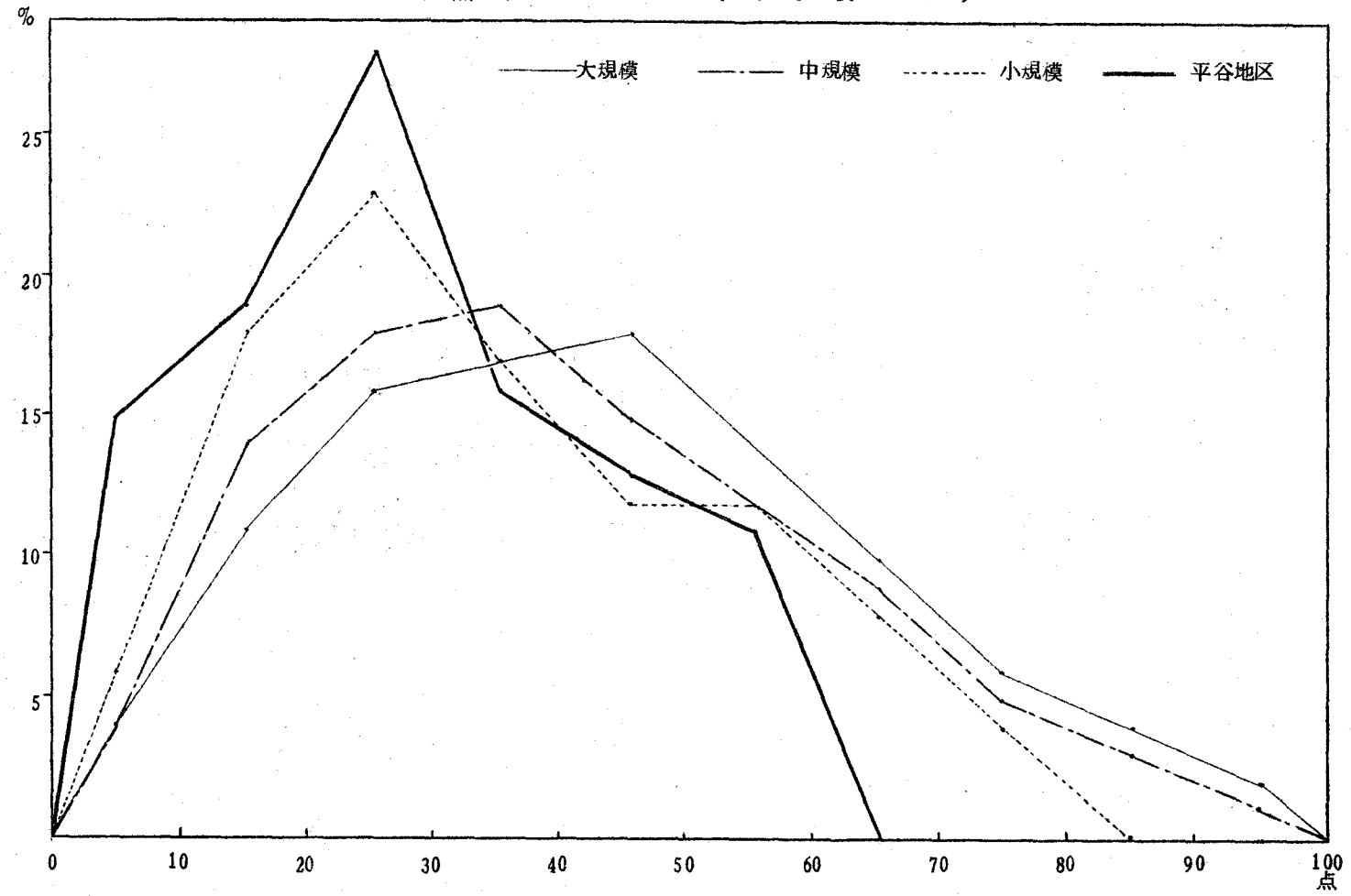
1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	67	5116	39.8	20.7
大規模	12	2115	42.3	21.2
中規模	32	2448	38.6	20.2
小規模	23	553	34.8	18.8
平谷地区	3	68	26.2	
平谷地区 A	1	39	27.4	
〃 B	1	18	21.5	
〃 C	1	11	29.6	

2. 個人得点分布表

学校規模	得点段階	0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	12	235	676	919	911	818	614	459	278	146	46	2
	%	0	5	13	18	18	16	12	8	6	3	1	0
大規模	人	4	93	228	343	352	381	257	223	124	77	32	1
	%	0	4	11	16	17	18	12	10	6	4	2	0
中規模	人	6	109	350	448	463	372	290	197	131	67	14	1
	%	0	4	14	18	19	15	12	9	5	3	1	0
小規模	人	2	33	98	128	96	65	67	39	23	2	0	0
	%	0	6	18	23	17	12	12	8	4	0	0	0
平谷地区	人	0	10	13	19	11	9	6	0	0	0	0	0
	%	0	15	19	28	16	13	9	0	0	0	0	0
A	人	0	6	4	12	8	5	4	0	0	0	0	0
	%	0	15	11	31	21	13	11	0	0	0	0	0
B	人	0	3	6	5	2	2	0	0	0	0	0	0
	%	0	17	33	28	11	11	0	0	0	0	0	0
C	人	0	／	3	2	／	2	2	0	0	0	0	0
	%	0	9	27	18	9	18	18	0	0	0	0	0

3. 得点分布グラフ（中学校二年）



○中学校三年

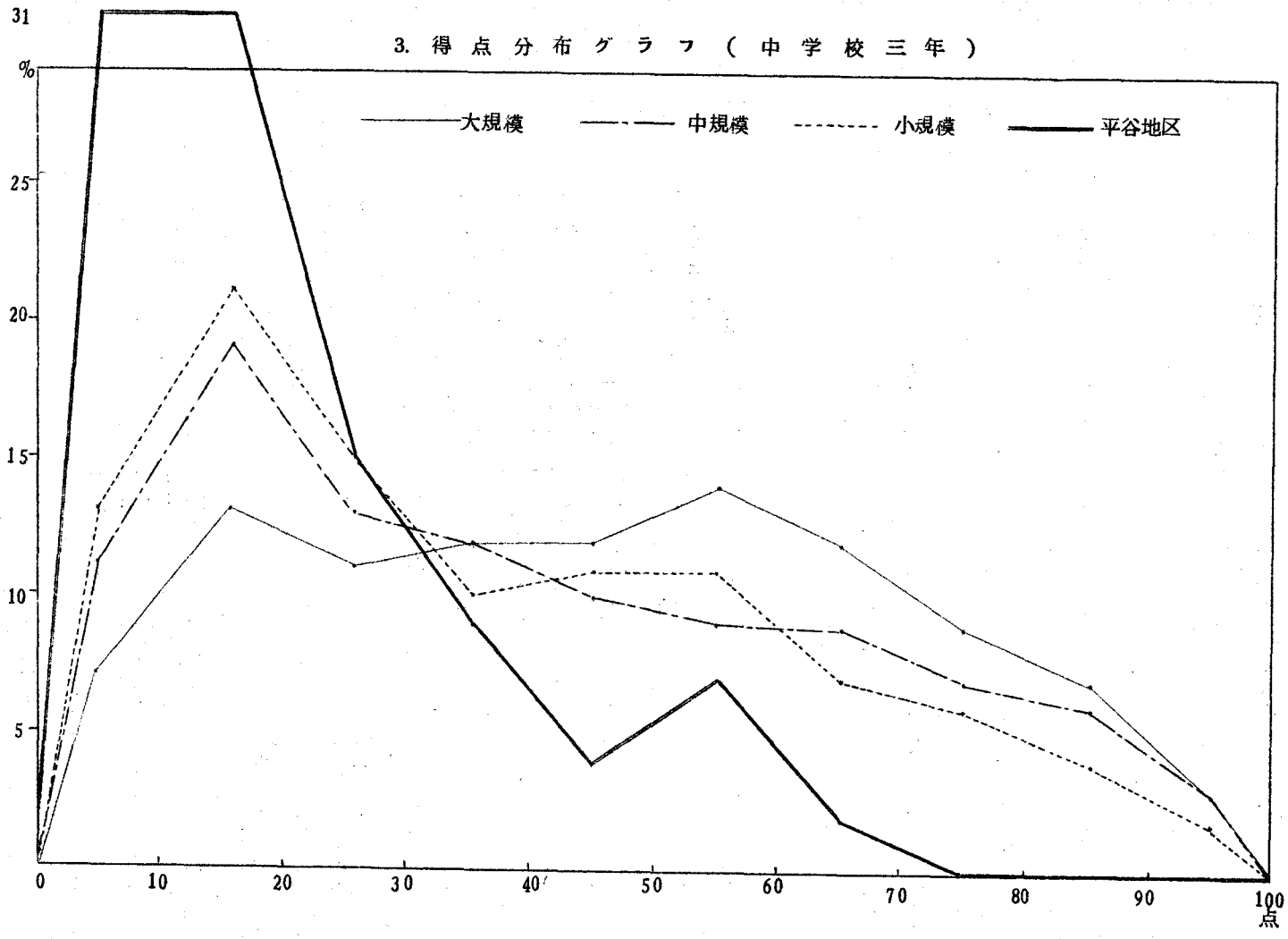
1. 得点平均ならびに標準偏差

学校規模	学校数	人員	平均点	標準偏差
全体	64	6687	41.7	25.7
大規模	12	2893	45.5	25.0
中規模	30	3044	39.5	26.0
小規模	22	750	36.4	24.7
平谷地区	3	55	18.9	
平谷地区 A	1	28	16.0	
〃 B	1	11	18.5	
〃 C	1	16	24.5	

2. 個人得点分布表

学校規模 ＼ 得点段階		0	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100
全体	人	32	645	1102	838	788	737	760	656	518	399	202	10
	%	0	10	16	13	12	11	11	10	8	6	3	0
大規模	人	13	204	373	323	356	330	404	332	270	195	87	6
	%	0	7	13	11	12	12	14	12	9	7	3	0
中規模	人	17	343	573	402	360	322	276	273	200	177	97	4
	%	1	11	19	13	12	10	9	9	7	6	3	0
小規模	人	2	98	156	113	72	85	80	51	48	27	18	0
	%	0	13	21	15	10	11	11	7	6	4	2	0
平谷地区	人	1	17	17	8	5	2	4	1	0	0	0	0
	%	2	31	31	15	9	4	7	2	0	0	0	0
A	人	1	10	9	3	3	2	0	0	0	0	0	0
	%	4	36	32	11	11	7	0	0	0	0	0	0
B	人	0	2	4	3	2	0	0	0	0	0	0	0
	%	0	18	36	27	18	0	0	0	0	0	0	0
C	人	0	5	4	2	0	0	4	1	0	0	0	0
	%	0	31	25	13	0	0	25	6	0	0	0	0

3. 得点分布グラフ（中学校三年）



三。教具教材設備状況調査

1. 調査のねらい。

理科教育振興法によって、理科関係の設備は不十分ながら追々とゝのいつつある。

数学についても法律こそまだできていないが、適当な教具・教材が各学校にもれなく完備されることが極めて望ましい。

日本数学教育会は、先年算数・数学についての設備基準を研究発表している。

この調査は、それにのっとって、平谷地区の学校ではどんな程度に整備されているかを調べた訳である。

奈良県全体はどうか、日本全体ではどうか、等の資料を調べなかったから比較することはできないが、日本数学教育会の発表した基準と比較することは出来る。

これと関係ある問題として、四では家庭における計量器具の調査をしてみたわけである。学校及び家庭における器具類の調査についても、二1.で述べたと同じ理由で、決論的な判断は述べず、問題点について読者の明察におまかせする。

No.	教具名 ＼ 項目	標準数量 学校規模（学級数） 6	12	18	24	30	平谷地区小学校 折立小 6	桑畑小 3	重里小 3
1	計数器セット（教師用）	1	2	3	4	5		1	2
2	百玉計数器（〃）	1	2	3	4	5	1	1	1
3	三線計数器（〃）	1	2	3	4	5			
4	トンボ式綜合教器と貼付板	1	2	3	4	5	1		1
5	一本輪投（5本1組）	10	10	20	20	30		1	
6	輪投台（十文字）	5	5	10	10	15		1	1
7	紅白輪投	4	4	6	6	8	1		
8	積木（大型セット）	1	1	1	1	1		1	
9	〃（中型〃）	1	1	1	1	1			2
10	〃（小型〃）	1	1	1	1	1	2		
11	動態算数掛絵	1	2	3	4	5		1	
12	模型時計（教師用）	2	4	6	8	10		1	3
13	算数掛図（1年用）	1	2	3	4	5		1	2
14	小黒板	6	12	18	24	30	30	6	13
15	方眼黒板（低学年用）	2	4	6	8	10		1	
16	マグネチック学習器	1	2	3	4	5			1

17	十進計数器　（教師用）	1	2	3	4	5	1	1	
18	分数説明器（低学年用）	1	2	3	4	5	1		
19	ものさし（50 cm）	12	12	18	18	24	15		
20	巻　〃　（1 m）	30	30	60	60	90	15		1
21	巻　尺（10 m）	10	10	15	15	20			1
22	〃　（20 m）	2	2	4	4	6			
23	〃　（30 m）	12	12	18	18	24			1
24	〃　（50 m）	2	2	4	4	6	1	1	
25	暗算用練習板	2	2	4	4	6			1
26	乗法九九指導掛図	1	1	3	4	5	1	1	1
27	三角定木1組（教師用）	6	6	18	24	30	2	2	3
28	算数掛図（2年用）	1	1	3	4	5		1	2
29	平面式分数説明器	1	1	2	2	3			
30	立体グラフ黒板	1	1	2	2	3			
31	コンパス（教師用）	6	6	18	24	30	2	2	2
32	透明リットルマス（1 dℓ）	12	12	18	18	24	5	1	2
33	〃　（2 dℓ）	12	12	18	18	24		1	
34	〃　（5 dℓ）	12	12	18	18	24	5	1	2
35	〃（丸型）（1 ℓ）	12	12	18	18	24	5	1	3
36	〃（角型）（1 ℓ）	12	12	18	18	24			
37	〃（丸型）（2 ℓ）	12	12	18	18	24		1	
38	自動上皿秤片面（1 Kg）	8	8	12	12	16			
39	〃　（1.5 Kg）	4	4	6	6	8			
40	〃　（2 Kg）	8	8	12	12	16		1	
41	〃　（4 Kg）	4	4	6	6	8			
42	〃　（8 Kg）	8	8	12	12	16	2		
43	〃　（10 Kg）	4	4	6	6	8			
44	〃　両面（4 Kg）	4	4	6	6	8			
45	〃　〃（8 Kg）	4	4	6	6	8			3
46	スプリング自動秤（1 Kg）	4	4	6	6	8			3
47	〃　（4 Kg）	12	12	18	18	24		1	
48	〃　（10 Kg）	2	2	3	3	5			
49	上皿さお秤（1 Kg）	1	1	1	1	1			
50	〃　（2 Kg）	1	1	1	1	1			
51	〃　（5 Kg）	1	1	1	1	1			
52	〃　（10 Kg）	1	1	1	1	1			
53	さお秤（5 Kg）	1	1	1	1	1			
54	〃　（7 Kg）	1	1	1	1	1			
55	〃　（10 Kg）	1	1	1	1	1	1		

No.	教具名 ＼ 項目	標準数量 学校規模					平谷地区小学校		
							折立小	桑畑小	重里小
56	さお秤（15Kg）	1	1	1	1	1		1	
57	上皿天秤（100g）	1	1	1	1	1	1	4	1
58	〃（200g）	1	1	1	1	1			
59	〃（500g）	1	1	1	1	1			
60	自動横皿片面（8Kg）	1	1	1	1	1			
61	上皿学習秤	1	1	2	2	3			
62	重さ直観具	5	5	10	10	15			
63	そろばん（教師用）	3	6	9	12	15	1	2	3
64	方眼黒板	4	8	12	16	20	2	1	3
65	平面幾何模型	2	2	4	4	6		2	
66	容積指導器	2	2	4	4	6	2	2	1
67	面積説明器	1	2	3	4	5			1
68	分度器（教師用）	3	6	9	12	15	3	2	2
69	モンテソリ分数説明器	1	2	3	4	5			
70	1 m 立方体	1	1	1	1	1			
71	1 cm 〃	2400	4800	7200	9600	12000			
72	2 cm 〃	2400	4800	7200	9600	12000			
73	5 cm 〃	300	600	900	1200	15500			
74	大型教授秒測計	1	1	2	2	3		1	
75	面体積説明器セット	1	1	2	2	3			
76	立体幾何模型	1	1	2	2	3	1		
77	体積説明器	1	1	2	2	3	2	1	
78	ガラスメスシリンダー（1dℓ）	1	1	1	1	1			
79	〃（2dℓ）	1	1	1	1	1			
80	〃（5dℓ）	1	1	1	1	1			
81	〃（1ℓ）	1	1	1	1	1			
82	〃（2ℓ）	1	1	1	1	1			
83	〃（10cc）	8	8	12	12	16	1		
84	〃（20cc）	8	8	12	12	16			
85	〃（50cc）	8	8	12	12	16	2		9
86	〃（100cc）	8	8	12	12	16	2		
87	〃（500cc）	8	8	12	12	16	1		1
88	〃（1000cc）	1	1	1	1	1			
89	〃（2000cc）	1	1	1	1	1			
90	円形グラフ板	1	2	3	3	5	1	1	2
91	回転体説明実験器	1	1	2	2	3			
92	投影用立体直観器セット	1	1	2	2	3			

93	分数説明器（高学年用）	1	1	2	2	3			
94	回転距離測定器	1	1	1	1	1			
95	丁定木	2	4	6	6	10		1	1
96	平板測定器	1	1	1	1	1			
97	ポール（3本1組）	1	1	1	1	1			

3. 平谷地区中学校数学科教具教材設備状況調査

No.	教具名 ＼ 項目	標準数量				平谷地区中学校		
		学級	学級	学級	学級	第四中学	第五中学	第六中学
		6	12	18	24	3	3	3
1	計算尺（1m木製）	1	1	2	2	1	1	1
2	計算尺（20cm位）	50	50	100	100		1	30
3	輪投げ（9本立計算練習用）	1	1	1	1			
4	計算器	1	1	1	1			
5	方眼黒板	4	6	8	10	1	1	3
6	円グラフ黒板	2	3	4	5	1		
7	物さし（木製1m）	2	3	4	5	10		2
8	巻尺（布製30m）	10	10	20	20		1	
9	〃（〃50m）	1	1	1	1		1	1
10	〃（金属製20m）	1	1	1	1			
11	ノギス	1	1	2	2	1		3
12	マイクロメーター	1	1	2	2	1		
13	カーブメーター	10	10	20	20			
14	副尺模型	1	1	1	1			
15	曲尺	1	1	1	1	5	6	5
16	メートル原器キログラム原器模型	1組	1	1	1			
17	平板測量器	10組	10	20	20		1	1
18	トランシット（2吋半小型）	1	1	1	1	1		
19	簡易測量器	5	5	10	10			1
20	ポール（3m）3本組	10	10	20	20	1		
21	箱尺	1	1	1	1			
22	水準器（木製）	1	1	1	1	1		1
23	パンタグラフ（拡大器）	1	1	2	2	5		2
24	比例コンパス（大型）	1	1	1	1			
25	プラニメーター	1	1	1	1			
26	面積原理説明器	1組	1	2	2			1
27	体積原理説明器	1〃	1	2	2			1
28	立方体積木（体積説明）	1〃	1	2	2	1		

29	上皿天びん	1	1	1	1	3	6	4
30	さお秤	1	1	1	1		1	1
31	自動上皿秤	1	1	1	1	2	2	3
32	バネ秤	10	10	20	20	5	15	10
33	リットルます（1dℓ・5dℓ 1ℓ）	1	1	1	1		6	1
34	メートルグラス（またはメスシリンダー）	1	1	1	1	3	8	5
35	長定木（1m木製）	2	3	4	5	3	2	
36	三角定木	2組	3	4	5	3	3	1
37	コンパス	2	3	4	5	5	3	1
38	分度器	2	3	4	5	1	3	1
39	丁型定木	1	1	1	1	25	51	21
40	曲線定木（鉛製）	1	1	1	1			
41	平面模型	1組	1	2	2	1		1
42	立体模型	1組	1	2	2	1		1
43	三面黒板	1	1	2	2			
44	投影図説明器	1	1	1	1			
45	投影図直観器	1	1	1	1			
46	回転体実験器	1	1	1	1			
47	三平方定理説明器	1	1	1	1			
48	平行平面実験器	1	1	1	1			
49	相似形説明器	1	1	1	1			
50	球黒板	1	1	1	1			
51	ストップウオッチ	1	1	2	2	2	1	
52	掛図	1	1	1	1			3
53	製図用具	1	1	1	1	25		20

四。 家庭における計量器具調査　（中学校三年のみ）

品名			第四中学（11名）	第五中学（26名）	第六中学（16名）	合計（53名）
ます	升	1合	5	20	10	35
		5合	4	11	7	22
		1升	7	22	17	46
		1斗	0	2	2	4
	リットル	1dℓ	1	2	1	4
		5dℓ	0	3	0	3
		1ℓ	0	2	0	2
		2ℓ	0	2	0	2
ものさし		30cm	21	44	30	95
		1m	5	21	8	34
		1尺	7	12	17	36
		3尺	4	12	2	18
はかり		台	1	3	3	7
		さお	4	26	22	52
		さら	0	5	1	6
		ばね	1	2	5	8
計算器			0	9	0	9
そろばん			36	85	63	184
巻尺			14	16	12	42
その他		2.5合ます	2	0	1	3
		3合ます	0	0	14	14
		2尺ざし	0	0	6	6

参加者　36年3月卒業の奈良学芸大学学生
1部4回　今谷捷司　上平完爾
城保昭　万昭夫
顧問　竹内弘